
遊色の雫 イリデッセンス・ドロップ

天羽 爽夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊色の雫 イリデッセンス・ドロップ

【Nコード】

N0876L

【作者名】

天羽 爽夏

【あらすじ】

橙乃ままれ様の作品『ログ・ホライズン』の二次創作です。

原作主人公たちが遭遇した 大災害 に巻き込まれた何万人ものプレイヤーたち。その他大勢の一人であるマコトと、その仲間たちの異世界旅行記。

原作の壮大さと違い、小規模ギルドの生活密着型な話……になる予定です。

原作を読んでからの方が、細かい点が分かりやすいと思います。橙乃ままれ様、承認ありがとうございます。＜体調不良のため、し

ばらく休載します。体調が良くなり次第、再開しますので、御迷惑をおかけしますが、よろしく願います。>

電波受信！ 異世界への招待状？

電話の向こうの友人に真琴は告げた。

「今日？ 有休使ったよ」

「なにい！ 有休だとお！！」

友人の驚愕の声と一緒に、駅のアナウンスが聞こえてくる。

「仕事も一段落ついたとこだし、次の山が来る前に休みをしっかり取っておくように言われてるしね。現在、うちの会社有休大量消化週間 私は今日から5連休だし、同僚の中には今日から1週間ヨーロッパに行くって言うってた人もいたなあ」

「たしかに、マコンとは、×（しめ）に合わせて休出しまくりだもんね」

「シーは？」

「こっちは、今から大阪だよお」

「それは、ご愁傷様。これも日ごろの行いかな？」

「代われえ！ 私の追加パツクう！！ うう、この時を私はどんなに待ち望んでいたか。マコは良く知ってるでしょ？！ なのに仕事っ！ 神は私を見離れたのかあ！！」

少々芝居がかった友人の様子に真琴は笑い出し、「ユーララの神様にでも、嫌われちゃったんじゃないの？」と混ぜっ返した。

「ひどい神様だあ…… っと、そろそろ時間みたい」

後ろの声が急に賑やかになって、アナウンスが大阪行きの新幹線の入場を伝える。

「いつてらっしゃい。帰ってきたら、一緒に遊ぼうね」

「おう！ リアルミナミに行くてる。ああ、現実世界でトランスポート・ゲートがあったら、大阪なんてすぐに行けるのにい！」

「はいはい。お仕事がんばってね」

「ウイ、がんばってきます。それじゃ、みんなにヨロシクね」

シーの声と新幹線がホームに入ってくる音が重なり、電話が切れ

た。

真琴は携帯をパソコンの脇の小物入れに置くと、キーボードの上に無造作に置いてあるヘッドフォンを付ける。マイクの位置を確認しながら、マウスを操作した。視線の先にある液晶モニターには、現在プレイしているゲーム エルダー・テイル の鮮やかなグラフィックが広がっており、慣れた様子でマウスを操作すると、賑やかな会話がヘッドフォンから流れ出し、真琴も会話に加わることにした。

「電話終了。シーから連絡が来た。やっぱり、仕事で無理だった」

「何い！　なんで、俺のシーからの連絡がマコトにくるんだよ」

「誰が、貴方のシーなのよ！　訂正して謝罪しなさいよね」

「シーさんは欠席ですか。残念ですね、ガルム君」

「いや、その、まあ、確かに残念だな」

「だからってマコ君に妬かないでくださいね」

「なっ！　いつ俺がつ！」

「シーにやんつてば、残念なお」

「本人も残念がつてたよ」

「仕事では仕方がないでしょう。ガルム君も寂しいのは分かりますけど、泣き止んでください。もうイイ年なんですから」

「あら、ガル泣くんだったら、あたしの胸、貸してあげてもいいわよ」

「ガルガル、悲しいの悲しいの飛んでけなお」

「ちよっ！　おまえら、いい加減にしろよ。俺は泣いてねえ！！！」

ヘッドフォンからあふれ出すとりとめのない会話。液晶モニターには、蔦や草木に浸食された廃墟の街の背景画面とともに現在会話している5人のポリゴンでできたキャラクターが表示されていた。キャラクター達は中世風の衣装を身にまとい、鎧をまとったものや

ローブを着たものなど様々な装備をまとっている。画面の隅の方には、それぞれのキャラクターのステータスが表示してある。メニュー画面にあるメンバーリストの欄には、現在会話している（つまりキャラクターが表示してある）面々の名前が、白い文字で表示してあった。

エルダー・テイル というゲームは、剣と魔法の世界を冒険する、今はやりのオンラインゲームであり、ずいぶん長い歴史を持っているらしい……といっても、実際に真琴がプレイし始めたのは、ここ3年くらいなので、その歴史のすべてを知っているわけではないが。そんな真琴でも、ゲームの内容や難易度、アイテムの類たぐいの幅が広くてユーザーの層も厚いというのを攻略サイトでの解説などで知っていた。

そして、今日、その最新の追加データがユーザーに提供されるため、たくさんのプレイヤーたちがパソコンの前で固唾を飲んでいる……もちろん、真琴もその一人だ。

『つーか、マコトの場合あやかえ綾姐の金魚のフンだしな』

『マナちゃん、男の嫉妬は醜いわよ？』

馬鹿にしたような男の声に被ったのは、にまっと人の悪い笑みが目に浮かびそうな艶やかな綾香の声だ。

『だあああ！　なんで俺が嫉妬しなきゃならねえんだ！　しかも俺の名前は　マナーガルド　だ！　変な略し方すんな！』

『マコマコは金魚違うなお　ガルガルつてば、エルフと金魚間違えるなんて、目が悪過ぎなお』

『クリス、ガルド君が悪いのは、目じゃなくて頭ですよ』

『あつ、そか。それじゃ、矯正しよおがないのお。かあいそなおのしみじみと呟く少し甲高い女性の声と落ち着いた男性の声。その後、地を這うような低い声が続いた。』

『ク、クリスティーナにアズライト……てめえらっ！』

『ガルガル、本当のことを言われて怒るのは大人げないなの』

女性はそう言って、ふうつと呆れたため息を付けた。

『ガラム君、お気に入りのマコ君を苛めていると、愛しのシーさんから嫌われますよ』

『俺とシーとの仲は、それくらいじゃ壊れねえよ！』

『現実を知らないって怖いわよねえ』

マーナガラムを除く参加者の笑い声が聞こえて、仲がいいなあと真琴は笑う。

（『金魚のフン』って言ってるけど……ただの売り言葉に買い言葉なんだよねえ。つかじゃれ合い？）

大方、周りが、マーナガラムのことを^{からか}揶揄い過ぎたのだろう。それでなくても、マーナガラムがシーに好意を持っているのは周知の事実で、そのシーと仲が良い真琴のことを面白く思っ^{からか}てないのだ。そして、周りもわかつているからこそ、こうして^{からか}揶揄うネタになる。^{からか}揶揄われているマーナガラムにしたって、そのことを承知で答えているような部分もある。ようは、このメンバーの様式美みたいなものののだ。

（なんせ、ゲーム内では、私は男だしね）

真琴の エルダー・テイル 内での名前は『マコト』。エルフの男なのだ。

先ほど電話で話していた友人は、椎名和海。勿論女で、エルダー・テイル 内での性別も女。猫人族で、名前はケット・シー。メンバーからは『シー』の愛称で呼ばれている。

ちなみに、綾姐こと^{あやか}綾香の本名は香月綾子といい、真琴とは学生時代からの友人である。綾子は「近場で エルダー・テイル の話がしたい、というより^{つんちく}蘊蓄を語らせてくれ！ 語るならむさい男相手より女の子の方がいいんだあ」と言っ^て、仲間^に引き入れた手前、自分に使い道のないアイテム等を融通してくれる。

もちろん、『綾香』と『マコト』のキャラクターレベルも大幅に違うので、レベル上げに協力してくれたり、自分のクエストに誘ってくれたりする。

今、ボイスチャットをしている面々が所属するギルド 遊色の雫を綾香^{あやか}が立ち上げた時も、ギルドマスターとなった彼女に誘われる形で所属することになったので、ギルドのメンバーであるマーナガルムからは「金魚のフン」と良く^{から}揶揄われるのだ。もっとも、ギルドといったところで構成メンバー6人という弱小ギルドでしかないが。

人数が少ないからか、メンバー同士面識があるらしいのだが、『マコト』の性別が男性となっているため、真琴はメンバーと会ったことがない。唯一、真琴が女だと知っているのは、綾子だけだったのだが、たまたま真琴と綾子がウィンドウショッピングしていたときにシーと偶然出会い、シーには『マコト』が実際は女だとバレたのだ。その後、シーともオフで会うようになり、連絡を取り合う様になったのだが、前述の通り、その事実がマーナガルムからすると面白くないらしい。

（うーん、どうしようかな？ 別に女とバラしてもいいけど……目先の楽しみの（ガルムをからかう）ために、信じてくれない人たちばかりだし。それに、姐さんに手伝ってもらってばかりだから『金魚のフン』ってのもホントだしねえ。

性別を男にしたのだって、姐さんが「使えないアイテムの使い道ができる」って理由だったし。今にして思えば、早計だったみたいね……声でバレると思ったけど、悲しいかなバレないし）

日常、意識して高い声さえ出さなければ、電話でも男に間違えられることが多々ある真琴である。マイクを通しているためかは判らないが、現段階まで真琴が女であると疑われたことがない。もともと真琴の声が、男女の区別がし辛い声質なのだろう。もちろん、意

識して高い声を出せば、男に間違われることはない。

やいのやいのとマーナガルムを^{からか}擲擄っている面々。マーナガルムもオーバーなりアクションで応え、さらに賑やかな会話がヘッドフォンから流れてきた。

楽しく会話している間にも、ゲームの方では敵が現れたらしく、
『ガルム、 守護戦士（ガーディアン）でしょ、ちゃんと壁になりなさいよ』と声が聞こえ、画面の中では綾香が敵を攻撃していた。
『わーってるって！ さあ、俺様に傷付けようなんぞ、100年早いぜ』

気合の入った言葉とともに、技を繰り出すマーナガルム。傷ついた敵を素早く綾香が止めを刺す。

『流石なお。綾やん素敵なお』

『つと待て！ 俺は？ 俺の活躍は見てなかったのかよ』

『えつと……ガルガル、頑張れ？』

『なんで疑問形なんだよ』

『ほらほら、そんなに気が散っていたら、次の敵さんにやられちゃいますよ？』

穏やかな声とともに、画面上のアズライトは、炎の球を敵にぶつけていた。

『あたしも負けられないのお』

そう言ったクリスティーの前に魔法陣が表示されると、その中から赤いトカゲが現れた。

『^{サラマンダー}炎蜥蜴のサラちゃん、ヤっちゃえなお』

『僕の出番なさそうだね』

マコトは四人によって^{せんめつ}殲滅された敵を見て呟くと、敵方が落としていったアイテムを拾うのだった。

エルダー・テイル は、冒険を繰り広げるゲームである。プレイヤーキャラクター達は冒険するために様々な特典の付いた職業を用意している。敵との攻防戦を繰り広げる綾香とマーナガルムの職

業は、それぞれ 武闘家（モンク）と 守護戦士（ガーディアン）で、敵に接近して戦う職業だ。アズライトは魔法を使って敵を撃退する 妖術師（ソーサラー）、クリスティーナは魔物を召喚して戦う 召喚術師（サモナー）だ。マコトは 施療神官（クレリック）で体力を回復できる職業だ。

それぞれの職業が一長一短があり、大概のプレイヤーは、継続的な、あるいはその場限りの仲間を見つけて共に冒険をするのだった。

『わたしの方が迎撃数多かったわね』

『俺のアシストがあつたからだろう！ まったく、止めばかりさしやがって』

『二人とも、クリスのサラちゃんを忘れてるなのお！』

『単純に迎撃数だけでしたら、私の魔法の方が多いと思いますけどね』

『アズっ！ 魔法は反則よ！』

『アズ先生、これは俺と綾姐の戦いなんだ。口を出すなよ』

賑やかな会話が広がる。広がり続けて、收拾がつかなくなる。

どう收拾を付けるべきか真琴が悩んでいると、液晶モニターが一面、真っ黒くなった。

会話は一瞬途切れたが、その後現れた炎の文字に、メンバーは興奮した。

『おお！』

『きやあ　すごいのお！ 期待大なのお』

『とうとう始まったんですか？！』

『ええ？　なあに？　これ？』

『今回は、えらく凝ってるなあ』

『何？　これが解禁の合図？』

『わからないけど、ワクワクするわね』

炎の文字が消えると、自然と言葉がなくなり、画面にくぎ付けになる。

スクロールする間、現れる白い月　そして、暗転する視界。
すうっと意識が遠くなり、ガクンと地面に身体が落とされた。

現地集合！ 異世界旅行は片道切符

（耳の中に虫がいるみたい。うう……耳鳴りが、気持ち悪い）

地面に蹲る身体。^{（しゃがむ）}三半規管が狂ったのか、遊園地のコーヒーカーッ
プを酷く廻しまくった後のような、ぐらぐらする頭。目を閉じてい
てもグルグル回る視界に、瞼の向こうから感じる突き刺さるような
明るい日差し。

（明るい……日差し？）

そう思ったところで、何かがおかしいと気づく。

自分は、室内にいたのではないのか？
いくら電灯を点けてたと云っても、ここまで明るいだろうか？
目を閉じていても分かるくらい白く煌めく懐かしい感じがするこ
の光は、まるで自然の光のようで。

「自然の……光？」

自分の言葉に慌てて眼を開けると、突き刺さる日差し。鮮やかな
光の向こうから見えるのは、初夏の青々とした空と瓦礫を彩る緑。
さわさわと風に揺れる蔦や葉々。少し湿った初夏の空気を運ぶ風
は、土や植物の香りを含んでいる。
周囲は、鮮やかな総天然色で、人工物にまみれた灰色の都会の風
景ではなかった。

「なにこれ……」

茫然と呟くと、あたりからも悲鳴や茫然自失の呟きが聞こえる。

その声の主をたどるように辺りを見渡したところで、真琴は悲鳴を上げた。

「何、これっ!!」

周りにいるのは、あり得ない髪の色の人間たち。服装といえば、ある意味見慣れたもので、それでも現実社会ではお目にかかるはずもない、かなり奇抜なもの。人々が腰にぶら下げたり、背中で背負ったりしているものは、現代日本の街中であれば銃刀法違反で捕まってしまうようなシロモノだった。

「コスプレ会場?!」

(今日、コスプレイベントなんてあったっけ?)

そんな現実逃避をして自分の服を見てみれば、美しい刺繍の入った白いローブに肩掛けカバンを身に付けた姿。それは画面上では毎日のようにお目にかかっていたもの。近くには、やはり画面上にて毎日お目にかかっていた特徴ある杖が転がっていた。

そして、重要なことだが……あるはずの胸が、まっ平らだった。

さらりと、肩にかかるくらいの銀の髪が揺れるのが視界の隅に入っ
つて、やっぱりと思うと同時に、ますます現状を認めたくなくなっ
た。

「ヤダ……なんなの?」

泣き出しそうになりながら辺りを見渡すと、やっぱり周りの人も戸惑った様子で己の身体を見ている。そして、己の身体を手で確認しだす人々。真琴も慌てて、自分の耳を触ってみれば、人間の耳より妙に長くて。

「え……えるふ?」

がばつと立ち上がるが、うまく身体が言うことを聞かず、たたらを踏み、前に倒れた。

(鏡……)

頭をあげ、自分の身が映せるようなものを探す。近くに水たまりを見つけると、這うように進み、それに自分の顔を映した。水面にぼんやりと顔の輪郭が映し出され、エルフ特有の長い耳が水たまり越しに確認できる。見たものが信じられなくて顔を水たまりに近づければ、銀色のまつすぐ伸びた髪は水たまりに少し浸かり、水面に波紋が広がった。

現実世界の自分に良く似た顔が、揺れる水面の向こうからこちらを見つめる。ノンフレームの眼鏡をかけた顔は、細い肩と相まって妙に女性的だった。

（ウソでしょっ！！）

声にならない悲鳴を上げ、手を顔に当てる。そっくり同じ動作の水たまりの中の人物を見、胸を触り、腹を触り、その下へと手を持つていくと、己の身に起きたことを認めるほかなかった。

「男……に、なっちゃった？」

吐き出した言葉が、耳に入り、頭の中で認識する。

（ありえないありえないありえない……）

真琴は現状を激しく首を振ると否定するかのように、力いっぱい叫んだ。

「うそだあああああ！！！！！！！！」

叫び声を上げていたのは真琴だけではなかったようで、現状を否定するかのような叫び声があちらこちらから聞こえてきた。

（イヤダ、どうしよう……私、どうなっちゃうの？　なんでこんなっちゃったの？）

誰か説明してよ、助けてよ。

ねえ、誰が何で、どういうことよ。ゲーム？ リアル？ 夢？
幻？ 集団幻覚？

混乱し呆然としている真琴は、思いつくまま言葉や単語を並べ、ぶつぶつ呟いた。はたから見れば怪しい人確定だが、今この時は、誰も真琴の様子を見ているものではなく、周りにいる人々もある意味真琴と同じ状況だった。

どれくらい時が過ぎただろうか。耳元で響く何かの音に気がついた真琴は、音を遮ろうと重く動かしづらい己の腕を動かし、耳をふさいだ。しかしその音は止む気配もなく、それどころか、その音に合わせるように目の前の視界がブレた。

それを魂の抜けたような姿で、ぼんやりと眺める真琴。

目の前のぶれる世界に思い出すのは、今はもう使えなくなつて久しい懐かしい実家の年代物のブラウン管テレビ。使えなくなるギリギリまで現役だったそれの上に、父親が携帯電話を置きっぱなしにして、弟に良く文句を言われていたっけ。

（父さん、またテレビの上に携帯置きっぱなしにしたのかな）

それは、現実逃避だったのだろう。鈴の音が携帯電話の着信音に聞こえ、あるはずもない携帯を探して辺りを見回すと、ブレた視界が徐々にクリアになる。そして、目の前の風景の上に、いつもは液晶画面上で見慣れたメニュー画面が現れた。チカチカと点滅しているのは、フレンドリストの『綾香』の文字。フレンドリストとは、エルダー・テイルでの友人一覧のようなものだ。

「えっ？」

それを認識した真琴は、はっとしてメニュー画面に顔を近づけるように、頭を動かした。もちろん、そんな事してもメニュー画面

は大きくなるわけではないが、意識が目の前景色からメニュー画面に切り替わり、文字がはつきりしたような気がした。

フレンドリストの一覧の中では、ゲーム中の人を白い文字で表示している。現在、真琴の目の前にあるフレンドリストの中で白い文字で表記されている人が何人かいた。その中には、先ほど会話をしていた『綾香』『マーナガルム』『クリステイナー』『アズライト』の4人もいる。で、現在『綾香』の文字がチカチカと点滅している。「念話の受信？」

念話機能という エルダー・テイル のゲーム内でできるボイスチャットがある。頭の中で響く鈴の音と点滅する名前から推測するに、どうやら自分は念話に誘われているらしい。ヘッドフォンもマイクもない今の状態で云うと、テレパシーか端末のない携帯電話だろうか？

「姐さん？^{ねえ} ちょ、ちょっと待って、えっ？ これってどうやるの？」

真琴は慌てて念話を受信しようとするが、カーソルを動かす要領がわからない。なんといっても、カーソルを動かしたくてもマウスもキーボードもないのだ。うまくカーソルを動かすことも出来なければ、思ったところにカーソルを合わせることも至難の業だ。

もたもたしているうちに鈴の音が止み、フレンドリストの点滅も消えた。

（き……消えた？）

真琴は命綱を断たれたかのように絶望的な気持ちになった。

（でも、姐さんから念話が来たってことは、姐さんもこの世界にいるんだ。メニュー画面からすると エルダー・テイル の世界に来たってこと？ そんなことって可能なの？

それより、さっきまで話していた4人もオンライン表示ってことは、この世界にいるっていうことかな？）

そう考えると、意識をメニュー画面に合わせた。カーソルを移動させようと意識するが、徐々に疲れて頭が痛くなってきた。

（マウスがあればスーツと動かせるのに……）

ため息交じりに思っていると、スツとカーソルが動き出した。

（へ？ あ、マウスで動かすイメージでやればいいのか！ 便利なんだか、不便なんだか……）

そんなことを考えていたところで、目の前に白いブーツが見え、慌てて意識を目の前に戻した。

「真琴……ううん、『マコト』でしょ？」

真琴の目の前に立つのは、鮮やかなオレンジのチェニツクの上に動きやすい部分鎧を装備した妖艶な美女。彼女はウェーブした長い赤い髪を形のよい爪で掻き上げると、にっこりほほ笑んだ。アーモンド形のぱっちりとした目と勝気に弧を描いた唇を持つ女性の顔には、見覚えがあつて、真琴は無意識に「姐さん……」と呟いた。

「マコ、探したわよ」

「……ホントに姐さん？」

「それ以外に、誰に見えるかしら？ って、この恰好じゃ、判らないのも当然？」

そう言つて彼女は、両手を広げて自分の身体を真琴にさらした。

泣きそうになりながら、真琴は綾香を見上げた。

「ううん、顔が姐さんっぽい」

この訳も分からない世界で、知っている人と出会えるということ、こんなにも安心するものとは思わなかった。

「それに、例え姐さんじゃなくても、姐さんだと信じたいよ」

そう言つと、安心のあまり真琴の目からぼろぼろと涙がこぼれる。「やだわ、この子だったら……こんなことで泣かないの。まあ、しょうがない子ね」

座りこむ真琴に近付くと、その頭をぽんぽんと軽くたたく。

「私だつてびつくりしたけどね ほら、いつまで座ってるの。立ちなさいって」

腕を掴まれて、引つ張られるままに立ち上がる。

「なんか、妙な感じ」

自分の身体なのどこか借り物のような違和感。手を握ったり開いたりしながら真琴が呟くと「当たり前でしょ、あなたは『マコト』なんだから」とこともなげに答える綾香。

「私の方は、綾子である実際の自分と『綾香』ってさほど変わらないわ。まあ、筋肉の付き具合とか、手足の長さとか多少違う部分もあるけどね。まあ、誤差の範囲内でしょ」

自身の身体事情を『誤差』と言い切った綾香は、真琴を見て肩をすくめた。

「でも、マコの場合って身長は同じくらいだけど、性別から体格からまるっきり違うでしょ？ ある程度の違いは仕方がないと思うの」

（それでいいの？）

あっけにとられる真琴は言葉を失う。『ある程度』で済ませられる話ではない気がするの、真琴の気のせいだろうか？

「それより、ちょっとこっちへ来て。みんなに見つかる前に渡したいものがあるの」

綾香はグイッと真琴を引つ張ると、近くの大木の陰に移動する。手足などの肉体的違和感に戸惑いながら、真琴は綾香に引つ張られるがまま動き出した。

ビルの残骸をまとった大木の陰に入ると、綾香は自分のウェストポーチの中を覗き、薬瓶を取り出した。

「マコ」

手を腕の曲げ伸ばしをしたり、身体をねじっててみたり……身体を軽く動かして、身体から感じる違和感をなくそうとしていた真琴は、差し出された薬瓶に首をかしげる。オレンジ色の薬瓶の中では液体がタプンと揺れた。

「何？ これ？」

薬瓶を見ながら不思議そうに尋ねる真琴に対して綾香は答える。

「昔の景品。アイテム収集家^{コレクター}としては、どうしても手に入れたくてね。いろんなツテを頼って手に入れたんだけど……マコト、貴方そのままじゃ、大変でしょ？ だから、あげるわ」

「何が？」

「まあ、私は、めったにない機会だから、そのままで楽しむのもありだと思うのだけれど、こればかりは、本人の希望が大事だと思うのよ」

「だから、何が？」

「このイベントを、よ」

妙に適応し過ぎな綾香に真琴は付いていけず眉を寄せた。

「すごいわよねえ。バーチャルリアリティどころの話じゃないわ。実体験型RPGなんて、初めてみたわ」

「じつ……体験？ RPG？」

「そのうち、運営側から大々的に連絡が入るんじゃないかしら？ シーも後から来るのかしら？ それとも、初回特典？」

どっちにしる楽しみねと妙にわくわくしている綾香についていけず、真琴は差し出された薬瓶に目をやる。

（それで、これは何なんだろう？）

真琴が自分の手元を見ているのが判ったのか、綾香は「性別を変えられるのよ」と告げた。その言葉を聞いて、真琴は「ああ」と納得した。

（自分は、現実社会で女だけど、ここでは男で。精神と身体を一致させるための薬がこれで、それを姐さんは渡してきたのか）

ぼんやりとしながらも、そう納得したところで、綾香が慌てだした。

「まずいわ。ガルとアズがこっちに来るみたい……今、念話が来たの。この近くにいてるって!!」

そう言つと真琴の手から薬瓶を奪い取り、それを真琴の肩掛け力バンの中に押し込んだ。

「とりあえず、今、貴方は『マコト』で、男だからね！ 忘れないでね」

真琴の耳元で綾香が耳元で囁くのと同時に、ガチャリと瓦礫を踏む足音が聞こえてた。

「お邪魔だった？ お二人さん」

呆れたような男の声に、綾香は「あら？ そう見えるなら遠慮してくれるかしら？」と言いながら、『マコト』の首に腕をまわし、艶やかな笑みで挑発する。そんな綾香のようすに、男は呆れたように尋ねた。

「綾姐あやねえ、おまえさあ、現状認識ちゃんとしてんのか？」

「してるわよ。なかなか、良い男になつたじゃない？ マアナちゃん」

マコトの首から腕を離し、しげしげと目の前の男をながめる綾香。「『マーナガラム』だつて言ってるだろ まあ、良い男つてのは事実だけだな。でも、俺様はシーのモノだからな。惚れても相手にしてやれねえぜ」

キランと無駄に白い歯を光らせる男に、綾香は「見かけが良くても、中身がガルなのはねえ」と首を振りながら残念そうに言う。

「んだとお!」

「なあに？」

「はいはい、そこまで。ちょっと、ガラム君、いきなり絡んじやだめじゃないですか。綾もガラム君のこと挑発しないでください」

マーナガラムの後ろから現れたのは、淡いブラウンのレンズが入った丸眼鏡をかけた青年。彼は慣れた風に2人をなだめる。

どうやらこの世界での身体はプレイキャラクターのモノが適用されているらしいが、顔のつくりについてはプレイヤー、つまり現実世界の顔が反映されているらしい。実際に会ったことのある3人は、それぞれがそれだと認識できたようである。

このなかで実際に会ったことのないのは自分だけだから、青年は、呆気にとられて3人の様子を見ていたマコトに目をとめると、首をかしげて声をかけてきた。

「もしかして……マコト君ですか？」

「そう、この子が『マコト』よ、かわいいでしょ。マコ、こっちの無駄吠え筋肉ダルマがマーナガルムで、陰険眼鏡似非紳士がアズライトよ」

マコトが返事をする前に、綾香がマコトの後ろから抱きついて紹介した。

いきなり別世界に連れてこられたのに、いつものように話し出した3人にマコトは戸惑った。なぜに彼らは、これほどまでに馴染んでいるのだろうか？

「モニター越しでは何度もお会いしていますが、実際に会うのは『はじめまして』ですね。私がアズライトです」

「マコ、騙されちゃだめよ。いつもの会話で気付いてると思うけど、アズってば、笑顔で毒が吐けるんだから」

優しそうな微笑みを浮かべてアズライトが自己紹介する傍ら、マコトの耳元で綾香がクスクス笑いながら囁いた。マコトは綾香のセリフに曖昧な表情を浮かべる。

「俺がマーナガルムだ」

マーナガルムと名乗った黒っぱい鎧で全身を覆った男は、狼牙族らしい外見というのだろうか筋肉質の大きな身体と、ぼさぼさの髪の毛を持っていた。

マコトは、ごくりと唾を飲み込むと、自己紹介をした。

「マコト、です。よろしくお願いします。アズライト先生、ガルムさん」

マーナガルムはニツと笑い「よろしくな」と応えるとマコトの頭を大きな手で撫でた。そして、そのままマコトの後ろにいる綾香に対して「綾姐、誰が無駄吠え筋肉ダルマだよ!」と吠えたてた。

「ほら、無駄吠えじゃない」

フツと馬鹿にしたように笑う綾香に「なに」と詰め寄るマーナガルム。そんなマーナガルムの様子に「はぁー」と態態^{わさわざ}見せつけるように呆れたため息を吐く綾香。

「そんなに詰め寄ったら、かわいいマコが怯えるじゃない」

シツシツと犬を追い払う様に綾香が手を振ると、マーナガルムは「んだとっ」とさらに詰め寄ろうとした。

と、パンパンと手をたたく乾いた音がして、アズライトが二人の間に入った。

「二人ともやめなさい。マコ君が固まってますよ　マコ君、この二人はいつもこんな感じですから安心してくださいね。二人のコミュニケーション方法は独特過ぎて、私にも理解できませんが、とても仲良しなんですよ」

ニコニコと笑いながら説明するアズライトに、綾香とマーナガルムは揃って反論した。

「いい加減なこと言わないでよ」

「ぜってえ、違うつ!!!」

「ほら、仲がいいでしょ」

につこりと微笑むアズライトに、綾香とマーナガルムはガツクリと肩を落とした。

マーナガルムはため息をついて首を振ると、気を取り直してぼんやりとしているマコトに声をかけた。

「だいじょぶか?」

「あつ……うん、大丈夫」

マコトは左右に首を振ると、パチンと頬を叩いた。叩いた頬は、それなりに痛かった。

「ただ、この状況が現実離れしすぎててさ……」

呟くマコトに、マーナガルムも「まあな」と同意する。

「なんだかんだ言っても、俺だつて信じらんねえよ」

「この世界って エルダー・テイル なのかな？」

「どうでしょう。この世界は エルダー・テイル かもしれないし、エルダー・テイル じゃないかもしれません」

マーナガルムとマコトの会話に、アズライトが加わる。その言葉にマーナガルムはムツと眉をひそめた。

「どういうことだよ？」

「知ってました？ メニュー画面に『報告機能』ありませんよ」

「うそだろっ！！！」

アズライトの言葉に、マーナガルムとマコトは、メニュー画面から障害報告の項目を選ぼうとする。しかし、あるべき項目がある場所が空白になっており、選ぶことは叶わなかった。

「バグ……この状況がバグと言つていいならばですが、バグ報告を運営会社に対してすることができませんし、そもそも、こんな体験型ゲームの開発が出来たのであれば、ニュースにならないはずがないでしょう」

「うーん。確かに、聞いたことねえな」

マーナガルムが唸るように同意し、マコトもため息をついた。

「結局、夢か現^{うつ}か誰にもわからないってことだよな」

「夢でも現実でも、どちらでもいいんじゃない？ ここはわたし達が生きていた現実の世界じゃなくて、剣と魔法の世界。ログアウトの方法が分からない以上、ここに居なきゃならないわけだし、せつかく エルダー・テイル（異世界旅行）に来たんですもの楽しみましょうよ」

あっけらかんと言いつつ綾香の言葉に、一同は顔を見合わせた。

「俺、綾姐のそのポジティブさが、今、無性に羨ましくなった」

「ある意味、姐さんの明るさに救われるよね」

「ココから帰る方法は分からないのは変わりませんしね」

「ああ……確実に言えることは、腹は減るってことか」

ぐうっと鳴いた腹をポンッと叩いてマーナガラムは言った。

「あと、排泄ですね。びっくりしましたよ、ゲームにはない機能ですからね」

「お腹が空くのは今のガルの腹の虫で分かるとして、なんで排泄の有無をアズが知ってるわけ？」

不思議そうな綾香の言葉に、アズライトはフウとため息をついて「実体験ですよ」と告げた。

「ちなみに公衆トイレなんて高尚なものは、この世界にはないようですよ」

その言葉を聞いた途端、いやな予感がマコトの脳裏をよぎった。

「すごく、不味いよ、それ……あのさあ、姐さん、覚えてる？」

マコトが綾香の顔を見ると、一瞬キョトンとした様子だったが、マコトが「某社のトイレットペーパー事件」と告げると、思い当たる節があったのか、徐々に顔色が悪くなっていった。

問題発生！ 異世界のトイレ事情？

それは二人が、まだ学生だったころの話。夏休みの臨時アルバイトとして、とある会社で働いたことがあった。ちなみにこの時、この会社は人手が足りなかったこともあり、本来なら会社が休みの夏季休業時にも、仕事をしなければならぬ羽目に陥っていたのだ。

その会社のオフィスは賃貸ビルの一フロアを借りていたのだが、世間的に夏季休業期間中ということもあり、真琴の勤めていた会社以外のフロアには出勤している人がいなかった。そのため、他フロアは防犯システムを稼働している関係上、立ち入りを禁じられていた。

さて、ここからが本題だが、このビルでは1フロアに男女1か所ずつトイレを設置している。もちろん、ある程度の広さがあるフロアなので、個室は複数ある。清掃は、ビルの管理会社と契約している清掃会社が行っており、夏季休暇中ということで、その期間の清掃は予定されていなかった。

この時の仕事は緊急のモノということもあり、従業員はアルバイトを含めると20人近く出勤していた。ちなみに男女比は2：8だ。つまり、個室が複数あると云っても、1か所のトイレを16人近い女性が使うことになる。

そして、タイミングの悪いことに、誰も夏季休暇中出勤することを清掃会社へ伝えていなかったのだ。

男性には分かり辛いと思うが、女性というのはトイレットペーパーの消費量が非常に多い。2日目にして、女子トイレにストックしてあったトイレットペーパーが全てなくなったのだ。その時は、女性従業員が大騒ぎになった。しかも、その日アルバイトを管理する社員は、男性しか出社していなかった。

トイレの話題ということで、女性従業員の誰もが恥ずかしがって、男性社員に伝えられなかったのだが、背に腹は代えられぬと男性社

員に報告し、男子トイレにあったトイレットペーパーを流用して事なきを得た。

その日、社員の一人がトイレットペーパーを購入しにスーパーに駆け込んだという。

（トイレットペーパー、ちり紙……紙。この世界って、魔法書や秘術書があるから紙はあるんだよね。でも、紙って言っても文字を書いたりするモノだから、流石に使えないでしょ　　代わりのモノ、代替品になりそうな『ナニか』）

マコトは、何か役に立つものはないかと、肩掛けカバンの中をのぞいた。

（代わりになりそうなアイテムは……）

マコトが、カバンの中を覗きながら、持っているアイテムを確認しよう意識すると、脳裏にメニユー画面が広がり、自身のカバンの中に入っているものやギルド会館に預けてあるものなどのアイテム一覧表がパパッと現れた。

（そっか、エルダー・テイルと同じで、アイテムは一覧で確認できるんだ）

マコトは、感心しながらアイテム一覧を上から確認しだした。一方、綾香は『某社のトイレットペーパー事件』の騒ぎを思い出して真っ青になっていた。あの事件以来『引越祝いはトイレットペーパー』がある意味合言葉になった二人にとって、現実的な一番の問題なのだ。

「トイレットペーパーって、エルダー・テイルにあったかしら？」

気分が悪そうに口元に手を当てて、綾香はアズライトとマーナガラムに確認する。

「聞いたことありませんね。そもそも、排泄行為自体、ゲーム内には存在していないのですよ」

「俺も、聞いたことねえな……てかさ？ トイレットペーパーって、

そんな重要か？」

「重要に決まってるでしょ！」

のんきなマーナガルのセリフに、綾香は言い捨てた。

自身のアイテム一覧からあるものを確認したマコトは、トイレの話題が出たところでちょうど良いとばかりに確認する。

「あのさ、この世界、水道あったかな？」

「公式設定ではないですけど、この世界は何千年後の地球って言うのが私たちの共通認識ですからね。いったん滅亡した文明にそんな便利な代物^{しなもの}あるはずがないでしょう」

冷静に分析するようなアズライトの言葉に、綾香は悲鳴を上げた。
「えっ！　ってことは、トイレって水洗トイレじゃあ……」

「ないでしょうね。最悪なことを言えば、ゲーム内では、排泄なんてなかったわけですから、ゲーム上トイレなんて必要ありません。ということはですね、トイレがあつたとしても『オブジェ』扱いなんじゃないのかと……」

つまり、出したものの行き場がないってことで、それを想像すると嫌な汗が背筋を流れた。

「恐ろしいこと言わないで！」

とどめを刺すようなアズライトのセリフに、ますます顔色が悪くなる綾香。

「つまり、野糞すればいいってことだろ」

そののどが大変なんだとばかりにマーナガルムが言うと、綾香はギツとマーナガルムを睨んだ。

「女心の分らない奴には、一生分かりっこないわよ」

女の敵とばかりに睨む綾香とは対照的に、「やっぱりそれしかないよね」と小さく呟くマコト。

「ガルム君。今のキミの発言は、女性に対して少々デリカシーのない発言だと思いますよ」

肩を叩いて心底呆れたようなアズライトの言葉に、「ちょっと待ってくれよ」とマーナガルムは慌てた。何故、自分がこれほどまで

に非難されなければならないのか？

「トイレなんざ、別に水洗じゃなくてもいいだろ。つーか、ココは御綺麗な現代日本じゃねえんだぜ。そこんとこ分かってんのかよ！ サバイバルなんだぜ、サバイバルっ！

それに、アフリカの砂漠の中にでも旅行に行ってみるよ。お前らが考えるトイレらしいトイレなんてないからなっ。砂ん中に穴掘って……」

「ストップ。そこまでにしましょう」

かなり必死に、それこそ浮気がばれた亭主のごとく、世界のトイレ事情を解説しようとしていたマーナガラムをアズライトは止めた。「確かにガルム君の言う通りですね。トイレは、森の中ではないでしょう。もちろん、戦闘区域では魔物に警戒しながらですが……綾、私たちは、この世界の異分子なんですよ。同じ地球上の外国へ旅行に行くのだってカルチャーショックの連続なんです。貴女の言葉を借りるなら私達は エルダー・テイル（異世界旅行）に來ているわけですから、元の世界の常識を過度に持たないほうがいいかもしれません」

なだめるようなアズライトの言葉に、綾香は唇を尖らせた。

「わかったわ。『野外トイレ』ってことで、場所については妥協するわよ。不本意ですけどね。でも、トイレットペーパーは、どうするのよ？！

ガル、世界のトイレ事情に詳しいあなたなら知っているかしら？ 御綺麗な現代日本じゃないアフリカの砂漠では、トイレットペーパーの代わりに何を使ってるの？」

結果的にマーナガラムに言い負かされる形となった綾香は、悔しさを悟られないように語気を強くして、マーナガラムに詰め寄った。マーナガラムは言葉に詰まった。彼にしたって砂漠へ旅行に行つたとき、ティッシュを持参していたのだから、現地の人はどうして

いたのかなど知りようがないのだ。

「葉っぱ、とか？」

自信なさそうに答えるマーナガルムに、綾香は「へえ。砂漠に葉が生えてるの？」と冷たく言った。

そんなに激しく突っ込まれると思っていなかったマーナガルムは、視線をあちらこちらに彷徨^{さまよ}わせる。

「いや、その……なんだ。まあ、あれだよ！ あれ」

しどろもどろに言葉が続けるマーナガルムに対して、やっといつものペースになったことにホッとしたように表情を緩ませる綾香は、ここぞとばかりに畳み掛けた。

「あれってなあに？」

「ぬ、布とか？」

にへらと愛想笑いを浮かべながら言ったマーナガルム。額には汗がにじんでいた。

「布お」

「うん、それ採用」

綾香の声とマコトの声が重なった。

「そう採用して……は？」

思わぬ言葉にマーナガルムはポカンとしてマコトを見る。綾香も、まさかマコトが口をはさむと思っていたため、何も言えなくなり口をパクパクと開閉させた。

マコトは、二人の様子を気にすることもなく、脳裏に浮かぶメニュー画面で在庫を確認しながら、アズライトに確認しだした。

「アズライト先生、水に流すわけじゃないから、水に溶けなくてもいいですよね？」

「そうですね。何を思いついたんですか？」

「ええ。トイレットペーパーの代用品になるものを 使用後は、土に埋めるわけだから、微生物が分解できる天然繊維が……」って言うても、この世界に化学繊維がないから、必然的に今あるのは天然繊維ってことになるんだけろうけど」

ブツブツと呟くマコトに綾香は不思議そうに尋ねた。

「ねえねえ、マコ。何を思いついたの？ トイレットペーパーの代わりって？」

「あとは、量だけど……うん、もつかな？ どうだろう？ とりあえず、今日明日の分があればいいよね。あとで工房に行って確認しないと結論は出ないかなあ」

「だから……マコ？ 聞いている？」

自分の質問に対する答えになっていないと綾香はマコトの顔を両手で挟んで、ぐいつと自分の方に向かせた。

急に顔を固定され、顔を動かされたマコトは、びっくりして悲鳴を上げる。

「姐さん、痛いよ……聞いている！ 聞いているからゴメンってば」

慌ててマコトは謝ると、綾香の手を外そうとしたが、外れず諦めて「ある！ あります」と苦しそうに答える。

「本当でしょうね？」

「ホント、ホントだってば！ だから、離してよ」

片手でペシペシと自分の顔を挟む手を叩きながら、マコトはカバンの中から『代替品』を取りだし「はい、これ」と綾香の前でヒラヒラと左右に揺らした。

それを見た綾香は固まり、アズライトは「ハンカチ、ですか？」と首をかしげた。

「これっ、『母の日の贈り物』じゃないっ！」

『母の日の贈り物』とは、綾香がマコトを エルダー・テイルに誘ったきっかけとなったイベントの名前だ。

エルダー・テイル のユーザー数を見込んだある大手企業が企画したもので、母の日に合わせイベントを行ったのだ。このイベント用の商品を店頭で販売し、その商品に付いているタグに書かれたシリアルナンバーを入力すると『母の日の贈り物』というクエストを発生させることができるというもので、クエストをクリアすると

買った商品と同じものが限定アイテムとして獲得できた。その限定アイテムを目的に、実際に母の日の贈り物用や女性へのプレゼントとして購入したプレイヤーが数多くいたらしい。

商品のデザインや質が良かったので、エルダー・テイル ユーザーだけでなく、エルダー・テイル を知らない女性層が購入することも多かった。実際 エルダー・テイル を知らなかったマコトも、その商品を購入し、それならばと綾香に誘われたのだ。

マコトと同じように、このイベントがキツカケで エルダー・テイル を始めた女性が多くいたため、毎年の恒例イベントの一つになった。

ハンカチを見て、思い出したように綾香は顔をしかめた。

「あれは、毎回金銭的に痛いよね」

「あー、確かに辛かった。シーに強請^{ねた}られて買ったものの、昼飯が寂しくなったなあ」

当時を思い出してマーナガルムは遠い目をした。綾香も悔しそうに呟く。

「確かにモノは良かったわよ。でも、モノだけじゃなく金額も良かったのよね。ハンカチ数種類にスカーフ3種類、エプロンもあったわね」

「手頃な物もあったけど、姐さんの場合、全部買ったからね」

「コンプリートしたかったもの。それにエプロンは母親にも贈ったわよ」

「ああ、あれですか。私も買って母親に贈りましたが、学生さんには辛かったでしょうね」

アズライトの言う通り、当時はお金のない学生を中心に「とうとう拝金主義に走ったか」とか「貧乏人いじめだ」など反発も少なくなかった。

「で、なんでそのハンカチが出てきたんだ？」

「マコ！もしかして、あなたっ！」

「うん。代替品」

そのイベント後、商品購入に絡んだイベントが増えすぎ、「もうけ主義に走りすぎだ」との批判も多く出たため、一部の商品は作成可能とし、そのレシピを期間限定で公開することにしたのだ。期間限定といっても、一度作ったレシピは失われないので、材料さえそろえば、いつでもいくらでも作成できるようになった。

「マコ君は 裁縫師 でしたね」

「そつ。だから、布皮系の製作のイベントはWebとかでもチエツクしてるんだ。工房の杏師匠にも教えてもらえたりしたしね。それに、実は『母の日の贈り物』の他にも、そういうレシピ取得イベントって結構あったんだよね。『冬の暖房を1 下げようキャンペーン』の時は『綿入半纏』のレシピなんてあったんだよ。まあ、姐さんは、作成に関してはあんまり興味ないから知らないと思うけどさ」にこやかに言ったマコトに対して、綾香はというと難しい顔をしながら悩んでいた。

「これで……拭くの？」

「気が進まない？ でも、ほら、うちでもギルドショップを作ろうとしてたじゃない？ その目玉にするつもりで、たくさん作ったのがあるから在庫はあるんだ。使い捨てにしちゃって大丈夫なんだよ追加で作れるか工房へ行って確認しなきゃならないけどね」

安心させるように付け加えるマコト。

綾香は、他に方法はないかと少し考えたが、良い案など出てくるわけもなく、心理的な抵抗感を減らすために「本当にいいの？」と確認するしかなかった。

「いいよ。ただ、今すぐについていうと手持ちの分しかないけどね」

「でも……なんか、すごい贅沢ね」

ふふつと笑う綾香に、「あんなに大騒ぎしてたのに……現金な奴だなあ」とマーナガルムは呆れかえった。

「他の問題といたら、綿を作るための綿花を手に入れなきゃならないことかな」

「綿花は畑でも栽培できたよな」

「毎日何枚かは、確実に必要よ。栽培じゃ、時間がかかるわ」

「んじゃ……あつ、突然変異してモンスター化した奴！アイツがいたよな？」

「コットンプラントですね。25レベルほどの低レベルモンスターですよ」

「うん、腕慣らしにちょうどいいわね。さくさく倒して、綿花を回収しましょ」

当面の問題が解決したためか綾香は明るく言った。

「それに、せっかく異世界エルダー・テイル に来たんだから、戦闘くらしい体験ときたいじゃない」

さあ行こうとばかりに歩き出した綾香。それを「ちょっと待てよ」とマーナガルムは止めた。

「悪いけど、飯が先っ！腹減ったぜ」

「ん〜、じゃあ、ご飯食べに行こっか？ふふつ。旅といえばおいしいご飯よね」

弾むような足取りで駅前公園の方へ向かいながら、綾香は楽しそうに言った。

「ゲーム中、何度も思ってたのよねえ。ほら、材料と料理名しか出ないでしょ。どんな味なのか、興味がわくじゃない？」

「確かにな」

マーナガルムは頭の中に様々な料理アイテムを描きだしす。それに合わせて、腹が歓声を上げた。

「もう、旅でいいですよ。どうぞ、旅行気分をお楽しみください」
旅行気分を前面に押し出す綾香にアズライトは諦めて言うのだった。

「ただし、攻略サイト（観光案内ガイド）はありませんので、覚悟してくださいね」

につこりと微笑みを浮かべて告げると、マーナガルムは目を丸くして振り返った。

「は？」

「おや？ 気付いてませんでしたか？」

にこにこと人のいい笑みを浮かべ、アズライトはマーナガルムを追いつきながら尋ねる。

「攻略サイトなんて便利なシロモノ、どうやって見ることができんですか？」

「えっ？ あ……そっか、見れねえか」

頭をかいて「気付かなかったな」と呟いたマーナガルムは、仲間の後を追った。一方、綾香はハツとしたように固まった。急に立ち止まった綾香の背に顔をぶつけたマコトは、鼻を押さえた。

「いったあ……姐さん、どうしたの？」

攻略サイトがなくても、近場だけになってしまいが綾香の希望する冒険はできる。確かにモンスター情報がなくなってしまうのは痛いけど、近場であつたならさほど、脅威となるモンスターはいないだろう。マコトとしては、こんな状態になって冒険に出て死んでしまったらどうするんだろうという不安の方が多い。

そう思っていたマコトだったが、綾香は違つたらしく残念そうに言うのだった。

「攻略サイトが見れないってことは、妖精の輪（フェアリーリング）は使えないわね？」

妖精の輪（フェアリーリング）というのは、エルダー・テイルにある転移装置で、様々な条件の元、特定の妖精の輪同士を繋ぎ移動できるというものだ。使いこなせば、目的地まで短時間で移動ができ、旅の助けになるものだが、『様々な条件』というのが曲者で、月の満ち欠け等様々な条件下の元ランダムに組み込まれている。もちろん、攻略サイトで一時刻表タイムテーブルを確認すれば、どの妖精の輪がいつどこの妖精の輪に繋がっているか一発で分かる。そのため、プレイヤーはソレを利用して効率

的に旅を進めていた。

しかし今、攻略サイトを見ることができない以上、どこに飛ばされるのか誰にも分からないのだ。

アズライトは「使うつもりだったんですね」と呆れたように笑って続けた。

「私達がこちらの世界に来たことで仕様が変わっていれば違いますが、私達が知っている時のままだとしたら、使うのは危険ですね。まあ、帰還呪文 が使えば、ココに戻ることはできますから、それを利用して冒険することだけならできますが……」

帰還呪文 とは、フィールドから五大都市のいずれかに戻ることができるシステムである。ただし、帰還できる場所は最後に立ち寄った都市と決まっている。綾香達であれば、ここアキバの街に帰ってくることになる。

「わたしだって、自分の命を実験にしないわ……ん、旅にトラブルはつきものって言うけど、旅行ガイドくらいは持ってきたかったわ」

残念そうにため息をつき綾香は言う、食事を求めて駅前広場へ進むのだった。

問題発生！ 異世界の食事情？

異様な雰囲気だった。

人がたくさんいる気配がするのにも、メインストリートには、さほど人がいない。棧橋の下、ホームの上、建物の陰、ビルの2階の窓の向こうエトセトラ、大量の視線がメインストリートに突き刺さっている。

そして、それほど人が集まっているにもかかわらず、物音がせず、静けさを保っていた。仲間同士、固まってしゃべる声はある。ただし、それは小さくぼそぼそとか細い声がさざ波のように広がっているだけで、日常のしゃべり声とは全く違う。もちろん、いつものゲーム上の賑やかなアキバの雰囲気とも違うものだった。やがて誰かの怒鳴り声や泣き声がすると、さざ波のような声はシンと一旦静まり返るが、またさあっとひそひそ声が広がります。そしてまた苛立たしげな怒鳴り声や泣き声が聞こえます。

駅前広場は、かつての賑わいを忘れ、ひっそりと沈みかえっていた。何かを待っているかのように、何かを聞き逃さないように人々は息を殺す。

「いやな雰囲気だわ」

ぼそりと綾香は漏らす。

「ん、確かになあ」

「分からないこともないよ」

誰だって、突然、何の断りもなしに訳の分からない世界に放り込まれたら、混乱するだろう。そして、どうしてこうなったのか理由が知りたくなる。けれど、現状は、混乱ばかりで安心できうる情報は何もないのだ。

いつ帰ることができるのか？

ココは何なのか？

どうすれば帰ることができるのか？

この世界に連れてこられた人全員が、不安に思っても不思議はない。

「なによ。私たちは、めったに來れない エルダー・テイル へ旅行に來てるのよ？ 帰れるか帰れないかは二の次で、現状を楽しむべきだと思うわ」

そう言いきる綾香に、残りの三人は呆氣にとられる。

「姐さん……まず、普通だったらこんな所に来れないっていうか、誰も來たくなかったと思うよ」

「マコ、氣が合うな。俺もそう思うぜ」

ぼそりと呟くマコトにマーナガルムもその通りだと頷いた。アズライトも首を振りながら疲れたように呟いた。

「たぶん、この世界に來て一番喜んでるのは綾ですね」

そんなことを言いながら大通りを歩く四人の後ろから、甲高い聲が聞こえた。

「いたいたいたあゝ！ 見つけたのお」

四人が声の方を振り向くと、白い猫の耳を頭に乘せた白いフワフワとした髪少女が、大きく手を振りながらぴょんぴょんと跳び跳ねているのが見えた。その傍らには、ローブを着た女性とドワーフの男性が立っていた。

「みいんな、やっと來たのおゝ！ クリス待ちくたびれたのお」

「クリス」

アズライトは答えるように手を振り、綾香はクリスティーナの容貌を見て目を輝かせる。

「猫耳娘」

クリスティーナが4人のそばによるよりも早く、綾香はクリスティーナに駆け寄りギュムツと抱きつく。

「えっ？ あ、綾香様」

クリスティーナの傍らにいた女性が、驚いて一歩下がる。ドワー

フの男性は目をまん丸くしてクリスティーナと綾香の二人を見ていた。

「かわいいわあ。しつぽがフワフワで気持ちいい」

綾香の歓声が静かな街に響き、近くにいた人々から注目を浴びる。後ろから3人が追いつくと、綾香のハイテンションについていけず目を白黒させてクリスティーナがいた。

「犠おもちゃ牲者確定だな」

クリスティーナの様子を見たマーナガルムが哀れそうな目を向けて言うと、アズライトは微笑ましいものを見るかのように二人を見た。

「いいじゃないですか。綾のクリスに対する親愛の挨拶ですよ」

にこにこするアズライトを信じられないものを見るかのように見たマーナガルムは「して？ その心は？」と尋ねた。

「こちらに被害が来ない限りは放っておきましょう。なんでしたら他人のふりでもしておきますか？」

「あ、綾っち、離しやがれなのお！ って、ライライにガルガル、マコマコも見てないで助けるなのお！！」

クリスティーナは何とか綾香の腕を引き離そうとしながら、悲痛な叫びをあげた。

その声に慌ててマコトは二人に近付く。

「ね、姐さんっ！ クリス苦しがつてるってば」

がしつとクリスを抱きかかえた綾香の腕を解こうと頑張っていたマコトだったが、戦闘職 武闘家（モンク）の力に非戦闘系職業のマコトとクリスティーナの力は全く敵わない。

「ガルムさんとアズ先生っ！ 見てないで姐さんを止めてくださいよ」

マコトは自分だけでは埒があかないと、後ろでのんびりしている二人に救援要請を出した。

「呼ばれたぜ？」

「仕方がないですねえ」

おどけるようにして肩をすくめ、アズライトは静かに綾香の後ろまで近付くと、フウッと綾香の耳元に息を吹きかけた。

「ふきやあつ！」

甲高い叫び声を上げると綾香はクリスティーナを離し、耳元を押さえてしゃがみ込んだ。

「ライライありがとなのお」

涙目のクリスティーナはアズライトに抱きついた。マコトは疲れたように息を吐き、クリスティーナの傍に立つ二人を見た。

「あ、あの？」

「銀杏工房　の二人組なのぉ」

アズライトから腕を離し、綾香から距離を置いたクリスティーナは、二人を紹介する。

「ドワーフの『ぎんちゃん』。こつちが『あんちゃん』」
しろがねあんず

「銀と杏ですわ」

あまりにもざっくりとした紹介に慌てた女性がそう名乗り、ぺこりと頭を下げる二人。クリスティーナは、銀と杏に自分のメンバーを一人一人指して紹介した。

「このセクハラ姐さんが綾っちで、眼鏡かけてるのがライライですよ、筋肉がガルガル、んで、たぶんマコマコなの」

あまりにも適当な紹介に、アズライトは額に指を当てて首を振る。

「酷いじゃない、アズ……ああ、びっくりした」

回復した綾香が、銀と杏に「はじめまして。いつもお世話になってます。綾香です」と比較的まともな挨拶をする。

その後、アズライト、マーナガラムが挨拶し、「マコトです」と名乗るとクリスティーナが「やっぱり当りなのぉ」と得意げに猫ヒゲをびくびくとさせた。

「銀親方と杏師匠、はじめまして。クリスもはじめましてだよね。いつもお世話になってます」

ぺこつと頭を下げたマコトに、「あの……実は……」と可愛らしい声がした。

はじめで聴く声に綾香をはじめとする4人がキョトンとしていると、髭もじゃで分かりにくいが銀の顔が真っ赤になって「ワシ、じやなくてあたしです」と小さく手を上げていた。

「えっ？」

「そなのぉ！　なんとびいつくりなのぉ！　ぎんちゃん、女の子だったのぉ」

クリスティーナがマル秘事項なのとばかりに口の前に指を一本立てて、小さな声で囁いた。

「！！！」

叫びだしそうな所、それは失礼かと慌てて口をふさいだマコトと綾香。アズライトの眼鏡がずり落ち、マーナガルの口があんぐりとあいた。

「今まで黙っていて申し訳ありません」

申し訳なさそうに謝る杏。

マーナガルは「俺ら、かなり目立つから、どつかの廃ビルに入ろうぜ」と周りを見渡しながら呟き、近くの廃ビルの中に入った。

廃ビルの中で、綾香は銀に確認した。

「どうして、男キャラにしたの？」

「女二人組よりは男女二人の方が、知らない人に絡まれることもないと思いましたの」

真っ赤になり何も言えなくなってしまった銀の代わりに、杏が説明しだした。

「銀はドワーフの器用さが魅力でドワーフにしようと思ってたのですわ。でも、ドワーフの女の子って悪目立ちしそうですよね？　どうせなら男にしておおうと言いました」

そう言えば、親方に話す時って大概文字チャットだったなとマコトは思う。

「杏師匠がフォローしてたから、親方って人見知りか激しい人だなって思ってたけど……女の子だったら、そうだよな」

「でさあゝあ」

クリスティーナは耳をぴくぴくさせながら、アズライトの陰から綾香に尋ねる。

「前、見た目を変えられる薬を手に入れたって綾っち言ってたでしょ？ それ、ぎんちゃんにあげちゃダメかなあ？」

「お願いしますっ」

「綾香様、貴重なアイテムなのは分かっております。でも、譲っていただけないでしょうか」

必死に頼み込む二人に、綾香は引きつった笑いを浮かべ、マコトの腕を引いて皆から離れ、柱の陰に隠れる。

「どうしよう？」

めったに見られない綾香の動揺しきった様子に、マコトは苦笑した。

「どうしようもこうしようも……仕方がないでしょ。私はこうやって話しても男だって納得されちゃうくらい男声なんだから、大丈夫よ。銀親方に渡してあげようよ」

「で、でも、あんただって、男の姿じゃ大変でしょ？ なんだったら、わたしから断ってあげるわ」

マコトはチラリと銀と杏の様子を見る。不安そうな顔で、こちらを見ている二人の姿。確かに今の状態では、心細くて仕方がないだろう。

「姐さん、渡してあげよう」

肩掛けカバンの中からオレンジ色の薬瓶を出し、綾香の手を取る。その手の中に薬瓶を置くとギュツと手を握らせた。

「マコ……分かったわ」

呆れたような声で綾香は答えた。

「まったく、甘い子なんだから」

しかたがないという風に肩をすくめ、皆のところに合流する。

「はい、これよ」

綾香は銀の手を取り薬瓶を握らせると、銀の顔に笑みが広がった。綾香の手に額がくつつくほどお辞儀をする。

「ありがとうございます」

「綾香様、ありがとうございます。私達が出せる精一杯ですが、お礼をお渡ししたいので、ギルド会館まで御足労願えますでしょうか」
「えっ？」

綾香は呆気にとられた。確かにこのアイテムを手に入れるために、結構いろんな人に声をかけたのだが、最終的に譲ってくれた人は「使い道ないから」とタダでくれたのだ。もちろん、何度もチャットしたり、一緒に冒険したりと仲を良くするための行動は起こしていたが。

タダでもらったものを有料で譲るとするのは如何なものか？ 綾香は、うーんと悩んだ。

「お礼なんて別にいらないわよ。親方には、いろいろ防具を作ってもらったり、防具の強化してもらったりしたし」

防具の中には 鍛冶屋 でしか作れない防具もあった。そのため、銀には集めた材料で防具を作ってもらったり、防具の強化をお願いしたりしたのだ。いろいろ世話になっているため、お金を取ってまてという気にはならなかった。

「それでは、申し訳ありませんわ」

杏が言つと銀も頷く。

「うーん……それじゃ、マコが裁縫台借りるときに融通してくれるってのは、どう？ マコには、わたしの日常生活にかかわるものも作ってもらつ予定だし」

「そんなことでいいのですか？ もちろん、それで良いのであれば、私達の方は構いませんわ。裁縫台も炉も作業台も 遊色の雫 の皆さまへは無償で提供させていただきますわ」

「ぼ、防具や武器の、強化とかも、タダでやります……ホント、ありがとうございます」

そう言つと、二人は深々と頭を下げるのだった。

「じゃあ、後で、お願いしに行くから……またね？」

急いで使いたいのだらう。二人は綾香に深々とお辞儀をすると、「

失礼します」とギルド会館の方へ急いで行ったのだった。

「いい加減腹減った……場所、移そうぜ」

「それじゃ、シデンの酒場に行く？ あそこなら食事も取れるですよ」

マコトが言ったシデンの酒場とは、一階が酒場で二階が宿屋になっている施設である。普段であれば、体力と魔法等を使うために必要な精神力を回復するための施設だが、異世界化してしまったエルダー・テイルでも同じ機能があるのかどうかは分からない。

それでも、非日常にさらされた彼らは肉体的にも精神的にも疲れており、休息を必要としていた。また、マコトは心のどこかで「寝て覚めたら、元の世界に戻る」ことを願っていた。

駅前広場で知り合いを見つけては話かけて話を聞いていたらしいクリステイナーは、宿屋に向かう道中、自分が聞いたことを仲間に披露していた。といっても綾香の「結局、何もわからなかったのね」の一言で終わってしまうようなものだったが。

「うーん。みんな、運営会社から何らかのアクションがあると思ってたのお。でも、ぜんぜん」

「企業側からの発表もなければ、なんの情報もないってことよね。それどころか今見ている通り、あまり雰囲気も良くない……」

『体験ゲーム』と信じて疑わない綾香は「せめてログアウトの情報ぐらい欲しいわね」と言った。

「これからどうなるんだろう？」

不安げに呟くマコトに「どういうことが分からねえけどさ……」とマーナガラムは答えた。

「とりあえず、自分ひとりじゃねえってことと、頼れる仲間がいるってことは、不幸中の幸いってとこじゃねえの」

「おや、マーナガラム君、いいこと言いますね」

「マコマコ、クリスが付いてやるから安心しろなの」

「そうだね。僕には、頼れるみんながいる」

マコトが言うと、混ぜっ返すようにマーナガラムが言った。

「まあ、マコが頼れるかどうかは分からんねえけどな」

「それをいうならガルだって、頼りになるかどうか分からないわね」
くすくす笑い出す綾香。「なんだとお」と、いつもの軽口合戦が始まりそうな所で、「あつたあつた、シデンの酒場なのお」と指をさして騒ぎ出すクリスティーナ。

賑やかな仲間の言葉に、確かに一人でいたときに感じた悲壮感は薄くなってきたと思いながらマコトは、酒場の中に入って行った。

酒場に入り綾香とアズライトは今日寝る部屋を押さえるべくカウンターへ行き、残りの三人は席について次々と料理を注文していた。注文した品を待っている途中、一同はどんよりした酒場の雰囲気嫌な予感がしたが、各々気のせいだと自分に言い聞かせていた。
「部屋は6人部屋にしたわ」

「二段ベッドが3つ置いてあるらしいですよ」

部屋を取っていた二人が合流すると他愛のない会話をして気を紛らわす。やがて、注文した料理が次々と運ばれてきた。その様子を哀れそうに見つめる視線。

六人はテーブルの上に並んだおいしそうな料理に手を伸ばした。そして、全員が全員ぐつと息を詰まらせる。まわりの奇妙な顔の理由を嫌というほど味わったのだ。

「信じられないわ……なに、この壊滅的な味！」

悲鳴に近い綾香の言葉に、マーナガラムもため息交じりに頷いた。

「食べられないわけじゃねえけど……これは、なあ」

「好き好んで食べたくないのお」

目の前にある『見た目おいしそう』で『塩気の抜けて湿気ったせんべい味』の料理をげんなりと見つめるクリスティーナ。

慌てて綾香は自分の持つている果物を背負い袋の中から取り出して、テーブルに並べた。並べられた果物たちは、瑞々しい芳香を漂わせ、食べてみると果物の味がした。

「どうやら、調理していない『素材』単体では、現実社会の同じものと同じ味だと思います…… 思いますけどね」

「これを調理と呼ぶのか？ 料理って言いたくねえけど、この料理は調理以前の問題だと思ぜ」

げんなりとマーナガルムが言えば、綾香が出した果物を手に取りながらマコトも頷く。

「うん、料理は全部同じ味だね。果物は違うけど」

マーナガルムは綾香をなだめるように続けた。

「匂いだって、全然しねえし…… なあ、いくら肉を焼いたものだって、肉の臭みをここまで消せねえだろ。ソースにしたって全然塩気がねえ」

デミグラスソースのかかった『見た目かなりおいしそうなステーキ』をフォークで刺したマーナガルムは、口の中にそれを放り込むと顔をしかめた。

「料理は視覚、味覚、嗅覚、どれが欠けても成り立たないのに、二つも欠けてますからね」

「そうなのお！ イチゴスフレもレアチーズケーキも、まあまったく甘くないのは許せないの！」

スイーツに対する冒涇だと力説するクリスティーナは、持っていたスプーンを握りしめた。

「そうだよ。見た目おいしそうだから余計に腹立たしいよね…… なんでケーキの中に入っただけなのに、味がなくなるんだろ？」

テーブルを囲んで、5人が5人ともため息。

「他のモノ、注文してみるわ」

「綾姐、誰が食べんだよ……」

「じゃあ、私が何か作ってみるわ！ ちょっと調理台借りに行ってくる！」

がたんと椅子から立ち上がった綾香をアズライトが止めた。

「綾、早まらないでください。同じものができるだけですよ」

「なんでそんなことが言えるのよ！ 失敗するって決めかからない

で欲しいわ」

「今あるのだって、全て見た目は失敗じゃないでしょう。見た目だけは……もともとゲームの世界なんです。味なんて誰も気にしないから、こうなるんじゃないですか？」

「じゃあ、なんで素材の時は味もおいもするのよっ！」

呻くように言う綾香に、マーナガルムが呟く。

「はあ……肉の味がするハンバーガー食べてえ」

「ケーキ、タルト、プリン、懐かしいのお……」

ふわふわの髪の毛を指でいじって、ため息交じりに告げるクリスティーナ。

そんな中、綾香だけが「よしっ！」と掛け声をあげると、ぐるりとメンバーの顔を見回して宣言した。

「明日から冒険にでましょう。健全な食生活の為に！　ここはエルダー・テイル　だし、私たちは　冒険者　なのよ」

なにも答えを返せない四人。何故そんな結論に達するのか理解できず、呆然としているメンバーを見て、反論なしと捉えた綾香。

「旅にはハプニングは付きものだわ。調理した料理はダメでも、果物は味がするんだもの、果物を採りに行きましょうよ」

こちらに向かって片目を瞑り、楽しげに言う綾香に、「気楽な奴め」とマーナガルムは首を振りながら席を立った。

「でも、綾姐の言う通りだな。いつ帰れるか分からねえ以上、なにかやるい事を見つけねえと腐っちまう」

「これで、ひと眠りして現実世界に戻れてれば、何も言うことはないんですがね」

流石に参りましたと嘆息するとアズライトも席を立った。

「今日はいろいろ疲れたでしょう。いろいろ対策を立てるのは、明日でも出来ます。今は、少しでも休んで気力を回復させましょう」

「はい」

まるで引率の先生のような様子のアズライトの言葉に、マコトとクリスティーナも席を立ち、二階へと続いて行くのだった。

部屋の中に入った五人は、それぞれベッドの中に倒れ込むと、祈るように眠りに付いた。

問題発生？ 異世界の被服事情！

朝起きると、そこは見慣れた自分の部屋だった。　　ら良かったのだが、もちろんというか残念ながら、目の前にあるのは2段ベッドの天井で、自分はまだ エルダー・テイル の世界に居るのだった。

目が覚めてぼんやりしていると、綾香とクリスティーナの声が聞こえた。他のベッドを見ると誰もいなかった。アズライトとマナガルムはどこかに行っているのだろう。

「やっぱり、下着がないのは痛いわね」

「身体が脂っぽい。お風呂かシャワーが欲しいのぉ」

マコトは欠伸を一つすると、ごそごそとベッドから這い出して、上の段に居る綾香を仰ぎ見た。

「姐さん、下着あるよ。代用品だけだね。ただ、今持っていないからギルド会館の貸金庫行かないと渡せないけどね」

「ホントぉ！ 助かったぁ……って、マコマコぉ、なんでキミが女物の下着なんて持つてるのぉ？」

エッチと騒ぎ出すクリスティーナに「代用品だから、用途は下着じゃなかったものだよ」と弁解したが、「少年、おねえさんに隠さなくてもいいのぉ。マコマコも男の子だったってことなのぉ」と余計に面白がられてしまった。

「で？ マコ、代用品ってなぁに？」

「ビキニ。去年の夏にレシピが公開されてた奴」

エルダー・テイル のグラフィックは秀逸である。そのため、キャラクターの服装も華やかで、鎧等本来武骨なモノも美しいグラフィックが用意されていたり、ローブやドレスは色とりどりに取り揃えたりしている。もちろん、夏になると水着が冬にはコートが、という具合に、キャラクターを好きなように着せかえできるのも楽しみの一つになっている。

また、それらの衣装類は、素材を組み合わせることも可能なので、作するためのレシピを公開しているサイトがある。裁縫師のサブ職業を持っているプレイヤーたちは、いろいろな情報の元、様々な衣装を作成しているのだ。

「上下分かれてるから、下着にはぴったりでしょ？」

「なんで、マコマコがそんなレシピ持ってるのぉ？ マコマコ……むつつり？」

「……去年の夏、水着のグラフィックを欲しがったのは誰だっけ？」

「そういえば、そんなこともあったかもなの」

てへつと笑うとクリスティーナは、上のベッドからぴょんと飛び降りた。

「クリスが欲しがったから、皆でシルクワームを倒して絹玉を取りに行ったり、装備特典付きの水着^{ヤッ}が欲しいってサラマンダーの卵の殻を取りに行ったり、ユニコーンの角やペガサスの羽根を取りに行ったりしたよね？ 竜の鱗が欲しいって言ってガラムさんとケンカになったこと忘れちゃったの？」

呆れたように言ったマコトに、クリスティーナは誤魔化すような笑みを浮かべて、「んぢゃ、貸金庫行ってくるなのぉ」と部屋の扉を開け、部屋を飛び出していった。

「わたしも貸金庫行つて取つてこようかしら。流石に同じ服を着続けるのも嫌だわ」

マコトの上のベッドから綾香が降りてきた。

「アズ先生とガラムさんは？」

「知り合いのところに行つて情報収集だつて。この部屋を基点に動こうつてことになって、アズが部屋の長期契約してくれたわよ。とりあえず、しばらくしたら今日の果物を採りにフィールドに出てみようつてことになってるの」

「もうそんなにいろいろ決めてたんだ。私つてば、ずいぶん寝坊したらしいね」

「気にしないでいいわよ。それよりも、『私』じゃなくて『僕』ね。

わたしの前だからって気を抜いちゃだめよ」

につこりと笑って綾香がマコトの顔を覗き込んだ。

「了解」

「そうそう、 銀杏工房 の方も気になるでしょ？ 一緒に行ってみない？」

「ああ……そうだね。『僕』も、いろいろ確認しなきゃ」

マコトは『僕』を強調して答えると、グッと背を伸ばして立ち上がった。

「じゃあ、早速ギルド会館に行きましょう」

ギルド会館では、ギルドという組合を作ったり入会したり脱退したりという事務手続きのほか、銀行がありお金をや貴重品を預けることができる。また、お金を払えば各ギルド専用の部屋、ギルドホールを借りることもできる。ギルドホールには大小様々な間取りが用意されており、さながらギルドマンションと云ったところだ。もちろん、大規模なギルドになると用意されたギルドホールでは部屋数が足りなくなり、家やビルなどを貸し切って使っている。

マコトたちのギルド 遊色の雫 は小人数ということもありギルドホールを借りてはいないが、銀や杏のギルド 銀杏工房 は自前の炉や裁縫台などの道具を置く場所が必要だということもあってギルドホールを借りている。

ギルド会館の中央にある大きな出入口をはいると、お金やアイテムの出し入れをする銀行カウンターが左手奥に、ギルドの諸手続きを行うギルドカウンターが右手奥にあるのが見える。中央には観葉植物や長椅子などがあり、高い天井や見事な柱などと相まってホテルのロビー的雰囲気醸し出していた。入口からは観葉植物に遮られて見えないが、中央奥には各ギルドの部屋へとつながる扉が左右にいくつも並んだ廊下がある。

二人がギルド会館に入ると、クリスティーナが銀行のカウンターからロビーに戻ってくるところだった。

「クリス！」

「マコマコっ！　ありがとなのお　おかげで清潔な下着なのお」
「るるとご機嫌なクリスティーナ。ご機嫌ついでにクルクルとターンすると、鮮やかなオレンジ色のワンピースの裾がクリスティーナの膝付近でフワリと膨らむ。どうやら服も着替えた模様で、朝着ていたモノと違っていた。」

「クリス、服装も変えたんだね。クリスは色白だから、ワンピースの鮮やかなオレンジがぴったり合ってる」

「へへっ　ありがとなのお」

照れたようにニマッと笑うクリスティーナにムツとしたような綾香。

「マコっ！　私も荷物取ってくるから、待っててね。あつ、親方たちに連絡任せたわ」

綾香はそう言うのと、銀行のカウンターのところに走って行った。

「マコマコ、今からぎんちゃん達のとこ行くの？」

「うんそのつもり……」

「んぢや、クリスも一緒に行くのお　かまないよね？」

「ああ、別に構わないよ。今日行くのは、昨日渡した例のハンカチを量産できるか確認するだけだから」

「どうせなら、下着ヒキニも量産してほしいなのお」

「うん、そうだね。じゃあ、それも杏師匠に確認してみようか」

「うみゅ」

クリスティーナは満足げにうなずいた。

「そいや、ぎんちゃん、どないしたる？」

「そうだねえ。無事に性別が戻ってればいいけど」

「どんな人になるんだろうなと思いはしても、元が髭もじやのドワーフである。まったく想像がつかなかった。」

「あつ、ちよっと待っててね。工房に行くのに、杏師匠に連絡しな

きや」

マコトはクリスティーナに断って、念話で杏に連絡する。すぐに杏が応答してくれた。

「あつ、杏師匠？」

『マコ様！　もしかして綾香様もいらっしゃるんですの？』

「うん。姐さんともいっしょ。今、ロビーに居るんだ」

念話で話し出すマコトにクリスティーナは「クリスも一緒お」と騒ぎ出した。

「クリスも一緒なんだ。今、姐さんは貸金庫に行ってるんだけど、姐さんが戻ったら工房に行くから、いいかな？」

『もちろんですわ……あつ！　ちよつと、銀っ！』

「ん？」

「どしたのお？」

「なんか念話終了されちゃった。まあ、姐さんが戻ってきたら、工房に行こう。行けば、なんか分かるでしょ」

そんな話を話していると廊下の一つの扉がすごい勢いで開き、中から背の小さな女の子が出てきた。何気なくその廊下を見ていたクリスティーナは、目を丸くする。

「およ？」

クリスティーナが不思議そうに女の子を見ると、勢いよく此方に来るではないか。マコトは銀行カウンターの方を見ているため気付かない。これは声をかけた方が良くかななんてクリスティーナが思っていると、あつという間に女の子が二人のところに来たのだった。

「クリスさん、マコトさん！　待ってたです」

後ろから急に声をかけられたマコトはビクツと肩を震わせ後ろを向いた。見覚えのない女の子に「僕のこと？」と首をかしげる。

「えつと？」

マコトが「どちら様ですか」と声をかける前に、女の子は自分の名前を告げた。

「あたしです。銀しろがねです」

「ええっ!!」

これにはクリスティーナもマコトも驚き、大声を上げてしまった。二人の驚き具合に、銀は真っ赤になって俯いた。

「そ、そんなに、変？　ですか？」

「いや、可愛いよ。っていうより……なんか、親方じゃないみたいだよ」

可愛い女の子になってしまった銀に対して、マコトは戸惑った表情を見せる。

「お、親方は止めて欲しい、です。うちのギルドメンバーにも言ってる、けど、この恰好で『親方』って似合わない、から……」

来たときの勢いはどこへやら、いきなり真っ赤な顔でモジモジと話し出した銀に、戸惑ってマコトは頬を掻いた。

「いつつも『白猫の小娘』扱いだったのお。今度はクリス呼ばわりなのお？」

「えっ、あ、あの……すみません。ごめんなさい、です」

ペコペコ謝る銀。ぷくつと頬を膨らませるクリスティーナを見て、マコトはもしかやと思いクリスティーナに尋ねる。

「もしかして『白猫の小娘』って気にいった？」

ちらりとマコトを横目で見たクリスティーナはコクンと頷く。銀は「ええっ！　お、怒ってたんじゃない、ですか？」と恐る恐る確認した。

「だって、みんなクリスが一生懸命『愛称』考えあげてるのに、だあれもクリスに可愛い愛称付けてくれないのおっ!!」

手をグーに握って力説するクリスティーナに、「は、はあ」と間抜けな相槌しか打てないマコトと銀。

「あ、あの。『白猫の小娘』って可愛い愛称？　ですか？」

「……クリスの感性が独特なんだと思います。しかも、周りへの愛称が『可愛い』と言い切れる神経がすごい」

こそこそと二人が話をしているところに、「お待たせ〜」と華

やいだ綾香の声がロビーに響いた。

「綾ちゃん！」

「姐さん……クリスに対抗しないでください」

綾香を見た瞬間、右手を顔に当て、天井を仰ぐように上を向いたマコトは、疲れたように言った。

銀行のカウンターから現れた綾香は、美しい鳳凰の刺繍の入った淡いオレンジ色のチャイナドレスを着ていたのだ。ご丁寧に手には羽根扇を持っている。チャイナドレスの裾から伸びた美しい小麦色の脚に、周りの男性の視線が集まっていた。

「あら？ マコ、もつと言うことはないの？」

不満げに綾香が言えば、クリスティーナが綾音を指さしてキャハと笑いだした。

「綾ちゃん、かぁいいいなお 乙女心なお」

中央の観葉植物を囲むレンガに突っ伏し、拳をレンガに叩きながら、笑い続ける来るしティーナ。仕方がないと嘆息して、マコトは綾香を評するのだった。

「はいはい、綺麗ですよ。でも、ここはパーティー会場じゃないはずなんだけど？」

「いいじゃない。料理もそうだけど、服装だって気になってたんだから。見てよ、ほらっ！」

両手を広げて、くるりと回る綾音。足首に付けた金色のアンクレットがシャラリと揺れる。ヒールのあるサンダルは、複雑な組みひものように足元を彩っていた。

クリスティーナはパチパチと手を叩いて喜びだした。

「うふふつ、クリスありがと……ねえ、マコ。ゲーム上でのグラフィック以上の出来だと思わない？」

綾香に言われるまでもなく、マコトも気付いていた。服にせよ、周りの風景にせよ確かに色彩が豊かなのだ。エルダー・テイルのグラフィックの秀逸さは折り紙つきだったが、実際に目にしている異世界は、それとは比べ物にならない。

「たくさん着せ替えができるわね。クリス、楽しみじゃない？」

「綾ちゃん、めっさ楽しみまくりなお」

「当たり前じゃない。楽しくて仕方がないわ　クリスは、わたし以上にうれしいんじゃないの」

「そこんとは、企業秘密なお」

にんまりと笑うとクリスティーナは綾香の言葉をはぐらかした。
「す、すごい、ですっ」

感嘆の声を上げる銀。始めてみる少女に綾香は首をかしげた。

「ん？　だあれ？」

「ぎんちゃんのお」

「わあっ！　可愛くなったわね。種族は、ドワーフのまま？」

「はい。やっぱり、器用さ、考えると、ドワーフが一番、です」

恥ずかしそうに告げる銀に「いいんじゃないの。自分のプレイスタイルって大事だと思うわ」と綾香は微笑んだ。

「でも、可愛らしくて、親方って感じじゃないわね。うーん、シロって呼んでもいいかしら？」

小首をかしげる綾香に「構わ、ないです」と照れたようにモジモジと答える銀だった。

「ホント、姐さんの適応力って素晴らしいね」

いまだに銀の容姿とこれまでの言動とを比較して違和感を感じているマコトは、しみじみと呟く。その呟きに、「あら、心外だわ」と綾香は告げた。

「マコモ『シロ』って呼んであげればいいじゃない？　今までの銀親方もシロも同じ人なのよ？　第一、『親方』って云うのも、愛称だと思っていれば良いんじゃないの？　マコモ慣れないと……シロが困って、可哀相だわ」

「努力シマス」

肩をすくめたマコトは、「それじゃ、工房にお邪魔しますか。杏師匠も待ってると思うし」とギルド会館の奥の廊下へと歩いて行った。

銀杏工房 のギルドルームへ続く扉を開けると、心配そうな杏の姿があった。杏は、マコトたち三人を見ると「お待ちしております。中へどうぞ」と招き入れる。そして、銀を見つけると、眉をしかめて怒りだした。

「銀っ！ 急に飛びださないで……」

「ご、ごめっ……赤毛、じゃなくて綾香さんが、来てるって聞いて、嬉しくて……」

銀の言葉を聞いた綾香は、クスツと笑った。

「シロ、いつも通り『赤毛の嬢ちゃん』で構わないわよ？」

「そ、そんな、命の恩人に……呼べない、です」

「クリスは『白猫の小娘』なのお」

「……ごめんなさい。よ、呼べない、です」

「何が『シロが困って可哀相』だよ。自分の方が、困らせてるじゃん」

マコトが憮然と言えば「それはソレ。これはコレ」とにこやかに返されるのだった。

「さあ、どうぞ」

応接室に通された三人は、椅子に座る。すると、コンコンと扉がノックされ、スーツを着た男性が、ティーセットを持って入ってきた。

「見た目は紅茶で中身は水道水をお持ちしました。この場合、紅茶の銘柄もお知らせしたほうがよろしいですか？」

男性は、飲み物をそれぞれの前に置いた。男性の身も蓋もない言葉に、苦笑する三人。

「も、申し訳ありません……一葉^{いちよう}、お客様の前よ」

たしなめる杏に、一葉は「紅茶ですなんて言ったら、それこそ詐欺じゃないですか」と肩をすくめるのだった。

一葉の言葉に綾香はため息をついた。

「この食糧事情、何とかしたいわよね」

「ゲームシステムだもん、どうしようもないよ。ひとまずこれは出

がらしだと思えば？」

マコトが諦めたように慰めれば「出がらしだって香りと味は仄かにするのぉ」とクリスティーナ。

「申し訳ありませんわ。私たちも何とかしたいとは思っているのですが……」

シユンとした杏に「師匠たちを責めてるわけじゃないですよ」と慌ててマコトがフォローした。

「そなの。これは、もお諦めるなの……今日はね、お願いなの」クリスティーナはテーブルの上にハンカチを置いた。そのハンカチを見て、一葉は不思議そうな顔をした。

「ハンカチ、ですか？ このデザインは……去年の『母の日の贈り物』ですね」

「そおなのぉ！ たくさん欲しいのぉ」

あっけらかんと言いつつクリスティーナに、訳が分からないと云う顔の銀、杏、一葉。

その三人に、マコトは事情を説明しだした。また、クリスティーナに茶々を入れられながら下着ビキニの話をし、銀杏工房の三人を驚かせた。

事情を聞いた三人は、「なるほど」と頷く。

「作製する分には問題ありませんわ。裁縫台の前で材料を選択して実行キーを押せば出来あがりますもの」

「確かに、たくさん、必要ある、です」

「そうですね。実は、私達も困ってましたの」

目をキラキラさせる銀と杏。一葉も「ティッシュペーパーの需要は高いと思います」と言う眼鏡をキラリと光らせた。

「し、下着もだけど、ティッシュペーパー、ホントどうしようって話してた。マコトさん、すごい」

銀の羨望の眼差しにマコトは居心地が悪そうに身体を揺らす。こっ面と向かって褒められると何かと恥ずかしいものなのだ。

「ティッシュペーパーを現実世界のポケットティッシュみたいに一定枚数を袋詰めして売れば……材料をどう調達するかによりますが、かなり良い商売になりますよ」

どこからか電卓を持ち出して、はじき出す一葉。

（そう云えば一葉さんって 銀杏工房 の経理担当者だっけ……）

銀杏工房 は、生産系ギルドであり、自分たちで作ったモノを駅前広場の店舗で売りに出している。小規模ながら製作から販売までをこなすギルドだ。

したがって、工房で商品の製作を担当する銀や杏を中心とした創作^{クリエイター}者のほかに、店舗にて商品を販売する売り子がいる。

そして、工房と店舗、両方の経理を一葉が行っているのである。

商品開発の話が始まり出すと、銀が「売り物に関しては自分よりも詳しい」と二人の女性を連れてきた。いつも店舗に居る二人なのが、現在の駅前広場が異様な雰囲気なのでギルドホールへ避難していたのだ。「昨日から何もやることがないと暇そうにしている」と一葉は言っているが、銀から経緯を聞いたであろう二人の目はキラキラと輝いていた。

「マコトさん、銀先輩から聞きました！ すごいです」

「凄すぎですよ！ 私達、全然気がつかなかった」

「そ、それほどでも」

二人の勢いにマコトもタジタジだ。綾香は面白いものを見るかのようにニマニマしながら、桜と椿の二人に提案した。

「桜、椿、袋は『母の日の贈り物 手鏡』の袋を使ってみるのは如何？」

『母の日の贈り物 手鏡』は 細工師 が手鏡を 裁縫師 が付属の袋を作るという面倒な工程を踏まなければならない。どちらか片方だけだと『母の日の贈り物/鏡部材』または『母の日の贈り

物／袋部材』と灰色表示^{使用不可}されてしまうのだ。ただし、それはゲームの世界だけのようで、異界化した エルダー・テイル では、どちらの部材も物として存在する。そのため、片方だけでも使用することはできた。

アイテム一覧では『母の日の贈り物／鏡部材』ではあるけれど、実際は『鏡』として利用できるし、同じように袋の部分も袋として単独で利用できるのだ。

綾香の言葉に、椿は首をひねる。

「『母の日の贈り物 手鏡』の袋、ですか……そうすると、このハンカチでは1枚、頑張つて2枚くらいしか入りませんよ？」

「椿、『母の日の贈り物 化粧ポーチ』は？」

「材料費が高く付きますよ。化粧ポーチにはスクエアシエルの貝殻が必要です。この辺には生息していません」

一葉の言葉に、桜は「採りに……は、無理ね」と諦め顔だ。

「『なめし皮の煙草ケース』はどうかしら？」

椿はポツリとつぶやく。『なめし皮の煙草ケース』は、母の日の成功に味をしめた企業が二匹目のどじょうを狙って父の日キャンペーンを行ったときの商品だ。しかし、母の日に比べ購入層が限られたためか、失敗キャンペーンの一つに数えられることとなった。

「『なめし皮の煙草ケース』の原材料は？」

桜が一葉に確認する。一葉は首を振って「残念ながら、私は覚えていません。裁縫師 系のウェブサイトを確認できれば分かるのですが」と告げる。

「牛……だった気がする」

マコトはレシピを検索しながら呟いた。杏もレシピ集を確認しているのか、目を閉じて集中しているのが分かった。

「一角牛ですわ」

しばらくして、杏はレシピを見つけ呟いた。

「一角牛でしたか。日本サーバーのどこでも見かけるモンスターで

す。レベルも20ないくらいですよ」

一葉が言っていると桜と椿がパチンと手を叩いた。

「決まりだねっ！」

「材料をどうやって仕入れるが問題ですけどね」

「入れ物なしのヴァージョンも用意しとく？」

「入れ物がない方は、枚数を増やせばいいですね」

桜たちが話していると、「下着も忘れちゃだめなのお」とクリスティーナが焦ったように口を挟む。どうもティッシュペーパーの話しか出ていないので心配になったようだ。

すると、その話は聞いていないと桜と椿はクリスティーナに説明を求め、説明を聞くと大いに頷いた。

「そうね。その通りよ白猫嬢！」

「下着は重要ですね、白猫様」

桜と椿はそう言うところクリスティーナと意気投合して、杏にビキニの種類や必要な材料などを確認して、入手可能かどうかを一葉に確認するのだった。

商人魂に火がついたのか桜たちが和気あいあいと商品開発話を繰り広げる一方、技術畑の銀は仲間たちの傍を離れ、マコトに近付いた。

「マコトさん、ありがとうございます。みんな、暗かった……でも、今、楽しそう」

「どういたしまして。僕は、何もやってないけどね」

につこりと笑ったマコトに、銀は首をぶんぶんと激しく振るのだった。

問題山積！ 異世界のモンスター事情！（前書き）

今回の話は、残酷な描写が出てきます。

がんばって、残酷な描写を試みましたが、ゆるかったらゴメンナサイ。

問題山積！ 異世界のモンスター事情！

情報提供のお礼として 銀杏工房 で、変わり映えない味ではあるが、昼食をごちそうになった三人。その後の話し合いで、材料の調達を 遊色の雫 が行い、作製販売は 銀杏工房 が担当することになった。

「売上金の一部は 遊色の雫 のギルド口座へ送金しますわね」

「別に材料費を貰うから必要ないのよ？」

杏の言葉に綾香はそう言うのだが、一葉や銀も受け取って欲しいという「あつて困るモノじゃないから」と渋々受け入れるのだった。

ギルド会館のロビーに戻ると、アズライトやマーナガラムに連絡を取り、ギルド会館で待ち合わせることにした。

「材料収拾に果物収拾、集めるモノがたくさんあるわね」

「やることがたくさんあるのは、いいことなのね 暇、大敵っ」

綾香とクリスティーナが話していると、他のギルドを訪ねていたアズライトがギルドホールの扉から出てくるのが見えた。

「アズ」

「ライライっ！」

二人が手を振ると、アズライトは二人の格好に驚いて一度立ち止まる。そして、呆れたように頭を振ると近付いてきた。

「アズ、いかが？」

につこりと笑う綾香の格好を見て、アズライトも微笑みを浮かべ、綾香の耳元で囁いた。

「その恰好でフィールドに出たら、木の枝でズタズタになって面白いことになりそうですね」

「変態っ！！！」

真っ赤になった綾香は「戦闘用の防具と武器を持ってくるわ」とクリスティーナを連れて銀行カウンターへ走っていくのだった。

「可愛いですね」

にこにこ微笑みながら、走っていく二人に手を振るアズライト。マコトは、「ふざけてるのか本気なのか判断が不可能だよ」とひとり呟いた。

やがて合流したマーナガルムとともに、己の装備品を確認し、整えた面々はフィールドへ繰り出すのだった。

街中の風景も素晴らしかったが、フィールドゾーンでも、映像では味わえないような驚きでいっぱいだった。

ジャングルと化した世界。腐食土に覆われた地面、枯れた葉や瑞々しい草を踏む感触。木々の揺れる音に遠くに聞こえる獣や鳥の鳴き声。顔に当たる風は、青々とした草木の香りがした。

木々の間から届く太陽の光は、白い線になって地面に鮮やかな模様を描いていた。

「綺麗ね」

ピクニックに来ているかのごとく綾香が声を弾ませた。

ここは、まだアキバの近場ということもあり敵のレベルも低い。

いつ敵が襲ってきてても返り討ちに出来るという自信もあり、一同は警戒することなくのんびり歩いていた。

「この辺で現れるとしたら狼かしら？」

「あとは、ゴブリンですね。確か植物系のモンスターもいたはずですが……名前まではちよつと……観光案内ガイド攻略サイトが見られないので、な

んとも言えませんが、樹木系だった気がします」

「観光案内ガイドかあ……ねえのは痛いな」

少し開けた場所に出ると、マーナガルムは担いでいたハルバードを手に持ち、ブンツと振りまわす。練習練習と呟きながら、技を数種類試して身体に慣らした。ハルバードの磨かれた金属部分に光があたり、木漏れ日の中キラリキラリと輝いていた。

綾香も腕に付けた鉤爪のついた手甲を確かめて、準備運動代わりに軽く技を使ってみる。妙に身体になじんでいるそれは、現実世界

の自分では不可能な動きで、身体能力の向上を確認することとなつた。

「身体が軽いわ。なんか、今ならドラゴンにも勝てそうな気がする」綾香は笑いながら近くにあった木をなぎ倒した。

クリスティーナは、周りの風景を眺めつつも、メニュー画面を開き、自分の召喚獣の確認をしていた。念の為にショートカットキーサラマンダーシルフィードに火蜥蜴と風精を登録しておく。

「ここらへんは、よわっちいから、クリスのお友達を出すまでもないと思うのお」

「ああ、俺や綾姐で片づけられる敵ばつかだからな。なんだつたらクリスも前線出てみるか？ お前の杖でも十分片づけられるぜ？」

準備体操は終わったのだろう、マーナガルムはハルバードを担ぎなおすと、軽口をたたくクリスティーナに混ぜっ返した。

「杖が汚れるのはヤなお」

自慢の白樺でできた杖をギュツと抱きしめた。木漏れ日に当たって杖の上部にある紅い宝玉の飾りがキラリと光った。

「回復系の呪文と防御力向上系の呪文をショートカットで登録しておけばいいでしょう。必要ないと思いますが、こちらの身体に慣れる練習だと思つて使つても構わないですよ」

自身の呪文を確認しながらアズライトはマコトに指示を出す。

「はい。呪文の使い方は、なんとなくわかる気がするけど……メンバーのステータス管理まで出来るかが……」

回復役の重要な役目は、仲間のステータス管理だ。HPが少なくなった仲間を回復したり、毒などのバッドステータスに陥った仲間を解毒などの状態回復呪文で支援したりと、戦いの間ただ後ろから見ているだけというわけにはいかないのだ。

「出来るだけ私も全体のステータスの確認をするようにしますけど、こちらでは初戦ですからね。対策が取りようにないんですよ」

困ったように微笑むアズライトに、しっかりしなきゃとマコトは自分に言い聞かせる。

と、その時、遠くの方から、狼の鳴き声が聞こえた。

メンバー全員が、びくりと身をすくませ、辺りを警戒する。

しかし、すぐに「そう警戒することもないわ」と綾香は言つと警戒していた自分を笑う。

「このあたりの狼系のモンスターと云つたら灰色狼ですかね。灰色狼は、^{ゴブリン}緑小鬼と行動を共にしていることがありますよ」

「いぬつころとゴブちゃんだろ？ 楽勝だぜ」

にやつとマーナガルムも笑みを浮かべて、担いでいたハルバードを片手で持ち直し、ブンブンと振りまわす。

「バーチャルリアリティだけあつて、鳴き声もリアルね」

綾香は軽口を叩くと、マーナガルムから「綾姐、迎撃数の勝負だな」と競争を持ちかけられ、不敵に笑った。

「負けないわよ。連敗中のマナちゃん」

綾香たちは、近付いてくるのは「敵」だと認識していながら、どこかモニター越しの頃と同じ気安さがあつた。たかが^{ゴブリン}緑小鬼に灰色狼かと、侮っていたのだ。

そう、感覚的にはゲームのころの ハルダー・テイル と同じだったのだ。昆虫採集をする子供にも似た、そんな高揚感があつた。

しかし、軽口が叩けるのも、高揚感に満ち溢れるのも、モンスターが遠くに見えていた時までだった。近付いてきたモンスターの獣臭や血臭、ぎらついた目の光など、威圧的な雰囲気^{けお}に気圧された。

目の当たりにしたモンスターの発する殺気に立ちすくむ。

（殺される！）

相手が自分よりもレベルが低く、格下だということは『データ』として知っている。ゲームとして楽しんでいたころは、攻撃力の弱いマコトでも簡単に倒せる敵だ。そう頭で理解していても、実際に目の前に現れ、はつきりとした殺意を向けられると、身がすくむ。

現代日本では、そんな殺意を向けられたことがある人など、かなりの少数派だろう。いくら殺人事件が毎日ニュースをに賑わせいるといっても、圧倒的多数は遠い世界の出来事だと思っているのだから。

「あ、あ……や、やだ」

意味もなく首を振り、パニックに陥ったマコトは、じりりと後退する。

現れてた緑色の小鬼の威嚇する声に心臓を掴まれたかのような錯覚を起こす。鋭い歯がむき出しになった口から滴る唾液、濁った黄色い眼は残忍な色に染まっていて、怯えたマコトに対して、圧倒的有利を感じ取り、にやりと唇がゆがんだ。振り上げられた錆びついた斧には何かの体液がこびり付いていた。

どこか、現実の出来事ではないと安心していただけ部分はあった。どうせ『ただのお遊び』で、しばらくしたら『これでおしまいです』と元の社会に戻る。そんなことを考えていたのは事実だ。

「マコト！」

マコトがパニック状態に陥っていることに気が付いたのだろう、綾香は「離れないでっ！」と声を荒げた。その声に合わせるように、ゴブリンの斧が綾香に振りおろされた。

超人的身体能力で、さっと綾香は攻撃をかわすが、パニック状態のマコトには分らない。綾香の身に斧が叩きつけられ、次にその斧が狙うのは自分だと思い込む。

マコトがパニックに陥ったことで、隊列が乱れる。

「いやあっ……！」

その場から逃げようと振り返ったとき、後方から近付いていた灰色狼がマコトに飛びついてきた。慌てて腕を顔の前に交差させ、攻

撃を防御しようとしたが、灰色狼の鋭い牙がマコトの腕に噛みつき、痛みが走った。

直前までの恐怖心がマコトの痛覚を誤認させた。ロープの防御力や個人修正値で実際は、転んで擦った程度のダメージで済んだはずだった。しかし、視覚、聴覚、嗅覚からの情報過多により、実際よりも大きいダメージを負ったと脳が認識し、腕が動かなくなる。

「い、いや……殺される！ 死んじゃうっ！」

涙でゆがむ視界。動悸が激しく、息を吸っても吸っても楽にならない。もっともつと酸素をと身体が要求し、目の前の景色が揺れる。腕をかまれたからだろうか、指先が冷たくなりしびれて動けなくなってきた。

足ががくがくして立っていらなくなり、腰が抜けてその場に崩れ落ちる。ジリリと近づく灰色狼に対して、あまりにも無防備だった。

「マコマコっ！」

唾液が滴る口が大きく開き、マコトの頭に食らいつこうとする

が、ガシツと固い音とともに、ブンと力いっぱい灰色狼が投げ飛ばされた。

野球のバッターのようにクリスティーナが杖で灰色狼を打ち取ったのだ。キャインツと鳴き、地面にたたきつけられた灰色狼。一回バウンドした後、打ち所が悪かったのかビクツと震え動かなくなった。

ショートカットキーを押そうと集中していたのだが、これで集中が途切れてしまった。その苛立ちもあり、クリスティーナはマコトに怒鳴った。

「しっかりしろっ！」

マコトの恐怖に見開いた目に、慌てて平常心を戻そうとする。いつもの笑みを浮かべ、「男の子が、情けないぞっ」と余裕そうに軽口をたたくが、実際はさっきの狼が動かなくなってくれて助かったというところだった。

これで、また攻撃を仕掛けられたらと考えると、どうなっていたか分からない。足ががくがくと震えだすが、意識的に気にしないことにする。

前衛では、マーナガルムと綾香が戦っているが、善戦しているとはい切れない。場当たり的に、目の前に来た敵を防ぐ一方なのだ。決して、二人のレベルが低いということはない。マーナガルムは90レベルだし、綾香にしたって88レベルである。対するゴブリンや灰色狼は『初心者はつしやうの訓練』とまで言わしめるほど低レベルなのだ。

攻撃は当たる。当たればクリスティーナのような非戦闘職でも一撃で仕留められるほどのレベル。それなのに防戦一方だということは、こちらから攻撃ができていないということ……気楽に「戦闘を楽しもう」なんて言っていた過去の言動を問い詰めたくなる。

（殺すのをためらっている）

クリスティーナはカタカタと震えながら杖を握る自分の手を見る。先ほど狼を仕留めたことで沸き起こる罪悪感を消す術を自分は持っていない。持っていないどころか、生き物を殺したことに對する自己嫌悪の気持ちは高まる一方だ。

自分の後ろで腰を抜かして座り込むマコト。自分の感情のままに『生き物を殺さない』コトを選択して弱弱しく足を引っ張っている彼が苛立たしく、羨ましく思う。

（自分の手には、生き物を殺せる力がある）

現実社会に帰った時、正常でいられるだろうか？

目の前のゴブリンの群れを睨みながらクリスティーナは思う。

「これは、敵よ！ 敵なのっ！」

弱い自分に言い聞かせるかのように綾香は呟く。目の前から襲いかかる緑色の小鬼の唾液まみれの口元に上げそうになる悲鳴を堪える。ただひたすらに、振り下ろされる斧を避けていた。

「わたしは強い。敵は雑魚」

「ああ、こんな奴に俺らは倒されない」

マーナガルムも答え、ごくりと生唾を飲み込み、相手の気迫に吞まれそうになる心を奮い立たせた。

唸り声を上げて、こちらに襲いかかる小物たち。

「俺を倒そうなんだ、100年早いっのっ！」

ぶれる刃先は、己の心の現れ。マーナガルムは自分を叱咤する。

「俺は、このチームの ガーディアン 守護戦士 だ」

ザシュツとマーナガルムの斧がゴブリンの首にめり込む。ゴブリンの黄色の目が驚愕に見開かれマーナガルムを凝視していた。

悲鳴を上げそうになる心をなだめる間もなく、次の敵に向かうため斧を戻すと、ゴブリンの首からは真っ赤な血が噴き出してきた。辺りには吐き気をもよおす血の咽むせかえるような臭い。頭から血をかぶり、赤く染まる世界。

「俺は、盾だ。仲間の盾なんだ……俺は、負けるわけにはいかねえんだっ」

それでも気力を振り絞り、威嚇するかのように叫び、ギツと敵を睨みつけるマーナガルム。その叫び声にクリスティーナは頷く。

「負けたら、駄目なんだ マコトっ！ 立て。隠れててもいいから、足手まといにだけはなるなっ！」

クリスティーナのドスの利いた冷たい声が、マコトの耳に入ってきた。

うるさい心臓の音に、揺れる目の前の風景。地面に倒れた狼や小鬼、キーキーと叫ぶ小鬼の声に、唸りを上げる獣の声。鼻に付く死臭に血の臭い。動かない身体、痙攣してぶるぶる震える足に腕。しびれが走る指先は冷たくて……『足手まとい』という言葉に「ああ、そうなんだ」と納得している自分がいた。

（みんな、死んじゃうんだ。

ここで……死んじゃうんだ

もう、身体は動かない。腕一本、いや指一本だって動かすことはできないよ。

自分は、このモンスターたちの餌になるのだろうか？）

全てがおわりだと、マコトは目をギョツと閉じた。恐怖に身体中が強張る。

マコトが諦めきつたのが分かったのか、クリスティーナは舌打ちする。

「諦めんなよっ！」

叫ぶクリスティーナの脇から「お待たせしました」と、いつもと変わらない落ち着いたアズライトの声が響く。

クリスティーナが、ハツとしてアズライトを見れば、アズライトの杖の先から無数の氷の矢が出現していた。

「頼んだっ」

クリスティーナはアズライトに言葉を投げると、マコトを抱え木の陰に隠れた。過呼吸を起こしているマコトの鼻をつまむと、息を吸い込む。そのまま屈みこむとマコトの口に自分の口を重ね、自分の息をマコトへ吹き込んだ。

アズライトが作り出した氷の矢達は、杖が振り下ろされるとまっすぐゴブリンたちに刺さる。矢が刺さった箇所からゴブリンの身体がパキパキと音を立てて凍りだし、瞬きをする間に全身氷漬けになっていた。

マーナガルムの目の前のゴブリンや狼だけではなく、綾香にかみつこうとしていた狼や斧を振り上げたゴブリンも、前衛を潜り抜けた狼たちも氷像と化していた。マーナガルムや綾香がポンと押すと、ゴブリンはあっさり大地に倒れた。

氷像の倒れるドサリという重い音と、倒れた氷像が割れる澄んだ音が辺りに響いた。

「お疲れ様です。ふたりとも」

アズライトの穏やかな声に振り返る。

「終わったのか？」

マーナガルムの問いにアズライトが頷くと、綾香とマーナガルムはその場にしゃがみ込んで、胃の中のモノを吐き出した。

様々な臭いに満ち溢れる中、氷像を一体一体壊していくアズライト。氷漬けのそれらは、思ったほど固くないのか、非力な^{ソーサラー}妖術師の力でも粉々に崩れていった。

「これはゲームなんだと言い聞かせてでもおきなさい」

最後の一体を倒すと、アズライトの厳しい声が辺りに響いた。

「確かに殺意なんて現代日本では目の当たりにしたことがないでしょう。当たり前です。ここはエルダー・テイル、異世界なんです」

胃の中のモノを吐き切って、苦しげにアズライトを見つめる綾香とマーナガルム。クリスティーナは、意識をなくしぐったりとしたマコトを、ぼんやりと見る。

「トイレの問題の時、常識を捨てなさいと言いましたね。これもそうなんです」

足元に転がっていた氷漬けのゴブリンの頭を踏みつぶすと、アズライトは目を伏せて言いきった。

「倒さなければ倒される。これが、ここの常識なんですよ」
「帰りたい」

か細い声で、初めて望郷の思いを口にした綾香。口にした途端、綾香の両目から涙があふれ出した。

「嫌よ。ゲームって、もっと楽しいものでしょ？　なんで、こんな思いしなきゃならないの？」

「綾姐……」

「綾、帰る方法なんて誰も知らないんですよ。もう、ずっといろんな人が言ってるじゃないですか。戸惑っているのはみんな同じなんです」

子供のように泣きじゃくる綾香をそっと抱き締め、アズライトは優しく声をかける。聞き分けのない子供ののように首を振り続ける綾香に、「仕方がない人ですね」とポンポンと背中を叩きなだめた。

「街に戻りましょう」

耳元で囁くと、綾香は微かに頷いた。アズライトは、マーナガルムに目配せを送ると綾香とともに帰還の呪文を唱えるのだった。

「俺らも戻ろうぜ。綾姐は、先生に任せとけば大丈夫だ」

マーナガルムは言うつと、マコトを肩に担ぎ、クリスティーナの頭をポムツと叩いた。クリスティーナは黙って頷くと、疲れたように帰還呪文を唱えた。

マーナガルムは、重いため息を吐くと「シーに会いてえな」と呟いて、アキバの街へと帰還するのだった。

問題山積！ 異世界のモンスター事情！（後書き）

クリス、それ人工呼吸だよ。意味ないよ！
なんて言わないでください。

とりあえず、絵的によさげだったから使ってみただけですから。
そのうち消えてるかもしれませんが人工呼吸

一意奮闘！ 異世界での恋愛模様？！（前書き）

「R指定いらないだろう？」「こんなもんでR指定入れるのか？」
と、疑問は多々あるかと思いますが、一応、R指定を入れさせていただきます。

一意奮闘！ 異世界での恋愛模様？！

アキバの街は、表面上平穏を保っていた。人々の眼差しには精気が乏しく、辺りを不安げに窺う様子は初日と変わらなかったが、一部では現状を受け入れた者たちもいた。彼らは異界化したエルダー・テイル にて何ができるのか、自分の力を見極めようとしていた。

朝から情報を得るために訪ねた友人たちの中にも、『戦闘』という面で、自分の持っている力を確認していた者もいた。正直、今日の今日で戦闘を経験した 冒険者 はいないだろうと踏んでいたのだが、もうすでに戦闘を経験したという友人がかなりの数いたことには驚いた。

もちろん戦闘を経験した大多数の友人たちは皆高レベルの者たちばかりで、各々パーティを組んでいる固定メンバーがいたり、ギルドに所属していたりと戦闘に参加する人数が一定数確保できたという好条件があったからこそという側面はある。それでも、昨日の混乱期に、街の外まで行って、魔物と戦えるだけの胆力に脱帽した。

アズライトは、昨日の綾香の言動から今日にも戦闘区域へ行き、魔物と戦うことになるだろうと予測をしていた。そのため、友人らから魔物との戦いに付いて聞きまわった。といっても、返ってくる答えを要約すると『あれは経験しなきゃ分からない』という、なんとも曖昧なものだった。

『これは、ゲームじゃねえぜ。あまりにもリアルすぎる』
げっそりとした表情だったが、親切にもそう忠告してくれた友人がいた。

『肉体は強靱な エルダー・テイル の 冒険者 だけど、精神は脆弱な日本人って云ったところかしら』

ため息をつきながら話してくれた友人も、疲れが体中から染み出

していて、昨夜は悪夢で眠れなかったと付け加えた。

『魔物は害虫で、自分らは害虫駆除をしてんだと思いこまなきゃ、ダメっす』

厳しい顔をしてそう言い切った 守護戦士の青年は言い切った。
『一見は百聞にしかずって言葉、嫌でも実感できますよ』

そう言った友人たちのパーティと街の外へ繰り出したが、確かに経験してみても愕然としたのだ。

相手は格下のゴブリン。それなのに頭でシミュレーションしていた時よりも、実際の戦闘での経験は酷いものだった。アズライトは最初の戦闘終了後、恥も外聞もなくその場で嘔吐した。胃の中がひっくり返るほどの衝撃だったのだ。

（モニターでは感じなかった臭いを初めとする様々な感覚。そして殺気に対する恐怖心や本能的恐れで思うように動けなくなる身体。

今まで、モニターに表示されていた情報は全くなく、もちろん敵に対する情報も記憶が頼り。魔法も使えはするが、思う様に使いこなせているかという点と否としかいいようがない）

アズライトは自己分析をしながら、午前中に何度か戦闘を経験した。誘ってくれた友人たちも戦う雰囲気に対する慣れを付けたかったのだろう。近場の低レベルモンスターを撃破すると、気分を悪くして座り込み、しばらくして落ち着くとまた低レベルモンスター相手に戦いを挑んでいた。

午前中いっぱい戦いを経験して、アズライトは仲間と合流するのだった。

そして、今、精神的にぼろぼろになった綾香を抱きしめながら帰還呪文でアキバの街に戻ったアズライト。アキバの街に戻るやいなや綾香の耳元で眠りの呪文を唱える。ぐずぐずと泣いていた綾香は強制的に眠りに付き、アズライトに身体を預けた。

アズライトは、綾香の背中と膝の裏に腕を入れて、自分の胸で支えながら抱きかかえる。

綾香の性格から他の人に弱った姿を見られたくないだろうと考え、定宿とは別の宿屋で部屋を取った。

ぐっすりと眠る綾香をベッドに寝かせると、ベッドの縁に腰を下ろす。顔に張り付いた髪の毛に気が付いたアズライトは丁寧な手つきで綾香の髪を整えると、やるせない表情で綾香の寝顔を眺めていた。

「帰りたい、か……」

ポツリと呟く。あの言葉は、胸の奥に秘めていた本心だったのだろう。陽気で明るいリーダーを演じながら、どこかで現状に恐れを抱いていたのだろうか。

それは、彼女だけではなくこの街に居る 冒険者 全員が抱いている想いなのだろう。

『どうすれば現実社会に帰れるかは、まだ誰も分かんねえっすよ。でも、どう戦闘するかは、自分らは分かってきたつもりっす。』

少なくとも、守護戦士 である自分には、ゴブリンごときの攻撃は蚊に刺されたようなもんで、低レベルのモンスター相手だったら、痛くてもせいぜいアスファルトで転んで擦りむいたくらいっす。そりゃ、怖いっすよ。でも、こいつらの攻撃くらいじゃ、自分らは死なねえって言い聞かせて、こいつらはゴキブリだと思っちまえば、自分は何とか戦闘が続けられるっす。

アズライトさんもゴキブリを殺したくれえじゃ、罪悪感なんざ湧かねえっすよね?』

血の咽かえるような臭いに負け、吐き続けるアズライトの背中をさすりながら、あるギルドの中核を担っているという青年は、自分が感じたことを丁寧に教えてくれた。

その後、攻撃魔法で敵を殲滅することを覚えたアズライトに青年は言うのだった。

『なあ、アズライトさん、自分らと組みませんか？ わりいけど、あの嬢ちゃんたちとのオママゴトみてえな生活じゃあ、アズライトさんには負担ばかりかかって、なんの得もねえんじゃないっすか？』

「ん……」

アズライトが物思いにふけっていると、綾香が何かを探すように腕を上げ彷徨わせた。ハツとしてアズライトが手を握ると、安心してように表情を緩める綾香。アズライトは空いている手で綾香の髪を優しく撫でた。

猫のように擦り寄ってくる綾香。アズライトは、握った綾香の手を引き寄せるとその指先に口づけを落とした。

（移籍するわけにはいかないんですよ）

親切心からか、自分の所属するギルドのためなのか、移籍を勧めてきた青年の申し出を受けることは、アズライトには出来なかった。多少の躊躇があったが、最終的には首を振ったのだった。

確かに、彼の所属するギルドに行けば、自分の負担は軽くなるだろう。

しかし、この一見『陽気で能天気なお嬢さん』は、その実寂しがりやな癖に気丈にふるまうのが得意な天の邪鬼で、弱いところを見せるのが苦手なのだ。強がりばかりの彼女が、助けを求める相手は自分だけだと思うと、この手を振りほくことはできない。

ぼんやりと綾香の顔を眺めていると、苦しげに眉をしかめ、唇が動くのに気が付いた。

「……や。こ……いで」

夢を見ているのだろう。先ほどの戦闘を夢の中で再現しているのだろうか？

「綾……」

名前を呼び掛けながら、髪を撫で続ける。

ところが、綾香は嫌がるように身をよじりだした。

「いやあっ！……！」

叫び声をあげて、繋いでいた手を振り払って起き上がると同時に、髪を撫でていた手までも振り払った。部屋にパシッと乾いた音がして、その音にビクツと綾香は怯える。そのまま、呆然としたアズライトの顔を見て「違うっ、違うの」と首を振った。

しかし、否定している割には、彼女はアズライトの傍に近寄ることをせず、反対にジリジリと遠ざかって行った。手足を縮め、ベッドの端で膝を抱えて座る綾香。自分の顔を膝に付け、必死に首を振って何かを否定していた。

「綾……私が、怖いんですか？」

呆然としたままポツリと訪ねるアズライトに、綾香は首を振って「違うのっ……ダメなのよ」と壊れたレコードのように繰り返すばかりだった。

「綾？」

恐る恐る手を伸ばす。アズライトの指が綾香の身体に触れそうになると、綾香の身体はビクリと震わせ怯えていた。彼女の怯えように伸ばした手をそれ以上動かせず、紙一枚の隙間を隔てたまま彼女の身体に触れられない。

顔を上げ、涙でぬれた瞳を自分の傍にある指先へ向けた綾香は、

「あなたが怖いんじゃないの」と小さな声で囁いた。

「なら、どうして逃げるんですか？」

「怖い……怖いのよっ！　ねえ、見たでしょっ！」

叫ぶと、己の両手をじっと見つめる。

アズライトは、彼女の叫びに、行き場のない手をグッと握りしめた。

「わたしの身体には生き物を殺せる力があるのよ。この手が武器な

の、凶器なのっ！……この手が紅く染まるのよ」

さっきの戦闘を思い出す。

攻撃を仕掛けてきたゴブリンをかわし、相手の力を利用して攻撃を仕掛ける。肉を殴る嫌な感触、骨の碎ける鈍い音、蹴り上げれば遠くへ飛んで弾んで動かなくなる敵の身体。

「ダメなの……わたしに、触ったら……」

「ねえ、綾。実は、朝、貴女たちと別れてから、魔物狩りをしてきたんですよ」

カタカタと震える綾香に対して、淡々と語るアズライト。語る内容は物騒なものだが、その口調は平素と変わらず、落ち着いたものだった。

「貴女たちとギルド会館のロビーで会った時には、もう私は大量の魔物の命を奪っていたんです　貴女も知っているでしょう？」

ソサラー
妖術師　の魔法の強力さを……」

先ほどの戦闘。無数の氷の矢たちは、綾香が苦戦していたゴブリンの身体を刺し、その命を奪っていった。氷漬けの彼らを砕いていたのは、アズライトだった。

「私が術を扱えるように、貴女も貴女の力を扱えます。自身の身体なんですから。だから、怖がらないでください」

ゆっくりと腕を伸ばし、綾香の手を取ったアズライト。今度は逃げられることも怯えられることもなく、アズライトはホッと表情を緩ませる。

武装したままの綾香の腕の装備を外していく。現れた素肌を愛おしそうに撫でると、身を屈めその指に、手の甲に口づけを落とした。

「アズ……」

どうして良いか分からないといった風に、アズライトを見下ろす綾香の金茶色の瞳が揺れた。アズライトは綾香の様子を下から見上げクスツと微笑み、そのまま身を起こすと、グイッと腕を引っ張る。

力の入っていないかった綾香の身体はぐらりと揺れ、アズライトの方に倒れていった。

アズライトは、腕の中に綾香を閉じ込める。大人しく腕の中にいる綾香に安心したように微笑みを深くすると、彼女の髪の中に顔をうずめた。

「綾を守るためなら、いくらでも力を使いますよ。私の力が尽きるまで、貴女の為に、いくらでも魔物たちを倒してあげましょう」

こめかみにキスを一つ、見上げてきた綾香の額にキスを落とす。

「そして、もし綾が、倒した魔物たちに罪悪感を抱くのであれば、その罪悪感を全て私に下さい。もし魔物を殺したことで罪があるというのならば、すべて私が被りますから」

優しく囁きかけると、綾香の瞼や頬に口づけを落とした。綾香の頬を滑り落ちる涙を唇ですくい取る。

「それで、アズが、わたしの分まで背負ったら、辛くはないの？」

大人しく口づけを受ける綾香が心配そうに尋ねると、「大丈夫ですよ」とアズライトは微笑んで彼女の頭を撫でる。

「背負った分のご褒美は、ちゃんと頂きますから」

綾香の唇に自分の唇を合わせ、ゆつくりとベッドの中に沈んでいた。

一意奮闘！ 異世界での恋愛模様?!（後書き）

R15になったでしょうか？

ちなみに「壊れたレコード」って意味通じますよね？

最近の人はCDしかないからレコードって言っても通じないんじゃないかと、小母さん不安です（笑

かといって「壊れたCD」じゃなんか味気ないし……

次回もちょっと重い雰囲気でお届けすると思われます。
早くほのぼのターンに戻りたい。

一念発起？ 異世界での決意表明！

父親は、俺が中学に入学したところから家に寄りつかなくなってきた。初めは会社に泊るだの出張だのと理由がついていたが、高校に入学するころには公然と別宅の存在を明らかにした。

母は何も言わなかったが、父親に似てきた俺を見ると、眉をしかめるようになってきた。家での居心地が悪くなった俺は近所の剣道場という逃げ場を作った。もちろん部活も剣道を選んだ。俺は朝早くから練習をし、放課後も学校か道場で練習、休日は練習や試合で家にいる時間を少なくした。

別に虐待されていたわけではない。早朝練習の時は俺の出かける時間に合わせて、朝食や朝練後に食べるおにぎりやお昼の弁当をダイニングテーブルの上に用意してくれたし、休日に道場や部活に出かけるときは昼飯代として封筒に入ったお金が玄関に用意されていた。もちろん、胴着なども洗濯機の前に置いておけば、きちんと洗濯して畳んで部屋に置かれていた。

母はただ、父親に似てきた俺の顔を見るのが嫌だったただけだったのだろう。

その分、妹には干渉が激しかったらしい。塾に行くのも送り迎えは当たり前、帰りが遅くなるものなどしたら駅まで迎えに行くのも当たり前。休日友人と出かける時も、誰とどこに出かけるのかを告げねばならないし、友人と会っている時も偶然を装って会いに行きたらしい。

家の中がこんな調子なのに、父親は帰ってくることはなかった。たまに家に帰ってきたかと思えば、かすかに女物の香水の香りがした。

「あんな派手なネクタイ、知らないわ」
能面のような表情で母がぼそりと言ったことを覚えている。

高校三年になると部活は引退させられてしまい、道場の方も大学受験を名目に練習量を減らすよう有難くない助言をされ、朝と放課後の逃げ場がなくなった。

受験を理由に図書館へ行ったり本屋に行ったりしたが、部活をやっていたところと比べると遥かに家にいる時間が増え、ストレスが溜まった。部屋で勉強をしても集中できず、家の中に潜む母の昏い感情が纏わりついてくるようで怖かった。

そんなときだった。俺がエルダー・テイルに出会ったのは。楽しかった。家の中にいても、母の感情に気持ち引き摺られることもなく、夢中になれた。

それでも、勉強をおろそかにすることはできなかった。家を出るための手段は、受験しかなかったからだ。父親は自分の負い目からか大学の費用と一人暮らしの許可を早々に出していた。妹のことは気がかりだったが、母とこれ以上共に暮らすのは出来なかった。

大学に入り、家から離れると肩から力が抜けたかのように生活できた。生きるのが楽になったというのだろうか。

このご時世だから、アパートには光回線が引いてあったのでエルダー・テイルで遊ぶことができたし、大学では『エルダー・テイル 同好会』なるサークルを見つけ同好の士を得ることもできた。他にも剣道サークルに参加することになったり、バイトを始めたりと毎日が充実していた。もちろん4年以上学費も生活費も出すつもりはないと父親に言われていたので、勉強もおろそかにしなかった。

家から解放された嬉しさから、長い夏休みも全てバイトを入れて地元へ帰省することもしなかった。

その知らせが届いたのは、その年の大学の合格発表があった日のことだった。

妹の合格発表を確認するため母と妹が上京し、共に食事をしようと誘われた。指定された場所に行くと、父親もいて何年ぶりに家族が一堂に会することになった。

そわそわと落ち着かない妹に、妙にすっきりした顔をしている両親。両親は食事が始まる前に「離婚することにした」と告げてきた。妹は知っていたのだろう。だから、落ち着かなかったのだ。

「あなたは大学も残り1年だし、名前が変わると面倒でしょ。だから、この人の戸籍に入ったままでいなさい。この子には先に話したんだけど、お母さんと同じ苗字になることにしたわ。丁度大学に入学するタイミングだから、さほど不便を感じないでしょう」

にこやかに伝える母。それは両親で話し合った決定事項なのだろう、父は頷いて言うのだった。

「別に父さんの戸籍に入ったからって、一緒に暮らさなくてもいいんだ。書類上だけだからな。これまで通り、アパートに一人暮らしすればいい」

逆説的に言うならば、父親は俺と共に暮らすことはしたくないということだ。俺も「そうだろうな」と一人納得していた。何と云っても、父の現在住んでいるマンションには、俺と五つほどしか年の変わらぬ女が住んでいるというのだ。誰が好き好んでそんな部屋に住みたいだろうか。

それに、もうこれ以上、両親の事情に振り回されることはないのだと安堵していた。

食事が終わり、アパートに帰ろうとする俺に、食事中もずっと黙ったままだった妹が声をかけてきた。

「大学受かったの。お兄ちゃんと同じ大学、学部は違うけど……」
言いにくそうに告げる妹。俺は自分の顔が徐々に笑顔になっていくのが分かった。両親とは会うことはなくなるだろうけど、この3つ離れた妹に会えなくなるのは残念だと思っていたからだ。同じ大学ならば、いろいろ教えてあげられることがあるだろう。

「おめでとう。住むところは決めたのか？」

「うん。お母さんの知り合いの人が女性専用マンションを持つてから、そこに入るように言われたわ」

言われた言葉に、母の方を見てみると、何やら笑みを浮かべてこちらを見ていた。

「そうか……じゃあ……」

大学近くの安くてうまい食堂や、同じサークルの女性たちが勧める喫茶店のケーキとか、いろいろ紹介したいところが頭の中を駆け巡り、「こっちに越してきたら連絡しろよ」と言おうと思った俺の言葉を、妹は遮って言うのだった。

「そつ、それでね！ 苗字、違うこと……説明したくないの。だから、大学で会っても他人のふり、してね」

告げられた言葉にショックを受けた。俺たちは二人っきりの兄妹だ。それは、両親の離婚ごときで壊れることはないと思っただのに。

「学部が違えば、会うこともないだろ。大丈夫だよ」

動揺する心を隠しながら、そう言った俺は「さよなら」も「またな」も言えず、妹に背を向け、駅の雑踏へと姿を隠した。涙を流しているなんてこと、認めるわけにいかなかった。

俺は大学卒業後、地元には帰らず東京で就職することにした。早めに懇意の教授に打診していたので、5月末ごろには運よく教授の伝手で内定をもらうことができた。

ちょうどその頃だろうか。エルダー・テイル 同好会で知り合い、よくパーティーを組んで冒険をしていた香月綾子（じつみあやこ）から紹介されたのは。

「ガル、丁度よかったわ。あのね、この子、同じテニスサークルの子なんだけど、あんたと同郷なのよ！ びっくりしちゃって、紹介してあげようと思ってさ」

「綾姐、藪から棒になんだよ？」

「名前はね、椎名和海ちゃん（しいなかずみ）。ぴちぴちの一年生よ。しい、この男は（おあたにひろかず）大谷博和。学年は私と同じ」

「は、はじめまして」

綾姐の隣で所在無げに立っていた彼女は、綾姐の言葉を受け、慌てたように元気な声で頭を下げた。

「あゝ……はじめまして？」

俺は、呆然として挨拶をしていた。

「なあゝに緊張してるのよ。まったく、女つけない男ってこれだから……まあ、いいわ。あのねガル、しいにね エルダー・テイルの話したら興味を持ってくれたの」

『可愛い女の子に エルダー・テイル を広めようの会』会長を自称する綾姐にとっては、絶好のターゲットだったのだろう。

「良かったな」

俺がそう言うと、綾姐は「うん。良かったんだけどねえ」とどこか残念そうに言うのだ。

「私これから教授に頼まれたこと、やんなきゃならないのよ。こんなことなら気安くOKしなきゃ良かったんだけど、仕方ないわね。で、あんた今日暇だって言ってたでしょ。だから、可愛い女の子のお世話、させてあげるわ。」

しい、登録のこと、この男に聞いてね。多分1〜2時間で帰るから、帰ったら一緒に冒険しましょ」

綾姐は、自分の言いたいことだけ言って、彼女と自分の家の鍵を押し付けると「キャラ作成と初心者館ヨロシクネ」と言って、どこかに行ってしまった。

その後、ほぼ エルダー・テイル 同好会の部室と化してる綾姐の家へ行くと、綾姐提供の共用パソコンを立ち上げる。ついでに自分が持ってきたノートパソコンも電源を入れ、エルダー・テイルの自分のキャラクターのステータス画面を表示させながら、彼女に聞いた。

「綾姐から、どこまで聞いているの？」

彼女は力バンの中からレポート用紙を取りだして俺に渡してきた。「キャラクターの作成については、レクチャー受けました」

差し出されたレポート用紙を見てみると、種族や職業などキャラクター作成に必要な項目が書きだしてあり、あとは入力と登録をするだけになっていた。ついでに、綾姐作のイラストまで付いていた。「さすが、綾姐だな」

「名前は自分で考えるようにって言われたんですが、なかなか思いつかなくて……」

困ったような彼女に、自分のキャラクターの名前の由来を教えた。「俺のキャラの種族が狼牙族、つまり狼なわけ。だから、北欧神話に登場する狼の名前を貰ったんだ。ちなみに黒狼のイメージで髪の毛は黒」

黒狼なんてウソだ。そんなの後付けの理由で、本当の理由は誰にも言っていないが、染めもせずまっすぐに伸ばした妹の髪の色だからだ。恥ずかしくて、これからも先、誰にも言えないが……。

「じゃあ、私は猫人族だから……ケルト神話から『ケット・シー』にしようかな」

「いいんじゃない。それじゃ、ココに名前を入力して、他の項目も埋めていこうか」

「髪の色……綾子さんに好きな色って聞かれて『白』って答えただけど、黒にしようかしら。黒猫っぽくていいでしょ」

俺の顔を見ず、彼女は言うが悪戯っ子のように笑った。

「私の兄が、このゲームをやってたの知ってたんです。私が興味を示したら、お母さんが兄を責めるだろうから、言えなかったけど」
「ふ、ふん……あつ、全部入力したら、ココを押せば登録完了だよ」

妙にあたふたとした俺は登録が終わるとログインの仕方を教え、「カーネル少佐の戦闘訓練場」という綾姐がいうところの「初心者の館」へと案内するのだった。

綾姐が帰ってくるころには二人で エルダー・テイル の冒険を楽しんでいた。

そして、しばらくしてお互いを『和海』『兄さん』と呼びあえるようになっていたのだった。

ある時、綾姐は呆れたように首を振って呟いた。

「あんたたち、ホント仲いいわよね　これで、『恋人同士じゃない』っていいはるんだから、おかしなもんだわ」

「俺は、あの子の兄なんだよ」

笑いながら答えると、綾姐は「兄妹ごっこもいいから、早く恋人作りなさいよ」と肩をすくめた。

綾姐のように直接聞いてくる相手には誤解を解いていたが、いつの間にか俺たち二人が付き合っているとわさが流れ、お互いに付き合っている相手もいなかったことと恋人を作ろうと考えていなかったこともあって、こちらからわざわざ訂正することはしなかった。そして、エルダー・テイル　内でもネタにされるようになって、面倒になった俺は『ケット・シーに惚れているマーナガルム』を演じだした。先に彼女には断っていたこともあり、彼女も周りの会話を楽しみだした。

「シーに会いてえな」

戦闘終了後、マーナガルムはポツリと呟いたが、その言葉を聞くものは誰もいなかった。

あれからアキバの街に着いたマーナガルム達は、定宿に決めたシデンの酒場に戻ってきた。先に戻っていると思われたアズライトと綾香はいなかったが、マーナガルムの予想の範囲内だったので慌てはしなかった。

部屋にマコトを寝かせる。宿屋まで担いで連れてきたが、失神し

たまま目を覚まそうとしない。一人になりたかったマーナガルムは、
疲れた様子のクリスティーナを残し部屋を出た。

この街の中は、平和だった。

ココにはモンスターはいない。食べるものも味さえ我慢すれば豊
富にある。着るモノだって今以上必要ないし、住むところは確保し
てある。わざわざ街の外へ出てまで、戦闘して何が得られるとい
うのだろうか？

ぼんやりと街の中を歩き回り、日も暮れたころ、誰もいない崩れ
かけたビルに入り込み、崩れた窓辺から空を見上げた。

空には黄色い月が柔らかな光を注いでいたが、マーナガルムの心
を癒すことはなかった。

「酒でも欲しいな」

この世界では、飲み物がすべて水になってしまつたので、酒のよう
に酔うことのできる飲み物は存在しない。それが、残念だと今日ほ
ど思ったことはなかった。

無残な結果となつた初めての戦い。こんなはずじゃなかったと、
何度も思い返しては悔しさに拳を握りしめる。恐怖で固まつた身体
必死に悲鳴をかみ殺していた。未だに倒したゴブリンの濁つた眼を
思い出して、ゾクリと背筋を凍らせる。

手に付いた紅に、^{くれない}頭からかぶつた赤に、鎧に付着した朱に、^{あけ}震え
る身体。あのとき、アズライトが終わりにしてくれなかったら、無
様にも大地に膝を付けて命乞いをしていたかもしれない
ゴブリンごとき相手に！

「情けねえ……」

グツと握りしめる拳。戦闘で被つた血は川に入つて流した。それ

でも、自分の身体から血臭がしているようで、吐き気がする。鎧や武器にこびり付いていた血は、いつの間にか消えていた。それどころかゴブリンから受けた鎧の傷も、ハルバードの刃に付いた肉片も気が付かぬ間に綺麗に消えていて、あの戦闘は悪い夢だったのでは
と思いたくなる。

「だせえ……」

あんなに楽しみにしていたのだ。ココが異世界だと認識して、己の人間離れた身体を認識して、現実世界では扱えないような武器を軽々と扱えて……精神までこちらの人間であるかのような錯覚を起こした。

「結局、俺は、『マーナガルム』ではなく、『おおたにひろかず大谷博和』という日本人なんだよな」

武器を持つて高揚した。武器を扱って技に酔いしれた。敵と戦って……恐怖した。敵を倒すことを躊躇して、倒したことを後悔している。倒せなかったことに対して、悔しい気持ちよりも、どこか安堵した気持ちが勝っている。

「なあ、和海。俺は、どうすればいいと思う？」

ココにはいない女性を思い出す。彼女を抱きしめて安心したかったが、本当に抱きしめたら殴られるだけじゃ済まなそうだなと思い、一人晒った。

「そうだよなあ、会いたいと思うだけじゃだめだよな。なんとしても、帰らなきゃ……流石に、あいつを一人残して、こっちでこのうと過ごすわけにいかねえよ」

一人、決意する。

自分は、モンスターどもにやられる訳にはいかない。生きて、コを抜け出して、元気な姿を彼女に見せなければならぬ。

『死ねない』から『生き残る』ために『敵を殺す』。躊躇しててはダメだ。恐怖心も克服しよう。なに、当面の相手は、レベルが格段に低いモンスターだ。こちらから攻撃をしてしまえば、多少のダメージは受けたとしても、死ぬようなことにはなるまい。グツと握った拳に力を込め、暗い廃屋から抜け出した。

一念発起？ 異世界での決意表明！（後書き）

無関心も虐待の一種だよなあなんて思いながら書いてました。

ネグレストですよ！ ネグレスト。

本気が付いてないみたいですが……がんばれガル君！

一意専心！ 異世界で生き抜く方法？（前書き）

原作に 召喚術師（サモナー）の詳しい説明がなかったのか、かなり創作が入ってます。橙乃様、もしNGだったら、ご連絡ください。

一意専心！ 異世界で生き抜く方法？

窓のない暗い室内。どうせ寝に帰るだけだからと、部屋を窓のない六人部屋にしたことを少し恨んだ。部屋の外からは、掃除をする音や料理を作る音、酒場の話し声など生活の臭いがしたが、部屋の中は暗く静かだった。

部屋の中には二人。ベッドに寝ている青年と自分だけ。残りの三人は、どこかへ行ってしまった。帰ってくるかどうかも分からない。自分のテリトリーである二段ベッドの上。下には、マーナガルの背負い袋が無造作に置いてあった。

「覚悟が足りないのかなあ」

いつもの陽気な少女の声とは違う、低いハスキーボイス。

じいっと己の手を見つめる。ずっとカタカタと震えていて、自分の意志では止まらない震え。帰ってくる時、震える手が何度も杖を落しそうになって、気を配るのも疲れてしまい、仕舞いには背負い袋の中に放り投げた。

服に付いていた汚れは、いつの間にか消えていた。手足の汚れさえなかったら、今日の無様な出来事が本当にあったことなのか、夢の中の出来事が迷うところだが、現実であるとクリスティナの記憶が語っている。

下の方から悲鳴が聞こえる。クリスティナは疲れたようにメニュー画面から眠りの精を召喚し命じると、大きな袋を持った小男は眠りの粉を撒き散らし、悲鳴の主は有無も言わず強制的に眠りに落ちた。

静かになった部屋の中、クリスティナは一人思い悩む。

もっとお気楽なものだと思っていた。こちらに來た時は驚いたが、見目愛くるしい自身の身体を見て狂喜したのだ。お気楽娘の口調で、無邪気な少女を演じれば、周りは苦笑を伴ってクリスティナを受

け入れてくれた。誰も自分のことを『気味が悪い』と避けることはなかった。

だから、戦闘についても、いつものモニター越しと同じ、あつという間に終わっているものだと思っていた。こんな五感に訴えるものだとは思ってもみなかったのだ。

生の感触。ゴブリンが何かを咀嚼する音、狼の息遣い、獣の臭いに、本能からくる敵意。そして、それらを目の当たりにしたときの恐怖心。肝が冷え、身体中の体温がスウッと低くなっていった。

恐怖心は厄介だ。無意識からくるものだけに、意識的に排除することは叶わない。

マコトには『足手まといになるな』と冷たく言い切ったが、あの言葉は自分自身に言い聞かせていたようなものだった。そうでも言い聞かせないと、恐怖でおかしくなりそうだったのだ。

ギリリと唇をかむ。

戦闘開始早々、恐怖心からサラマンダーを召喚しようとしたが、サラマンダーは召喚に反応しなかった。戦闘後、相性を確認すると98%。この数字だったら召喚に失敗することはまずない。昨日までの召喚率は100%だったが、今回のことで99.9%に下がってしまったから、夢ではないらしい。これは偶然だろうと思う一方で、異世界化したエルダー・テイルでは、成功失敗は自分の感情に左右されることになるのだろうかという疑問も残る。

サモナー 召喚術師 は、契約した精霊や幻獣たちを呼び出し、使役することができる職業だ。様々なクエストにより契約するモノを増やしていけるが、『相性』によっては、折角契約しても中々召喚の応じてくれない場合がある。

精霊の種類は火・水・風・地の四大精霊を基本としていて、幻獣等は一つないし二つの系統に属している。ちなみに サモナー 召喚術師 にも属性があり、クリスティーナの主属性は火で、副属性は風だ。

ドリアド 精霊で例えれば、森の精霊は、水と地の属性を持っているため、

クリスティーナとの相性はさほど高くなく78%といったところだ。
ウィンディーネ
水の精霊とは相性が悪く50%、召喚率に至っては約25%だ。確率は半々だが、確実に2回のうち1回呼び出せるわけではない。つまり、この場合、過去4回召喚したうちの1回しか応じてくれなかったという訳になる。

もちろん、そんなにも効率が悪い精霊を好き好んで召喚したくない。必然的に相性が悪ければ呼び出す機会も減り、そうなると召喚率も低いままになってしまうのも仕方がない。逆に光の精霊は、火と風の属性を持っているため、火の属性を持つクリスティーナとは95%と高い相性率を持っている。

メニュー画面を開き、光の精霊^{リユニエール}を呼び出す。目の前に光の魔法陣が広がり、中央から柔らかな光がぼんやりと輝く小さな精霊が現れ、フワフワと辺りを漂った。

精霊の名前を呼んで、手を広げれば、手のひらの上にフワリと光の球が降りる。小さな少女の姿の精霊は、クリスティーナに呼び出されたのが嬉しいとにつこりと笑って表現する。愛らしい少女の姿に、通常時のクリスティーナだったら「愛らしいのお」ときゃぴきやぴとはしゃぎだすのだが、この時のクリスティーナはぼんやりと精霊の姿を見つめ「平常心……かぁ」とぼそつと呟くだけだった。

クリスティーナが相手にしてくれないと分かったのだろうか、光^{リユニエール}の精霊は詰まらなそうな顔を見ると、またフワフワと部屋を飛び回るのだった。

（今日の戦いで実感したけど、戦闘中は魔物たちを前にして、平常心を保つのは難しいよね。どうすれば、平常心を保つことができるだろう？）

フワフワ浮かぶ光をぼんやりと見ながら対策を考える。

今のままの自分では自分が嫌だ。なにより面白くない。折角、理想^{おもしろいもの}の身体を手に入れたのだから、この世界での生活も楽しくしない

と勿体ない。

別に自分は、他の奴らのように『元の世界』に対して、さほど執着はなかった。逆に、こちらの世界の方が、自分にとって過ごしやすいのではと思っているほどだ。なんといっても、こちらの世界は、あちらと違って、何の束縛もなく自由なのだから。

『束縛』の言葉に、泣きながらすがりつく母親の顔が浮かんでいた。記憶の中の彼女はいつも泣き腫らした瞼をして暗く沈んでいるか、ヒステリックに叫んでいた。

「私の育て方が悪いの？ 違うわよね？」

「なんで普通の子じゃないの？」

「あなたは病気なのっ！」

病院に行こうと腕を引つ張られたことがあった。鬼気迫る勢いで、とても怖くて泣いたことを覚えている。

何も言わない父親の覚えている姿は後姿ばかり。いつも残業ばかりで、めったに会うことがないし、会ったとしても視線を反らし、顔を見ようとしなかった。夜、いつも聞こえてくるのは、母親のヒステリックな声と父親の母親を責める声。

最後に二人の穏やかな姿を見たのは、いつだったのだろうか？ 確か、小学校のころは勉強のできる『息子』に対して、微笑みながら褒めてくれた気がする。中学に上がるころには、『勉強ができるけど、変わった子』の烙印が押され、高校に入るころには『気味の悪い子』扱いだっただ。

年の離れた上の姉は、女性物の衣服や可愛らしいアクセサリーに興味を示す自分を気味が悪そうに見て避けていた。それでも、双子の姉のまりあは「ホントは、おそろいの性別だったのに、神様って意地悪ね」と言って慰め続けてくれたのだ。

「セイ、パパとママのことは、気にしないでいいと思うの」

小学校のころだろうか。同じベッドの中に二人で身を寄せ合って眠る時、まりあは大人びた声で囁いた。

「あたしはね、セイがセイらしくいれば、それでいいと思うのよ。」

だって、セイの人生はセイのもので、パパやママのものじゃないんだもの」

にっこりと笑ってそう言ってくれた彼女。まりあだけは、自分のことを理解してくれていると幻想を持っていた。彼女が用意してくれたおそろいの服を着て外出すると、誰も自分のことを男だと認識しなかったから、それがとても楽しくて、自分は彼女に依存していた。

「まりあの弟って、男なのに女っぽいよね」

高校に入学してしばらくたったある日、まりあと帰ろうと彼女の教室へ行った時のことだった。教室の扉を開けようとした時に声が聞こえた。盗み聞きするつもりはなかったが、自分のことが話題になっているのだ。扉を開けるに開けられなかった。

「ああ、あの子？ うん。私のまねばかりして、ほんとウザいよ」

「ええっ！ まりあ、仲よさそうじゃん」

「振りよ振りっ。だって、あの子めっちゃめっちゃ頭いいのよっ！ 宿題をやってももらったり、勉強見てもらわないと、あたしテスト全滅だもん」

「マジ？ あの子、そんなに頭いいんだ」

「頭いいって言うか、おかしいのよね。いつも難しそうな本ばかり読んでるし。それに、ママがね、お小遣い弾んでくれるのよ、あたしがあの子の面倒みると。しかもさあ、ママもあの子の相手したくないらしくてさ、『聖夜が、欲しいって言ってるんだ』って言えば、たいがいお金出してくれるわよお。まあ、聖夜様々って感じ」「うわあっ、悪いヤツう」

笑い声が教室に響いて、聖夜は黙ってその場を去った。姉の本音を聞いてしまい、誰を信用していいか分からなくなった。

どこに行ってもいいか分からなくて、実験棟の教室に逃げ込んだ。教室の隅で身体を小さくして、「あれは嘘だ」と自分に言い聞かせた。

それでも、あの馬鹿にしたような笑い声が耳の中にこだまして、

聖夜を嘲笑っていた。

どれくらいそうしていただろうか。窓の外から入ってきた赤い夕陽が消え、教室の中はまっ暗くなっていった。

ガラガラつと扉が開く音がし、ビクツと身をすくませた。誰かが教室に入ってきたのだろう。見つからないように、さらに小さく身を縮める。

「だから、まだ学校なんですよ」

その人は柔らかい声で話していた。電話中なのだろう、携帯電話の四角く切り取られた光が、闇の中に浮かんでいた。闇の中、思いのほか強い光は、電話中の人の横顔を照らした。あの顔は、確か理科の先生だったか。

「疑り深いですね。初めから今日はダメだと言っていたでしょう」
穏やかな話口調。授業中の硬質な声色とは全く違う優しい声。電話の相手は恋人なのだろうか？

「『エルダー・テイル 同好会女子部』ですか？ 凄いですね。まるつきり貴女の趣味じゃないですか」

呆れたような言い方だったが、携帯の光の中、その人は穏やかに微笑んでいた。

「仕方がない人ですね。分かりました。何時になるか分かりませんが、必ずログインしますよ」

そう言って電話を終わらせ、教室を出て行った。こちらには最後まで気付かなかったようだ。

「エルダー・テイル 同好会？、ログイン、なんだろう？」

急いで家に帰ると、会話の中に出てきた単語をネットで調べてみた。聖夜の家では、小学校高学年の頃から学校の宿題などでWEB検索をすることが多かったため、子供に1台ずつパソコンを与えていた。自分の部屋で検索をすると、それはすぐに見つかった。

「オンライン、ゲーム？」

ネットの中では、男女の区別はあいまいだった。もともと声変わりすることなく甲高い声質だったため、自身が女だと名乗れば疑う

者はいなかった。

そうして、エルダー・テイルの世界で冒険をするようになった。

「この世界で生きていくために、強くならなきゃ。僕は『クリステイーナ』なの。クリスは、この世界の召喚術師サモナー。なんだから……魔物なんか怖がっちゃだめなの」

自分に言い聞かせる。いつの間にか、手の震えは無くなっていた。にいつと無理やり口角を上げる。

「こんなことで凹んでたら、ダメダメなお」

かすれた声に苦々しい思いになりながら、唾を飲み込む。『大丈夫、自分はクリステイーナなんだ』と何度も言い聞かせる。

お気楽極楽なノー天気娘 それが、『僕』なんだ。

「でもね、リュミー。今日は疲れたから、明日からがんばるよ」

そう呟いたクリステイーナの枕元に、リュミエールはチョココンと座ると、よしよしとクリステイーナの頭を撫でた。

そして、クリステイーナは、そのまま眠りに落ちた。

商売繁盛！ 異世界の商人事情！（前書き）

暗い話に筆が進まなくなったので、マコたちが去ってからの 銀杏
工房 の話を入れます。

商売繁盛！ 異世界の商人事情！

銀杏工房 のギルドホールでは、部屋のあちこちで女性を中心とした塊ができていた。彼女たちの何やら真剣に話し合っている様子に昼飯から帰ってきた 七宝職人 のクロガネは何かあったのかと首をかしげていた。昨日、正確には今朝までの 銀杏工房 に漂っていたやる気のなさとは打って変わって、あふれんばかりの情熱と熱気に包まれた工房内は、見ているこっちにまで訳の分からない高揚感を誘う。

「なあなあ、桜、何かあったのかよ？」

会議室から出てきた桜に声をかけるが、「今忙しいのよっ！」とけんもほろろに言い返されてしまい「うぐっ」と声をのどに詰まらせた。桜は、クロガネの様子に気付いた様子もなく、言い捨てたあとギルドホールから出て行ってしまった。

「何がそんなに忙しいんだよ……今朝は『やることがないっ』って喚いてたくせに」

ぶつぶつと文句を呟いてみるが、ああ云う時の彼女らには『触らぬ神に祟りなし』『百害あって一利なし』なのは経験上良く知っているクロガネである。

「会議室には近づかない方が無難かなあ」

そんなことを独り呟きながら会議室を通り過ぎようとしたが、会議室の扉が勢いよく開き、思いつきりぶつかってしまった。

「いつ……痛っ！」

あまりの痛さに声が出ない。こちとらひ弱な ソーサラー 妖術師 だ。たかが扉といえども、思いつきりすごい勢いで開かれたヤツと正面衝突した日にや、痛さで悶絶してしまう。

クロガネが床にしゃがみ込んで、涙目で鼻を押さえていると出てきた女エルフは「あら？ そんなところでボンヤリして、どうしたんですの？」なんて言ってくるんだから救いが無い。

「桐姉さん……扉は、もつと静かに開けてほしいっす」

控え目に主張してみるが、出てきた桐は呆れたように言うのだ。

「あら？ そちらがボンヤリとしてらっしゃるのが原因でしょう？」

廊下とはいえ、ちゃんと前を見て歩いて欲しいですわ」

むっとしてクロガネが睨むが、そんな無言の抗議はこの姉さんには通用しない。

「まあ、いいですね。貴方と無駄話をしている暇は無いんですの。

一葉様からの伝言ですわ。今から全体会議を開きますから、食堂に集まってくださいとのことですね」

クロガネは桐の言葉通り食堂へ行こうとすると、やはり招集をかけられたのだろうギルドメンバーたちが次々と食堂に入っていた。いくら食堂といっても、全員が入るのかと不安に思っていたが、食堂のテーブルは片付けられ、いろんな部屋から持ってきたであろう様々な椅子が、所狭しと置いてあった。

クロガネが空いている端の椅子に座ると、念話で知らされたのだろう残りのメンバーが続々と部屋に入ってきて、次々と空いている椅子に座って行った。

「なあ、何がはじまるんだよ？」

クロガネは、近くに座っている料理人の母に声をかけた。

「んー今後の販売にかかわること、かなあ？ 商品開発、とか？」

ちよつと考えて母が答えるが、クロガネには何のことかさっぱり分らない。辺りを見渡してみると殆どのメンバーが集まったように、訳知り顔の女性陣がコソコソおしゃべりしているのが見えたが、男性陣はクロガネと同じように何も知らないのか、彼女たちを不審そうな顔で見ているのだった。

クロガネが首をかしげていると、一葉が立ち上がり会議がスタートした。

会議の内容は、今後の方針についてだった。一葉は手に持った紙をチラリと見ながら、全員の顔を見渡し話し出した。

「駅前通りにある店舗は閉鎖します。現段階では、女性だけで店舗販売を賄うには雰囲気が悪く、不安も多いため、あのゾーンは解約する予定です」

不安があるというのは本当なのだろう。店舗での販売を担当していた女性たちが領いていた。基本的に 銀杏工房 では 鍛冶屋や 大工職人 などの創作者クリエイターや材料調達部隊は男性が多いのに対し、店舗での 売り子 の大多数は女性だ。少数だが男性店員もいるが、やはり女性が販売したほうが受けが良いのだろう。人気のある売り子には固定ファンがいるという噂まである。また、 銀杏工房 のような規模のギルドには珍しい カリスマ店員 という 売り子 の上級職に付いているものもいる。

話はそれだが、クロガネも朝からアキバの街を歩いていて、その異様な雰囲気というのを感じていたため一葉の決断には「流石、先輩」と頷いた。

「また、販売についてですが、噂では他のギルドショップの商品撤収が始まっているらしいです。また別の噂では大手ギルドによる品物の買い占め等があるようですね。今は未確認で噂の域は出ませんが、いろいろな情報を確認したうえで、信憑性があると言わざるを得ないでしょう」

噂と一葉は言うが、市場から商品が無くなっているのは事実だとクロガネも感じた。今日の食料の買い出しにと、味が比較的ましな果物を求めに行ったのだが、考えることは皆一緒らしく、ほとんど入手することができなかった。軒並み『売り切れ』の表示がされているのだ。ついでにと、いろんなショップを覗いてみたが、やはり在庫は少ないようだ。

一葉は、ぐると全体を見渡す。一部の女性メンバーから、妙に急かすような視線を受けるが黙殺する。コホンと咳をして、気を取り直すように言葉をつづけた。

「この状況下では、例えば店舗で商品を出したとしても、大手ギルドに買い占められてしまい、現在特に必要としている消費者には品物

は届かず、倉庫の中に眠ってしまふことが予想されます」

クロガネは、一葉の言葉に首をかしげた。必要としている消費者とは誰のことを指しているのだろうか？ 医療品でもない限り、そんなに切迫して必要としている人がいるだろうか？ また、食料のことを言っているなら、どれを食べても同じ味だ。だったら、そんな吟味してまで買いたい人などいるはずがない。

「一葉。もう御託はいいでしょう？ 早く本題に入ってください」
待ちきれなくなったのか、椿^{つばき}が声を上げる。それに同調する女性が数名。

「分かった。分かりましたよ」

一葉は苦笑すると、「で、本題ですが」と続けた。

「実は、遊色の零様から御提案がありまして、新商品を売り出すことにしました」

一葉の言葉に、一部の情報を知っていたと思われる女性陣からは拍手が、事情を知らないクロガネを初めとした男性陣は、キョトンとした顔をした。

「基本的に女性向けに販売する予定ですが、女性用下着の代用品として『ビキニ』を、ティッシュペーパーの代用品として『母の日の贈り物／ミニタオル』を製作、販売することにします」

マコトはティッシュペーパーの代わりにハンカチを提案していたが、その後、使い心地等を女性陣が実地で確認した結果、使いやすいのはハンカチよりも吸水性の高いミニタオルだと落ち着いた。ハンカチもミニタオルも毎年新柄が発表されている商品なので、色々な柄を作り、柄違い5枚一組を『なめし皮の煙草ケース』に入れて販売することにした。

また、下着^{ビキニ}についても、材料調達の目処が立つまでは、一番材料が集めやすい『ノーマルビキニ』を販売することとした。また、昨年『浴衣』とともに発表されたレシピ『巾着』を今年の夏に販売しようとして少しづつ用意していたモノがあったため、それに入れて販売することで商品価値を高めるとともに、男性からの目から少しでも

隠せるようにしたのだった。

「販売時に、『ガーネットローズ等のアイテムがあれば』『ノーマルビキニ』以外の商品が出来ますので、材料を持参のうえご連絡ください。オーダーメイドでお作りします」と付け加えてください。流石に『ノーマルビキニ』以外は量産できないので、お客様の材料持ち込みという形で『ノーマルビキニ』では満足できないお客様に対するフォローを行おうと思っています」

椿の言葉に一部の女性たちから拍手が起こる。やはり、女性というのは『自分だけの』『他人とは違う』『アイテムという特別感があるモノには敏感なのだろう。』

クロガネは 七宝職人 の自分が出来るものが何かないか考える。商品開発に何かしらの貢献をしたいと思っていたし、自分も皆と同じように打ち込めるものが欲しかったのだ。

目を閉じて、自分が持つているレシピ集を確認する。

（貴金属や宝石ばっかだなあ……生活必需品に代用できそうな奴。もしくは、付加価値を付けられるもので、材料が簡単に手に入るモノ）

基本的に 七宝職人 が作るモノは、ペンダントトップやブローチ等アクセサリーが殆どだ。なおかつ、殆どのアイテムに輝石が使われているため材料費がかかる。アクセサリー類はステータス補正のあるものがほとんどなので、冒険者 たちからは需要があるが、生活必需品に転用できるかと聞かれると否としか答えられなく、クロガネはため息をついた。

（買い手を女性に絞っているなんて、流石、女性至上主義の一葉先輩なだけあるよな。

なんせ、このギルドの女性陣のほとんどが一葉先輩のファンみたいなもんだからなあ）

杏と銀が生産系ギルドを立ち上げる時、頼ったのが柘榴と一葉だ。柘榴は材料調達を主にこなすため戦闘系友人を集めて『材料調達部

隊』を作り、一葉は「売り手は女性の方が有利です」と自分の知り合いを次々とエルダー・テイルに誘い、売り子にしたのだ！当時クロガネは、一葉から「細工師のレベル上げをたくさんさせてあげますよ」と勧められて入会したのだが、このギルドの女性率の高さには驚いたものだ。

後で聞いたところ、彼女たちは一葉に対する『淑女協定』なるモノを結んだというから驚きだ。クロガネには分からない世界だ。

さて、全体会議では材料調達部隊の中心人物である柘榴ざくろが、売り子と護衛をペアで行動させると告げていた。

「街中での戦闘はあり得ないと思うが、女性の一人歩きは避けた方が良さだろう。護衛役は、売り子の安全を第一に考えてくれ。また、材料調達は小人数では行かないように。分かっていると思うが、ここはエルダー・テイルであり、安全な日本ではない。できるだけ一人で行動することがないように、気を付けてくれ。」

なお、綿花がかなり必要になってくる。売り子の護衛にならなかつた者は、コットンプラントを倒して綿花を取得する必要がある。護衛と材料收拾の二つに分けるので、会議終了後、作戦室へ集合すること。」

その言葉を受けて椿が立ち上がって続けた。

「販売に関してですが、最初のうちは念話などで知り合いに、特に女性にですけれど、連絡を取って商品を紹介してください。要するに、テレポ通販ですね。押し売りはしないでくださいね。在庫が少ないので、一度に購入できるセット数はお客様1人に対してティッシュが2点、下着が1点です。」

それと、くれぐれもティッシュが『母の日の贈り物』だと言わないでくださいね。気付く方は気付くと思いますが、気付かない方にもまでお教える謂われはありませんから。きっと他のギルドでも売りに出すようになるでしょうから、今日明日が勝負です。」

「在庫の管理は、椿と桜、お願いします。売り子の皆さんと手の空

いてる女性は、袋詰め作業を会議室で行ってください。銀は貸金庫から綿花などの在庫を持って来てください。以上！ 皆さん、行動を開始してください」

パンつと手を叩き、一葉が告げると会議室や作戦室へ向かう人たちや早速知り合いに念話をする人たちなど動き出した。

会議中も作業場では、裁縫台の前で杓がミニタオルやビキニづくりに励んでいた。作っても作っても売れるだろうとの一葉の言葉に、少しでも多くの在庫を作っておこうと思ったのだ。

会議終了後、作業場には一葉に箱のようなものを渡す青年の姿があった。青年の名前は蘭丸らんまるといい 木工職人 だ。

「現実世界のティッシュボックススケーヌみたいなモノを考えたんです。ティッシュボックスと違って穴はありませんが、『寄木細工の宝石箱』といって、細工がきれいなため、女性には喜んでもらえると思うんですが……」

恐る恐る蘭丸は言葉を紡ぐ。

「この中にハンドタオルを入れて販売するのは、どうでしょうか？それに、入れ物の種類が多くなれば、多少は杏先輩の負担が減るんじゃないかなと思って……」

「そうですね……」

箱を開いたり裏返しにしたりと観察した一葉は、難しそうな顔で蘭丸に確認した。

「『寄木細工の宝石箱』の価格は？」

「材料によつて違いますけど、今回作ったのは売値金貨5枚です」心配そうに答える青年。一葉は目を閉じて考える。

（この箱にはミニタオル5枚だと寂しいから、10枚は入れたいですね……箱入りミニタオル10枚は金貨11枚になりますか。そうになると少し、値段が張りますかね？ 女性には金貨10枚にして、男性には金貨13枚で売ればいいですね）

一葉は考えをまとめると、不安そうな蘭丸に一番重要なことを確認した。

「材料の在庫は？」

「たくさんはないですけど、今日作る分くらいはあります」

その答えに頷くと指示を出した。

「それでは、柘榴さんに必要な材料を報告して、材料収拾の依頼をしてください。椿には私から連絡しておきます」

「はいっ！」

生き生きとした表情になった青年は笑顔になって答えると、部屋を飛び出して行った。隣の作業台では、竹細工職人のスズメがミニタオルをストックするための竹かごを作っていたのだが、蘭丸の様子を見て「だいぶ活気が出てきたな」と呟いた。

「ええ、やはり、やることかしないと腐る一方ですからね。スズメも何か『なめし皮煙草ケース』に代わる入れ物を思いつきませんか？

正直、一角牛の皮は在庫をさほど持つていないんですよ」

「何か探してみるよ」

ニヤリと笑って、スズメはレシピ集を確認する。一方、一葉は念話で椿に連絡をする。

「椿、蘭丸から提案があつたんですが、『なめし皮の煙草ケース』

の代わりに『寄木細工の宝石箱』を入れ物に使った商品も出します」

一葉の言葉に、椿は『流石、クリエーターの方は視点が違いますね』と感嘆した。

「値段は、女性10の男性13。入れる枚数は10枚。こちらも購入数制限ありでお願いしますね」

「分かりました。そうすると煙草ケースをお一人様2点まで、もしくは宝石箱1点、どちらかということですね。売り子さんへ伝えておきますわ」

「よろしく頼みます。袋詰め作業の方は順調ですか？」

『用意したハンドタオルは無くなりそうなので、蛍を向かわせますわ。あと、受注が入ってきましたので、売り子さん達を配達に出したいのですが？』

「追加は了解しました。護衛については柘榴さんに連絡してください」

い」

『分かりましたわ』

念話が終わるや否や作業場の扉が開き、蛭が飛びこんできた。

「椿先輩から連絡来ましたか？」

「はい。裁縫台の脇の竹かごの中にあります。重くはないでしょうが嵩張るので、この背負い袋を使ってくださいね」

一葉はミニタオルが山積みになった竹かごと背負い袋の中に入れて蛭に渡す。この背負い袋は一定のレベル以上の物ならば誰でも持っているマジックアイテムで、たくさんのアイテムを入れても重量が変わらないのだ。蛭は背負い袋を背負うと「失礼します」と言っ、会議室へと急いで行った。

一葉は蛭が作業室から出て行くのを見ると、空の竹かごを裁縫台の脇に置いた。

杏は、次から次へと製作していったが、流石にゲームと違い生身の人間。疲れがたまってきた。

「流石に、一日中かかりつきりは辛いわ。ゲームならマウスの操作だけで済んでたけど、今はメニュー操作に集中力も必要になったから……」

「革職人のイズチさんがいれば、ケースの方はイズチさんをお願いで来たんですけどね」

「ログインしてなかったんですもの、仕方がないわ」

杏はため息をついて「逆に、ログインしてなくて幸運だったと言うべきかもしれませんわね」と呟いた。

その言葉に神妙な顔つきになった一葉だったが、柘榴からの念話にハッとしように現在自分がすることに集中した。

『イチ、護衛10人ほど残していく。会議室で袋詰めの手伝いに行かせた。売り子の外出時に適当に宛がってくれ。俺たちは、材料調達に行ってくる』

「分かりました。気を付けて行ってらっしゃい」

『ああ』

必要なことだけを言うのと柘榴は念話を終了した。一葉は椿に護衛役の連絡をすると、椿から蛭が貸金庫と作業室と会議室の運搬連絡係として駆け回ることにしたと報告を受けた。

作業室に戻ってきた蘭丸が『寄木細工の宝石箱』作りを開始し、スズメも『竹わっぱ（竹でできたお弁当箱）』という殆ど趣味で仕入れたレシピを探し出し作り始めたのだった。

「ダメだわ。頭が痛い……少し休憩させて」

全体会議にも出席せず在庫を作ろうとフル稼働で作業していた杏。今回の商品のほとんどが布製品だ。このままでは杏の負担が多すぎると考えた一葉だったが、現在のギルドメンバーの中には 裁縫師が杏しかない。

（誰かを 裁縫師 に……しかし、レベルが低すぎると作れる品物が少ないんですね）

基本的に生産系サブ職業の場合、レシピ自体にレベル設定があり、必要レベル以上でないと品物を作ることができない。そのため、今レベル1の 裁縫師 がいても、作れるミニタオルは1種類だけだ。桜や椿曰く「色々な柄が入っていた方がお得感が出ます」とのことだったから、複数の柄が欲しい。

「困りましたね。私の知り合いに、といっても、皆さんギルドに属していますから、うちの手伝いをしてくれる方など……あつ！」

一葉は気が付いた。この商品の原案を持ってきたマコトは 裁縫師 だったことを。

「杏、明日マコトさんに応援を頼みましょう。2人になれば、作れる量も二倍です。材料調達は柘榴さんたちも出来ますが、作製の方はマコトさんにしか頼めません」

「……そうね。それしかないかしら。明日の朝、連絡してみますわ」
そう言う杏は「今日は、私一人で頑張りますわ」と裁縫台に向かうのだった。

この日、売り子たちは、様々なギルドに訪問して品物を渡し、新

たな注文を受けて 銀杏工房 へ帰ってくると、また外出していった。この日杏が作ったたくさんのミニタオルやビキニは、すべて女性たちの手元へ渡り、一日の購入数が決まっていると知らされた彼女たちは「明日の分の予約をしたい」と言いだした。

これを聞いた一葉は、売り子たちに紙とペンを持たせ、予約希望者の名前を控えさせるのだった。

また、女性たちからティッシュの存在を知らされた男性たちは、商品を持っていないと言った売り子たちに「倍の値段でもいいから売ってくれ」と詰め寄ったらしいが、ガタイの良い護衛役がギロリと睨むとスゴスゴと引き下がったらしい。

数日後のこと、この 銀杏工房 が売り始めたこの新商品たちは、アキバの街でやる気をなくしていた 裁縫師 達の目を覚ました。後日、ある 裁縫師 は言うのだった。

「いつ帰れるか分からない以上、せめて人間らしい生活をするために、出来ることから始めよう!」と。

この日の夜、 銀杏工房 では本来の自分たちを取り戻した活気あふれる面々が、今日の成果に意気揚々と報告してきた。そして徹夜で袋詰め作業を行うのだった。もちろん、材料調達部隊は、思いのほか厳しい戦闘事情を考慮して、どうすれば効率よく材料を調達できるかを話し合っているのだった。

こうして エルダー・テイル に 冒険者 たちが来てから2日目、夜の夜が更けていった。

試行錯誤？ 異世界旅行はトラブル続き！（前書き）

内容を一部変更致しました。

試行錯誤？ 異世界旅行はトラブル続き！

朝日が出る前、まだ薄暗い時間にアズライトは寝ている綾香を部屋に残し、シデンの酒場へ向かった。昨日は綾香にかかりつきりで他のメンバーまで気が回らなかったが、あの三人はどうなったのか、綾香の様子が落ち着くと気になった。

シデンの酒場まで近付くと、向かいからマーナガルムが神妙な顔で歩いてきた。

「ガルム君、朝の散歩ですか？」

いつもの笑みを浮かべたまま尋ねれば、何かを決意した様子のマーナガルムがアズライトに向かって何かを放り投げた。受け取ったアズライトは、自分の手の中にあるモノをしげしげと眺めた。

「綿花？」

「ああ、野生の群生地を見つけたぜ」

「フィールドに行ったんですか？」

「近場しか行つてねえよ」

驚くアズライトにマーナガルムは言い訳がましく呟いた。

「アキバ周辺だったら、俺一人でも何とかなるぜ」

「……魔物が、います」

昨日の戦闘中のことを思い出すアズライト。マーナガルムの敵を傷つけることを躊躇する姿が脳裏によぎる。それが分かったのか、「ああ」と低く唸るとマーナガルムはアズライトの目を見て言いきつた。

「決意表明、つてやつかな」

「この世界で生きるため、ですか？」

尋ねるアズライトにマーナガルムは首を振って答えた。

「帰るために、生き残ることを」

「……そうですか。なら、安心ですね」

手の中の綿花をギュツと握る。アズライトは綾香以外の分まで何かを背負うつもりは毛頭ない。

「マコトは……無理だろう」

夜中に部屋に荷物を取りに戻った時に見た姿を思い出し告げる。

酷くうなされた様子に、ガラス細工のような脆さを感じた。血の気の引いた唇が、なんども「助けて」と動くのを見て哀れさを誘った。「家を借りましょう……基点を作って、腰を据えて落ち付ければ、何かが変わるかもしれません」

マーナガルの言葉を受け、アズライトは決心した。

実際問題、綾香が落ち着くように沈静剤代わりの香などを焚くにしても、手持ちの在庫だけでは足りないだろう。今日は 銀杏工房に借りればいいだろうが、だからと云って毎回 銀杏工房に借りるわけにも行くまい。アロマや香水など作るには、自分専用の調香台が必要だ。

「金は？ この人数じゃ、勿体ねえってギルドホールだって借りなかったら？」

「以前は、特に必要ありませんでしたから。街に帰ってきてログアウトすればおしまいだったでしょう。でも、今は違います。腰を落ち着ける場所が必要です」

アズライトの言葉に、「確かに」とマーナガルは呟いて空を見上げた。

東の空が濃紺から白へ、白からオレンジへのグラデーションで彩られる。水墨画のような世界が、極彩色の鮮やかな世界へと切り替わる瞬間を見ながら、マーナガルは目を細めた。

「俺は、仮眠をとる。二人が起きたら、その様子を念話するから、いつフィールドに出るか連絡をくれ。今度は、無様な姿は見せない」「まず今日は、ガルム君が見つけた群生地に行つて、綿花を大量に採りましょうか」

マーナガルはアズライトに背を向け歩き出す。手を上げて左右に振ると、シデンの酒場へと入って行った。

太陽が東の空から頭を出してきた。朝日の柔らかな光を浴びながらアズライトはギルド会館へと急いだ。貸金庫に預けてあるモノを綾香が起きる前に持って帰ろうと考えたからだった。

ところが、貸金庫の前で 銀杏工房 の柘榴に会い、 銀杏工房 の面々が徹夜作業をしていることを知ると、貸金庫から材料を持つていき調香台を借りることにしたのだった。

「何を作ったのですか？」

疲れた表情の杏が、それでも興味津津とアズライトの手元を覗いた。アズライトの手元にある小瓶からは仄かに爽やかな香りが漂っていた。

綾香のことを思い微笑みながら「香水ですよ」答えるアズライト。

「やはり女性は、気になるでしょう？」

「確かに……羨ましいですわね」

「差し上げましょうか？」

アズライトがニコツと笑みを浮かべて尋ねると「よろしいのですか？」と嬉しそうな表情を見せる杏。

「ええ、構いませんよ。その代わりに作っていただきたいものがあるのですが……」

「私の知っているレシピであれば」

ニコニコとご機嫌な様子の杏に、アズライトはあるモノの製作をお願いするのだった。

「分かりましたわ。アズライト様は綾香様のコトがとても大切なのですね 材料は、こちらですね」

杏がクスクス笑いながら了承して、アズライトが用意した材料を受け取るのだった。

「アズライトさん、ちょっとよろしいですか？」

今度は、こちらを窺っていたのだらう一葉が声をかけてきた。

「今終わったところです。大丈夫ですよ」

にこりと微笑むアズライトに一葉は、昨日の『ティッシュ』と『下着』の話と半日分の売上と今日の予約分、送金の件を話し出した。

そして、それにもなつて 裁縫師 が足りないこと、マコトを貸して欲しいことを説明する。もちろん、原料が足りないのも、そちらの收拾を依頼したいことも付け加えた。

「もちろん、報酬はお支払させていただきます」

一葉が告げると、じつと聞いていたアズライトは難しい顔をする。「マコ君をですか……」

昨日の様子からマーナガルムに言われるまでもなくフィールドに連れて行けないだろうとは思っている。しかし、ここで二つ返事でマコトの派遣を決めてしまつては、彼に対して「おまえは戦力外だ」と付きつけることになるのではないだろうか。

「少し考えさせてください。あとで、ご連絡します」

アズライトの答えに、一葉は少し残念そうな様子を見せたが「それでは、良い返事をお待ちしております」と答えるのだった。

杏から頼んだものを受け取ったアズライトは、ギルド会館を出て、綾香の眠る部屋へと急いだ。帰る途中マーナガルムから念話を受けた。

クリスティーナはフィールドへ行けるらしい。本人から確認したようだ。マコトはまだ寝ているが……何度もうなされているそうだ。宿屋に帰りつき部屋に入ると、まだ寝ている綾香を見てホッと安堵の息をついた。

「本当は、ギルドマスターが回答するのが筋なんですけどね」

呟く声に返事はない。確実に反対するだろう綾香を思うと気は重いが、そこは自分が何としても説得しなければならぬ。アズライトはため息を一つつくと、一葉に了承の連絡をするのだった。

「マコ君のこと、どう説明すれば納得してもらえますかね」

太陽はすでに姿を見せて久しい。初夏の眩しい光が部屋に差し込んだ。空は今日も青く澄んで美しいが、己の心の中は曇天なのだろうとアズライトは思う。

一葉に連絡をした後、だいぶ時間が過ぎてしまった。これほど明るいのなら、あちらの面々も起きているだろうと、マコトに念話を

試みたが通じなかった。仕方がないので、マーナガルムにマコトの派遣を伝える。

「貴女の罪は全て被ると言ったのですから、このことも私の罪になるのでしょうか」

これからのことを考えると疲れた表情になるをしたアズライトだったが、いつまでもこのままではいられないと、綾香を起こすことにしたのだった。

一方、こちらは、夜明けの頃のシデンの酒場。遊色の雫が借りている部屋では、マーナガルムは仮眠をとるために戻ってきたところだった。

二段ベッドの下部分、自分のテリトリーにゴロンと横になったマーナガルムは、目を閉じて仮眠を取ろうとするが、うとうとするたびに一人で行ったフィールドでの恐怖を思い返し、ビクツと震え飛び起きた。

流石に、アキバの街近くとはいえ、一人でフィールドに出た時の恐怖は半端じゃなかった。いっどこから敵が襲ってくるのか分からず、狼の遠吠えを聞いてはビクリと足を止め、そんな自分を叱咤していた。

「強くならねばならない」

さいな

強迫観念のようなソレに苛まれながら、それでも生き抜くための度胸と決意を固める。やがて、群れから逸れたらしい狼や数匹のゴブリンなどと出会った時は、躊躇なくまではいかなかったが、必死に敵を倒せるまでになっていた。

「痛くないし、殺されることもない。相手は弱い……」

ほんと

繰り返しつづやっていた自分。実際、相手に傷つけられても殆ど痛みは感じず、斧が当たったと言うのに掠り傷にもなりはしなかった。仕舞には、自分に向かってくる魔物や足元に転がるモンスターたちを虫けら同然だと認識していた気がする。

そして、それは偶然だった。森の奥、パリンという乾いた音がし

たかと思うと、一面に綿花が実っている空間にでたのだ。ふわふわの綿が顔を出す実をプツリと千切って確認し、しげしげと眺める。それが綿花だと認識できると、夢中で背負い袋の中に詰められるだけ入れるのだった。

マーナガルムは、そんな昨晚から今朝にかけての出来事を思い出しながら、うとうとと微睡まどろんではビクツと飛び起き、また目を瞑まどろつて微睡まどろんで、ビクリと震え目を覚ましと繰り返していた。

「ガルガル……どこ行つてたの？」

目を瞑まどろつてどれくらい経つただろうか。少女の軽やかな声に、うとうとと微睡まどろんでいたマーナガルムは起こされ目を開く。声の方を見ると、二段ベッドの上から下を覗き込む少女の姿は、まるで逆さになった生首のようで、マーナガルムは出そうになる悲鳴を飲み込んだ。

「な、なんだよ。おどかすな」

「脅かしてなんかはないなお。勝手にガルガルが驚いてるだけなのっ！ で、どこ行つてきたの？」

ムツとしたように唇を尖らせるクリスティナ。エメラルド色の瞳が、悪戯っ子のようにきらめいた。その様子にため息をつくマーナガルム。

「フィールド。魔物を殺してきたぜ」

マーナガルムの答えに、小さく笑うクリスティナ。昨日の不甲斐ない自分ではないというアピールなのだろうか？ その余りにも真っ直ぐな、愚かとも受け取れる表現方法にクリスティナは呆れたように呟いた。

「……暑苦しい男なお。猪突猛進？ もっとスマートさが重要なのお」

「なっ！ いいだろっ。俺だつて戦えるつてのを知りたかつたんだ」

「それで敵さんにやられちゃったら、最悪なお」

「お前なあ、ゴ布林ごときに俺がやられるわけないだろっ」

「油断大敵なお」

二パツと笑ったクリスティナは、一度頭を引っ込めると、ぴよんと飛び下りてくる。そして、じっとマーナガルの顔を見ると、真剣な表情で告げた。

「僕だつて、負けないよ？ 戦えるし、生きられる。僕は、この世界の『クリスティナ』なんだから、魔物なんて怖くないんだ」

クリスティナの言葉に、マーナガルもニヤツと笑った。

「そっちこそ、ずいぶん熱いことで」

「ガルガルの移ったのお。やだなあ、クリス、おちゃらけキャラなのにい」

にいつと笑ったクリスティナ。

「先生に連絡しとくぜ。お前とマコトがフィールドに立てるか、確認しておいて欲しいって頼まれたからな」

そうマーナガルが言った時、別のベッドから悲鳴が上がった。

「いやあつ！ 助けてー！」

「マコマコ……」

慌ててベッドに目を走らせるクリスティナ。それでも近寄ろうとはせず、ただじいつと苦しそうな彼の姿を見守る。マーナガルムは、苦しそうに自分の喉を掻き^{むし}きるマコトの姿に、やるせなさそうに告げた。

「マコトは、留守番だな……先生には、そう報告しよう」

「……足手まといつて言いたいのか？」

平坦な声。現状では、マコトはフィールドに立てないと二人とも分かっていたが、確認するように言葉を交わす。

「いいや、アキバの街では大切な仲間だ」

「フィールドでは？」

「敵より厄介な味方だ。後ろから撃たれるぜ」

昨日の今日だ。例え決意しても、なんらかの恐怖心や怯えが残っているのは仕方がない。割り切っているつもりでも、後ろで恐慌状態に陥って怯えられては、こちらも引き摺られてしまうだろう。足手まといどころではない、文字通り足を引っ張って、彼は自分でも

気付かないうちに敵の援護をしているようなものだ。

「酷い言いよう……でも、僕もそう思うよ」

ポツリと呟いたクリスティナは、未だ苦しげに手を動かしているマコトの寝ているベッドに近付きながら、こちらを見ているマナーガルムに言葉を投げた。

「仮眠、取るんでしょ？ マコマコはクリスが見てるよ」

その言葉を受けて、ひらひらと手を振るマナーガルム。何かをぶつぶつと呟いていたかと思うと、しばらくして微かな寝息が聞こえてきた。

ベッドの上、マコトの足もとに腰かけるクリスティナは、苦しそうな顔のマコトを覗き見る。額ににじむ汗に気付き、ポケットからハンカチを取り出して拭う。クリスティナが優しく触れると、きつくギュッと閉じられていた目の力が少しゆるんだような気がした。妙にそれが嬉しくて微笑んだ。

「マコマコ……きつとキミの方が正常な反応なんだろうね。僕もガルガルもライライも、みんな戦うことを選んだけど、でもどこかでそれを悔やんでるんだと思う。だから、迷っているキミが哀れで、羨ましい」

柔らかな銀の髪を撫でながら、今夜何度目かの眠りの精を召喚する。現れた大きな袋を背負った小男は、またかと微妙に顔をしかめていたが、クリスティナの願いに快く応じ、マコトに穏やかな眠りをプレゼントするのだった。

「ついでに、あっちの大男にも眠りの粉、ヨロシクなお」

面倒な奴に呼び出されたと苦い顔をするザントマンに、クリスティナはポケットに入れておいたムーンストーンの欠片を放り投げた。ぴよんと飛びあがってそれを手にしたザントマンは、にやりと笑うと、ご機嫌で砂を撒いて帰って行くのだった。

耳元で響く音に綾香は眉をしかめた。綾香の自宅の目覚まし時計はラジオだ。時間になったら電源が入って音が流れるようにセット

している。目覚まし時計の人工的な音ではなく人の声で起きられるから綾香は好きなのだ。

（リンリンリンンっ！　うるさいっ！　まあ、誰よ、こんなやかましい目覚まし時計セットしたのっ！）

自分じゃなければ、もう一人しかいない。自分のベッドの布団と違った感触から、ある男の顔を頭に浮かべて舌打ちした。

「うるさい……一輝^{かすてる}、目覚まし、止めてよ」

呟いたところで、はっとする。自分が エルダー・テイル に来ていることを思い出したのだ。そして、この鈴の音が意味するところは……。

「ね、んわ？」

がばっと起きて、肌寒さに下に目をやれば自分が裸だということを知り、慌てて掛布団をかぶった。綾香が目覚めたのが分かったのか、いつの間にか喧しかった鈴の音は消えていた。

（ん？　わたし？　あれ、れ？）

「起きましたか？」

頭までかぶった掛布団をゆっくりとめくりながら、アズライトはククツと笑って言った。綾香と言えば、すっかり服を着て笑っているアズライトをギツと睨む。

「笑わないでよ、一輝……じゃなくて、アズっ！　あんたが……」

「はいはい。笑いませんよ、お嬢様」

「そう言いながら、笑ってるじゃないっ！　わたしの服は？」

そう言っただけで伸ばされた綾香の腕に、ふわりと掛けられる下着^{ビキニ}。白から緑のグラデーションで染め上げられ、途中から下に草花が描いてあるソレは、目覚えがなくて不審な眼でアズライトを見上げる。

「これ、わたしのじゃないわ。わたしのはどうしたの？」

「綾のです。差し上げますよ」

眉をしかめる綾香。

（確かに見た覚えはある。でも私が持っているビキニには、こんな柄はないはずだわ。でも目覚えがある……あっ！　見たことあるは

ずだ。材料が集まらなくて断念したんだ！)

この柄の水着は綾香が欲しくて材料を探したのだが見つからず、最後の手段とばかりにクリスティーナに強請^{ねだ}ったのだが、物が森^{ドリ}の精霊と花の妖精の髪^{アドフロアル}の束と涙の結晶だったため、相性が悪くなるから嫌だと断られて諦めたものだっただ。

「どうしたの？ これ？」

「先ほど 銀杏工房 の一葉君と話をしてきましたね。そのとき杏嬢に作っていただいたんですよ」

微妙に答えになっていない気がするすると眉間のしわが深くなる。答えてもらっているのに疑問が増えるとはどういうことだろうか？

難しい顔をする綾香に、しかたないなあと優しく微笑むと「先に着替えてはいかがですか？」と勧めるアズライトだった。

着替え終わった綾香は、ベッドに座って足を組んで不機嫌な顔をして目の前の男を見た。

「で？ どうして出かけてたの？ 銀杏工房 にはなんで？ あと、水着のこと！」

尋ねるられたアズライトは、綾香の言葉にひとつひとつ指を折って数えながら、につこりと笑いかけた。

「疑問は3つですね？」

「答えによつては増えるわ」

むっとしたように綾香は言い放ち、顎をしゃくると先をせかす。

「まず、何から説明しましょうかね…… 銀杏工房 の件からにしますか。 銀杏工房 の柘榴君経由で連絡がきまして、ギルド口座送金の件で……」

「ああ、ティッシュと下着ね」

「ええ、昨日半日でだいぶ売れたらしいですよ。それで、口座に送金したと言われ、確認をしに。思っていた額よりも多くてびっくりしましたよ」

「材料も採ってこなきゃ……昨日は、約束したコットンプラントを倒すところの話じゃなかったわ」

ため息をつく綾香。アズライトが綾香の髪を撫でて慰めると、綾香がアズライトの胸にコッソんと頭を預けた。

「金額の確認に一葉君に会いましたね……そう言えば、銀杏工房の皆さん、徹夜で今日の商品を作ったと言っていましたよ」

「なんで、黙って一人で行ったの？」

「誰かさんが、ぐつすりと気持ちよさそうに眠っていましたから。起こすのが忍びなかったんですよ」

柔らかい微笑みを浮かべながら、綾香の髪を撫でていたアズライトだったが、「そうそう」と呟いて、服の隠しから薄い水色の小瓶を取り出す。中の液体がタプンと揺れた。

「ん？」

アズライトの声に上を向く綾香。アズライトは小瓶の蓋を取ると瓶の口を指で押さえる。瓶を一度傾けると元に戻し瓶の蓋をした。

チャプンと中の液体が揺れ、ふわりと爽やかな柑橘系の香りがした。液体の付いた指を綾香の首にスーッと滑らせるアズライト。綾香からほのかな香りが漂い、綾香の表情が緩んだ。

「香水？ ああ、アズは調香師 だったわね」

「今回、ノリヤ君はこちらに来なかったようなので、調香用の作業台を貸していただいたんですよ」

ノリヤというのは 銀杏工房 の調香師 だ。彼はログインしていなかったらしく、こちらの世界にはいない。今回はその誰も使っていない調香台を借りて、香水を作ってきたのだらうと綾香は考えた。

「ええ、貴女は気にしそうですね？」

何か企んでいそうな微笑みに、綾香は緩んだ表情を引き締める。

「何を？」

「知ってました？ 昨日、水浴びもしていませんよ」

アズライトの言葉に、綾香は目を見開いた。自分が、ゴブリン達と戦った後、水浴びすらしていないことに今初めて気が付いたのだ。自身の身体の臭いが気になり、バツとアズライトから離れると、慌

ててくんくんと自分の肩や腕の臭いを嗅ぐ。

「ああ、大丈夫です。身体の隅々まで、私が拭き清めましたよ」

心底楽しそうに囁いたアズライトは、驚愕の表情の綾香を気にした風もなく、綾香の足もとにしゃがむと綾香の足を片側ずつに掴むと足首に香水を付ける。

「変態っ！ 変人っ！ なんてこと言うのよっ！」

ぎゃあぎゃあ綾香が騒ぎ出すが、アズライトは「いまさらじゃないですか」と楽しそうに微笑むばかりだった。

「効果は回避率のアップ……といっても、1〜2%なので気やすめですが。それでも柑橘系のさわやかな香りは気分を爽やかにしてくれますからね」

アズライトの言葉の通り、爽やかな香りが綾香を包み、気分をすっきりとさせる。

「そんなに、むくれないください」

立ち上がったアズライトは、むうっと頬をふくらます綾香の髪を撫でた。綾香と同じ香りがアズライトの指から香り、綾香の髪の毛にも香りが移って行った。

「貴女も知っているとありますが、先ほどお渡しした水着は森林フィールドでの回避率・防護力アップの特性が付いています。低レベルのモンスター相手だったら、傷つくようなことはありませんよ」

森の精霊と花の妖精の髪^{ドライード}の束と涙の結晶は、調香の材料になることもあるため、アズライトが個人的に手に入れてあったシロモノだった。こんな風に役に立つと思わなかったが、アズライトは綾香の為、杏に材料を渡して製作をお願いしたのだ。彼女が声を掛けてこなくても香水を餌に製作を頼むつもりだったが、今回は手間が省けたとアズライトは微笑む。

「ありがとう」

アズライトの心遣いに、ぎゅっと抱きついてお礼を呟く綾香。アズライトは、目を閉じると「それで、ですね」と今日、これからのことを告げるのだった。

「フィールドには、マコ君を連れて行きません」

きつぱりと告げられた言葉に、綾香はどういうことだと顔を上げアズライトを睨んだ。幾ら魔物を見て怯えるからと云ったって大切な仲間なのだ。マコトを街に残して行くいわれはないだろうとその瞳は告げていたが、アズライトは気付かないふりをして言葉をつづけた。

「銀杏工房 で、裁縫師 が足りないそうです。あちらからマコ君を貸してほしいと要請がありました。『ティッシュ』の売り上げの一部は、遊色の雫 の口座に入金されます。断れないでしょう？」

「もう、返事をしたの？」

「はい。昨晚のマコ君の様子をガルム君から伺いまして、今日はフィールドに立てないだろうと判断しました。何か問題でも？」

冷静なアズライト。さらりと言われた言葉に、反射的に綾香は「大ありよっ」と声を荒げ、アズライトの身体を突き飛ばした。突き飛ばされたアズライトは、後ろへたたらを踏み、壁に背中を打ちつけた。

「どうして、何も相談しないのっ！　なんで、そんな勝手に決めちゃうの?!」

「綾だつたら、どうします？」

「そんなの断るにきまつてるでしょ！　マコは仲間なのよっ！　一緒に居なきゃ……」

勢いよく言葉を返す綾香。アズライトはため息をつく。「冷静に考えてください」と綾香の言葉を遮った。

「本当にそれがマコ君の為ですか？　昨日あれほど魔物におびえていたんです。今、フィールドに連れ出すことが彼の為ですか？　綾、貴女が離れたくないだけなら、それは貴女のエゴです」

「アズっ！　わたしはっ！」

大声を上げる綾香。彼女の反応は予想済みだ。アズライトは冷静に言葉続ける。

「敵におびえる姿を見て平然としていられますか？ 彼が怯えてパニックに陥ったらどうするのです？」

「でもっ、でも……」

畳みかけられて綾香の言葉は弱くなる。弱弱しく首を振り、「だって、でも」と繰り返すばかりの綾香を優しく抱きしめるとアズライトは囁く。

「貴女の罪は、全て私のモノだと言ったでしょう。綾、貴女がマコ君を残していくことに罪悪感を感じるのであれば、すべて私に押し付けてください。だから、一葉君には私が連絡を取りましたし、ガラム君にはマコ君に伝えるよう私から指示を出しました」

「そんなのって……」

手をぎゅっと握り、唇をかみしめる綾香。頭では分かっている、理性はアズライトの言葉を正しいと認識している。でも、感情が反発する。弱いから捨てるのかと、足手まといは切り捨てるのかと綾香を責め立てる。

アズライトは、仕方がない人だと微笑むと綾香の顎に指を添え、視線を合わせる。戸惑いながらアズライトを見つめては反れる揺れる瞳。彼女の唇に指を這わせ囁く。

「貴女は私のモノです。罪も咎も全て私が引き受けます。だから、躊躇わないでください」

唇に口づけを落とした。

戦線離脱？ 異世界での派遣稼業？

いつものようにパソコンの前に座り、仲間たちと冒険の旅に出る。ここ3年ばかりハマっているオンラインゲーム エルダー・テイルの画面が液晶モニターに表示され、画面の中では仲間たちがゴブリンと戦っていた。

（変なの……ゴブリンなんて弱い敵と戦ってるなんて）

ぼんやりと思いながら、仲間のステータスを確認する。自分は回復^{ヒール}役なんだから、ちゃんと確認しないと思つてステータスの表示してあるはずの場所に目を移すが、そこには何も表示されていなくて首をかしげる。

「バグ、かなあ？」

呟いた途端、座っていたはずの椅子は消え、尻もちをつく。部屋の床はフローリングのはずなのに、湿った土の臭いがした。

訳も分らず辺りを見回すと、そこは緑の生い茂ったジャングルのような場所で、目の前には 冒険者 の恰好をした綾子達の姿と、不気味な姿の緑色の小鬼や狼の群れが迫っていた。

「何？ これ？」

呟いた声を耳にしたのか、小鬼がこちらを見て視線が重なる。にいつと捻じれた唇をゆがませ、こちらにのそりと歩いて来る小鬼。パニックになつて手をむちゃくちゃに振り回せば、目の前の白い髪的美少女が振りかえり「足手まとい」と冷たく言い捨てる。

「あんななんて、彼にとって金づる兼便利な家政婦でしかないのよ」

幻聴が聞こえた。目の前に立っているのは今度は白い髪の少女ではなく、脱色して痛んだ髪を掻きあげる女。憎々しげに私を見ると、真っ赤な口紅を塗った唇が動きます。

「いい加減、彼に付きまとわないで」

付きまとってなどいないと何度言っても、彼女は理解しようとしなかった。私が住んでいるアパートに転がり込んできたのは彼だし、お金を渡さないと殴ってくるのも彼だ。離れたいのは私の方で、離さないのは彼の方だと叫んでも、何度も彼女は私の前に現れて「彼と別れて」と繰り返すのだ。

彼にとつて私の存在など、お小遣いをくれて、寝食とセックスを提供する便利な女だったのだろう。私がいくら疲れていても、仕事を立て込んでいても、彼の要求に従わないと待っているのは暴力だった。別れようと言葉にすると、そのときだけは優しくなって、私は別れるに別れられなくなる。

疲れ果てた私は、会社に泊まり込み、仕事に精を出した。私が仕事を理由に相手にしないと、それを理由に他の女を私の部屋に連れ込んで生活していた。

「お前が悪いんだ」

彼はいつもそう言つて、自分を正当化して私を殴る。

「あんたが彼を離さない」

彼女はそう言つて、私を責め立てた。

「私が悪いんじゃないっ！！」

叫ぶと、目の前にナイフを持った女が現れた。こちらへ走ってくる彼女。恐怖にガクガクと震えて見ていると、私の前には彼がいて、彼女の持ったナイフは彼の腹部に突き刺し、驚愕に目を見開いた彼女は慌ててナイフを抜き取った。

彼の腹部からは血があふれ出し、目の前の出来事に叫び声を上げる私。こんなはずじゃなかったと取り乱す彼女。点滅する赤いランプ、白い車。制服の男たちを見た彼女は、錯乱して自分の腹部へ刃物を突き刺した。うめき声を上げる彼と彼女から私は遠ざかる。

遠ざかった私の周りには、緑色の小鬼が群がり始め、悲鳴を上げる私。ザシュツと何かが振るわれ、小鬼たちは大量の死体となって散乱した。

「もう大丈夫よ」

そう言つて真つ赤な返り血で身体中を染め上げた赤毛の美女が、血ぬられた手を差し伸べる。私は、大声を上げてその手を振り払うと逃げ出した。逃げ出した私の前に誰かが立ちはだかり、私はぶつかつて転んだ。

「だからお母さんの言う通りにすれば良かったのよ」

髪を振りみだして怒り狂う女がいた。私は叩かれたのだろう、頬が痛かつた。

「子供は親の言うことを聞いていればいいの。良い高校に行つて、良い大学に入つて、良い会社に入つて、良縁を見つけて結婚して、子供を産んで育てるの。それが貴方にとって幸せなのよ！　なのにっ！」

ヒステリックに騒ぎまくる女。ざわついた建物内が、そのときだけはシンと静まりかえり、部屋中の人が私達のことを見ていた。

「お母様、彼女は被害者ですし……」

とりなすような初老の男性の言葉にも彼女は、耳を貸さなかつた。ただ、恨み事のように繰り返し「親不孝者」と言つていた。

疲れ果てた私は、ぼんやりと座り込み　　いつの間にか、おしやれなカフェでコーヒを飲んでいた。目の前に居る綾子さんが、ひどく私を心配していた。かなり顔色が悪かつたのだろう。当時、眠ろつとすると血まみれの何かが、私を追いかける夢をよく見ていたのを思い出した。

そう言えば、落ち込んだ私を心配した綾子さんが、気分転換にと紹介してくれたのが　エルダー・テイル　だった。

「自分が嫌なら、自分じゃない人間になつてみたらどうかしら？　もし女であることが嫌ならば、ネットの中だけでも男になつてみない？　違つ自分を演じていると思えば、その時だけは、現実の煩わしさから逃げられるでしょう？」

事件のことは、世間体のことを気にする母の意向で余り知られていないはずだったが、異様な私の雰囲気になにかを感じ取つたのだろう

う、綾子さんはそう言って勧めてくれたのだ。

正直、他人と係わる煩わしさには辟易していたのだが、気分転換にと始めたそれに、いつしか夢中になっていた。他愛のない会話に、オンラインだけの関係、雑音じみたボイスチャットの会話は、一人暮らしの私の心を癒した。人の声が、とても安心するのだ。なんとも相手はパソコンの向こうだ。視線が気にならないのが嬉しかった。

優しい声が私を包む。安心して眠っていいのだと、その声は囁き続けていた。私はその声に導かれるように深い眠りに吸い込まれていった。

ぼんやりと目を開く。徐々に覚醒する意識。見覚えのない天井に、自分がどこにいるか分からなくなるが、覚醒した意識が エルダー・テイル だと現状を認識する。

いつ寝たんだろうと思うながら枕元に手をやるが、目当てのものはそこにはなく、どこに置いたのだろうとベッドの中、ごそごそと探しまわる。メニュー画面を開いてアイテム一覧を確認してみれば、自分が所持していないことを知り、どこに落としたのだろうと悩んだ。

マコトがゴソゴソと動き出した気配を感じたのか、クリスティーナが隣の２段ベッドの上から身を乗り出して声をかけた。

「おはよなお。お寝坊さんだね、少年っ！」

「あれ？ えっと……」

昨日、戦闘で恐怖のあまり気絶したことは、うる覚えながら記憶にある。でも、柔らかな布団に包まれている現状を考えると、夢かと思えてしまった。いつもの賑やかな口調が、昨日の惨事を忘れさせた。

「夢じゃないの。ガルガルが担いで帰ってきたのお。クリス、力ないからマコマコ運べなかったのお」

能天気な声。クリスティーナの弾んだ声を聞いていると、あの時の

ことは夢にしか思えなくて……それでも、夢でないのだろうと、ぼんやり思う。

先ほどから探している眼鏡が見つからなくて、ため息をついた。ガラス越しでない風景は、あまりにも刺激が強すぎて目を瞑る。部屋の中にはクリスティーナ一人だと分かっている、視線が気になり落ち着かない。ここ数年、ガラス一枚でも世間と隔たれていることに安心していたのだ。誰も事件のことは知らないと分かっている、素顔をさらし続ける勇氣はなかった。

「眼鏡、無くしちゃったみたいだ」

目に手を当てて、そう呟くマコトをキョトンとした眼差しで見つめるクリスティーナ。小首をかしげて記憶を探すが、戦闘が終わったときには、眼鏡なんて掛けてなかった。

「探しに行ってみるの？」

尋ねる声に首を振ったマコト。小さな声で「諦めるよ」と呟いた。流石に、一人でフィールドに出る覚悟はない。別の眼鏡を探そうとアイテム一覧に目をやるが、結局は貸金庫に行かねばならず、宿からギルド会館までは、素顔でいるしかなかった。

そのとき、扉が開いてマーナガルムが現れた。

「おっ、マコトも起きたんだな」

「ガルムさん、おはようございます……姐さんと先生は？」

マーナガルムと視線を合わせないように若干俯きながら、残りの二人の行方を聞けば、マーナガルムは明後日の方を向いて、ポリポリと頬を掻いた。マコトの質問には答えず、今朝アズライトから念話で聞いたことを伝えた。

「近いうちに、アキバの街中にでも家を借りるってさ」

マーナガルムの言葉に、クリスティーナは騒ぎ出す。

「ええっ!!! どことどここお? 今度はどこに引っ越すのお?

窓があるとこ希望なのお」

ぴよんと2段ベッドの上から飛び降りたクリスティーナは、マーナガルムに体当たりしながら嬉しそうに尋ねる。体当たりされたマ

「マーナガルムは、それでも非力な召喚術師^{サモナー}の体当たりなど何でもないように平然として「さあな、なんでも先生、自分の作業台が必要になったらいいんだ」と答えた。

「お金、大変だから借りないってライライ言ってたのにい？」

クリステイーナは、マーナガルムを見上げると「勝手なお」と目を丸くした。

「アズ先生から連絡が来たんだ。どうやら、昨日お前たちが銀杏工房で話したことが大当たりだったらしく、ギルド口座にそこそこの額が入ってきたんだ。んで、コットンプラントを大量に倒して綿花を入手するのを依頼されたいらしい。マコは銀杏工房でアルバイトな。裁縫師が足りなくて困ってるらしいんだ」二人から視線を外し、事務的に淡々と話すマーナガルム。ちよつと困ったように目じりを下げて、マコトに言った。

「べ、別に、仲間はずれじゃないからな。ただ、な……その……」言いにくそうに言葉を詰まらせるマーナガルムに、マコトは首を振った。

「うっん。大丈夫だよ。僕が、今僕がいても、役に立たないどころか……」

言葉が続かないのか、苦しそうに声を出すマコト。マーナガルムは「違うつ！」とマコトの言葉を遮った。

「違っんだ……違っんだよ、マコト」

慌てて言葉を重ねるマーナガルム。クリステイーナはマーナガルムを仕方がない奴だと冷たい目で見たが、いつものように朗らかな明るい声を出してマコトに言った。

「適材適所って言いたいんでしょう？ もあ、ガルガルってば頭悪いんだからあ」

ぐりぐりとマーナガルムの腹を握った拳で押してくるクリステイーナ。マーナガルムは、ワタワタと冷や汗をかきながら言い訳のように言葉を紡ぐ。

「あ……あぁ、そう、そうなんだ。杏さんがな、大変なんだって言

つてたらしいぞ。向こうからのオファーらしいんだ」

そして、自分のベッドから背負い袋を持ってきて中身を見せた。
「それに、昨日俺が採ってきた綿花も持って行ってもらいてえからさ、背負い袋を交換しようぜ」

クリステイーナはダメダメだと口の中で呟きながら、くるりと回ってマコトの方を向いた。マコトに近付いたクリステイーナは、ベッドに腰掛け力なく項垂れる彼の足もとにしゃがむ。視線を合わせようと覗きこんだが、ふいつと彼に反らされてしまった。不思議に思いつつも、クリステイーナは説得を開始する。

「マコマコ、怖い怖いって夜泣いてたなお……今日も、フィールド行ったら、また怖い思いしちゃうから、クリス心配なの。ねっ、マコマコも怖いのでしょ？」

頷くマコトにクリステイーナはにっこりと無邪気な笑みを浮かべる。

「クリス、いっぱい綿花取ってくるの。だから、マコマコが『ティッシュ』いっぱい作って欲しいの。これこそ分業なのっ!」

力いっぱい主張する少女に、マコトは「分かってるよ……」と力なく言葉を返すと、俯いたまま自分の背負い袋をマーナガルムに渡すと、彼の持っていた背負い袋をクイツと引っ張る。慌ててマーナガルムが手を離すとそれを受け取り、二人を避けるように扉へ向かった。

「大丈夫、僕は自分のできることをがんばるよ」

マコトは小さく呟くと扉の取っ手に手を掛け、扉を開けた。扉を開けると目の前に綾香とアズライトが立っていて、そんなところに人がいると思ってなかったマコトは、目を見開いた。ガタガタと身体が震えだし、その場に蹲るマコトの姿に驚いたアズライトはマコトに手を伸ばす。

「い……イヤア! 触らないでっ!」

パシンと音を立てて払われる手。自分の身体をぎゅっと抱きしめたマコトは、小さく縮こまる。

「マコ？」

顔を覗きこもうとした綾香だったが、マコトが眼鏡をしていないのを知るとアズライトに手を開いて出す。

「眼鏡っ！　眼鏡を貸して」

「度は入ってないですよ？」

「いいから、早くっ！」

アズライトは目が悪いわけではないが、この眼鏡には命中値補正が付いているため掛けている。何故、それを綾香が必要なのか分からないまま、アズライトは自分がしている眼鏡を綾香に手渡した。

綾香は、受け取った眼鏡をマコトに掛ける。マコトの視界が淡いブラウンで覆われた。いつもとは若干違う色合いの風景に戸惑いながら、ガラスを通しているという事実にもマコトの中に安堵感が広がる。手や身体の震えが止まり、人の視線が気にならなくなった。

しばらく俯き、息を整える。息を吸って吐いてを繰り返し、落ち着いたところで、マコトは顔を上げ綾香の顔を仰ぎ見た。

「姐さん、ありがとう」

「どういたしまして……大丈夫？」

頷くマコト。何が何だか分からない三人は、呆然と二人を見る。

「アズライト先生、悪いんですけど、眼鏡、貸してください」

「構いませんよ？」

何故眼鏡が必要かは分からないが、とりあえず了承するアズライト。クリスティーナとマーナガルムは説明を求めるように綾香とマコトを見るが、二人とも説明する気はないようだった。

「それじゃ、僕、銀杏工房へ手伝いに行ってくるよ　先生、眼鏡、後でちゃんとお返しします」

逃げるようにマコトは、宿を後にした。

三人の視線に首を振る綾香。

「ガルが見つけたんでしょ？　綿花の自生地。さっさと行って取っ
てきましょうよ」

艶やかな笑みで告げると部屋を後にした。

三人は目配せし合つて、お互いに何も知らないと分かると首を振つて綾香の後を付いて行くのであった。

意気衝天！ 異世界にてギルド員募集！（前書き）

この話の内容を若干変更致しました。

ご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ありませんでした。

意気衝天！ 異世界にてギルド員募集！

朝から慌ただしい雰囲気にもまれた 銀杏工房 のギルドホールでは、徹夜で商品を作っていた 売り子 達が出来た商品を背負い袋へ積み込み作業をしていた。

ミニタオルなどのアイテムは、裁縫台の前で必要なアイテムを選び、実行ボタンを押すだけで一瞬で出来上がる。しかし、今回は出来あがったミニタオルを決められた枚数、それぞれの容器に入れる必要がある。その作業を 売り子 たちは行っていた。もちろん、数をこなすうちに生産スピードは上がってくるので、かなりの在庫を作ることができたが、昨日の勢いを考えると、まだまだ足りないだろうと椿は考えていた。

それになんといってもマジックアイテムである背負い袋は、レベル45にならないと発生しないクエストでしか獲得できないアイテムである。持っているプレイヤーが殆どとはいえ、主に街中でしか活動していない 売り子 の中には、そのレベルに到達していないものが存在する。もちろん、 売り子 だけではなく、材料調達部隊の中にも持っていない者はいるが、材料調達のため冒険を多くしていたためその数は少ない。

「自分の背負い袋を持っている方は、それに商品を入れてください。持ってらっしゃらない方には、クリエーターの方の分をお貸しします」

椿は自分の荷物を作りながら、そう言っただけで杏達から借り受けた背負い袋を貸すのだった。もちろん、護衛役と 売り子 がペアで動くため、どちらかが持っているというグループはある。しかし、昨日の売り上げと今日の予約分を考えると、一度に大量の商品を持つて歩いた方が効率的である。ペア二人分の背負い袋に商品を詰め込

むよう一葉からも指示が出ていた。

ちなみに昨晚徹夜をしたのは、杏たちクリエーターと 売り子たち販売担当だけで、材料調達部隊の面々は今日の材料収拾と護衛役の為にちゃんと睡眠を取るよう言われている。まだ、朝日が顔を出したばかりのこの時刻、この場に居るのは 売り子 たちだけであつた。皆、徹夜明けのハイテンションで、厳つい男に『ティッシュ』が無いかと詰め寄られたあの、護衛役が守ってくれてキュンと来たあの、護衛なのに役に立たず私が守ってあげたあのと賑やかに話していた。

「皆さん、準備の方はどうですか？」

賑やかに詰め込み作業をやっていた 売り子 たちは、商品在庫置き場と化している会議室に顔を出した一葉を見ると、しんと静まり返つた。そして、一斉に立ち上がると「おはようございます。一葉様」と綺麗に礼をするのであつた。一葉の後ろからその一系乱れぬ姿を見ていた銀は、いつものことだと思いつつも教祖的勢いを放つ自らの兄の姿に二歩ほど下がってしまうのであつた。

「皆さん、昨日から徹夜で作業していただき、ありがとうございます。椿、状況はいかがです？」

「はい。昨日予約されたお客様へお渡しする商品は、すべて揃いました。本日分の在庫として、昨日の売上分と同じ量は用意してありますが、昨日の様子を考えますと午前中で売り切れてしまう恐れがあります」

よどみなく答える椿。答えを聞いて一葉は少し考える。

「昼間、 売り子 の皆さんが配達や販売をしている間に、商品を作る必要があるのですね。銀、私はギルドに所属していない方を探して勧誘してきますから、中のことは任せますね」

「兄さん……それって、ナンパ、じゃ？」

脊髄反射的に呟いてしまった銀に、一葉は「人聞きの悪い」と苦い顔をする。

「せっかく仕事があるんです。何をやっていいか分からなくて困っ

ている人を助けるのは、とても重要なことだと思いませんか？」

「モノは、いいよう……」

「それなら……」

椿は一葉に声をかける。一葉と銀は「ん？」と椿を見ると、少し逡巡する様子を見せた彼女だったが、腹を決めたように一葉の顔をじつと見て告げるのであった。

「私の知り合いで、昨日 銀杏工房 で働きたいと言っていた女性がいるのですわ。彼女は今までギルドには所属せず行動していたのですが、今回の異変で一人で行動することが怖くなってしまったらしく、ギルドに所属したいと私に相談してきたのです」

椿の言葉に、後ろに立っている 売り子 の数名も手を上げだした。

「私の友達も同じようなことを言っていました」

「以前から、一葉様のファンの子がいるんですけど、その子でも構いませんか？」

「そういえば、私の友人にも……」

一人が発言するとたちまち我先にと 売り子 たちが口を開きだした。一度に話し出すから、発言が聞き取れないばかりか喧しい。

銀は思わず耳を押さえたが、一葉は皆の発言を聞くと嬉しそうに微笑む。

「皆さん、ありがとう」

一葉の言葉にピタリと言葉を止める一同。もちろん、 売り子 であるメンバーは殆ど一葉ファンクラブの面々である。大切な一葉様の言葉を聞き洩らすわけにはいかない、と云ったところであろうか。

「それでは、皆さんのお友達にお手伝いをお願いしましょう。もちろん、ギルドへの加入が条件ですが、それでも構わないと言った方に声を掛けていただけますか？」

コクコクと頷く 売り子 たち。それを見て、やはり「これ以上、信者……増やさなくなつて……」と呟いてしまう銀なのであった。

朝日が昇り、今日も初夏の青い空が広がりました。人々が活動する時間になると、売り子たちも昨日の予約者一覧の紙と商品の大量に詰まった背負い袋を持って、配達に出かけました。

「徹夜明けで疲れていると思いますが、よろしくお願いしますね」

一葉が一人一人に声をかけながら背負い袋を手渡すと、売り子たちは「任せてくださいませ」と口々に答えながらギルドを後にしていった。

「高レベルの裁縫師、来るといいね……兄さん、助かるでしょう？」

全ての売り子を送り出した後、味は水道水のお茶を渡しながら銀が言うと、一葉は不敵な笑みを浮かべながら答えた。

「さあ、来た方が高レベルの裁縫師であればあるだけ、注意しなければいけませんよ……楽なのはレベルの低い新人さんですね。ゲームレベルが低くて、ギルドへの所属履歴がない方なら幾らでも受け入れますよ」

「えっ？ どうして？」

不思議そうに首を傾げる妹に一葉は「まだまだお子様ですね」と頭をぐりぐりと撫でるのであった。

「それでも、まあ……獲りこんでしまえば、こちらのモノ。上手くいけば、かなりの手勢が集まりますから、ここは私の腕の見せ所つてところでしょうか」

兄の黒い雰囲気、なんでみんなこんな人に心酔するのか分からないと改めて思う銀だった。

「イチ。材料收拾へ行ってくる。今日、役に立たんヤツは置いてくから、自由に使ってくれ」

後ろに数人の仲間を引き連れた柘榴は、そう言い切ると「行くぞ」と仲間を連れて行った。昨日材料收拾に行ったメンバーの中には、戦闘が余りにも衝撃的だった為か、今日はぐったりしてベッドから出られないものもいるようだ。

ギルドホールを出て行く柘榴たちの後ろ姿に「よろしく願いますね」とニコニコ笑いながら手を振る一葉。

人数が少なくなった 銀杏工房 の中、事務室に戻った一葉は、椿の残していった予約数や予備で持っていく商品の数、現在残っている在庫数などが書かれた一覧表を見ていたのだが、しばらくしてクロガネが慌てて飛び込んでくると、静かな事務作業は中断するしかなかった。

「一葉先輩！　なんか、うちのギルドに入会希望っていう女の子が来てんですけどお」

外に気分転換に出ていたクロガネは、 売り子 の誰からか聞いたのだろう入会希望の女の子を連れて戻ってきた。

おどおどとした様子の少女は、ステータスを見るとまだ初心者らしくレベルが25と低い。一葉は、ファンクラブの女性たち曰く『聖人のように見てるだけで癒される微笑み』を浮かべると少女を招き入れたのだった。

「いらつしやいませ。私は 銀杏工房 の経理を担当しています一葉と申します。お嬢さん、入会希望のことですか？」

丁寧な一葉の言葉に、少女は顔を赤らめると頷いた。

「あ、あの、あたし、芹菜……じゃなくて、芹と言います。えっと、椿お姉さまから、お手伝いを募集してるって聞いて……」

クロガネの騒々しい声を聞いた銀は様子を見に来たのだが、彼女の言葉を聞いて思わず呆れたように呟いた。

「椿姉の、お客さん？　お客、店員にするつもり？　あの人……」

使えるものは何でも使えと常々言っている椿らしいが、一葉の求めている『ゲームレベルの低い』人材を選んでよこすところは流石だなと思いつながら、銀は今日の仕事である荷物運搬兼連絡係をするために杏のいる作業場へ急いだ。

さて一葉は、目の前の少女のステータスを確認しながら、「もちろん、歓迎ですよ」と少女をギルド会館のロビーへと連れて行く。ギルドへの入会手続きなどをするギルドカウンターに少女を案内し

ながら、言葉巧みにこれまでどこのギルドにも所属していないこと、前々から 銀杏工房 のギルドショップに通っていたこと、椿との友好度合いなどを聞き出していった一葉は、この芹という少女の安全性を確認する。

「ここで入会手続きをするんですよ すみません。この方がうちのギルドに入会するので手続きをお願いしたいのですが」

対NPC（ノンプレイヤーキャラクター）とはいえ、今現状ではステータス画面を確認しない限り、NPCかPC（プレイヤーキャラクター）か分からない。対外的に考えれば、丁寧に対応しておくに越したことはないが一葉は考えていた。現に ^{NPC}大地人 相手にも変わらない丁寧な物腰に芹は「素敵」と呟いていた。

その様子を後ろで見ていた女性が一葉に声をかけてきた。

「あの、桜ちゃんから聞いた……いえ、伺ったのですが……」

やはり入会希望の女性らしい。桜の知り合いだという彼女は、一葉の姿に頬を染めながら話し出した。一葉は、入会手続きをしている芹を確認しながら、話を聞いた。もちろん彼女のステータス画面をチェックするもの忘れない。

こうして、この日一日中、懸案事項であった商品の袋詰め要員を次々と手に入れて行く一葉であった。椿や桜のような慣れている店員は一葉の求める人材を、まだ エルダー・テイル を始めて間もない蛭のような店員は「途中で声を掛けられて」と他ギルドからの偵察だろう人材を連れてきたが、一葉は慣れた様子で入会希望者をさばいていくのであった。

一葉は、彼女たちの入会手続きが終わると、会議室へ連れて行き、袋詰めやり方を教える。やがて彼女らは、一葉に良いところを見てもらいたいと、自ら進んで新たな信者^{仲間}に手順を説明するのだった。「皆さん親切でとても助かります。これからもよろしく願ひしますね」

一葉が微笑みを浮かべてお礼を言うと「いえ、そんな……」と頬を染め、瞳を潤ませる彼女たち。

後日、彼女たちが実は『陰ながら 銀杏工房 一葉様を応援する会』の会員だったことを知った銀は、自分の兄がどこまで手を伸ばしているのか不安を覚えたのだった。

さて、 銀杏工房 の作業場では、手伝いに來たマコトと杏が交互に商品の作成にあたっていた。といつても杏は、昨日からノンストップで働いていたため、マコトが裁縫台を使っている間、休憩に入っていた。銀が持ち込んだ長椅子に身を横たえて仮眠をとる杏。その姿を見ていると、自分はこちらに來た方が役に立っていると思いつつも、メンバーから見捨てられたような、戦力外通知を受けたような寂しい気持ちになるのだった。

「マコトさん、これ、持ってつてもいい？」

銀が背負い袋の中に入っていた綿花などの材料を竹かごの中に入れ替え、商品の詰まっている竹かごを指さして聞いてきた。竹かごの中には色とりどりのハンドタオルが山になって入っている。

「あっ、はい。よろしくね。あと、『なめし皮の煙草ケース』用の一角牛の皮が足りないけど、在庫あるかな？」

「すみませんっ、まだ柘榴先輩、帰ってきてなくて……」

コットンプラントは植物系のモンスターで、動くとはいえ伐採に近いものがあり、心情的に牛などを倒すよりは倒しやすいのだろう。戦闘を経験しても魔物を倒すまでには至らなかったマコトでも、そのくらいことは分かっている。

「じゃあ、『ノーマルビキニ』の作製に入ろうかな。『巾着』の在庫は、まだあるの？」

材料の入った竹かごの中を確認しながらマコトは銀に確認すると、銀は首を振って「ミニタオルの生産、おねがいします」と言うのだった。

「ビキニは、始めたばかりの新人さん以外に、売れないようです。ベテランさんたち、ビキニ自分の持つてる、から……」

「そっか。確かに、分かってしまえば、自分で持つてるの使いたい

もんね。了解。またミニタオルの作製に入るよ」

そう言くと、綿花と黄色い花を持って裁縫台の前に立つのだった。基本的にアイテム作製をする場合、手に持つ必要はない。だが、手に持っていない場合はアイテム一覧から選択する必要があり、使う材料が少ない場合は手に持って作業台の前に立つた方が作れる量は少ないがメニュー画面での操作が少ない分疲れにくい。それに気づいたマコトは面倒でも材料を手に持って作ることにしたのだった。マコトは、またミニタオルを作りながら、ぼんやりと考える。

最近見ていなかった夢のこと。あの事件ことは霧がかかってしまい、良く覚えていない。覚えてるのは、目の前に広がった赤い液体と、半狂乱になった自分の母親の姿。事件の後、刑事や弁護士など男の人が来たが、そのたびに怯えてしまい話にならないと嘆かせた。他人が怖かったのだ。

あの男とはどこで出会ったか、もう覚えていない。当時は好きだったのだろうが、それが愛情か友情か同情か分からなかった。ただ好意を示しただけだったかもしれない。それでも男が私の部屋に住んだのは事実で、男に支配されていたのも事実だ。

出来あがったミニタオルを竹かごに入れると、今度は別の柄を作るため蒼い花と白い花を手にとった。綿花は裁縫台の上に残っている。

「私は、弱い……強く、ならなきゃ、いけないの？」

あの時も呟いたセリフ。自分が弱いなんて知っている。弱くなくなったら、彼を追いついてたし、そもそも彼に頼ろうなんて気が起きなかっただろう。でも、だからといって弱いことがすべてダメだと言われてしまったのは、私の存在は……？

ため息をついたところで、自分がミニタオルを持ったまま考え込んでいたことに気づき、慌てて出来あがったミニタオルを竹かごの中に入れた。

「マコ様、お疲れになったでしょう。交代致しますわ」

目が覚めたのだろう、まだ若干疲れた様子の子が声をかけてきた。

マコトは首を振る。

「杏師匠、まだ顔色が悪いよ。休んでて」

「それを言ったら、マコ様だって、顔色が悪いですわ。何処かお身体の調子が優れないのでは？」

杏は腕を伸ばして、マコトの額に手を当てる。フワリと爽やかな香りが杏から漂っていた。その香りは綾香から漂うモノと同じ香で、マコトは瞬く。

「熱は無いようですね」

「香り……綾姐さんと同じ？」

マコトの疑問の声に、「ああ」とふんわり笑った杏。

「アズライト様に譲っていただいたのですわ。今朝、アズライト様がいらして、調香をされていたのですわ」

「先生が……めずらしいね」

思わずマコトが呟くと、「今回は報酬、といったところでしょうか」とフフッと笑う杏。

「綾香様に差し上げるプレゼントを作って欲しいとのことだったので、対価としていただいたのですわ。気分が落ち着くでしょう？」

「そうだね。バラの香りのお風呂とかだと気分が華やぐしね」

頷きながらマコトが呟くと、「よくご存じですこと」と驚いた風な杏。

「えっ……姐さんの受け売りだよ」

慌ててマコトは言う、「今度は僕が休憩します」と長椅子にころりと横になった。

その日の一日、杏とマコトはミニタオルを、木工職人の蘭丸は『寄木細工の宝石箱』を、竹細工職人のスズメは『竹わっぱ』を作り続けた。柘榴や綾香達は、採ってきた材料を次々と銀杏工房の空いている部屋に運び入れ、それを銀が分別しながらマコトたちに届けるのだった。

売り子 たち販売担当の女の子は、知り合いのギルドや酒場な

ど人が集まりそうなところを飛び回り、徹夜で用意した商品は2時間ほどで売れ切れてしまった。在庫が無くなってしまったので、新たに入会し会議室で商品の袋詰めをしている新人たちと混じり在庫を作っていると、やがて会議室は井戸端会議の様相を見せてきた。

やはり、女性同士ということもあって、今まで自分が仕入れた情報などをおしゃべりしていると、一人が「人が生き返るらしいよ」と話し出した。

「あたしも最初は『うつそだぁ』って思ってたのよ。でもね、今日のことなんだけども……警備兵に剣持って突っかって行った馬鹿がいたのよ」

警備兵とはアキバの町など非戦闘区域で戦闘行為をしようとすると飛んでくる兵隊で、レベルが高く、プレイヤーキャラクターでも敵わない。たいがいには牢に入れられてしまうのだが、抵抗するとサツクリと殺されてしまう。

「うわぁ……やだなあ、血みどろの死体？」

尋ねてくる友人に首を振る少女。

「うつん。光に包まれて消えちゃった。まわりに金貨やアイテムが散らばったから、みんな、取り合いだったわよ。醜いわねえ」

キャラキャラ笑う少女に、別の子が詰め寄った。

「それでっ、死んじゃった人は、どうなったのよ」

「私知ってるわよ。別な人なんだけど、フィールドに出てモンスターに殺されたって人が、大神殿で生き返ったって話聞いたもん」

一人が得意げに言えば、さっきまで話題を独占していた少女が頬を膨らませて「落ちいったらダメじゃん。今言おうとしてたのにさあ」と怒りだした。

「まあまあ……でも、そおするとき、あたしら死なないってこと？」その言葉に、またきやあきやあ騒ぎ出す少女たち。流石に手が止まっておしゃべりに夢中になる彼女らに椿は注意をした。

「ほらほら、皆さん、手が止まっていますよ。そんなにサボってばかりですと、一葉様が悲しまれますわよ？」

その言葉に、それまで賑やかに騒いでいた少女たちは、ハツとしたように手元を見て、今までの遅れを取り戻そうと必死に手を動かすのであった。

椿は、念話で今の少女たちの話を要約して一葉に伝える。この話が本当ならば『死ねば現実社会に戻る』ということはなさそうだ。それどころか、文字通り死んでも死に切れないということだ。つまり、この世界に居る限り自分たちに終わりはない。

一生懸命クルクルと回し車を廻すリスのように、自分たちはエルダー・テイルに囚われ続けてしまうのだろうか、不安を募らす椿だった。

流言飛語？ 異世界でギルドの噂大集合！（前書き）

クロガネ君のサブ職業を 七宝職人 に変更しました。

流言飛語？ 異世界でギルドの噂大集合！

女性だけの集まりなんて、とりとめのない世間話やら井戸端会議やらだと相場が決まっている。特に枚数を数えて容器に入れるなんて単純作業をしているのだから、手だけではなく口も動くのは仕方がない。

やることのないクロガネは、会議室で黙々と商品作りを手伝っていた。他にも、材料調達部隊の若いのが数人、同じように商品作りを黙々としている。否、周りの雑談が喧しくて、会話をしようにもできないのだろう。

それでも今日入ったばかりの新人たちは初々しいもので、竹かごに山積みされた『ミニタオル』『寄木細工』『竹わっぱ』を手にとつて、椅子に座つて作業を始めていた。

「こつやつてる作ってるんですか」

「この器は、何枚ですか？」

「他にも器つてあるんですか？」

物珍しそうに商品作りを見ていた新人の少女たちは、先輩に教わりながら『ティッシュ』の枚数を数えていた。

「蒔絵の容器つてありませんでしたっけ？」

まだギルドに入会して間もない少女たちが、あつちの先輩にこつちの先輩にと作り方を教わっていた。壁の掲示板には一覧表が張り出してあり、そこには入れ物の名前と何枚入りかが書かれていた。それぞれの容器は、竹かごに入れて運ばれ、会議室の隅に山になっている。

「あら、貴方は桜お姉さまの！」

店舗で良く出会っていたのだろう。初めて顔を合わせたとは思えない親しさで、会話をする少女もいた。

「はい。よくお店で会いましたね」

「貴方も入ったのね」

「桜お姉さまって素敵ですよ。あの飛白かすりの着物、上品で素敵だと思っただけ、私には似合わなくて」

「そうなのよねえ。やっぱり同じ服でもあたしが着るのと桜ちゃんちゃんが着るのとじゃ、全然違うでしょ。桜ちゃん、なんでも似合うんだもん、羨ましいわあ」

「椿お姉様も素敵よ」

お姉様

それぞれ贔屓の販売員お姉様がいるらしく、自分と同じ人が好きだということだけで意気投合しては、おしゃべりに花を咲かせている。もちろん、過去何度も椿に注意されたため、手を休めることはしない。そういうところは評価が高いと思うが、どうも身の置き場がない。「クロガネさんって、お姉様方とお話する機会ってあるんですか？」

「いや……そんなに……」

無難に答えを返してみれば、あからさまにガツカリとした顔をして「ああ、やっぱり」だとか「そりやそうでしょうよ」などと小声で言っているが、こちらに丸聞こえなのは、気付いていないんだろう。ここで怒りだすのは大人げないと、聞こえないふりをして枚数を数える。

「椿お姉様って、創作畑クリエイターの方とお付き合いされてるんですよ」

「うそおっ！ 初耳」

「どんな人なの？」

あちらでは、椿の話題が上がっているらしい。正直、どうでもいいが、こちらに話を振られては困ると、クロガネは冷や冷やして会話の流れに聞き耳を立てた。

「さあ、そこまで詳しくは……でもね、今日会ったときに、キラキラ輝く綺麗なリングをされてたから『彼氏からのプレゼントですか』って聞いたら、顔を赤くして頷いたの！」

「リングっ？！ 帯留じゃないの？」

「それ、どういうことよお！ 詳しく話して」

「うわあ……ショックかもお……」

（確か……スズメさんに頼まれて作ったやつだよな。こいつらが言う椿先輩が持つてるリングとか帯留とかって……）

クロガネが 七宝職人 になってからというものの、折を見て輝石などを持ってきて、椿先輩に贈る物を作らされていたのだ。材料はスズメが用意してくれるため、レベルアップにもなるしと気軽に引き受けていたが、 七宝職人 になる人は少ない。もし、ここで自分が椿先輩の彼氏と勘違いされたと、クロガネは青くなり、こちらに話を振らないよう切実な願いを込めて祈った。

そんなクロガネの思いとは裏腹に、椿の彼氏疑惑に椿ファンの子たちは、どこか残念そうながら、諦めたように呟いた。

「でも、仕方ないか。椿お姉さまだもん」

「そうよね。彼氏の一人や二人いない方がおかしいわ」

「ねえ、つてことは一葉様のこと諦めたつてこと？」

尋ねる新人に「椿だったら、初めからファンクラブなぞ入つたらんよ」と答えたのは、この中では一番古参のメンバーで、ラベンダー色の髪を持つ女性だ。彼女は 交易商人 をしている橋たちはなといい、

自称『 銀杏工房 のおばば』もしくは『 銀杏工房 の生き字引』

と言い張り、老婆じみた言動をしている。しかし、実際は、かなり若いのではないかというのがギルド内での噂になっている。

彼女は、老眼鏡と云い張る眼鏡を外して、肩を叩いた。おしゃれな真珠の飾りが付いたメガネチェーンがしゃりと揺れ、眼鏡が彼女の胸元に留まった。橋は周りの目が自分に集まっていることに気が付くと、目を細めて話し出した。

「若いのは知らんだろうけどな、もともと 銀杏工房 は銀坊、つと今は『銀嬢ちゃん』じゃったかの……まあ、その銀嬢ちゃんと杏嬢ちゃんが始めたんじゃないよ。で、材料收拾に柘榴が、店舗運営に一葉が乗り出したつてワケじゃ」

「へえ……」

「よく知ってますね」

感心するような声に、ニヤリと人の悪い笑みを浮かべた橋は「わ

しや 銀杏工房 の生き字引じゃからの」と告げた。

クロガネも思わず「すげえな」と呟き、あちらの材料調達部員たちを見れば、やっぱり初めて聞いたのか手を止めて、橘の方を見た。

「ほらほら、おまえたち、手が止まっちゃるぞ」

注意された少女たちは、ハツとしたように手元を見、それぞれが手を動かす。クロガネも慌てて『ティッシュ』を数えだした。

「あんたらも知つと思うけどな、柘榴と一葉の妹が銀嬢ちゃん。銀嬢ちゃんと杏嬢ちゃんは友達同士じゃ。んで、初期メンバーが椿やワシと材料調達隊の楠、柊、柏じゃったな」

「ええっ！ 柘榴様と一葉様って兄弟なんですかっ！！」

女性たちは初めて聞いたという様に騒ぎ出した。

橘と云えば、「おやおや、そんなことも知らんとね」などと言いながら、ぐうつと背筋を伸ばし、腰や肩をトントんと叩いた。

「年寄りにや、座りっぱなしっつーのは、キツイのお」

橘はそう言くと、「どっこいしょ」と立ち上がった。

（おいおい、そんな年じゃないだろっ！）

心の中でクロガネはツツコミを入れたが声には出さず、橘は「そろそろ赤毛のお嬢が帰ってくるころだね。材料費、少々値切ってみようかねえ」などと言いながら、腰のあたりで手を組んで、老婆のような歩き方で会議室を出て行くのだった。

橘が出て行ったあとも、女性たちは色々憶測を飛び交わしていたが、橘から聞いた以上の情報は出て来るわけもなかった。

「そういえば、今日 遊色の雫 のアズライト様が眼鏡をしていなかったわ」

柘榴と一葉の話題が一段落すると、中堅どころの 売り子 が思いついたように言いだした。周りに居た同じくらいの 売り子 歴の少女が目丸くして驚いた。

「ええ！ そんなレアなお姿がっ！」

レアってなんだよ、珍獣みたいな言い方だななんてことを思いな

がら、『ティツシュ』の枚数を数える。あつ、いけね、一枚多い。慌てて山に一枚戻した。

「偶然見ちゃったんだけどね、素顔も素敵だったわあ」

「羨ましいわあ。アズライトさんって素敵よねえ」

「そうよねっ！ 私の中で一葉様について二番目ね」

「ええっ！ 二番目は柘榴様よ」

（どっちでもいいよ、そんなもの……なんて言っちゃいけないんだろうなあ。ああ、早く椿先輩が戻って来ると良いな。椿先輩が戻ってくれば、この苦行は終わるはず……そういう約束になってるんだ。もう少しだ、頑張れオレ！）

そんなことを考えながら『竹わっぱ』に数えた『ティツシュ』を入れた。

周りでは、きゃいきゃいと、好きな男性を発表し合っている少女たち。クロガネも材料調達部隊の面々も、いい加減にしてくれと思いつつも、黙って噂話を聞いていた。

それぞれ会議室にいる男性陣は、何も商品作りの手伝いだけできているわけではない。先ほど椿から一葉へ知らされた「人が生き返る」という話が 売り子 たちが話していた噂話から来た情報だということ、他にも重要な情報が噂で紛れ込んでいるのではないかと興味を持った一葉や柘榴から依頼されて、椿が外へ販売をしている間と云う約束で、こうして聞き耳を立てているのだ。

だが、先ほどから出てくる話題は、ギルド内の良い男ランキングやら、現実社会のおいしいお菓子屋さん情報など、余りというか全然重要と言えないモノばかりで、自分のしていることは意味のないことなのではと不安になる男性陣だった。

「それだけじゃないのよっ！」

アズライトの素顔を見たという少女は、興奮してしゃべりだした。「あのねっ、アズライト様の眼鏡、マコト様が持っていて、返してたのよっ……！」

キヤアーとどよめきが起き、その声にびっくりして身体をすくま

せる男性陣。並みのモンスターよりも破壊力があるんじゃないかと思ってしまった。

「ねえねえ、それって」

「そういうことじゃないの」

「いやぁーん」

何が何だか分からないクロガネは、もう商品作りを放棄して、会議室から出て行きたいと切に願った。

「でも、アズライト様もマコト様も、あの女の彼氏なんですよ」

「うらやましいわねえ。両手に花って感じじゃない」

なんだか雲行きが怪しくなってきたなど、声のトーンが変わった女性たちの会話にクロガネ達男性陣は、耳をふさいで逃げ出したい気分になる。

「絶対、アズライト様もマコト様も、あの女に騙されてるのよねえ」

「ああ、私が目を覚まさせてあげたいっ！」

「無理無理」

キヤハハッと笑い声が起ったが、クロガネ達の背中では冷たいモノが滑り落ちた。

「しかもさあ、お気に入りしか入会させないんですよ」

「そおそお！ 《遊色の雫》って、あの女の取り巻き集団よ」

「うわあ、そうなんだ」

「そうよ。いっそのこと《綾香の取り巻き》って名前にすればいいのに」

「あと、あのクリスティーナってヤツ！ なんなのよ、あれって感じじゃん」

「最悪ー」

「あの綾香って女、魔性の女よ！ 絶対」

「そんなにひどい人に見えなかったけどなあ」

新人の一人が呟けば、まわりの女どもは「騙されてる子、ココにもいるわあ」だの「あんたは素直だから、裏の顔が見えないのよ」だの言いたいことを言って、新人の子は周りの勢いに押されて「そ、

そうなのかな」と阿る^{おもね}ような言葉を発する。

耐えきれなくなつて、そろりそろりと会議室を出た男性陣は「女
つて恐ろしい……」と、蒼くなつた顔を振りながら口々に呟く。

「皆さま、どうなさつたの？」

後方から椿の声が聞こえ、びっくりと身体を震わせる男性達。会議
室から漏れる賑やかな会話に、椿は訳知り顔で「ああ」と頷いた。

「お疲れさまでした。何か有益な情報は聞けまして？」

ぶんぶんと思いつきり首を横に振るクロガネ達。目を丸くしてそ
の様子を見た椿だったが、にこりと微笑む。

「後は私が、あの子たちのお相手をいたしますわ。皆さま、お疲れ
さまでした」

すつと会議室に入っていく椿の後ろ姿を女神を見るような目で見
てしまつても、誰も責められないだろう。女というモノに幻滅した
直後であつたため、その神々しさはまばゆいばかりだ。

賑やかな会議室の会話は、椿が入ったことで一旦静まり返り、ま
たさわさわと始まつて行くのだった。

「やつぱり、椿先輩みたいな女性がいいなあ」

「俺達には高根の花だけだな」

「ああ、どつかに、裏表のない可愛い子いないかなあ」

男性陣は、ため息をつきながら、口々にそう呟くのだった。

さて、一方魔性の女こと綾香という仲間と共に綿花を背負い袋
いっぱいにつめてきて 銀杏工房 へ納品しているところだった。
「くしゅっ……鼻がむずむずする。埃っぽいからかしら？」

綿花から出る細い綿毛や乾燥して細かくなつた茎など、埃の材料
となりそうなものは揃っていたため、綾香はくしゃみを連発してい
た。

納品された綿花を確認していた橘は、ホッホッホと笑う。

「大方、会議室の子スズメどもが、噂話に花を咲かせているんだろ
うよ」

「橘さん、なんか知ってるの？」

ぐしゅぐしゅと鼻を鳴らしながら綾香が尋ねるが、そこは 交易商人 の橘だ。ニヤリと笑うと「さあてね」と言っ、て、左手の手のひらを上にして綾香に差し出した。

「やだわ。その手には乗りません……で、どう？ 今回の収穫量は」橘の肩を揉みながら尋ねる綾香。橘は、「そうさねえ……」と目を細める。

「確かに、綿花はあってもあっても足りんがね……そろそろ、他のギルドもうちの商品に目を付け出したようじゃからの。今後同じ値段で買えるかどおか」

「もうっ！ いい加減、その老婆プレイ止めてよ。まったく、普通こう言うゲームって若いふりをしたがるのが定石でしょ。なのに、変身前の銀といい、あなたといい、なんでこのギルドには老けプレイをしたがる人が多いのかしら」

「赤毛の嬢ちゃん、人は歳には勝てんのじゃよ？」

含み笑いで答える橘は、おっくうそうにゆくりと椅子に座り、竹かごいっぱい綿花を一つ一つ確認するふりをしながら、ニヤリと笑った。

「どんなプレイスタイルも個人の自由、そう言っていたんは、嬢ちゃんの方じゃなかったかのお」

「……額のしわ、ずれてるわよ」

余りにも腹が立つので、隣の椅子に座って言うてみれば、少し慌てたようにポケットから手鏡を取り出し、自分の額を確認する橘だった。

「嘘よ。ねえ、他のギルドも『ティッシュ』を売り始めたってこと？」

一杯食わされムツとした表情の橘だったが、ヤレヤレと首を振ると「せっかちじゃのお」と呟いた。

「柘榴と一葉の小坊主たちが派遣した小童^{こわっぱ}どもは聞き逃してるだろうが、新人の嬢ちゃんが面白いことを言っ、とったんじゃ。『蒔絵の

容器ってありませんでしたっけ?』じゃと」

「蒔絵?」

綾香は目を閉じて、記憶を掘り起こしていた。

「あれって確か…… 漆職人　しか作ることのできないアイテムよね?」

日本独特のサブ職業というモノも数多くある。日本サーバーを運営している会社が地域色を出そうと考えたもので、例えばスズメの竹細工職人　や今話題に上った　漆職人　といったサブ職業は、日本工芸が元になっているモノである。ちなみに　木工職人　の上級職で、余りにもお遊び的要素が強すぎるため、よほど暇なプレイヤーでない限りなろうとしないサブ職業だ。他にも　細工師　の上級職に、真珠貝を使って色々な形の真珠の養殖や様々な加工が出来る　真珠職人　やクロガネが就いている　七宝職人　などがある。

「　銀杏工房　では、誰かいたかしら?」

ちなみに言うと　銀杏工房　のクリエーターは、余りメジャーではないサブ職業、はつきり言えばマイナー処の生産系サブ職業を持っている者が多い。そういう人材を一葉が集めたと言ってしまえばそれまでだが、そのおかげでギルドショップには、かなりバラエティ豊かな品が揃っており、人気の秘密になっている。

「蘭丸は目指しているが、まだまだじゃのお」

「つまり、いないのね」

誤魔化すような答えの仕方に、はつきり言いなさいよとばかりに呆れる綾香。

「他の所だつたら、高値で仕入れてくれるかしら?」

チラリと流し眼を送りながら綾香が言うと、橘は「売り上げの分け前が減っても構わないと嬢ちゃんと言うんだね」とニヤリと笑うのだった。

「ああつ、もうっ!　そういうんだつたらマコトの派遣料、値上げするわよ?」

「ふおおふおお、代替品じゃつたら、いくらでも用意できるぞえ?

エルフ坊主よりも高レベルのヤツをのぉ」

「おあいにく様っ！ マコの代わりはおりませんのよーだ」

ふんとソツポを向く綾香に「そろそろ、全員、こちらに入る気は起きんかね？」と真面目な声で尋ねる橘。

「今回の厄災のことを考えると、仲間は多い方がええ。小規模ギルドは、いばらの道になるぞ？ なんせ、抛り所となる味方が少ないんぢや、数の暴力で負ける。幾ら高レベルの者が揃ったところで、手駒の数が少ないと、できることも少ない」

「橘さん」

綾香は、つらそうに眼を瞑る。

「無理よ……知ってるでしょ？ 睡蓮のこと」

「今は、知らんものが殆どぢや。アレに係わったヤツは殆ど引退しちよるし、流れていた噂も今は知る者もいまい 彼女のことで、宝玉の翼 のことだって知つとるヤツは、もう少ない」

「無理よ。私が覚えてる」

綾香はきつぱりと言うと「ゴメンね、折角誘ってくれたのに」と頭をチョコンと下げた。

「私には、自分の手で守れるだけの人数が丁度いいの 今は、守ってもらってる部分が大きいけどね。それに、たくさんの人の中に埋めれると、どうしても軋轢が生じるわ。そんな煩わしい思いは、もうしたくないの」

遠くを見る眼差しで、何かを思い出しているような綾香の姿に、
「辛いことを思い出させたみたいじゃの。すまんのぉ」と橘は謝った。

「それでも、覚えときや。もしもの時は、受け皿になるギルドがあるってことをの」

「ん……」

綾香は頷いた。

流言飛語？ 異世界でギルドの噂大集合！（後書き）

「女の子の会話って、こんなだったけ？」と疑問になりながら書いていました。

噂話のところ、若い子風の話言葉にしてくれる方募集です（苦笑

新居購入？ 異世界の住宅事情！（前書き）

やっぱり二つに分けました。次回は、美容事情です。

新居購入？ 異世界の住宅事情！

アキバの街のメインストリートを外れた裏路地。辺りには大木と大木の間に壊れたコンクリートのビルが建っていたり、ビルの窓から小枝が伸びていたりビルらしいビルの形をした建物など一棟もないような有様だった。といっても、それは、この区域だけではなく、アキバの街全体、否日本全体が緑に浸食されているこの世界では、当たり前前の光景なのだろう。

綿花を納入するために 銀杏工房 を訪れた後、価格交渉兼情報収集をする綾香を残し、マーナガラムたち三人は 遊色の雫 のギルドハウスとして購入した建物を確認するために裏路地を左へ右へと進んでいた。

「ここです」

アズライトは、連れてきた二人に四階建ての建物を指し示す。もとは道路があつたのだらう草に覆われた小道と裏通りの角に建った建物は、外観上は何の変哲もない雑居ビルのような感じた。

しかし、その建物は、ビルの壁一面が蔦で覆われており、壁を彩る蔦の葉は太陽の光を照りかえし輝いていた。しかも蔦たちは、このビルだけに飽き足らず、小道を挟んだ反対側のビルにも触手を伸ばしており、何本もの蔦で絡み合つて太くなつた緑の綱は、緑のアーチとなつて小道の上に架かつていた。

案内されたマーナガラムとクリスティーナは、呆然とそのビルを見た。正確には、ビルの屋上から顔を見せるもつきりとした葉の生い茂る大木の姿に、中の様子を想像して呆然としていた。大木の枝葉は、アズライトが指した蔦まみれのビルを抱きかかえるように存在していた。

「なあ、正気か？」

「す、住めるのお？」

スタスタ建物に近付くアズライト。一階部分は車庫だったのだら

う、シャッター二枚分のスペースが通りに面してあった。車庫の左隣には、縦に4つほど穴があいてあるステンレス製の片開き扉。元々はオシャレな赤いエントランスドアだったのだろうソレは、錆びて大部分が剥げてしまい、みすばらしい姿を晒している。好奇心に駆られて錆びついた扉を開いてみれば、左側には郵便ポストが、右側には若干背の低いドア、奥には上に続く階段と階段下収納なのだろう片開きの扉があった。

両方のシャッターは錆びつき傷だらけで、^{ひしゃ}拉げて折れていた。一方は辛うじて見られる姿で地面まで降りていたが、余りの折れようにシャッターを上げるのは無理だと諦めるレベルだった。もう片方は、中央部分が見事に錆びつき穴だらけで、下半分はぶらぶらと風に揺れていた。

アズライトは躊躇なく風に揺れるそれをはぎ取って、ポイと傍らに投げ捨てた。シャッターの残骸は派手な音を立てて地面に転がる。空いたスペースをくぐって中に入るアズライト。クリスティーナも後に続いた。

「おいおい……修復できるのに、やめろよな」

マーナガラムが慌ててシャッターを拾い、丁寧に車庫の隅に置いた。壊れたとはいえ、物さえ残っていれば自分のサブ職業「大工」で修復することはできる。ギルド会館に預けてある『大工道具』を思い出しながら、次に来る時に修繕しようと考えたマーナガラムも、シャッターを潜る為しやがんで車庫の中に入って行った。

「そうですか？ それでは、ガラム君に修理をお願いしましょう。頼みましたよ」

アズライトが微笑みを浮かべて言うと、マジックトーチの呪文を唱える。オレンジ色の光が車庫の中を照らした。

車庫の中に入ると、外観に反してワンボックスカーを2台余裕で駐車できるスペースが広がっていた。といっても床のほとんどをガラクタや雑草に占領され、地面が見えない状態だったが。

一階の車庫部分は普通の建物より若干低い。背の高いマーナガラム

ムの頭上数センチのところに天井があった。もともと車高の高さより数センチ高いくらいの設計だったのだろう。

部屋の左側には階段室に通じる背の低いドアがあり、アズライトが力を込めて引つ張るとギシギシと軋みながらドアが開いた。ドアの先は階段の前に出ることが出来る。ドアが天井に合わせて低いので、マーナガルムは腰を曲げて、そろそろとドアをくぐった。

ドアをくぐってすぐ右に扉があり閉まっていた。クリスティーナが引つ張ってみるがビクともせず、どうせ掃除道具などをしまう収納スペースなのだろうと、すぐに興味を失った。

中は、ガラクタと埃だらけだったが、外観の状況に比べてマトモで、包み込むような枝葉はどこから来ているのだろうとクリスティーナは車庫と階段部分を見回すが、雑草以外の植物は見当たらなかった。

「階段が無事ですから上階まで楽に行けます」

案内するように二人を二階へと誘いながらアズライトは説明した。「二階から四階まで、生活スペースに出来ますよ。そこその広さがあります」

二人はアズライトの後ろに続いて階段を上って行った。クリスティーナが階段がやけに明るいなと辺りを見回せば、蔦の絡まった壁の隙間から明るい日差しが入ってきた。

二階に上がると左手に壊れた扉あった。上の蝶番を止めるネジが外れてしまったのだろう、斜めになった扉はぶらぶらと揺れて、ぎいぎいと物悲しい音を立てていた。もともとは何かの事務所だったのだろう、擦りガラスの扉には看板らしきシートが貼ってあったが、文字は消えていて読めなかった。

扉の向こうには、10畳前後の広さの部屋が広がっており、壊れた事務机や椅子などオフィス家具が置いてあった。オフィス家具は全て壊れており、空き巣に入られたかのように物が散乱していた。ここを片付けるのかと思うとクリスティーナはげんまりする。

マーナガルムは、入り口扉の蝶番を確認する。ネジが足りないよ

うだが、手持ちのネジを使えばすぐに修復できるだろうと思い、やはり『大工道具』を持ってこなかったことを後悔した。『大工道具』と補修すべき材料があれば、一瞬で家の部材などを組み立てることが出来るのが 大工 である。ネジなども現実社会のように大きさを考えなくてもいいし、裁縫師 や 料理人 などのように作業台が必要ということもない。かなり利便性の高いサブ職業だが、家を建てたりリフォームしたりということがない限り使用しない職業でもある。有名だが必要価値が高いかという微妙な位置を占めている。

「一階の車庫を店舗にリフォームして、店でも開くか？」

苦笑交じりに提案してみれば、クリスティーナに「誰がこんな場所まで買いに来るか、なのお」と呆れた声で返された。

部屋に入り、ガラクタになったオフィス家具をひいひいひいっと避けながら窓の傍に行くクリスティーナ。会社名を書いてあっただるう窓のガラスは割れており、緑色の植物調のおしゃれなブラインドだと思っていたモノは、近付いてみると驚いたことに普通のブラインドに蔦が絡まったものだった。

部屋の片隅には埃まみれの応接セットがあり、元は革張りだった破れた椅子にマーナガルムは腰を下ろす。舞い上がったほこりに顔をしかめるマーナガルム。

「すげえとこだな……」

蔦が窓を塞いでしまい薄暗い部屋の中、それでも蔦の隙間から光が入り込み、光の筋を作っていた。その光の筋が舞い上がったほこりを受けてキラキラと輝く。

「ライライ、掃除大変なお！ フラウニー 家の精霊を召喚してお掃除してもらいたいのお」

口元にハンカチを当てて、眉をしかめるクリスティーナの声を無視して、アズライトは説明しだした。

「この部屋に調香台や裁縫台を置こうと思っています。三階や四階は仕切りなどを使って分けて、個人の個室を作ろうと考えてます」

「男3の女2だから、それぞれ男部屋と女部屋つてとこだな？」

頷くアズライト。クリスティーナは『三階・四階』の言葉にピンと耳を立てると、ワクワクと顔に書いて出入り口の扉に向かった。「ほらあ、早く上の階に行こうよ！　どんなお部屋かなあ」

部屋を出るとパタパタと元氣よく階段を上がって行った。

「にしても、外壁の蔦以外はマトモなんだな」

マーナガラムは部屋の中をぐるりと見回して呟いた。

ガラクタが多いのは、マーナガラムの中では許容範囲内だ。綺麗に何も無い場所と云ったら、それこそギルドホールを借りるしかない。

「この建物はメインストリートから裏通りに入って、入り組んだ道に入る上、しばらく歩きますからね。普通は、もっと便利な場所に居をかまえるでしょう」

ゾーンの値段を見ても、中規模クラスのギルドホールよりは格段に安く、中を片付けなければならぬことを差し引いても結構なお値打ち価格だ。

「車庫のシャッターが壊れているのが、少々問題といったら問題ですか。でも、ガラム君が直せるというなら、問題ではありませんね」「ギルド会館からは若干遠いんだな。荷物を運ぶのが手間だが、必要なものは部屋に置いておけるようになるんだ、さほど問題じゃねえな」

マーナガラムはソファから立ち上がると、階段に向かうアズライトを追った。

クリスティーナは4階まで行ったのか、下に向かって「屋上があるのぉ！」と叫んでいた。

「屋上？」

「ええ、屋上にいられます。裏手の建物は大木に占領されてしまつて、建物が崩れかけているのですが、その枝葉が此方こちうの建物にかかっているんです。緑の屋根のある屋上から見上げる空は、なかなか趣があつて素晴らしいですよ」

「へえ……」

上階を仰ぎ見ながら、「ホント良く見つけたよな」とマーナガ
ムは呟いた。

三階は二階と同じように事務所だったのかガラクタが散乱してい
たが、四階は空き店舗だったのか寂しいくらいにガランとしていた。
屋上に出てみると、裏手から伸びる枝葉が、風にさわさわと揺れ、
木漏れ日が射していた。屋上の床には背の低い雑草が生い茂り、緑
の絨毯を敷き詰めたかのようなだった。クリスティーナは気持ちよ
そうに伸びをして「バカンスチェア欲しいのぉ」などと騒いでいた。
「あと、バーベキューセット　ここでバーベキューしたら楽しそ
うなのぉ」

「なあ……今の食糧事情忘れてンだろう？」

クリスティーナのセリフに、ちよつとツツコミを入れてしまうマ
ーナガムだったが、そんな彼の言葉ににポムと手を叩くとアズラ
イトは呟いた。

「食堂をどうしましょうね」

「食堂かぁ……味の無い飯でも食わなきゃ腹が減るしな」

「他にも必要なものは、いろいろ出てきそうですね」

「ベッドが必要だろ？　あと、椅子とかテーブルとかも買わねえと
な……さすがに家具は俺じゃ作れねえからな」

「まずは、建物の修繕と部屋の片付けですね。住めるようにしない
と始まりませんから……」

アズライトが呟く。クリスティーナは屋上をグルグルと走ってい
たが、ふと止まると振り返って尋ねた。

「蘭々らんらんは忙しいから、お願いするの無理かなあ？」

「蘭丸君ですか？　ああ、『ティッシュ』の容器作りをしていますか
らね」

各々現状考えられる問題点をあげる。とりあえず、優先すること
は寝る場所だということになり、ガラクタが少ない四階部分を仮の
生活スペースにすることに落ち着いた。

「しばらく、宿に寝に帰ることになるのか？」

綿花収拾もやらなければならない。そう考えると、建物を借りたとしても片付けたり、家具を設置したりする時間がないのではないかとマーナガラムは思いため息をついた。

クリスティーナは、メニュー画面を開いて精霊の召喚をする。

「一応、家の妖精にお掃除依頼なお！ ウニー、来いなお」

ぼわんと白い光の魔法陣が現れ、箒を持った茶色い子犬ほどのモグラがチョココンと二本足で立っていた。ベージュ色のチェニツクを着たモグラは、くりくりとした目をクリスティーナに向けてと小首をかしげる。その愛らしい姿に「久しぶりなお。いつも可愛いのお」とクリスティーナは両手を広げて、抱きつこうとした。

「くっぴいっ！」

驚いたブラウニーは飛び上がって叫ぶと、慌てて建物の中に逃げ込んだ。

「うう……残念なお。もお、ウニーってば恥ずかしがり屋さんなんだから……」

チツと舌打ちが聞こえた気がしたが、マーナガラムは聞こえなかったふりをして、「大丈夫なのか？ あれで？」と尋ねた。

「ウニーは、お掃除好きだから、綺麗に片づけてくれると思うよ。まあ、問題は、妖精だから、必要なものと必要じゃないものが分からないくらいかな……でも、どうせ要らないものばっかだから、のおぶるぶれむなお」

上機嫌に答えるクリスティーナ。不安に駆られたマーナガラムが「ホントに大丈夫なんだろうな」と確認するが、「しつこい男は嫌われるの」とじろりと睨まれてしまい何も言えなくなってしまった。

「クリス、ガラム君、綾の方も終わったようです。私は迎えにギルド会館に向かうつもりですが、お二人はどうされますか？」

念話をしていたアズライトが声をかけると、「やることねえしなあ」と呟いていたマーナガラムだったが、ハッと気が付く。物を買

いたくても売ってなければ買えるはずもない。最近のショップ事情を考えると、物が無い可能性が大いにあるのだ。

「駅前広場とかのショップで、物を売つてるところあるか、確認してくるわ。もし、家具がなんもなかったら、蘭に頼むしかねえだろ？」

「クリスマスも行くっ！ 市場調査してくるなお」

るんとクリステイナーも手を上げる。マーナガラムは一瞬ひるむが、まあいいかと肩をすくめた。本音を言えば、市場調査の後、ギルド会館によって貸金庫に預けてある『大工道具』を持って来て、この建物の修繕をしようかなどと考えていたのだが、そこまでクリステイナーが付き合うかは分からないのだ。

「そうですか。良いものがあつたら購入しても構いませんよ」

アズライトは、につこりと笑って二人に言う、階段に向かった。

「何かいいのあるかなあ？ 可愛いベッド希望なお」

「ベッドよりも何よりも、まずは部屋のかたづけ修繕だろ？」

「乙女ごことの分らない奴なお……」

賑やかに階段を降りながら、マーナガラムは修繕箇所を確認していた。ブラウニーが掃除を始めているのだらう、微かに走り回る音が聞こえてきた。

「それでは、気を付けて」

「おう、夜はシデンの宿に戻るからな」

そう言うと、マーナガラムとクリステイナーはアズライトと別れ、二人で駅前広場の方へ向かった。

アズライトはギルド会館へ向かい、銀杏工房で綿の納入をしている綾香やアルバイトをしているマコトを迎えに向かうのだった。

駅前広場に付いた二人は、いろいろなショップを見て行ったが、品物はほとんどなかった。各ギルドは運営するギルドショップから品物を引き上げているらしく、全ての商品に売り切れの札がかつていた。品物が無いとショップの店員に怒鳴りつける人やある品物でなんとか我慢する人など、色々な冒険者がいる中、マーナガ

ルムはため息をつくのだった。

「ここまでだったとはなあ……」

商品がないってことは、商品の流通も消費も何もできないわけで、金は持っていてたまる一方で使い道がない。

（個人向けの商品がないけど、ギルド同士の商品の取引って点で言うと、多少はあるんだろうなあ）

マーナガルムは考える。そうでなければ生産系ギルドは自分たちが使う以上の商品を作ることになってしまっし、そもそも材料を探すのが大変だ。なんせ、近郊フィールドにいるのは低レベルの魔物とはいえ、実戦経験がないメンツだったら、たちまち魔物の餌食だ。作るには材料をどこからか仕入れる必要がある。

逆に、戦闘系ギルド辺りは、狩り取ったアイテムを商品に転換することが難しい。まあ、戦闘系ギルドの全員が生産系のサブ職業を持っていないことはあり得ないから、多少は商品を作ることにはできるだろうが……需要と供給のバランスを考えると付き合いのあるギルドと対価交換するってのが定石だ。

そう考えると、ここ最近無所属の 冒険者 が少なくなってきたのも頷ける。人間、一人つきりじゃ不安なもんだし、現実的に商品がないのならば、あるところに寄生するしかないだろう。

「どっちにしても、小規模ギルドは生き残るのは難しくなるってことか」

呟くマーナガルムだったが、だからと言って今のギルドを抜け出して別のギルドに移籍するかと問われれば、否と答えるだろう。何といっても、ケット・シーとの繋がりは、このギルドしかないのだ。

一方、雑貨屋さんと目を輝かせて走って行ったクリスティナも、ほぼすべての商品に売り切れの札が掛けられているのを見ると、顔を曇らせるのだった。商品がないことを詫びる 大地人 に、クリスティナはヒラヒラト手を振り気にしないことをアピールする。ほっと表情を緩ませる 大地人 の姿に、若干の違和感を感じるが、その原因が分からず、考えることを放棄する。次のお店を覗こうと

していたクリスティーナをマーナガルムが呼びとめる。

「なあ、クリス。俺は、ギルド会館へ行つて『大工道具』を取つてきてから、ギルドハウスの補修をするつもりだけど、お前はどうかする？」

次のお店とマーナガルムを見比べながらクリスティーナは、「うーん」と悩みだした。

「ここにいても何も買えないし、お宿に戻っても誰もいないし、仕方がないからガルガルのお手伝いしてあげるなお」

「手伝うことなんて、特にないけどな……」

ぼそりと呟いたマーナガルムの声を無視して、片手を上げたクリスティーナは叫ぶ。

「さあ、ウニーのところに出発進行なのー！」

マーナガルムはため息をつきながら、貸金庫へと向かうのだった。

その後、『大工道具』を持ったマーナガルムはシャッターの修理やドアの修復を黙々としていた。

手伝うはずのクリスティーナはというと、ブラウニーと遊ぼうと追いかけてまわして、埃まみれになり、ゴホゴホと咳き込んで、ブラウニーに背中を擦られていたのだった。

ブラウニーは己の召喚主にちよっぴり不安を覚えた。が、クリスティーナにオレンジを半分貰うと、たちまち機嫌が良くなり、二人仲良く階段に並んで座って食べ始めた。

（やっぱりこの人に付いて行こう。お掃除、頑張るゾ）
そんなことを思う単純なブラウニーだった。

暗中模索？ 異世界の美容事情！

綾香は橘への綿の納入を終え、念話でアズライトに報告すると、マコトのいる作業室へ向かった。作業室までの廊下を歩きながらぼんやりと考える。

（とうとう、他のギルドも『ティッシュ』の生産を始めたのね）

橘に言われるまでもなく、もともとマネしようと思えば、すぐに真似できてしまう商品なのだ。とはいえ、今現在、在庫が足りない状態である。確かに他ギルドにも売り上げはあるだろうが、こちらの売り上げが落ちると思えなかった。第一、『ティッシュ』は消耗品である。一度使ったら終わりということとは、毎日買わなければいけないものなのだ。消費者からすれば、誰が始めたことだろうが、物さえあればどうでもいいと云ったところか。問題があるとすれば『価格』。

（値下げ合戦にならなきゃいいけど……）

生産者側で起こり得る問題とすれば、『ミニタオル』の主原料である綿花の奪い合いであろうか。栽培ができるとはいえ、ある程度の日数が必要だ。そうなるとコットンプラントを倒して収集するのが手っ取り早い。

（やっぱり、そうなると綿花の収集が大変になるわね……モンスターは無尽蔵に現れるとはいえ、ピンポイントにコットンプラントだけと出会う訳じゃないし）

しかし、その手に入れにくさが、価格破壊になりにくいともいえる。

（って、私の考えることじゃないわ。私は生産ギルドでもなければ、商人でもないんだから）

実際、こうして 銀杏工房 の手伝いをしているのは、自分たち

が使う分の『ティッシュ』が必要なのと、戦闘の経験を積みながら戦闘で得たアイテムを売れること、何気ない会話で情報を貰うことができるの3つの利点があるからだ。それがなくなれば、別に銀杏工房 と別の道を歩んでも構わない。

（私は、どこにも属さない……ギルドを作っても、手の届く範囲で、小規模に……）

何処かのギルドに所属して歯車の一つになってしまえば楽なんだろうが、大勢の人が集まればどうしても軋轢は生じるのだ。

適度に仲良く、適度に離れて。つかず離れずの関係の友人が数人いれば、それでいい。なにも大きなギルドに身を寄せる必要はない。『ダメダメダメっ！ 考えすぎは、身体に良くないわ』

綾香は首を振って考えるのをやめ、通り過ぎそうだった作業室の扉を開けた。

作業室では、杏は竹かごに入っている材料を片付けをしており、マコトは『遊色の雫』へ持ち帰る分の『ハンドタオル』を背負い袋に入れていた。

部屋に入ってきた綾香が「もう今日は終わりなの？」と杏に尋ねると、杏は苦笑交じりに答える。

「昨日、徹夜しましたでしょ。今日は早めに終わりにするようにと、一葉さんから注意されてしまいましたわ」

「ああ、確かに徹夜続きだったら、一葉だって心配するわね。でも、一葉以上に怒りそうな人もいるけど、こっちに来てるのかしら？」

クスクス笑いながら綾香が言くと、「ああ」と杏も笑った。

「昨日から、お怒りですよ。『夜更かしだなんて、お肌の敵よっ！ イチってば乙女のこと、全然分かってないのね』ですって。一

葉さんもこれには参りまして、今日は全員に徹夜禁止を言い渡したらしいですわ」

「らしいわねえ。だったらシロってば、かなり苦労してるんじゃない？」

「苦労、というか……『彼女』は狂喜乱舞ですね。ほら、ドワーフ

の女性つて数が殆どいませんから、大切なサンプルなんですって。銀も今までは、男キャラということで逃げていましたが、とうとう逃げられなくなりましたの」

杏の言葉に、綾香は「うわあ……ご愁傷様」と笑った。杏は肩をすくめて、「今日は多分無事ですわよ」と呟いた。首をかしげる綾香に杏は説明する。

「今日は、女性メンバー全員に特製の『美容液』を配ると豪語してましたの。ほら、昨日は皆さん徹夜でしたでしょ。今朝から在庫を漁って、鬼の形相で『美容液』作りに励んでいますわ。綾香様も如何です？ 口利き、致しますわよ？」

杏の言葉に、ぱあっと綾香の顔が明るくなる。

「うわあ！ それは、かなり欲しいわね。こっちに來てからお肌の手入れを怠っていたから、かなり心配なのよ」

「なんでしたら、白猫様の分もご用意いたしますわ。『彼女』に言えば、喜んで用意すると思いますわよ」

「それこそ『らしい』わねえ」

二人は肩を震わせて笑いだした。マコトは、意味が分からず「二人とも、誰のことを言ってるの？」と尋ねた。

「『乙女がお肌の手入れを怠るなんて、この世で一番の罪よ！ 極悪なのよっ！ 例えユーララの神が許しても、この薊あざみ様が許しませんよ」

「えっ？」

きよんとするマコトだったが、最後に出てきた薊と云う名前に聞き覚えがあり「もしかして」と呟いた。

「そう、その『もしかして』よ。化粧師 薊。マコも何度かあったでしょ」

「あら、綾香様。化粧師 とおっしゃってはいけませんわ。本人いわく、メーカーキャプアーティスト らしいですから」

おっとりと杏が訂正する。

化粧師 とは、文字通り化粧品のスペシャリストであり、他人のキャラクターを綺麗に化粧を施せるサブ職業だ。化粧品を作ることができるのだが、もともと用意されているキャラクターグラフィックには化粧が施されているため、ゲーム内で化粧品などを販売してもさほど売れなかった。そのため、化粧師 のサブ職業を持っている人は少ないと言える。

しかし、異界化した エルダー・テイル においては、化粧師の作れる『石鱈』ひとつとっても大切なアイテムだ。今、エルダー・テイル にいる 冒険者 は、現代日本で育った現代っ子である。水浴びするにしても、自分の顔や身体を『石鱈』で洗いたいと思うのは必至だ。

オンラインゲームでは必要なかったものが必要になる。食料だけでなく、日常で使うアイテムの存在が注目されている。

その中でも化粧品は、女性を中心に確実に必要なアイテムの一つになっている。

綾香は杏の言葉に頷いた。

「そうだったわね。それにしても、薊がいてくれて助かったわ。やっぱり『石鱈』は必要だし、他の化粧品だって必需品だね」

綾香がしみじみ呟いていると、作業室の扉がバーンと音を立てて開いた。驚いて入口を見る三人。

そこにいたのは、とにかく派手な人だった。異界化した エルダー・テイル に来て、さまざまな驚きに見舞われたマコトでも、驚いて目を見開き、まじまじと見つめていた。

その人の青みがかった銀色の髪には様々な色のエクステンションを美しく付けてあり、付け睫毛やら化粧やらで顔は美しく彩られていた。爪にはマニキュアを施しており、みごとにデコレーションがつま先を彩っている。

また、着ている服も独特で、襟元がカシユクール状になった細身のドレスに、色鮮やかな打掛を羽織っているのだ。それでも、色合

いなどが絶妙なバランスで保たれており、色があふれているのに見苦しくないという、他の人には決して真似できない格好をしていた。『彼女』は、部屋に入ってきて来ると「当たり前でしょう」と得意げに笑みを浮かべた。

「私は乙女の味方ですもの。この世界に居ないわけにはいかないわよ」

「流石、薊ね……どうせなら、女になればよかったのに。この世界だったら、性別は選べるのよ」

呆れたように綾香は言くと、薊は「分かってないわね」とため息をついた。

「私はね、女よりも美しい男、つまり『おかま』って性別がやりたいのよ。性別を女にしちゃったら、ただの女じゃない。そんなの薊様の主義に反するわ」

力説する『彼女』に苦笑いの綾香。杏は、とりなすように薊に尋ねる。

「例の『美容液』は完成されたのですか？」

「もちろん。この薊様がお肌の疲れた乙女たちに、とっても素晴らしいアイテムを処方したわよ。うふっ、綾ちゃんも試してみる？」

艶やかに微笑みながら杏に答えた薊は、如何とばかりに持っていたポーチの中から小さな小瓶を見せた。薊が瓶を左右に振るとトロリとした液体がゆっくりと動いた。

「へえ。流石 化粧師 ね。私とクリスの分も分けてもらえるかしら？」

「メーキャップアーティスト って呼んでいただきたいものだわ」小瓶をきゅっと握って服の中に隠すと、綾香はクスクス笑いながらお願いした。

「メーキャップアーティスト の薊様、私めに『美容液』を分けてくださいませ」

綾香の言い方に、少しむっとした表情を見せた薊だったが、「まあいいわ」というと持っていたポーチの中から一つ取り出し、持つ

ていた小瓶と合わせて二本、綾香とクリスティーナの分として渡すのだった。

「綾ちゃんと白猫ちゃんの分ね。そういえば、黒猫ちゃんは来なかったの？」

「ありがと……シーだったら仕事が忙しくて、ログインしてなかったわよ」

小瓶を受け取った綾香は、薊の質問に答えると、しげしげと小瓶の中を見つめた。

「ちよつと残念だわ」

残念そうにため息を漏らす薊。綾香は「まあまあ」などと慰めながら尋ねた。

「洗顔フォームってある？　なんか顔がべたべたしてるから、さっぱりとさせたいのよね……あと、化粧品ってあるの？」

綾香の問いに薊は、苦い顔をした。どうやら、今日の在庫品漁りで芳^{かんば}しい結果が出なかったようだ。

「化粧品ねえ。実はね、そんなに在庫ないのよ。私も困っちゃうんだけどね、ほら、今って外に行くの怖いでしょ。材料集めに行こうと思っても難しいのよね」

「材料さえそろえば、化粧品もうちの主力商品になるだろうと思いますわ」

杏も頷いた。一葉達と雑談交じりに話した時に、今女性が欲しいものとして『石鹸』と化粧品各種は話題に上がったのだが、薊に材料のことを言われると諦めざるを得なかったのだ。

「そうなのよ！　せめて『天然石鹸』があればっ！　あれはクレンジングにも洗顔フォームにもシャンプーにもなる仕様なのよっ！　ただ髪の毛がごわついちゃうから、リンスは必需品なんだけどねえ」

ふうつと口元に右手の指を当ててため息をつく薊。左手で指折り必要と思われるアイテムを数えだす。

「あとは、お肌のキメを整えるために『化粧水』『乳液』あたりは必需品ね。たくさんの乙女たちが困っているのに、美の伝道師たる

私が何も手伝えないなんて……」

苦悩の表情を見せる薊に対し、いつものことなのかヤレヤレと顔を見合わせる綾香と杏。そんな二人を後目にマコトは首をかしげた。
「材料って、そんなに揃わないの？」

不思議そうにマコトが尋ねる。そんなにレベルの高いアイテムを材料にするとは思えないので、畑などで収集出来ないものかと思っただ。

「これだから、素人サンって困るのよねえ」

薊はハアとため息をつく、説明しだす。

「『石鹼』を作ろうとしたら、『重曹』と『消石灰』を使って『苛性ソーダ』を作るの。それさえ出来れば後は簡単。『苛性ソーダ』と各種オイルを合成すれば、はい出来あがり。オイルの種類を変えれば、いろいろな種類の『石鹼』が出来るわ。

ちなみに、『重曹』と『消石灰』は、山や洞窟に行つて探してもしない限り エルダー・テイル では見つからないわよ。その点、オイルは簡単ね。木の実を大量に採ってきて、それを精製すればいいんですもの」

「採取かあ…… あんまりアキバの街から遠いところは行きたくないのよね。ほら、戦い方が今までと違うじゃない？」

綾香も昨日今日のフィールドを思い出して呟いた。

「そうなのよお。だから難しいの…… もあ、こんなのって、乙女に對する冒涇だわっ！」

「幸運なのは、この世界の 冒険者 の肌って何もしなくても艶々なことね…… 肌はくすまないし、肌荒れとも無縁だし」

薊の怒りを鎮めるように綾香は呟くが、薊は「だからって、お手入れしなくていいってことないでしょ」とさらに怒りだすのだった。そんな中、マコトは不思議そうな顔をして三人に尋ねた。

「『重曹』と『消石灰』…… ようは、『苛性ソーダ』を集めればいいんだよね？」

マコトは、『苛性ソーダ』というアイテムを探せばいいのだから、

わざわざ『重曹』と『消石灰』とアイテムを集めるより、『苛性ソーダ』一本に絞って探せばいいのではないのだろうか、単純に考えたのだ。

自分が難しいと言っているのに、さも簡単なことのように尋ねてくるマコトに、むっとして顔を険しくさせた薊は声を荒げた。

「簡単に言っけどね、少年っ！ 『苛性ソーダ』なんてフィールドで、どうやって収集するつもりなのよ？ あるわけ……」

「あるよ」

きょんととしてマコトは薊の言葉を遮り答えた。

「えっ？」

マコトを覗く三人は、あまりにもあっさり答えたマコトに驚いてポカンと口を開ける。なかでも薊は、それまで「ない」と信じていた分だけ、二人よりも余計に呆氣にとられていた。

「『苛性ソーダ』って紙を作る時にも必要なんだよね。ほら、シーつて 筆写師 でしょ。紙とインクがなきゃ仕事ができないって、良く言ってたから一緒に『苛性ソーダ』を集めに行っただ」

淡々と説明するマコト。

「どこにあつたの？」

「ジェルスライミー。粘着質なモンスターで物理攻撃は殆ど利かないから、魔法で倒すしかないけどね、そんなに強くないはずだよ。7、8割の割合で落としてくれるしね」

マコトが告げると、しゃがみ込みガシガシつと乱暴に頭を掻きだす薊。

「その手があつたかあゝ……！！」

綺麗にセットされていた頭を乱暴に掻いたので髪は滅茶苦茶に乱れ、声は一オクターブ以上上がり、どう考えても男の声にしか聞こえなかった。

薊は髪の毛をぐちゃぐちゃにしたまま、くいつと顔を上げたかと思つと、次の瞬間ぐわつとマコトの両肩に手を置いて掴んだ。そのまま、ぐつとマコトに顔を近づけて、にっと笑う。

「ありがとな、坊主っ！ そっか、その手があつたか！ 盲点だったぜ」

「は？」

急激な変わりように今度はマコトが呆然となつてしまふ。そんなマコトを氣にとめた風もなく、杏に指示を飛ばす薊。

「おい！ イチと柘榴にこつち来るよう連絡取ってくれ。あと、橘のばぁと椿を呼べ、作戦会議だ」

言い終わると、レシピを確認しているのか目を閉じて集中した。杏は、薊の言葉に慌てて、念話を使って四人を呼び出すのだつた。

綾香は、ススツとマコトに近寄ると、マコトの耳元で囁いた。

「ジェルスライミーって、あの粘々した紫色の塊でしょ。わたしの攻撃が全く効かないから、あんまり好きじゃないわ。でも、そんなアイテム落としてたのね。マコつてば、よく気付いたわね」

「基本的に、パーティの中でアイテム拾いは僕の役目だからね。よく使うアイテムは、落とす相手を覚えてるよ」

やっと衝撃から立ち直ったのか、ぼそりとマコトが呟く。綾香は偉い偉いとマコトの頭を撫でた。

やがて、杏から呼び出しを受けた四人が、作業室に集まつてきた。綾香とマコトを迎えに来たアズライトも四人の後ろから現れた。

「杏、急に呼び出してどうしましたか？ 薊、今日は皆さんに仕事を終わられるように伝えましたよ」

一葉は薊から散々文句を言われていたのだろう。予防線を張るように苦笑交じりにそう言った。

しかし、薊は一葉の言葉を見殺して、フッフフと肩を震わせて不気味に笑いながら告げた。

「イチ、『石鱗』が売り物になるわよ」

薊の言葉に、状況を把握できていない一葉たちは眉をしかめる。

「はい？ どういうことです？」

「『石鹼』は無理だと昨日言っただけだ。」

「『重曹』と『消石灰』を採りに行くことが出来ないと聞きましたわ？」

「急に何を言い出すんじゃ？」

不思議そうに聞いてくる四人に、薊は「あつたのよ」とにやりと笑った。

「『苛性ソーダ』、ジェルスライミーが落とすアイテム」

すると、橘が「なんじゃ」と呆れたように呟いた。

「昨日、無理だ無理だといっていたのは『苛性ソーダ』を作る材料だったんかね……必要なのが『苛性ソーダ』じゃと言っとくれば、ワシが教えてやったのに。手間じゃのお」

橘の言葉に驚いたのは薊だ。目を見開いて、まじまじと橘の顔を見つめた。

「はあ？」

「まったく、これだから若いもんは……薊よ、お前さんの悪いところは、自分が知らないもんは、全員知らんと思っちょるところじゃの」「えっ？　ちよっ……」

まさか橘が『苛性ソーダ』を知っていたとは気付かなかった薊は、ガクリと肩を落とした。

「ジェルスライミーか……魔術系しか使い物にならない」

「生息地は？」

確認する一葉に柘榴は「川だ」と一言答えると、スツと扉の方へ移動していった。

「明日からは、『苛性ソーダ』も収集対象にする。材料調達部隊のメンバーには、オレから伝えよう」

扉を開け、ちらりと一葉を見ると柘榴は言い、そのまま部屋を出て行った。

聞こえないと思いつつ柘榴の後ろ姿に「よろしくお願いします」と言つと、一葉は「さて」と呟いた。

「綾香さん、『苛性ソーダ』の収集もお願いしますね」

「ええ、もちろん。こちらにも『石鹸』融通してくれるわよね」
にこにこ笑いながら綾香は告げた。

「なんといつても、マコが気付かなかつたら気付かなかつたみたい
ですし？」

綾香の言葉にグツと言葉を詰まらせる薊。一葉は深々とため息を
つくと「仕方ありませんね」と呟く。

「薊、これからは橘さんに、ちゃんと相談してくださいよ」

一葉の言葉にソップを向いて、悔しそうに爪を噛む薊。そんな薊
にアズライトはにっこりと微笑みながら尋ねるのであった。

「精油なら、調香で使うものを在庫で持っています、いかがです
？ もちろん、出来あがつたモノを 遊色の雫 にも分けてもらい
たいのですが？」

「くう……ひ、卑怯よっ！ ああっ！ もう！ 悪かつたわよ。私
が悪かつたわ。もう許してよ」

がつくりと膝をつき、しくしくと泣き始めた薊。杏と椿は困った
ようにお互いの顔を見るのだった。

「まあまあ、皆さま。『石鹸』のおかげで、他のギルドが『ティッ
シュ』を売り出しても、うちの売り上げには影響が無くならそうで
すし、そんなに薊さんを責めなくてもいいのではないですか？」

「他のギルドが『ティッシュ』を売り出したとは、本当ですか？」

椿の言葉を一葉は確認すると、橘が「ああ、事実じゃろうよ」と
頷いた。

「向こうは『蒔絵』じゃと。なかなか高級志向じゃのお」

「そうなる……明日からコットンプラントの奪い合いになります
ね」

アズライトは難しい顔をして呟き、綾香もその言葉に頷いた。

「綿花の収集と合わせて、こちらでは『ミニタオル』に代わる商品
を探す必要がありますわね」

杏の言葉に、「そう簡単に見つかればいいけど」と綾香はため息
をついた。

「それじゃ、年寄りはサツサと休ませてもらうよ。ワシの方でも、何か思い当たらんか、錆びついた脳みそを漁ってみるとするかね」
橘はそう言くと、部屋から出て行く。それに釣られたように綾香もアズライトとマコトに告げた。

「わたしたちも、宿に戻りましょう。ココに居ても、これ以上手伝えることはないわ　　薊、これ、ありがとね」

綾香の言葉に、突っ伏して泣きながらも器用にひらひらと手を振る薊。そんな薊の傍に寄ってマコトは尋ねた。

「石鹸って、現実社会のように香りが良いのを作れますか？」
「ん？」

薊は、涙を拭いてマコトを見るとスッと目を細めた。

「少年、何を考えてるのかしら？」

「えっ……いや、別に……」

「まあ、いいわ。明日、見せてあげるわ。明日も来るんでしょ？」

頷いたマコトに、「自信作を見せてあげるわ」と得意げに微笑む薊だった。

「よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げるとマコトは綾香の傍に行き、「皆さん、お疲れ様でした」と頭を下げた。

そして、三人はシデンの酒場へと帰って行くのであった。

狂喜乱舞？ 異世界での石鹸事情！（前書き）

新商品作製秘話（？）を付け加えました。

狂喜乱舞？ 異世界での石鹸事情！

紫色のぐにやぐにやした生き物がカマイタチを受け、目の前で八つ裂きになったかと思うとドロドロに溶けて行く。そんな姿は、何度見ても気持ちのいいものではないと、綾香はしみじみ思う。その向こうでは、プスプスと黒い煙を上げて続ける、こんもりとした消し炭の姿があった。

氷の矢を受けたジェルスライミー達を、無情にも足でグシャリと潰し壊した男は、につこりと微笑んで振りかえる。

「綾？ ちゃんとアイテム拾わないと、『石鹸』を貰えませんよ？ 折角です、どうです？ 貴女の好きな香りの精油を使って作ってもらいましょう」

ジェルスライミーが溶けたところには、白いカプセルに入った粒状の物が数個ころがっていた。どうやらアレが『苛性ソーダ』らしい。素手で触れても大丈夫なように加工してあるところが芸が細かいというか、微妙な感じだが、綾香はゲーム上の利便性と思い、深く追求しないことにする。

深く追求してしまえば、何故ジェルスライミーなるモンスターが『苛性ソーダ』を持っているのかを考えなければならぬ。

別にゴブリンでも良かったんじゃないかと、もっと言うならば、なんでこんなジェル状の気持ち悪いモンスターを作ったのかとモンスターデザイナーを責めなくなる。

「きやははは 魔法攻撃しか受け付けない魔物って、のほほんとしてるから、可愛くて好きなお」

クリステイーナは嬉々として妖獣や精霊を呼び出し、ポンポンと攻撃を放っていく。人間、慣れとは怖いものだと思いながら、初日のゴブリンすら怖がる初々しさはどこに行ったのだと思ってしまう。マーナガルムだったが、現状を認識して考え直す。

（ソレはオレも同じことか……）

未だに怖がってフィールドに出れないマコトと比べると、こうして戦っている自分たちの エルダー・テイル 慣れしている姿に自嘲の笑みをこぼす。

生理的嫌悪感からか、ぐにやぐにやしたクラゲの死体みたいな紫色のそれらを触れられない綾香の頭をポンポンと叩くと、『苛性ソーダ』のカプセルを拾い出すマーナガルム。彼はアイテムを拾いながら、綾香に苦笑と共に言った。

「俺たちは、こいつに対して、役立たず状態だな」

「ガル、あんたは代わりに壁役になれるじゃない。それに、ちゃんとアイテムも拾うしね」

ため息一つ零して、嫌そうに顔をゆがめながら辺りを見回す。

「壁役？ あいつらに必要だと思うか？ これじゃ、大量虐殺だぜ」綾香の言葉に一人呟くが、下手にあの二人に聞かれたらたまったもんじゃないと、黙々とアイテム拾いに精を出すマーナガルム。

「あああ…… 本当に役立たずは、わたし一人みたい」

溶けたり、消し炭化になったり、砕かれたりと様々な形状のジェルスライミーの死体の大群を見た綾香は、近くにあった棒を拾って『苛性ソーダ』カプセルを拾おうとしたが、すぐに諦めた。

「見張りに立ってるわ。敵が来たら知らせるから拾ってて」

ポーンと棒を放り投げると、ぐっと伸びをした綾香は、遠くまで見渡せるような場所を探す。

「逃げちゃダメなお。綾ちゃん、この感触慣れば面白いのお。触ってみ？」

「嫌よ」

クリスティーナの言葉にきっぱりと言い切ると、見つけた大木に登って辺りを見渡す。少し離れたところでは、 銀杏工房 の面々がジェルスライミーと戦っているのだらう、爆煙が立ち上っていた。「コットンプラントの方が、生理的に楽だわ ああ、気持ち悪いっ！」

一人呟く。どうもあのグニャグニャした物体は苦手だ。画面上で

は分からなかった質感を思い出し、ブルブルつと身震いをした。

「仕方ないなあ。クリスの分の『石鹸』分けてあげないぞ」

「まあまあ、代わりに私が綾の分まで集めますから」

クリスティーナはアズライトのセリフに「甘々なお」と首を振った。

「そんなんぢや、綾っちは全然成長しないゾ、なのお」

「お前に苦手なモンは無いのか？」

しみじみと呟いたマーナガルムに「失礼なのお」と憤慨するクリスティーナだったが、苦手なもの何かあったかなあと考えながら、ジェルスライミーの死体にズボツと手をつ突っ込んでクチャクチャとかき混ぜた。

それを見たマーナガルムは「うっ……」と絶句すると、気持ち悪そうに消し炭になったジェルスライミーの中から『苛性ソーダ』カプセルを拾っていくのだった。

さて、クリスティーナが楽しげに『苛性ソーダ』拾いをしている頃、銀杏工房の作業室では薊あやみから『石鹸』各種を見せてもらっているマコトが居た。

「この黒いのは竹炭を配合してあって、こっちは椿オイルを使ってるわ。この二つはジャパニーズオリジナルって言って海外の友人から評判がいいのよ」

「へえ……こっちの黒いのは？ これも炭？」

「ああ、『クレイ石鹸』ね。泥よ、ド・ロ」

黒い石鹸を手にとったマコトは鼻に近づけ匂いを嗅ぐ。泥と聞いて泥臭さを覚悟していたマコトだったが、見た目に反してどこか果物の香りに似た甘い香りがした。

「泥っていう割には、果物の匂いがするね」

「当たり前じゃない。石鹸の香りってとても重要よお。これだって、レシピを教えてもらうのに苦労したんだからあ」

得意げに答える薊。日本ではマイナーな化粧師 というサブ職

業だが、やはり海外でも余り就く人がいない。そのため薊は国内はもとより、海外の友人の伝手を辿って、海外の　メーカーアップアーティスト　たちとも交流を深めている。そして、その交流を通じて、様々な『石鹸』や『化粧品』のレシピを持っていた。

「こっちは、アメリカの友人から教えてもらったレシピなの。彼ったら素敵なお人だったわ」

薊は濁ったピンクの石鹸を差し出した。受け取って香りを嗅いでみると鼻に近づける前から強いバラの香りが辺りに漂った。

「ピンクの石鹸なんてあるんですね。しかも、凄い匂い」

「香りが強いでしょ。どうもアメリカ人って、はっきりした香りが好きなのよねえ。ちなみに、これもクレイ石鹸なのよ　同じローズでも、こっちは中国の友人から教えてもらったの。『薔薇真珠石鹸』よ」

白く透明感がある石鹸を指し示す。こちらは、先ほどと違って仄かに香る日本人好みの香りだった。

そして薊が次に取り出した石鹸は、濃いオレンジ色の石鹸だ。

「こっちはローズヒップオイル配合。香りづけにラベンダーとローズマリーのが入ってるわ。ローズヒップはハーブティとかで有名よね。このオイルを作るだけで大量のローズヒップが必要だから、凄い贅沢なのよ。ちなみにこれは、イギリスの　メーカーアップアーティスト　が個人サイトで公開してたレシピなの」

次から次へと色鮮やかな石鹸が作業台の上に並べられた。数多くの色々な香りがまじりあい、作業室は凄い匂いになっていた。

「でも、香りのないゲームの世界で、よくこんなにも色々な香りを作りだしましたね」

マコトは不思議に思っていたことを尋ねた。もともと　エルダー・テイル　はオンラインゲームだ。当たり前だが、ゲームをするのはパソコンの前である。例えば香水や石鹸を作ったとしてもグラフィックはあるが、匂いという要素は無い。アズライトの　調香師　についても思っていたのだが、マコトには香りにこだわるサブ職業に疑

問があつたのだ。

「あら、マコトってば、ナンセンスよ。架空の世界だからって、香りのおしゃれを楽しみたいでしょ？」

フフッと笑つた薊だったが、「ホントはね」と付け加えた。

「僅かだけドステータスアップの効果があるのよ。石鹼は、エルダー・テイル 内の時間で半日、つまり現実世界では1時間ね。香水だったら1日、現実世界では2時間。但し、水に入ったら効果は消えてしまうし、香水や石鹼を重ね付けしても効果は出ないわ。相殺されちゃうの。それにマイナス効果の香りなんかもあるから注意は必要。まあ、マイナス効果も使い道は様々あるのよ。マコトも知つてると思うけど、モンスターをおびき寄せたり、追い払つたりする『匂い袋』。あれも 調香師 の作品よ」

薊の言葉に、「知らなかった」と驚くマコト。確かに 匂い袋 は有名だが、それを作るるのが 調香師 だということは知らなかったのだ。

ちなみに、 匂い袋 には香りごとに、効果のあるモンスターが違う。つまり同じ 匂い袋 の匂いでも、追い払えるモンスターと逆におびき寄せるモンスターと両方あるため、持ち運びに気を付けなければならぬのだ。

「こっちは韓国の友人から教えてもらった柘榴の石鹼。微力だけど攻撃力アップの効果があるから、柘榴が使わせることが多かったわね。今は、この香りが嫌だから使いたがらないけど」

乳白色の石鹼からは甘酸っぱい匂いがした。マコトは鼻に近づけると、匂いを嗅ぐ。甘酸っぱい香りが鼻腔に広がって心地よかった。「この香り、結構好きですね。なんだか幸せになる気がする」

「あら、ありがと。褒めてくれたお礼にあげるわよ。たくさんあるから持っていけば」

褒められて嬉しいのか、薊はフフッと笑うと『柘榴石鹼』をマコトの手に乗せた。

「日本では余り知られていないけど、欧米では香水の効果は有名よ。

流石、香水文化の国ってところかしら。調香師や　メーカー
プアーティスト　向けのクエストもあるから、ノリややアズライト
を誘って遠征に行ったことがあるわ」

薊は何でもない事のように簡単に言うが、海外のクエストを受け
るためには、かなりの手間暇がかかる。言葉の問題もそうだが、海
外の情報を色々と集めなければならないのだ。マコトのような一般
のユーザーからしてみれば、驚くより他なかった。

「わざわざ、海外のサーバに行って来たんですか？　凄い行動力で
すね」

「あら？　私はパソコンの前から動いてないわよ。動いたのは薊と
いうキャラクターだけ。エルダー・テイル　じゃ、そんなに大変
じゃないわよ。実際の海外旅行の方がお金も時間もかかって大変ね」
「確かに……」

現実社会ではマコトも仕事の都合上、何度も海外に行ったが、確
かにお金も時間もかかって大変だった。

しかし、時間という点では、調べる等を含めると苦労はさほど変
わらないだろう。それを考えると、やはり行動力というか意欲が凄
いなと思わずにいられないマコトだった。

「ほんと、もう少し、知名度が高くてもいいと思うのよねえ。も
ちろん、海外では攻撃力アップのメイクとかも存在するのよ。メイ
クの特効効果がないのは、絶対日本の関連会社の怠慢だと思うのよ」
薊は怒ったようにそう言ったかと思うと、何かを思い出して、ニ
ツと笑ってマコトに対してパチンとウィンクした。そして、少し声
をひそめて、内緒話をするようにマコトに教えたのだ。

「ちなみに、向こうのハロウィンは凄いわよ。メーカーアップアー
ティスト　達の祭典みたいになってるわね。私も日本の歌舞伎のメ
イクを引き上げて、参加したことがあったわよ」

「へえ……すごいですね」

驚くマコトに、薊は残念そうに呟いた。

「日本でも、同じハロウィンを真似るなら、とことん真似してもら

いたかったわあ。服装だけでなく、化粧へのこだわりも重要だと思うのよ」

「でも、化粧品も石鹸も、今の エルダー・テイル では、かなり必要なアイテムだと思いますよ」

マコトが言うと、薊も「もちろん」と頷いた。

「だから、色々な材料が必要になって来るの。蜂蜜、砂糖大根で作るベタイン、グリセリンは保湿効果が高いから化粧水やクリーム、美容液を作る時に確実に必要になって来るわ。色々な植物、特にハーブ類がオイルを作る時に必要なのよね……」

難しい顔をして考え込む薊。蜂蜜は森の中に行けば、この世界では容易に見つかる。ハーブ類も畑で栽培できるだろう。グリセリンをつくために必要なオリーブオイルも森の中で見つかるかもしれない。

「妖精の輪 が使えないんですもの…… 今までの採取場所は使えないわ。妖精の輪 を使わずに、その場所まで行くのが大変ですもの。最初から それこそ材料を探すところから始めなきゃならないのよね」

悔しげな表情を見せているかと思えば、薊は不敵に笑う。

「いいじゃない。この挑戦受けてあげるわ。なんて云っても薊様に不可能なんてないわ。こうなったら柘榴たちに護衛をお願いして、また初めから材料の採取場所を探し始めるわよ。これまでのぬるま湯のような冒険じゃないわ。本当の冒険よ。腕が鳴るわね」

やはり薊は行動力があるのだろう。そう言い切れる意欲と胆力に脱帽した。

「戦闘を経験するために、コトンプラントやゴブリンと戦ったわ。どうなるかと思ったけど、なんとかなると感じたわね」

きっぱりと言う薊からは、嘘をついてる気配も強がっている感じも受けなかった。事実そう思っているのだろう。薊の目には、今アキバの街にいる大多数が宿している無気力さというものは無かった。「味方との連携は、ゲームのころと比べると格段に難易度が上がった

たわね。かなり難しいわ。でも、だからこそ攻略のし甲斐があると
も云えるわね。私の90レベルは伊達じゃないのよ　　フフフッ。
楽しくなるわねえ」

薊の言葉にマコトは今の自分を思うと考え込んでしまったが、今
はそれを考え込んでも仕方がないと、無理やり目の前に意識を戻す。

マコトは、薊から石鹼の説明を受ける前に、隣の作業室から『ハ
ンドタオル』を数枚と『寄木細工の宝箱』と『竹わっぱ』をそれぞ
れ1つずつ持って来ていた。

「ちなみに売りだすとしたら、どの石鹼にするの？」

材料の問題もあるのだろう。尋ねられた薊は難しい顔をして悩み
だした。

「クレイ系は、難しいわね。泥は泥でもいいってわけじゃな
いのよ。やっぱり泥にもランクがあるのよねえ。それに今の状態だ
と、良い植物油がなかなか手に入らないのよねえ……そうになると、
やっぱり牛脂かしら」

「牛脂？　って、もしかして一角牛の？」

ぎょっとしたようにマコトは薊を見た。薊は頷くと、あっけらか
んと言い放った。

「そうよお。皮だけ剥いで肉を使わないのは勿体無いでしょ？　一
角牛を獲る時に一緒に行つて、現場で『牛脂』だけを分離させて持
つて帰つて来たのよ。それを使えば問題ないわ。量はそこそこある
しね」

「香りはある？」

「もちろんあるわよ。『牛脂石鹼』にするには『牛脂』を『水』と
『苛性ソーダ』と合わせて調合するの。で、その時に『バニラオイ
ル』を加えれば甘いアイスクリームみたいな匂いになるし、『オレ
ンジオイル』を加えたら柑橘系のさわやかな香りになるわ」

薊の答えを聞いたマコトは、持ってきたハンドタオルを二つの山
に分け、それぞれ『寄木細工の宝箱』と『竹わっぱ』の中に入れ

た。

「『牛脂石鹸』って今在庫ある？ バニラとオレンジ、それぞれの香りが欲しいんだけど」

「あら？ 何をするつもりかしら？ 待ってて、作って見せてあげるわ」

化粧師 も 調香師 と同じ台を使用するらしい。薊は調香台に立つと材料を選び、まず『牛脂石鹸／バニラ』を、次に『牛脂石鹸／オレンジ』をそれぞれ作りだした。台の上に出現した石鹸を受け取るとマコトは、それぞれの容器に一つずつ石鹸を入れて蓋をした。

不思議そうにマコトの行動を見ていた薊は「もしかして」と呟くと、マコトはにっこりと笑った。

「これで香りが移れば、『石鹸と香りつきティッシュ』って商品ができると思わない？」

「すごいわっ！ よく考えるわねえ」

ぐりぐりとマコトの頭を撫でた薊は、「うまくいくと良いわね」と台の上の容器を眺めた。

しばらく置いて、それぞれの蓋を開け『ハンドタオル』の香りを確認してみると、見事に石鹸から香りが移っていて、鼻を押し付けると仄かな香りが『ハンドタオル』から香ってきた。

「やったね」

嬉しそうにマコトが小さくガッツポーズをすれば、話を聞きつけて訪れた杏や一葉は感心しながら二つの香りを確認していた。

「見事ねえ。よく気が付いたじゃない。これだったら、他の香りでも試してみたくなるわね」

薊はワクワクして声を弾ませながら呟けば、杏もマコトの両手を握って振り回しながらピョンピョンと跳び始めた。

「凄いですわ、マコト様。これでしたら、他のギルドが発売する『ティッシュ』とは差別化できますわ」

「価格はどうでしょうか？ 薊さん、それぞれの石鹸の価格は？」

冷静にみえる一葉の声にも興奮の色が混じる。

一葉に尋ねられると、薊は空を睨んで考え出す。

「『牛脂石鹸』一つに付き、それぞれ金貨¹……いや、香り付け用のオイルの在庫を考えると2枚かしら。3枚じゃ、いくらなんでもぼったくりでしょ」

「中に入れる『ハンドタオル』の枚数を調節しますか。もちろん、容器なしの詰め替えヴァージョンの『ハンドタオル』の発売も開始しましょう」

薊の答えを受けて、一葉はそう呟くと、椿や桜を念話で呼び出した。

「あら、詰め替えの『ハンドタオル』にも香り付きの物を用意できるでしょ？ 売り子ちゃんたちが、大きな目の容器に入れて持っていけば良いんだから」

にこにこ薊が言えば、杏は「そうですね」と微笑む。

「それに、それぞれの売り子さんごとに、違う香りの詰め替えヴァージョンを持ち歩くんていかがでしょう」

「あら、そのアイデアいいわねえ。自分のお気に入りの香りを運ぶ売り子ちゃんなんて素敵じゃない。売り子ちゃんの香り付け用ぐらいだったら、数だつて用意しなくて済むから、色々な香りの石鹸を作つてあげるわ」

杏の言葉に乗り気になる薊。一葉は、それを聞いてにこりと笑う。

「なら、売り子さん達には、どんな香りを運びたいか確認したほうが良さそうですね。椿と桜を呼びましたから二人が来たら詳しく話を詰めましょう」

「香りが無い詰め替えも作つた方がよいよ。自分の好きな香りがある人は、自分のボックスに『ティッシュ』を入れて、好きな香りだけを楽しみたいだろうからね」

マコトの言葉に三人は頷き、作業室に来た椿と桜からも支持を得ることになる。

さて、作業室を訪れた椿と桜は、部屋中に充満する凄い匂いに顔をしかめたが、薊や杏から話を聞くと、感嘆の声を上げた。

そして、売り子の香りを決めるため、薊から各種石鹼を預かり、会議室に戻るとそれぞれの担当の香りを決めた。担当の香りを決める時は凄い騒ぎになり、会議室は混乱を極めたが、そこは一葉や椿の鶴の一声で大人しくなり、それぞれが自分の香りに決まった石鹼を大切に持ったのだった。

翌日から『銀杏工房 香りティッシュ』が爆発的に売れることになるのだが、もともと石鹼を作れる 化粧師 が少ない。そのため、様々な香りが作れる 化粧師 が育つまで他のギルドは真似することができず、悔しい思いをするのだった。

一期一会！ 異世界で新人獲得？

綾香達は『苛性ソーダ』と『綿花』を大量に集めてから 銀杏工房 へ戻って行った。

この日は、柘榴たちも大量に『綿花』を取ってきたこともあり、材料収集はお休みして、ギルドハウスを住めるように整えようという事になった。

マコトも、杏が一人でも大丈夫だと言ってくれたので、ギルドハウスの補修や清掃を手伝うことにする。やはり、自分たちが住む場所である。自分たちの手で出来るところまで綺麗にしたかった。

「綾ちゃんとマコマコは初なのよねん。見たらびいっくりなお」

うきうきとスキップしながらギルドハウスまで先導するクリステイーナ。

「ガルガルが頑張って扉の補修したから、ライライも見違えるのぉ」
「お前は、ブラウニーと遊んでたな」

昨日の騒ぎを思い出し、げんなりとしたように呟くマーナガラムに、むうつと頬を膨らませたクリステイーナが文句を言いだす。

「ウニーは、今日もお掃除頑張ってるはずなのぉ。ウニーを呼び出したのはクリス、だからクリスも偉いのお！」

「はいはい。もうすぐ着きますよ あっ、綾、マコ君。あの建物ですよ」

クリステイーナが拗ねるのをかわしながら、角をまがったアズライトは、目の前にある四階建ての建物を指さす。

綾香とマコトはワクワクと角を曲がり、建物の姿を見ると絶句した。

「なにあれっ！ 薦まみれじゃないっ！」

「ええっ！ 上にある木は？ あれって、ビルの中から伸びてる…の？」

「っていうか、このビルに住めるんでしょうね？」

驚いてる二人に、「普通そう思うよな」とマーナガルムは呟いた後、二人の肩をポンポンと叩いた。

「大丈夫だ。屋上に見える木は後ろの敷地に生えてる木で、建物の中は無事だ。心配なら中に入って確かめればいい」

「ガルムさんが、扉を修理したってクリスが言ってたけど？」

マコトの不安そうな言葉に、マーナガルムは二カツと笑って親指で自分を指した。

「俺のサブ職業は 大工 だぜ。腕の見せ所ってヤツだよ」

「あら、あんたがフィールド以外で役に立つだなんて知らなかったわ」

正直に綾香が言うと、トホホという顔になったマーナガルムは、ガツクリと肩を落とした。

「ほらほら、二人とも入ってみましよう。ゾーンの入場制限をかけてありますから、メンバー以外に出入り自由な人を設定したかったら、教えてくださいね」

アズライトが言えば、ビルの方では入口のドアを開けたクリステイーナが「早く早く」と手を大きく振って呼んでいた。

「じゃあ、入ってみましょ！」

綾香はマコトの手を取ると走りだした。マコトはいきなり引つ張られて踏鞆たたらを踏んだが、なんとか立ち直ると無様に転ぶことなく綾香の後に付いて行った。

「遅い遅いゾ」

にこにこクリステイーナは叫ぶと、ドアを広く開ける。ドアの中、正面には階段があり、明るい日差しが降り注いでいた。

「うわあっ！」

中に入ると綾香とマコトは驚きの声を上げた。中はきれいに掃除がしてあり、階段には絨毯が敷いてあって、蔦の絡まった壁からこぼれる光は真つ白な壁に反射して輝いていた。

「ウー、流石なお！」

どこからか持ち出したのか、真つ白なペンキをペタペタと壁に塗

っていたブラウニーは、自分の仕事を見て驚く五人の方を見ると、得意げに胸を張った。ブラウニーの着ているベージュ色のチェニックスは埃で汚れていたり、ペンキで白くなっていたりと凄惨有様で、茶色い毛並みにも白いペンキが点々と飛んでいた。

そして妙に達成感の感じられる得意顔のブラウニーは、手に付いたペンキに構うことなく、へへんと鼻の下に指をこすりつけたので、ブラウニーの顔に白い口髭ができた。

「ウニーすごいのお！」

クリステイーナは、ペンキまみれのブラウニーに抱きついた。ブラウニーはビツクリして目をまん丸くしていたが、褒められて嬉しそうだった。

「他の部屋はどうなっているんでしょうか？」

ぼつりとアズライトは呟くと、車庫に繋がる扉を開ける。

それをみてギョツとしたようなブラウニーの姿。慌ててクリステイーナの腕を抜け出し、駆け寄ろうとしたが、クリステイーナの腕から逃げられなかった。

「……」

アズライトは、黙って開けた扉を閉めた。ブラウニーはそれを見て視線をあちこちに彷徨わせた。

「ん？ アズ先生、どうしたんだ」

「いえ……車庫の方は、後回しにして、まず上の階を見て回りますよ」

アズライトは答えると、階段を上って行き、二階の部屋へ入って行った。

二階の壊れていた扉は、昨日マーナガラムが補修していたので、しっかりと閉じていた。扉は階段の壁と同じように白く塗られていて、その扉を開けてみると、綺麗に掃除された空間が広がっていた。「綺麗じゃない。掃除なんてする必要ある？」

壊れていた事務机やいすは撤去され、床も綺麗に掃除してあった。キャビネットなどは設置されたままだったが埃は無く、昨日の空き

巢に入られた直後の様子からは一変していた。

「すげえな……ブラウニー」

マーナガルムは感嘆の声を上げると、昨日は物に隠れて見えなかった奥の扉を開けてみた。そこには小さいながら給湯設備があったが、水道の蛇口をひねっても水が出るようなことは無かった。

「あつ……やっぱり、無理だよな」

諦めたようにマーナガルムが言うと、後ろから見ていた綾香が仕方なさそうに告げた。

「一階の車庫つてとこに、かまどを作ってお湯を沸かせるようにしましょうよ」

「屋上にも作って欲しいのお　ばあきゆう、ばあべつきゆう！」

嬉しそうにクリスティーナが言うが、綾香に「あんた、湿気たせんべい味の焼肉食べたいの？」と突っ込まれたのは言うまでもない。「でも、屋上にもかまどがあつた方がよいよ」

マコトは盛大に突っ込まれて、しくしくと泣き崩れたクリスティーナを擁護する。

「ほら、屋上でお湯が沸かせれば、お風呂とか出来そうじゃない？」

「マーコ、お湯が沸かせるって言っても、水はどうするの？」

綾香が尋ねる。出来っこないと云わんばかりの口調に、マコトは少し考える。

「クリスティーナに水の精霊を呼び出して、水を出してもらうとか？」

「成功率低いから、無理無茶無謀なお」

マコトの案を一蹴するクリスティーナ。キミの為にフォローしてるんだよなんて考えながら、次の案を考えるマコト。

「アズライト先生の魔術は？」

「壊れてもいいのなら……」

やはり否定的なご意見にマコトは頭を抱えた。

「ん……背負い袋の中に大量の水が入った樽を入れればいいんじゃない？」

至極まっとうな意見がマーナガラムから出されて、クリスティーナが「それ採用なのお」と歓声を上げた。よほどお風呂に入れるというのが嬉しかったらしい。

「難しく考えすぎなのよ、マコは」

綾香に慰められるマコだった。

さて、一同がそんな風に騒いでいる頃、銀杏工房の蘭丸は困っていた。今まで作っていた『寄木細工の宝石箱』の生産をストップするよう言われたからだ。

「どういうことですか？」

「どうやら詰め替えの『ティッシュ』の方に需要がありそうですね。これからは『石鹸』と『ティッシュ』だけお求めになる方が多くなると売り子の皆さんが予想しています。スズメにも伝えたのですが、在庫を作りすぎないように容器の生産を止めてもらいたいです」

不安げに尋ねる蘭丸に、にこやかに答えた一葉。笑みを深くして言葉をつづけた。

「スズメの方は、『詰め替え用ティッシュ』を持ち運ぶための葛籠かぶつや行李こしを作ってもらっているのですが、蘭丸には違ったお手伝いを頼みたいんですよ」

「お手伝い、ですか？」

「ええ。実は、遊色の雫の皆さんがギルドハウスを購入しましたね、多分家具などが入用になると思います」

一葉の言葉に蘭丸は不思議そうに首をかしげる。自分の生産中止の件と遊色の雫のギルドハウスの件が繋がっているように感じられない。

「ここのところ、マコトさんには、いろいろお世話になってばかりですから、この辺で、一度しっかりとお礼をしたいと思ひましてね」「ああ。それで、ギルドハウスの家具を作るんですね」

蘭丸はなるほど納得して頷いた。確かにマコトには、色々商品

のアイディアを出してもらい、かなり 銀杏工房 に貢献してもらっている。この恩を何かの形で返さないと、とクリエーターたちの間からも話題に上っていたのだ。

「任せてください。ベッドやテーブルなど、必要なものを作ってくればいいんですよ」

「話が早くて助かります。しっかり、丁寧な、仕事をお願いしたいのですが、任せても大丈夫でしょうか？」

憧れの存在でもある先輩に頼りにされているので張り切る蘭丸。その姿をにこにこ見ていた一葉は更に後押しする。

「材料などで足りないものがあつたら、うちの在庫から持っていっても構いませんよ。お礼、ですからね」

「分かりました」

「場所は、私も良く分からないので、 遊色の雫 のメンバーの誰かに連絡をとってあげましょうか」

親切に一葉が尋ねれば、蘭丸は「大丈夫です」と首を振った。

「マコトさんとフレンドリストに登録し合ったので、念話を送れば迎えに来てくれると思います」

「そうですか。じゃあ、安心ですね。気を付けて行ってらっしゃい」使命感に燃える青年を送り出した後、一葉は綾香に念話を送る。

「あつ、綾香さん、ギルドハウスを借りられたそうですね。おめでとうございます」

『良く知ってるわねえ。アズから聞いたの?』

呆れたような相手の声。

「ええ、まあ……」

どこから仕入れたかは、流石に企業秘密だ。誤魔化させてもらって、こちらの要件を伝える。

「それで、あなたのところでは 木工職人 が居ないでしょう。だから、蘭丸をそちらに向かわせました。使ってやってくださいね」
『えっ?? どういうこと?』

困っている相手の顔が目に浮かぶが、混乱しているうちに畳み掛

ける。

「あなたのところのギルドハウスは、かなり裏通りを入った場所にあるみたいですね。蘭丸も道に迷って困ると思いますから、連絡を入れてあげてくれますか？ マコトさんのフレンドリストに蘭丸が入ってますから」

『えっ？ えっ？』

「丁寧な仕事をする青年ですし、マコトさんと仲も良いんですよ。本人もやる気を出してますし、是非使ってあげてくださいね。よろしくお願いします」

綾香が戸惑っているうちに、一方的に会話を終わりにする。

アズライト辺りから念話が来ては面倒だと、一葉は銀に念話を送る。

『兄さん、どうしたの？』

「いや、特にどうしたという訳じゃないけど……」

適当に会話を続けながら、一葉はほくそ笑んだ。

銀杏工房のメンバーの誰のフレンドリストに誰が入っているかなど、ちゃんとリサーチしてある。

蘭丸はマコトと年が近い。似たような作業をしている仲間意識からか、新商品を考えだしたマコトに対する憧憬からか、休憩時間の度に色々話をして、二人は友人関係になっていた。

一葉は、蘭丸がクリエーターとしてマコトに心酔していることに気付くと、それとなく助言をしたのだ。

「フレンドリストに登録して、後々相談に乗ってもらっては如何ですか？ 一人では思いつかないことでも、二人で話していたら良いアイデアが浮かぶことってよくありますから。それに、あなたにもギルドを超えた友人ができると エルダー・テイル を遊ぶ上でかなり有意義なものになると思うのですよ」

親切に助言を繰り返せば、素直な青年のこと相手にフレンドリストに加えてもらおうとするのは目に見えていた。そして、マコトも

人が良い青年だ。お互いにフレンドリストに登録し合うだろうことは予想済みである。

商品開発に色々アイディアを貰うのは構わないが、貰いっぱなしだと後でアズライト辺りから何かとんでもないことを依頼されるのは目に見えている。

この辺りで借りを返さなければと、常々一葉は思っていたのだ。そこに降って湧いたのが、遊色の零のギルドハウス購入の話。

この話に乗って借りを返さない手は無い。

「これで、トントン……若干、まだウチが不利ですか」

呟く一葉に「兄さん、また、悪だくみしてるの？」と不審そうに尋ねる銀だった。

さて、綾香から聞いた一葉の会話に何やらキナ臭いモノを感じたアズライトだったが、現状 銀杏工房 との間には『貸しはあつても借りは無い』状態なので、借りを返しに来るだけだろうと思うことにした。

もちろん、何かあった時の保険の為に、銀杏工房 への『貸し』状態の物をピックアップすることを忘れなかったが。

「蘭々来てくれるって、ラッキーなお」

クリスティナは、ブラウニーを労いながら屋上で日光浴をしていた。

マーナガラムといえば、ブラウニーがいららないものを放り込み物置と化している車庫の中から、使えそうな部材を選別していた。

蘭丸から念話を貰ったマコトは、蘭丸を迎えに大通りの方へ走っていた。ギルドを出て行ったマコトの後を綾香も追いかけた。

「ちょっと待って、私も行くわ」

二人が走って大通りまで出ると、にこにこと蘭丸が手を振っているのが見えた。

「ごめん。待たせちゃったかな？」

「すみません。いきなり呼びつけちゃって」

二人の声が被り、綾香は盛大に吹きだした。

「あんたたち、仲いいのね」

二人の青年は綾香の言葉に顔を見合わせて、どちらともなく苦笑いを浮かべた。

「あの、それで、一葉先輩から……」

「ああ、聞いてるわよ」

綾香が蘭丸の言葉を遮った。そして、案内するように裏通りに入って行く。

「でも、うちに木材って在庫してないのよ……うちに 木工職人いないでしょ。作ることがないから在庫も確保しなくて……」

綾香の言葉に蘭丸は「大丈夫です」と自信満々に背負っている二つの背負い袋の片方を叩いた。

「一葉先輩から 銀杏工房 の在庫を使って構わないと言われて、角材や部材を入れるだけ持つてきましたから」

蘭丸の言葉に驚く綾香とマコト。

「ええっ！　なんでそんなに親切なのよっ！」

「太っ腹だね」

「当たり前じゃないですか。マコトさんには色々助けてもらっているんです。こちらこそお礼をしなきゃいけない立場なんですよ」

「そんなことないよ……」

蘭丸の言葉に謙遜するマコトだったが、綾香はケロリと「そう言うことだったら、がんばってもらわなきゃね」と笑うのだった。

「そういえば、作業台はどうするの？」

木工職人 も 裁縫師 と同じように専用の作業台が必要なはずだ。それを心配してマコトが尋ねると、蘭丸は片方の背負い袋を叩いた。

「へ？」

「一葉先輩が貸してくれたんです。で、一葉先輩の方の背負い袋に作業台を丸ごと入れてきました」

蘭丸のセリフに「はあ」と間抜けな声しか出せなかった綾香とマ

コト。ここまで本格的に手伝ってくれるとは思ってなかったのだ。

「なんだか……後で特大のお願いが来なきゃいいけど」

「わたしも、不安になったところよ」

そんな会話をしながら、裏通りを曲がり小道に入ろうとすると、裏通りの向こうから 冒険者 が二人歩いてくるのが見えた。

若い男と、その傍らには背の小さな可愛らしい黒髪の女の子が不安そうに歩いていた。

「珍しいね。こんな裏通りで人に会うなんて」

何気なくマコトが言つと、綾香もマコトの目線の先を追う。

「ずいぶん背が低い……あれ？ ドワーフの女の子かしら？」

「ドワーフの女の子ですか。銀親方じゃなかった銀先輩以外にも居たんですね」

「当たり前じゃない。プレイヤーが選べる種族なんだから」

ドワーフは、その小柄でがっしりとした体つきから女性プレイヤーには、あまり人気がない。エルダ・テイル ではグラフィックが秀逸なため、女性プレイヤーたちは、美しい容姿の種族を選んてしまう傾向がある。

それなのに、ドワーフという『美麗さ』という点では他の種族に負ける種族を選んだ少女にマコトは興味を覚えた。

「相手は人間族の男ね。あら、レベルはずいぶん違うじゃない」

驚いたように綾香が囁いた。その言葉を聞いてマコトと蘭丸も二人のステータスを確認すると、人間族の男の方はレベルが55、ドワーフの女の子は10。まだ、始めたばかりの初心者だ。

「女の子は、ギルドに入ってないね」

「男の方は 流離なみだりの義勇軍 だつて……聞いたことないわ」

「まあ、ギルドは星の数ほどありますからね」

三人はコソコソと話しながら小道の陰に隠れて、二人の様子を窺った。

男は、女の子に顔を近づけるように腰を折って話しかけてた。

「ギルドには、絶対、入った方がいいって」

シンとした路地の中、さほど大きくない男の声が響いた。その後、どうしてギルドが良いのかと、言葉巧みに話す若い男。

「他のギルドでは最低レベルを設けてたり、厳しい師弟関係を強いられたり、酷いところだと脱退したくてもさせてくれなかったりするけど、うちのギルドは、そんなことないから」

男のその言葉を聞いて、マコト達は「ん？」と引っかかり、顔を見合わせる。

確かに、最低レベルを設けているギルドはある。一番有名なのは、かの 黒剣騎士団 だろう。最低レベルが85というのは、なかなか厳しい条件だ。だが、全部のギルドがそうなのかというところである。逆に最低レベルを定めているギルドの方が少数派だ。

師弟関係にしたって、確かに大概のギルドは、それなりに上下の区別はある。あることはあるのだが、教える側と教えられる側との違いによるもので、さほど厳しいものではない。あくまで常識的なものだ。

しかも、ギルドというものは基本的にく来るもの拒まず。去る者追わず、的なフリーダムなものである。強制的に脱退させないなんてことは、どこのギルドも不可能だ。

「でも……」

「大丈夫、ギルドに入り方知らないなら、俺が教えてあげるよ。うちはね、初心者対応型ギルドだからさ、メイン職業やサブ職業のレベルの上げ方とか、ホントいろいろ教えてあげるよ」

男のこのセリフもおかしい。何かがというわけではないが、「初心者に優しい」ギルドというのは、どこのギルドにもいえることで、その男のギルドが特別というわけではない。けれど男は、さも特別なことのように謳^{うた}っている。

「えっ？ 何が心配？ 心配なんてないよ。大丈夫、他にも始めたばかりの女の子もたくさんいるから安心だよ」

そこまでくると綾香は呆れたように首を振り、蘭丸の表情も硬く

なった。マコトも男の言葉が全て胡散臭くなり、げんなりとしながら歩いている二人の方を眺め続けた。

聞けば聞くほど、詐欺師のようではないか。

「……なんかやばそうじゃない？」

「姐さん……凄いな。同意見だよ」

「これは、助けた方が良さそうですね。あの男の言っているギルドって、なんか変ですよ」

目の前を通り過ぎる二人。綾香達は物陰に隠れているため、二人からは気付かれない。

「私、面倒事は嫌よ……」

顔をしかめながら綾香は呟く。ゆっくり動きだすその姿に、マコトも後に続いた。

「でも、初心者も初心者、お尻に卵の殻が付いてそんな雛を知らん顔することって出来そうじゃない？」

ため息交じりに囁く。蘭丸も慌てて二人の後を追いかけた。

三人は二人の背後に忍び寄る。

「私は、いいです」

怪しいと雰囲気を感じ取ったのだろう、女の子は断ろうとした。が、断り方がまずい。

瞬間的にマコトは、相手の男が言うであろうセリフを口にする。

「『いいの？ それじゃ、ギルドに入会しに行こうか』あたりかな？」

「いいんだ。じゃあ、入会しにギルド会館へ行こう」

マコトが呟くのと同時に、その男も似たようなセリフを口にして、驚いたように後ろを見た。すると真後ろに人が立っているのだ、男はかなり驚いて飛び上がった。

「なっ！」

「マコ、若干違ったけど、誤差の範囲内ね」

綾香は苦笑交じりに言うと、ドワーフの女の子に優しく微笑み諭す。

「お嬢ちゃん、駄目よお。『いい』って言葉は、肯定にも否定にも取れるの。学校で習わなかったかしら？」

「『いい』って、相手次第でどちらにも転がる便利な言葉なんだよね」

「嫌な時は『お断りします』が正解ですよ」

綾香の言葉にマコトが続け、最後に蘭丸が締めくくった。

キョトンとしていた女の子は、「は、はあ……」と困惑げた。

「おまえら、誰だ？」

男は不審な様子で三人を見たが、マコトは人好きする笑みを浮かべて男に話しかけた。

「あのさ、おせっかいだとは思っただけど、情報は正しく教えてあげなきゃいけないと思うんだ。湾曲した情報ばかりだと女の子に嫌われちゃうよ？ 詐欺師さん」

「誰が詐欺師だっ！」

怒りだした男。

綾香はそんな男の様子に「小物ねえ」とクスクスと笑いながら教えてあげるのだ。

「あらあ？ 詐欺師じゃなきゃなんなのよ。『ギルドを強制的に脱退させない』なんて、ウソよ。誰もそんなこと出来ないわ」

「それとも、『詐欺師さん』は、そういうギルドを知ってるんですか？」

蘭丸まで詐欺師呼ばわりして畳み掛けた。

「っ……！」

悔しそうに唇をかみしめる詐欺師男。忌々しそうに三人をじろりと睨んだが、三対一では分が悪いと「くそっ！ 覚えてるよっ！」と叫び、走り去って行った。

「大丈夫ですか？」

蘭丸は、どうなっているか分からないと云った風に戸惑っている女の子に声をかけた。

「あ……ありがとうございます？」

「えっと、なんで疑問形かな？」

小首をかしげてお礼を言う女の子に、マコトも困ったように眉尻を下げた。

「立石に水って感じ、色々言われても分からないわよね」

綾香は面白そうに言って、先ほどのやり取りを思い出したのか急に笑いだした。

「ぶくくく。詐欺師だって……マコ、最高っ！」

笑い続ける綾香を困ったようにチラリと見たマコトだったが、放置しておくことに決めたらしく蘭丸と顔を見合わせ「どうしようかと呟いた。

その様子を見ていた女の子は、「もしかして、助けてくれたんですね」と呟くとピヨコンとお辞儀をした。背中の三つ編が彼女に合わせて一緒に跳ねる。

「ありがとうございます」

「いや、そんなに改めて言われることでもないけど」

「でも、ギルドに入っておいた方がいいってのは、正論だと思いますよ」

蘭丸は丁寧に彼女に告げた。

「見たところ、まだ始めたばかりでしょう？ 分からないことばかりだと思っんですよね」

「それは言ってるわ。右も左も分からず、この騒ぎでしょ。一人でいるよりも何処かのギルドに所属して、教えてもらった方が断然いいわよ」

蘭丸の言葉に綾香も頷いた。そんな二人の言葉に、マコトはハッとして慌てて女の子に言うのだった。

「って、別に僕らのギルドに誘ってるわけじゃないよ。でもね、やつぱりレベルが低いと危ないから、ね」

少女の目線に合わせて、腰をかがませて優しく諭すマコト。そんなマコトの姿を綾香は微笑ましそうに見ていた。

「じゃあ、お嬢ちゃん、気を付けてね」

「悪い人に捕まらないように気を付けてくださいね」

綾香と蘭丸は手を振って小道の方へと戻って行った。マコトも後を追おうと「気を付けてね」と手を振って歩き出した。

「ま、待つてください」

慌てて少女は、マコトの服を掴んだ。

「ん？」

マコトが振り返ると、ためらう様に一瞬口を閉じた少女は、ごくりと唾を飲み込むと、緊張した面持ちで言った。緊張のしすぎで、少女の顔は真っ赤だ。

「あ、あの……ご迷惑じゃなければ、あなたたちと同じギルドに入ってもいいですか？」

「えっ？」

マコトはギョツとして、助けを求めるように前に歩く二人を見た。綾香は微妙に顔を曇らせて、蘭丸はキョトンとしたように少女を見て呟いた。

「でも……このお二方と私、ギルドが違うのですか？」

「えっと、それに別にうちのギルドに入って欲しくて声かけたんじゃないよ？ 逆にうちのギルドってば人数が1桁の弱小も弱小、極小ギルドだよ？ ある程度の規模の方が安心なんじゃないかな？」

マコトも言い訳するようにワタワタと喋り出した。

「で、でも……」

捨て猫のようなさびしそうな眼差しにマコトは音を上げて、綾香の方に助けを求めた。マコトはギルド内での発言力なんて無いのだ。逆に、綾香が了承すれば一発で決まってしまう。

「どうしましょう。一葉先輩に掛け合いますか？ きつと一葉先輩だったら 銀杏工房 で引き受けると言いだしそうですか……」

恐る恐る綾香に申し出る蘭丸。差し出がましいと分かっているため、腰が引けていた。

「ん……」

綾香は目を閉じて考えた。

（蘭丸が手伝ってくれるだけでも破格なのに、材料付きでしょ……
これで新人の世話まで押し付けちゃったら、あとで何を言われるか
分かったもんじゃないわね。新人……新人の女の子、かあ）

ため息一つ。ちらりと少女に目を移せば、頼りなさげな視線に過去のトラウマがチクチク刺される。それでも、助けを求める視線を跳ね除けることなんて出来なかった。

「……他に入りたいギルドができたなら正直に言うこと。裏切ったなんて思わないこと。最初に入れてもらったからって義理立てするこ
とないから、分かったかしら？ ギルドなんて、そういうものじゃないんだから」

（あちからから逃げて行く分には、私は構わないんだから……）
目を伏せ告げた言葉は、どちらにとつての逃げ道だろうか。
「本当ですか」

泣きそうな顔から一転、嬉しそうな顔をする少女。

「姐さんの言う通りだよ。ギルドに縛られることは無いからね」
とりあえず念を押してみれば、少女は元気に「はい！」と答えた。
（分かっているのかなあ……）

そう心配したとき、「ん？」とマコトは思い当たった。

「僕らつてば、お互い名前も知らないよね。僕はね、マコトって云
うんだ」

にっこり笑って名前を告げるマコトに、女の子もはっとしたように目を丸くした。

「あつ、私……ビオティーテです」

「ヨロシクね。ビオティーテ」

にっこりとマコトが笑いかけると、ビオティーテは少し赤くなつて慌てて頭を下げた。

「よろしく願います、マコトさん。えつと……」

困ったように上げた頭を綾香に向けた。綾香は艶やかに笑うと、自分の名とギルド名を告げた。

「わたしは綾香よ。遊色の雫 へようこそ、ビオティーテ」

「綾香さん、よろしく願いします」

「姐さんがギルドマスターなんだ。逆らわないようにね」

「からかい交じりに言うマコト。綾香やマコトが挨拶をする中、お
ずおずと蘭丸もビオティーテに声をかける。

「私は違うギルドですが…… 銀杏工房 の蘭丸です」

「蘭丸さんですね。よろしく願いします。えっと、 銀杏工房
ですか？」

首をかしげるビオティーテに、マコトは説明を付け加えた。

「僕たちは 銀杏工房 と仲が良くてね……」

「別に仲が良いとかじゃなくて、持ちつ持たれつの関係なのよ」

「 遊色の雫 の皆様には、とてもお世話になっているんですよ」
綾香はマコトに注意したかと思うと、蘭丸がビオティーテに説明
するのだった。

そうして、新しい仲間と共にギルドハウスへと行く一行だった。

一期一会！ 異世界で新人獲得？（後書き）

今までで一番長いような気がします。

いつもこのくらい書ければいいのですが（汗っ

一国一城？ 異世界での我が家作り！

ギルドハウスはブラウニーのおかげで、一部を除き綺麗になった。階段の白い壁は鳶の隙間から零れ落ちてくる光を反射させたので、薄暗い階段部分は以前よりも明るくなっていた。己の仕事に満足したブラウニーはひと仕事を終え、クリスティーナと共に屋上で日向ぼっこに勤しむ。

（ご主人様、すごい喜んでくれたなあ）

ほくほくと喜びながら、暖かい日差しの中、ご褒美に貰ったリングをシャリシャリと食べているブラウニーの隣には、クリスティーナがゴロンと大の字で寝転んでいた。

「いい天気なお」

ポカポカ陽気に、木漏れ日から落ちてくる優しい光。さわさわと枝葉を揺らす風は気持ちよくて、クリスティーナは何時の間にかうとうと転寝うつたねを始める。

さて、マコトと綾香が蘭丸を迎えに行っている間、アズライトは調査台や裁縫台を購入する為、職人の訓練所へ行っていた。職人の訓練所の施設内には各サブ職業の作業台が売っている。今回綾香が使う調理台をどうするか悩んだのだが、「結局は湿気た煎餅しかできないんですよ」という綾香の言葉により、調理台は購入しないことにした。

一方マーナガルムはというと、倉庫と化した車庫から使えるものがないか探していた。もちろん明りがないので、クリスティーナが呼びだした光の精霊リユニールがパタパタと飛びまわって辺りを照らしていた。ブラウニーは手当たり次第、車庫こくに物を放り投げたのだろう。昨日は壊れていなかった物まで拉ひきちぎげて使い物にならなくなっていた。「確かに上は綺麗になったけど、いらない物を一か所にまとめただけじゃないか」

ため息交じりに呟くが、見える所だけでも綺麗に掃除をしてくれ

ただけでも助かったと思っっているので、文句も言えなかった。

「これ……何に使ったんだ？ 車止めか？」

大量のレンガが壁際に積まれてあり、不思議そうに手に取ったマナーガルド。なんでこんな所に大量のレンガがあるのか分からなかったが、かまどを作る材料に丁度いいだろうと思い、手に取ったレンガを戻した。

他には何かあるかと辺りを見回すが、スチールディスクの残骸だとか、大量の折れ曲がった折りたたみ椅子だとか、使い物になりそうなのは無かった。

「壁材に使える奴があつたらよかったんだけどなあ……」

残念そうに呟くが、もともとは事務所の備品である。そんなに都合よく様々なものがあるわけなかった。

「壁に必要なのは、木と釘か……あとで収集してくるかな」

ブツブツと呟きながら、とりあえず屋上にかまどを作ろうとレンガを背負い袋の中に入れて、屋上まで持っていくマナーガルド。

屋上に着いたマナーガルドは、屋上でうとうとと昼寝をしているクリステイナーを尻目に、メニュー画面でレンガを選択すると『大工道具』を片手に実行キーを押し『かまど』を出現させるのだった。かまどの中を興味深そうに眺めるブラウニー。恐る恐る中に入ったかと思うと、フンフンと鼻を動かし、中から外を眺めていた。

「ウニー。それ、ウニーのお家じゃないよお」

昼寝から目が覚めたのか、ふわあつと欠伸をしながらブラウニーに注意したクリステイナー。ぐつと背を伸ばすと、ブラウニーとリユミエールの二体の召喚を解除した。ポムツと煙と共に消えていくブラウニー。ココからは見えないが、倉庫の中のリユミエールも消えたのだろう。

「やっぱり二体召喚はMP消費が激しいなお」

昼寝から目が覚めたばかりだと云うのに疲れたように呟いたクリステイナー。

「お掃除用のメイドさん雇ってくれないかなあ？」

「そんなに金ばかり掛けるなよ。いくら今、使うことがないっていったって、そのうち生産系ギルドあたりから商品が出てくるだろうし、そんなときに『使わなきゃ良かった』ってなったら悲惨だぜ」

マーナガラムが呆れたように言えば、クリスティーナは「そのうちっていつなのお」と顔をしかめて呟いた。

「そのうちっていったら、そのうちだろう。さて、あとはドラム缶でも見つけてくれれば簡易風呂でもできっかな」

「レシピあるのお？」

ぼそりと呟いたクリスティーナの言葉に、「うつ」とマーナガラムは言葉を詰まらせた。

「レシピないんじゃない、作れないじゃん。流石お間抜けガルガルなのお」

口元に手を当て、片目を閉じて、ふわあっとまた欠伸一つ。

階段室の方から音が聞こえ、クリスティーナは口を開けたまま、ちらりと横目で階段室を確認すると、すりガラスの向こうに黒い影が揺れた。

「ああ、ココに居たっ！」

階段室の扉が開き綾香が屋上に来た。綾香の後ろにはマコトと蘭丸が居るのだろう、動く影が見えた。

「おつかえりい」

ひらひらと手を振りながらクリスティーナが言つと、綾香は「リユミエール消したでしょう」と肩をすくめながら尋ねた。

「倉庫から明りが洩れてたから誰かいるのかなあって覗いた途端、リユミエールが消えちゃってビックリしたわ」

「ありり……ゴメンなお。ガルガルが屋上に来たから、誰もいないからいつかって思ったのお」

悪びれもせずのほほんと答えるクリスティーナ。綾香は「まあいいわ」と呟くと、後ろに向かって「早くいらっしやい」と声をかけた。

「ん？ 蘭丸か？ よく来たなっ」

マーナガラムが声をかけると、綾香の陰に隠れていた小柄な人物はビクツと身体を竦ませた。

（ん？ 蘭丸にしては小せえな……）

「馬鹿ガラムつ。ビククリさせないでよ。怯えちゃうでしょっ

ああ、大丈夫だから、こっち来て。今の大声出した馬鹿も仲間なの。紹介してあげるわ」

前半部分をマーナガラムに怒鳴り付け、後半部分は優しい声で語りかける綾香。

「は、はい」

小さいながら女の子の声が聞こえて、マーナガラムとクリスティナは顔を見合わせた。

「誰かいるのあ？」

クリスティナが疑問の声を上げたのと、綾香の後ろから黒髪の女の子が現れるのはほぼ同時だった。

「この子はビオティーテ。見ての通りドワーフの女の子で、遊色の雫の7人目のメンバーよ。ビオティーテ、男の方がマーナガラム、もう一人はクリスティナ。それぞれ90レベルだから、あなたの大先輩ってところね」

ビオティーテと紹介した少女の肩に両手を乗せ、二人に押し出しながら簡単に紹介する綾香。ビオティーテという少女は、助けを求めるように綾香を見ていたが、紹介を聞くとマーナガラムとクリスティナをおどおどと見つめた。黒目がちの瞳が、不安そうに揺れている。

「へっ……」

「よ、よろしく、なのあ？」

呆然と呟く二人に対し、ビオティーテは緊張してガチガチになりながら勢いよく頭を下げて挨拶するのだった。

「ビオティーテと申します。よ、よろしく、お願いしますっ」

「ビー、そんなに緊張しなくて大丈夫だよ」

後ろから来たマコトが笑いながら言うと、「でも……」と不安げ

に振り返るビオティーテ。頭の動きに合わせて背中では三つ編が揺れた。

マコトの後ろに居た蘭丸が屋上に出てくると、その屋上の景色の素晴らしさに「おおっ！」と歓声を上げる。そして、きよろきよろと興味深そうに辺りを見回した。

「さあつて、蘭丸。作業台出して、出してっ。さつさと家具を作ってもらわなきゃ……一葉の背負い袋は、出来あがった家具を入れて下に持っていくのに使いましょ」

呆氣にとられるマーナガルム達を無視して、綾香は蘭丸に家具作りをお願いするのだった。

「あの……」

何をしていいか分からないのか、おずおずとビオティーテが綾香に声をかけた。

「ビーは、お掃除手伝って」

マコトがビオティーテに話しかけると、ビオティーテはビクツと身体を揺らした後、ホツとしたように表情を緩ませてマコトの方に振り返った。

「あのね、一階に倉庫があるんだけど、凄いことになってるらしいから、その片づけをしちゃおうよ」

につこりとマコトがそう言うのと、ふわりと微笑んで頷くビオティーテ。二人が連れだつて一階に行こうとすると、クリスティーナは耳をぴくぴく動かしながら飛び上がった。

「クリスも行くっ！ 手伝いのお。マコマコ、ビオっち待てなのお」
器用に階段の手すりを滑り降りていくクリスティーナ。階段から賑やかな声が聞こえ、徐々に小さくなっていった。

綾香は、作業台を組み立てる蘭丸の作業を見ながら、「何を作ってもらおうかしら」と呟いた。

「まずは、人数分のベッドかしらね」

「どんなベッドが良いですか？」

「ええっ！ どんなつて、そんなにいろんなベッドがあるの？」

蘭丸の答えに綾香が驚くと、苦笑する蘭丸。

「当たり前じゃないですか。二段ベッドに、ロフトベッド。ヘッドボード付きベッド、収納機能が付いてる物までありますよ」

「うわぁ……そうなると、レイアウトから決めないと作れないわね」綾香は悩みだした。その真剣な姿に蘭丸はにっこり笑う。

「存分に悩んでください。作るのは一瞬ですからね」

「それじゃあ、テーブルとか椅子も種類って結構ある？」

おずおずと尋ねる綾香に、蘭丸は「もちろん」と楽しげに答えた。マーナガラムは、悩みこんでいる綾香の腕をがしつと掴み、蘭丸から離れたところまで連れて行くと耳元で囁いた。

「大丈夫なのかよ？」

綾香は一瞬ギクツとしたように目を見開いたが、次の瞬間にはムツとしたように目を細めて言い放つ。

「何がよ」

「何がって……あいつ、新人だろ？ 声からしてもプレイヤーは女だろ？」

「……クリスだって平気だったじゃない。大丈夫よ」

「おまつ……クリスが平気って云ったって、あいつは男だし、中堅になってからだろ知り合ったのは」

「もう、じゃあ、放りだせる？ 変なギルドに捕まりそうだったあの子のこと」

綾香は掻い摘んで先ほどの一件をマーナガラムに話し出した。悪質なギルド勧誘に対する噂は、少しは聞いていたのだろう。マーナガラムは聞いているうちに険しい顔になっていた。

「一葉に頼んじまえばよかったのによ」

「いやよ。蘭丸を派遣してきてただけじゃなくて、材料付きよ。これ以上あちらに何かしてもらったら、とんでもないことになるわ」

ぷいっとソツポを向く綾香。マーナガラムは困ったように頬を掻きながら「でもよぉ……」と呟いた。

「いいの。私が決めたんだから」

きつぱりと言い放つ綾香に対し、マーナガルムはため息をこぼすと尋ねた。

「先生には？」

「二階で作業台を設置してたから、紹介してきたわ」

「違っ！ そっじゃなくて、アズ先生は何て言ってるんだ？」

綾香は押し黙る。確かにアズライトにビオティーテを紹介した時、若干迷うような、確かめるような眼差しを綾香に送っていたのだ。それを思い出すと言葉がなくなる。

その姿にマーナガルムは「やつぱり」と呟いて、責めるように言った。

「反対したんだろ？ だったら……」

「……わたしのっ！」

マーナガルムの言葉を叫ぶような声で遮ったが、蘭丸が驚いてこちらを見たことに気付くと、慌てて引きつったような笑顔を作る。

「なんでもないわ。作業つづけて」

小さく手を振りながら、蘭丸に声をかけた。そして、マーナガルムの近くに寄り、口元に手を当てると小さな声で囁く。

「わたしの、好きにしていって言われたわ」

綾香の答えを聞くと、マーナガルムは顔に手を当てて空を仰いだ。

「あの先生も……ったく、知らねえゾ。どうなっても」

「大丈夫よ」

にこりと作り笑いを浮かべ言い切る綾香に、マーナガルムはため息をついた。

「マコトを紹介してきた時は、やっと元の、おせっかいじみた綾姐に戻ったって喜んで、心配はしなかったんだ……でもよ、今回のピオなんたらの場合、助けたことは綾姐らしいよ。綾姐らしいけどさ」
そこでマーナガルムは一旦区切ると、ぎゅっと唇を結んだ。

紹介された黒髪のドワーフ娘の姿を思い出す。おどおどとした娘のぱっちりとした大きな目が不安そうに揺れいて、マコトに声をかけられた時のホッとした表情、こちらを窺うような視線……庇護欲

を誘うような仕草は、昔の友人を思い出してしまい、苦い気持ちで心を満たす。

マーナガラムはジツと足元を見ると、しばし逡巡したあと、苦しげに呟いた。

「折角居心地のいいギルドをさ……泥沼にしたくないんだよ。もし、あんときみたいになりそうだったら、先生や綾姐が何て言ったって、ビオなんたには出てってもらうからな」

そう言い捨てると、綾香の肩をポンと叩いて、蘭丸と言葉をかわしながら二人で階下へと行くのだった。

「分かってるわよ。そんなこと……」

屋上で一人、こうべを垂れて立っている綾香は、ポツンと呟いた。

この日、蘭丸の頑張りもあって、たくさんの家具が作られた。人数分のベッドにテーブルや椅子など、蘭丸が作ったさまざまな家具が部屋に配置され、遊色の雫の面々は今晚からギルドハウスで生活できるようになり、アズライトはシデンの酒場の解約をしてきたのだった。

三階の女性部屋は、クリスティーナの趣味で全てカントリー調に揃えてあった。クリスティーナは、自分好みの可愛いカントリー調のベッドに大満足だった。

「蘭々、ありがとなのお。感謝なの。びゅーていふおなの」

出来あがりを見た時にそう言ってクリスティーナは蘭丸に抱きつき、蘭丸を慌てさせた。

蘭丸がたくさん木材を持ってきたので、マーナガラムが全ての部屋の壁を木目調にリフォームし、武器をかけるフックなどを取り付けた。

三階の女性部屋では、入口から近いところに小さなテーブルと椅子を置いた。窓に近い壁にはローチェアを並べ、中央より奥寄りに二段ベッドを設置し、一番奥はロフトベッドを置いた。ロフトの下はチェストにした為、たくさん収納ができる。綾香は、ギルド会館

の貸金庫から衣装を持って来て、そのチェストに入れようと思っているのだ。

ちなみにクリスティーナは二段ベッドの上、ビオティーテが下、綾香がロフトベッドを使うことになっている。ベッドは四方にカーテンを取り付け、中が見えないように工夫していた。

「ふふふん」

クリスティーナはご機嫌に鼻歌を歌っていた。マコトに作ってもらった敷布団は心地よい固さだし、フワフワの掛け布団と枕のカバーの柄は愛らしい苺柄だ。ちなみにビオティーテは小さな薔薇が散りばめられた乙女チックな柄だ。綾香は薄い緑地に淡い色合いの蔦が描いてある柄を選択した。

実は綾香は「寝る時しか使わないから無地で構わない」とマコトに言っていたのだが、それを聞きつけたクリスティーナから散々「地味」だの「可愛くない」だの抗議され、諦めて無難なリーフ柄にしようと妥協したのだった。

「寝ればいいんじゃないの？」

疲れたように呟いた綾香に、クリスティーナは「綾さんはロマンチックさが足りないなお！」と力説されてしまった。

「何も、全部カントリー調にしなくても良かったんじゃない？」

呆れたように綾香は言うが、綾香自身は家具にこだわりは全く無い。クリスティーナが拘るなら好きにすればいいと云ったところだ。要はちゃんと使えればいいのだ。

「すごい、素敵です」

やはり女の子というべきか、ビオティーテは夢見心地な表情でうつとりとカントリー調の家具を見つめていた。

「女の子の憧れって感じです」

言い切るビオティーテ。収納スペースに自分の背負い袋の中身を入れていた綾香は不思議そうに呟く。

「そう？」

「そうなのお」

綾香の呟きが聞こえたのだろう。力いっぱい肯定するクリスティーナ。

「そんなもんなの？」

「そんなもんなのぉ！」

さっぱり理解できないと綾香は、それでも下手に言い返すと何倍にもなつて返つて来るのは分かっているので、軽く首を振って荷物を片付けるのだった。

さて、二階の作業室スペースは窓側に調香台と裁縫台を並べて置き、収納をたくさん作つた。また、マーナガラムは奥の給湯スペースを少し広げ、材料などが置けるよう棚のある小部屋に改装した。

小さなローテーブルとベッドにもなるソファを置いて休憩スペースを作ると、もう場所が無くなつてしまったため、四階を入口近くと奥と二つに区切り、入口近くに会議スペースを設けることにした

会議スペースといっても、テーブルと人数＋分の椅子があるリビング的なものだったが。

ちなみに、四階の奥には二段ベッドを二つ置き、天井までの高さのある戸棚を中央に近いベッドにピッタリくっ付けて壁代わりにした。男性陣の荷物は作業室に収納を作つて、そこに仕舞うことにしたのだった。

「これでなんとか形になりましたね」

全て終わるとアズライトは、裁縫台に突っ伏していたマコトに声をかけた。

蘭丸は全ての家具を作り終わると、銀杏工房のギルドホールへ帰って行つたので、今このビルの中に居るのは遊色の雫のメンバーだけだった。

「布団やクッション、カーテンなど大物を作つたので、絹玉や綿花の在庫が殆ど空になっちゃいましたよ」

マコトは疲れたように呟いた。流石に、次から次へとアイテムを作っていると目の奥が痛くなってきた。なにしろクリスティーナのこだわりが凄かつたのだ。

「あと、草花や木の実の在庫も無いなあ……クリスの指定が細かったから、たくさん使ったもんなあ」

マコトは身体を起こし、ぐうっと伸びをして、肩を叩いた。

「お疲れ様です。しばらくは大物を作ることは無いと思いますが、今度フィールドに行ったときに収集してきますよ」

アズライトが慰めるように言うと、マコトは口元に笑みを浮かべ「お願いします、アズライト先生」と呟いた。

「ライライ、マコマコ」。夕飯の果物、何が良いのお？ 早く来ないと無くなっちゃうよ」

入口の扉が開き、賑やかなクリスティーナの声が作業室に広がった。

この日の夕食、遊色の雫のメンバーたちは、ギルドハウス完成のお祝いと新しく加わったビオティーテの歓迎を合わせた果物だらけの宴を開くのだった。

そして、異世界に来てから四日目、遊色の雫のギルドハウス初日の夜が更けていった。

拳拳服膺？ 異世界生活の心得？

次の日、朝食の果物を並べた真新しいテーブルの周りには、リラックスした服装のメンバーが思い思いの格好で座っていた。朝食を食べながらの議題は、今日の行動について。

出した結論は、綾香達は材料収集兼バイオティーテのレベルアップを目的に、フィールドに出て戦闘すること。ちなみに、バイオティーテに確認したところ、こちらに来てからフィールドに出たことは無いらしい。

「戦闘を経験してみましょう。どちらにしてもメイン職業のレベルアップは必要ですからね」

にこにこ言い切るアズライトの言葉に、緊張しながら頷くバイオティーテだった。

「装備は、私のを貸してあげるわよ。使っていない防具もたくさんあるし……^{ビキニ}下着も貸金庫から持って来てあるから、好きなのをどうぞ」
「クリスもお気に入り以外だったら、好きなのをあげるのよ」

綾香とクリスティーナの言葉に、嬉しそうに笑うと「ありがとうございます」とお礼を言うバイオティーテだった。

そんなバイオティーテを見て、「いい気なもんだな」と口の中で小さく呟くマーナガルム。

「えっ？」

こちらを見てきたバイオティーテに対して、ぶっきらぼうに告げるのだった。

「戦闘中は悲鳴とか大声を出すなよ。あと、敵に攻撃しようとするな。邪魔だし、気が散るからな」

そんなマーナガルムを見て、アズライトは仕方がなさそうに苦笑する。

バイオティーテを見てみれば、マーナガルムに怯えて小動物のようにビクビクしている。助けを求めるように綾香に視線を移すバイオテ

イーテに、マーナガルムは小さく舌打ちをし、さらにビクリと肩を揺らし怯える少女。アズライトはため息をこぼしそうになるが、ぐっと抑えてバイオティーテに優しくアドバイスした。

「戦闘中は木の陰にでも隠れていてください。私達はこの辺りのモンスターを倒しても経験値は入りませんが、貴女は違うでしょう？それに貴女のレベルアップも目的ですが、貴女が戦闘の雰囲気慣れることも目的なんです。敵を倒すのは私達に任せてください」

「は、はい」

こくこくと頷くバイオティーテ。マーナガルムは余計なことを言いたげにアズライトを睨むが、気付かないふりをする。

（貴方みたいに、八つ当たりするだけでは逆効果なんですよ）

アズライトはそう思いながら、マコトに言葉をかける。

「今日も 銀杏工房 でアルバイト、よろしくお願いしますね」

アズライトの言葉にびつくりして「ええっ！」と声を上げるバイオティーテ。

「マコトさんは、一緒にフィールドに行かないんですか？」

「あ……」

バイオティーテの言葉に対してマコトは申し訳なさそうに眉尻を下げた。

「マコ君は優秀な 裁縫師 ですからね。 裁縫師 が足りない

銀杏工房 からマコ君の手を借りたいと要望があっただですよ」

にこにこ微笑みを浮かべ説明するアズライト。バイオティーテはそれを聞くと「マコトさんって凄いですね」と尊敬のまなざしを送った。

「い、いや……そんなことないよ」

バイオティーテの視線に居心地が悪くなるマコトだったが、アズライトは気にした様子もなく「そろそろ準備をしましょう」と朝食の終わりを告げるのだった。

女子部屋では、綾香とクリスティーナが防具や下着^{ヒキニ}を見せあい、

ビオティーテに「好きなを選んで」と広げていた。

「これは、森や林みたいに木のたくさんあるところで防護力アップの効果があるタイプのチェニツクよ」

「この下着は魔法耐性があるのぉ」

綾香が緑色のチェニツクを持つてくれば、クリスティーナが薄紫色のビキニを持つてくる。テールの上は様々な色の服で賑やかだ。

「私……マーナガラムさんに嫌われているんでしょうか？」

ビオティーテがポツリと言葉を漏らした。綾香とクリスティーナは「えっ？」と手を止めて椅子に座るビオティーテの方を向く。

「なんだか、私……歓迎されてないみたいで……」

小さな体を縮こませて、椅子の座面に両足を抱えて座り込む姿は哀れさを誘う。綾香とクリスティーナは何と答えていいかわからず顔を見合わせた。

「確かにガルガル、いつも変だけど、昨日から更に変なのぉ」

「ん……嫌われてるわけじゃなくて、まだ慣れないだけじゃない？」

綾香は心当たりがあるため、少しばかりマーナガラムをフォローしてみた。

「もてない男は、女の子の扱い、不得手なのぉ」

うんうんと頷きながらマーナガラムを扱下ろすクリスティーナ。その言われように少し同情しながら、綾香はビオティーテに言うのだった。

「気にしなくてもいいと思うわよ。あれで、フィールドに出れば頼りになるし」

「でもっ」

「深く考え込まないで？ ねっ」

綾香の言葉に浮かない顔ながらコクンと頷くビオティーテ。

「私……ここを追い出されちゃったら、どこ行っていいいかわからないんです」

目に涙をためて綾香を見つめるビオティーテ。座っている彼女は

立っている綾香を見上げることに必然的に上目遣いになる。

その頼りない表情に綾香はギョツと抱きしめると、あやすように髪を撫でた。

「大丈夫よ。私が追い出すわけじゃない。ねっ、元気出して」
クリステイナは、何かを考えるように二人の姿を見ていたが、開けていたローチェストの引き出しを仕舞い、すくっと立ち上がった。

「クリス？」

「『ティッシュ』、マコマコに追加で貰うの忘れちったの。行ってもらってくるなの」

「あら、行つてらっしゃい」

「ビオっち、くよくよ悩まず、フィールド行く準備しとけなの」
にかつと笑うとクリステイナは勢いよく部屋を飛び出して、階段を駆け上った。

クリステイナが出て行くのを見ていた綾香とビオティーテだったが、「さて、どれを着ましようか？」という綾香の問いに、二人で装備を選んでいくのであった。

階段を駆け上ったクリステイナは、四階の扉の前で風の精霊シルフィードを召喚して、誰かが四階の扉に触れたら知らせよう命じた。シルフィードは了解したとクルクルと回り、扉のノブに腰掛けてクリステイナにウインクする。

「よろしくなの」

こそつと囁いて、そつと音をたてないように四階の扉を開く。ブラウニーが油を点さしてくれたおかげでスウつと扉は開き、こそつとクリステイナは部屋に入る。奥の方からマーナガラムとアズライトの声が聞こえた。

どうやら好都合なことに、マコトは下の作業室で 銀杏工房 へ持っていく物を準備しているらしい。物陰から男性陣のベッドルームをのぞき込み、クリステイナは二人しかいないことを確認する。

二人ともそれぞれベッドに座って作業していた。アズライトは能力値補正のある指輪を選んでるようだ。マーナガルムは入口近くのベッドに居るため、良く見えない。枕元に置いた箱の中を見るアズライトの眼鏡が、窓から入った光を反射して光った。

「ガルム君、あれでは逆効果ですよ」

アズライトの声に、すつと物陰に隠れるクリスティーナ。そつと聞き耳を立てる。

「ああ？」

苛立ったような不機嫌なマーナガルムの声。

（ホント、機嫌が悪いんだね。新人さんにもバレバレだなんて、かつこ悪いのお）

クリスティーナは声を出さないように笑いながら、耳をぴくぴくさせた。

「新人さんのことです。あんなに怯えさせては、綾に依存するに決まっています。なんといっても、このギルド内で立場が一番強いのは綾なんですから」

「んなこと言われたって……」

苦々しい口調のマーナガルム。

「また、あんときの二の舞になるかと思うと、な……」

マーナガルムの言葉に呆れたような口調でアズライトが返した。

「ならないかもしれないでしょう。別に今までギルドに入れなかっただけで、似たようなトラブルは有ったのですから」

アズライトの言葉に驚いたのか、びっくりしたようなマーナガルムの声が響いた。

「……あつたのかよ」

「ありましたよ。知りませんでしたか？」

あつさりと言い放つアズライト。マーナガルムは気落ちしたように呟いた。

「気付かなかった。」

「困っている女の子を見捨てておけない綾が、困ってる女の子を助

けて、その子が綾に依存しかけて、ギルドに入りたいと押しかけられて……こちらに来られても面倒なので、適当に合いそうなギルドを紹介してそちらに流れるようにしましたから」

（っ！！！！！）

驚きに声を上げそうになり、クリスティーナは慌てて口を押さえた。

（なんだその真っ黒黒助はっ！）

「……その紹介つてとこに、黒い糸が見えてくるのは気のせいかな？」
クリスティーナと似たようなことを感じたのだろう、マーナガルムは聞きたくなさそうに問い返した。

「気のせいでしょう。たまたま、紹介したギルドに好みのタイプが居たり？ たまたま、ギルド外の人とパーティを組んで遊んだときに口説かれて、その口説いた人のギルドに入会したり？ たまたま、PKの時に別のギルドの人から助けられたり？ そんな偶然が多々ありましたけどね」

にこにこ微笑みながら思い出すように具体例を上げるアズライトに、マーナガルムはため息をつく。「もういい。具体例は必要ない」と首を振った。

（とんだ策士だなのお。もともと真っ黒な人だとは思ってたけどお……）

クリスティーナはこのギルドの中で一番敵に回してはいけない人物だと再確認した。

「……全部、お前が仕組んだんだろ。なんだよ、そのPKって」
疲れたように言ったマーナガルムだったが、本当は答えなど期待していなかったのだろう。

しかし、アズライトは気にした風もなく、淡々と答えた。

「PKも知らないんですか？ プレイヤーキャラクターから襲われることですよ。お金やアイテムを奪われるのですから、襲われた方は堪ったものではないですね」

「違う、PKのこと自体は分かってるよ。プレイヤーキラー、つま

り追剥みたいなやつらのことだろ」

「知ってるじゃないですか」

驚いたように言うアズライトに「タヌキがつ」と毒付くマーナガルム。

「綾姐に付きまとってたヤツが、なんでPKされて、しかも都合よく助けられるんだよ」

頭じゅくを垂れ、両手で頭をガシガシと掻きむしりながら言っているのだろう、声がぐぐもった。

（もちろんライライのことだから、ハラスメントに当たらないように白馬の騎士を抱き合わせ販売したんだろおなあ……ライライの名前なんて、どこ探しても出てこないだろうから運営者側に通報されたとしても、ライライにとっては関係ないんでしょあ？ あゝあ、やっぱり黒助なのお）

ふりふりと動くしつぽを掴み、見つからないように隠れながら、そんなことを思っているクリスティーナの耳にアズライトの声が入ってきた。

「不思議ですね。神様は日ごろの行いを見てくださるんですよ」
につこりと微笑みながら言っているだろうアズライト。

そんなアズライトの姿に言葉を無くしたマーナガルムだったが、ハツと気が付いたように「これまでのことはいいんだよ」と話を戻した。

「ビオなんたら、どうするんだよ」

マーナガルムの問いに、アズライトは「ビオティーテ、ですよ」と訂正して、につこりと答えた。

「鍛えますよ。当たり前じゃないですか。泣いても吐いてもフィールドに連れ出して、強制的にレベルアップしてもらいます」

「強制的に、レベルアップ、ねえ」

疑わしそくにマーナガルムは呟いた。あの気弱そうなお嬢ちゃんが、自ら進んでフィールドに立つとは思えないのだ。

マーナガルムと同じことをクリスティーナも思っていたが、アズ

ライトはクスツと笑うと冷酷な声で告げるのだった。

「してもらわないと困るんですよ。言っただでしょう？『泣いても吐いても』って。綾が何と言って来ても、こればかりは綾を宥めずかせて実行しますよ。」

そして、ある程度育ったら、出荷します。他のギルドからは是非にと言われれば、綾だって断れないでしょう？ ついでにあのお嬢さんからも移籍したいと言わせられれば恩の字ですね」

「しゅっ……え、笑顔で言うセリフか？」

マーナガルムはフィールドに出る前から疲れてしまったようだ。そう、主に精神的に。

「別に綾が拘らなければ、今すぐに放逐しても構わないんですけどね」

そんなことを言つてのけるアズライト。話している間に準備が終わつたらしい、最後の仕上げとばかりに靴紐を結ぶ音が聞こえた。

（情報、盗み聞きでもらえるのもココまでかな？）

クリスティーナはそう判断するとコンコンと棚をノックする。その音に驚いたのか、マーナガルムとアズライトは顔を見合わせる。

「ふつたりつともつ、男同士の秘密話は、もつと小さな声でした方が良いと思うのお」

「クリス……」

アズライトとマーナガルムの声が重なった。

「聞いちゃった」

テヘツと小首をかしげて、クリスティーナがニコツと笑う。

「なんか、ガルガルの様子が可笑しいし、ライライも微妙にピリツとしてるしい、気になったからきてみたら、ふたりでおもしろい話してたのお」

「……何が言いたいんだ？」

睨むマーナガルム。アズライトは笑顔の下でクリスティーナを窺っているようだ。

（敵になるか、味方に付くか、量ってるって感じなのお）

クリスティーナは、にこつと笑顔を顔に乗せる。

「ねえ、ガルガルが何でビオっちを目の敵にしてるのか、教えて欲しいのお」

ふいつと視線を反らすマーナガルム。ちらりとアズライトを横目で見てみれば、クリスティーナの視線を感じたのか、さあと肩を竦めていた。

「仲間はずれは酷いのお。そんなに仲間はずれするなら」

そこで言葉を区切り、アズライトの顔をじつと見つめた。

「今聞いたこと、全部綾やんに話ちまうなお」

にいつとクリスティーナは笑みを浮かべる。

「確かに、ガルム君と私の不注意、でしたね」

諦めたように手を開いて微笑むアズライト。その微笑みに奇妙な違和感を覚えるが、クリスティーナは違和感に目を瞑って、ベッドスペースに歩を進める。

「ねえ、教えてよ。キミらが、あの子を目の敵にする意味」
かたき

「そうですね……」

少し考えをめぐらすアズライト。じつとクリスティーナを見て尋ねた。

「クリスティーナ、貴方は エルダー・テイル を始めてどのくらい経ちました？」

「僕が始めたのは高校に入ってからだから……ん、5年？ いや6年、かな」

クリスティーナは指折り数えて答えると、マーナガルムの隣に座った。

「6年か……丁度、時期が被るな」

クリスティーナの答えに、ベッドの枕元から黒い指輪を取り出したマーナガルムは呟いた。彼は黒い指輪をじつと見つめて、「もう6年か」と呟いた。

（6年前？）

クリスティーナは記憶をたどる。自分が始めたばかりの頃、何か

あつただろうか？

「 宝玉の翼 の噂を聞いたことはありませんか？」

アズライトが静かに問いを投げかける。

「 宝玉の翼？ 」

オウム返しに呟いたクリスティーナ。少し考え込んで、「アイテムだっけ？」と呟いた。

「 たしか、女性だけが受けられるクエストでもらえるアイテム……あれ？ あれって、『 宝玉の羽根 』だっけ？」

当時まだ始めたばかりのクリスティーナは、エルダー・テイルのクエストなどを受けるにはどうすればいいのかわからなくて、攻略サイトなどを参考にしていた。クエストの中には、まだクリスティーナのレベルでは受けられないようなモノがいろいろあり、その中に性別や職業などの制約があるモノがあるのを知って驚いたものだ。

そしてその攻略サイトの中で『 宝玉の羽根 』を受け取ることできるクエストを知ったのだが、残念なことにレベルが足りず受けることができなかった。そのまま、忘れてしまい思いだした時には『 宝玉の羽根 』のクエストは無くなってしまったのだった。

「 よく覚えてますね。今は無くなってしまったクエストですが、『 宝玉の羽根 』というアイテムを得られる女性だけのクエストがありました」

アズライトの言葉に、クリスティーナは頷いた。

「 覚えてるよ。思いだして調べた時には終わってたんだもん」

「 その女性だけが持つ羽根が複数だから 宝玉の翼 なんだそうですよ」

「 えっ？ 」

クリスティーナはアズライトの言葉に目を丸くした。

「 そんなアイテムあったの？」

「 違う。女性だけが集まったギルド。ギルドの参加資格がプレイヤ―自身が女だってことなんだよ」

見当違いなところに着地したクリスティーナに対して、マーナガ
ルムが軌道修正した。

「アズ先生、回りくどいんだよ。説明が」

「ああ、すみません……どうしても感傷的になってしまっ
た。この話題は」

悲しそうな笑みを浮かべたアズライトは、目を閉じて説明を続
けた。

「綾が エルダー・テイル を始めてしばらくは、女性の参加者が
少なかったんですよ。もちろん、女性キャラはいましたよ。しかし、
プレイヤーが女性と言うと、かなり少なく……綾が大学に入っ
たころからでしょうか、自分の知り合いやその姉妹と女性だけの自衛
団みたいなものを作ろうと集まったんです」

「それが、 宝玉の翼 だな。シーも所属していた」

「……参加資格が女性なんでしょ？ 性質たちの悪いプレイヤーから狙
われそうなギルドだね」

一見女性だけが固まって安全そうだが、逆にそのギルドに所属し
ている人はプレイヤーが女だと宣言しているようなもので、危険こ
の上ない。

呆れたようにクリスティーナは呟いた。

「ああ、確かに、実際色々なちよっかいを受けたらしいぜ」

マーナガルムも頷くが、綾香達のフォローをするのだった。

「綾姐たちも、悪質なプレイヤーや危険人物なんかの情報、それに
いろんな注意喚起をしてただけだな ほら、今でも子供相手
にその手の注意喚起してるだろう？ 個人情報教えねえとか、簡
単に1対1で会うとか……」

「ネットゲームに慣れていない女性もいましたからね。様々なトラ
ブルがあったようですが、運営側に通報したり、警察や弁護士に相
談したりと、ほとんどが問題が大きくなる前に解決したようですよ」
「でもなあ……」

マーナガルムは苦いモノを飲み込んだような表情で告げた。

「綾姐のその対応力の素晴らしさにな、 宝玉の翼 の面々が頼りだしたんだ」

「頼っちゃうダメなの？ そのためのギルドなんですよ？」

首をかしげ不思議そうに尋ねるクリスティナ。マーナガルムは当時を思い出したのか、苦々しい表情で吐き捨てた。

「自分がまいた種でもか？ エルダー・テイル の男性プレイヤーと自分勝手に恋愛して、恋人同士になったはいいが別れたくなったら『あいつはストーカーだ』と言って綾姐に相談しに來たり、違う奴は相手の男が二股を掛けてたらしく相手の女を悪し様ざまに言って相手の女から男を取り戻すよう依頼してきたり…… そんなんばつかったんだぜ。しかも、綾姐に別れさせられたって泣きながら別の男に泣きつく女もいたんだぞ なあ、そうだとしても、当たり前なのか？」

マーナガルムの言葉にアズライトも冷たい表情をして呟いた。

「綾の様子がおかしいので聞き出した時には、 宝玉の翼 の一部のメンバーは綾に対し、自分勝手な要求を押し付けてたんです」

「アズ先生が、いろいろ手を廻したらしくて、一時は落ち着いたが…… そんな時起きたのがあの事件だ」

マーナガルムがため息とともに吐き出した言葉に、クリスティナは反応して尋ねた。

「あの事件？」

すると、アズライトが「色々あったんですよ」と言葉を濁して、それ以上尋ねようとするクリスティナを拒んだ。

クリスティナの物言いたげな視線に、アズライトは困ったように続けるのだった。

「いえ…… まあ、ごたごたがありまして、 宝玉の翼 は空中分解したんです で、私達が恐れるのは、あのドワーフの娘が綾に頼りっぱなしのプレイヤーにならないかどうか、なんですよ」

アズライトの言葉にマーナガルムも頷く。

「二の舞になって、この 遊色の雫 も無くなっちゃうなんて、ゴ

メンだからな」

「だから、クリス。貴方にも手伝って貰いたいんですよ。あの新人さんが独り立ちできるように、ね」

にっこりと微笑むアズライトに、クリスティーナは否ということ
は出来なかった。

叱咤激励？ 異世界生活のススメ？

外は暗く、夜の闇が世界を覆っていた。フィールドからギルドハウスに戻ってきたビオティーテは自分のベッドにグッタリと横たわった。綾香たちは、扉の外から心配そうにその姿を見ていたが、仕方がないと溜息をついて部屋から離れて行った。

マコトはまだ 銀杏工房 から戻ってきていない。念話で確認してみれば、今日は徹夜になりそうだから 銀杏工房 でお世話になると言いだしてきた。

マーナガルムは二階の作業室で採ってきた材料の分別を、クリスティーナは屋上のかまどの前でサランダーを呼び出してお湯を沸かして、身体を拭くための暖かなタオルを用意する。

そして、綾香とアズライトは四階の部屋の中へ入って行った。

「明日も、今日と同じですね」

会議スペースにて、しばらく話していた二人だったが、アズライトが明日の予定を言いだすと、綾香はダンツと会議スペースのテーブルに拳を叩きつけた。

「なんでよっ！」

「何故とは？」

「今日のビオティーテの様子を見たでしょ。明日は街で留守番させてもいいじゃないの」

こちらが顔を赤くして怒っているというのに、目の前の男と言えば涼しげに笑みを浮かべ眺めている。

ギリリと睨みつけるが気にした風もみせず、アズライトは口元に笑みを浮かべたまま、綾香の怒りを更にあおるようなことを言い出した。

「それでは、彼女の為にならないでしょう」

「あの子の為ですつてえ！ どうしてよ。あんなに辛そうなのに」
帰って来るとすぐにベッドに横たわった小さい姿。フィールドで
モンスターを見れば、その恐ろしさに怯えて黒い瞳は涙でうるんで
いた。戦闘中は健気にもマーナガルの言葉を守り悲鳴一つ上げず、
がたがたと木の根もとで震えてたのだ。戦闘が終わるたび、辛くて
泣きだすバイオティーテを励ましていた綾香だったが、こんなにして
までバイオティーテに戦闘を経験させることに疑問を抱いた。

「あんな状態じゃ、戦闘なんて出来ないわよ」

「戦闘なんてしなくても構わないですよ。言っただけでしょう、『慣
れ』が必要だと。それに、今日一日でレベルがどれだけ上がったか、
ステータス確認をしているのですから分かるでしょう？」

綾香は悔しそうに唇をかむ。

確かにアズライトは戦闘が終わるたびに綾香に回復薬を渡して、
バイオティーテのステータスを確認するよう指示を出していた。綾香
はアズライトの気遣いに感謝しつつ、バイオティーテのレベルが上が
ったことと、それによって体力などの各種能力値が増えたことを確
認していた。

「まさか……あの子の体調管理を私に任せたのは、その事実を見せ
るためなの？」

「違いますよ。綾、貴女の連れてきたメンバーなのですから、その
面倒をみるのは貴女の役目だと思っただけです。無事、レベルが上
がっているのなら、良いことじゃないですか？」

「バイオティーテは昨日のレベルは10だったんだから、コットンプ
ラントやシルクワームを倒せば、レベルが上がるくらいアズに
だって分かることじゃないっ！」

舌打ち交じりに怒鳴りつければ、何を当たり前のことをと言うか
のごとく、アズライトは目を細めて言うのだった。

「もちろん。ですから、回復薬をいつもより多めに持って行きまし
たよ。なんといっても回復役のマコ君がいないのですからね」

その言葉に綾香は「そうよっ」と早口で言葉を紡ぎ出す。

「ビオティーテもマコと同じように街でアルバイトしてもらえば……」

いい考えたと悦に入りながら告げるのだが、終わりまで言えないうちにアズライトに言葉を遮られてしまった。

「彼女は何ができるのです？ サブ職業もレベルが高いわけじゃないでしょう？」

「……」

アズライトの指摘に唇をかむ。確かにアルバイトと言っても、サブ職業のレベルも低く、知り合いも少ない彼女に出来る仕事など無いのだろう。

「メイン職業もサブ職業も使い物にならないのでしたら、どちらかを優先的にあげて使い物になるようにするのが良いと思うのですが？」

「使い物つて、あなた……」

「綾、貴女はビオティーテを自分では何もできない子にしたいのですか？」

まるで道具か何かのように言いだすアズライトに綾香は逆上しそうになるが、ため息をつきつつ綾香に確認してきたアズライトの言葉を聞いて言葉に詰まった。

「ねえ、彼女をどうしたいのです？」

「どうつて……」

言葉に詰まる綾香に諭すように優しく語りかけるアズライト。

「ビオティーテのことも考えてあげたらいかがですか？ レベルが低いままでは、流石に彼女だって『自分はお荷物なのでは？』と思っ
てしまい、ココに居ずらいでしょう？」

綾香は黙りこむ。

そんなことは無いと、アズライトの言葉を否定できなかった。

「それにね……今、この無法地帯と化してる世界で、何かあったら保護してくれる運営会社も警察もないんです 彼女は女性です。女性でレベルが低いとなったら、様々な意味で危険だと思います。」

せんか？」

息をのむ綾香。過去の事例を思い出した彼女は、ネットから離れてしまえば基本的に安全だった現実世界と、今の現状とを比べて現在のバイオティーテの状況の危険性を認識したのだろう。

「彼女はレベルがまだ低いんです。私達と違ってアキバの街周辺の敵でも、倒せば倒した分だけ経験値が入り、レベルが上がるんですよ」

「そ、そうだけど……」

アズライトの言葉に綾香は頷いたが、それでもアズライトの言葉に従うことに抵抗を感じているのだろう。その声は弱弱しかった。

「ちゃんと育ててあげて、貴女が守らなくても自分の力でも出来るんだということを学ばせてあげなくては……いつも綾が守ってあげられるわけじゃないでしょう。彼女が自分の力で切り抜けなくてはならないこともあるんですよ」

「それでも、バイオティーテが心配なの」

綾香は俯くと、最後の抵抗を見せた。アズライトは笑みを深くするが、優しく語りかけるように心がけて告げた。

「成長を見守ることも重要なんですよ」

コクンと頷く綾香。

「守ることだけで全てが解決するなら構いませんよ。でも、綾がバイオティーテの全てを背負うことはできませんよね」

アズライトの言葉にハツとした綾は、ぎゅっと目を閉じて息を吐いた。そして、微かな声で言葉を漏らす。

「……まだ、あの時のこと、怒ってるの？」

綾香の囁くよりも小さな声を聞き洩らすこともなく、アズライトは立ち上がると綾香を抱きしめた。

「怒ってなんていません。あの時だって、まあ、確かに呆れはしましたけど……でも、怒っていなかったでしょう？」

確認するように言いながら綾香の髪を撫でるアズライト。噛みしめるように、ゆっくりと言い聞かせる。

「私は、優しい貴女が壊れてしまうのではないかと心配しているだけなんですよ。もし、貴女がビオティーテを支えられないというのであれば、私が彼女の教育係になりましょうか？」

アズライトが優しく耳元で囁いたが、綾香は力なく首を振ると自分の弱い心を振り払う様に呟いた。

「私が拾ったようなものよ……だから、私が最後まで責任を持つわ」アズライトの胸に顔をうずめる。アズライトは意地を張って全部自分で背負おうとする綾香の姿にやるせない思いに見舞われる。

それでも、ダメ押しとばかりに言わずに居られなかった。彼女が仏心を出されてしまつては、また同じことの繰り返しになる可能性がある。

「なら、下手な同情で彼女の芽を摘まないでくださいね。たまには突き放すことも優しさなんですよ」

「分かつてるわよ……」

アズライトの言葉に掠れた声で返事をする綾香。その弱弱い姿にアズライトは、もう一度だけと救い手を差し伸べるのだった。

「全て私に押し付けても、構わないんですよ？」

綾香はアズライトの言葉に首を振った。

「大丈夫、大丈夫よ」

「貴女の『大丈夫』は信用ならないのですが……今は信用しておきますよ。明日もビオティーテには、頑張ってもらいましょうね」

微かに綾香は頷いた。

アズライトはそれを確認すると、ギュツと綾香を抱きしめるのだった。

籠に入れて持ってきた暖かい濡れたタオルを持って、三階の扉を開けると真つ暗だった。ランプには火が入って無く、夕飯にも顔を出さなかった少女の姿も見えなかった。

クリスティーナはリュミエールを呼び出す。リュミエールが召喚されると彼女を中心に部屋が明るくなる。

「ビオっち？ 居るのお？」

初めてのフィールドの衝撃は凄まじかったのだろう。ビオティーテは、最初の戦闘の後胃の中の物を全て戻し、昼食も夕食も全く口にしていなかった。唯一救いだっただのは、水や回復薬は口にできたこと。体力は回復していたのだから、残るは気持ちの問題なのだろう。

籠をテーブルの上に置いて、籠の中からタオルを一枚だけ取る。そして、ゆっくりとベッドに近付く。ベッドの中にこんもりとした山を見つけると、逃げ出したわけではなかったのかと少し安堵した。もし、逃げ出していたとしてもアズライトのことだ。これ幸いと探すことはしないだろう。

もちろん、綾香の手前探す振りはするだろうが……今朝アズライトの口から出た『放逐』の言葉を思い出し、最終的には今逃げ出したところで、時期が早いか遅いかの違いだけで、結果が変わることは無いのだろうと考えるクリスティーナだった。

それでも、流石に今、この現状で出て行かれるのは寝覚めが悪いと、ベッドの山を励ますようにポンポンと軽く叩いた。

「今日はお疲れ様なお。よくがんばったのお」

「……の？」

布団の中からぐもった声が聞こえた。クリスティーナは聞き取ることができず「ん？」と首をかしげた。

バツと布団を跳ね除けると、ビオティーテが真っ青な顔で泣きながら叫び出した。

「どうして、あんな思いしなきゃいけないの？ どうして……」

ぐしゃぐしゃになった顔と髪の毛。恐怖に震える瞳を覗き込めば、黒い瞳の中にクリスティーナの姿を映す。

ビオティーテのカタカタ震える身体に、クリスティーナは数日前の自分を思い出した。

「私は……もうフィールドに行きたくない。もう、戦いなんてイヤ」「……じゃあ、ビオっちは、どうしたいの？」

困ったように首をかしげて、ビオティーテの腕を取ったクリスティーナ。そのまま暖かなタオルで腕を拭いてあげながら呟く。

「クリスたちは、裁縫師 じゃないから生活必需品ティッシュを作ることが出来ないでしょ。だから、代わりにフィールドで素材を取って来るの。お金出せば買えるけど、折角ギルドメンバーに作れる人が居るんだから、素材を採ってきた方が経済的だし、時間つぶしにもなるしね。それにそれにさあ、戦闘に慣れとけば、なんか有った時に迷わず戦うことができるの。ねっ、ちゃんと考えがあるんだよお」

ビオティーテのフォローは自分じゃないのになどと考えながらも、とりあえず現状を認識させてみようかと一つ一つ解説してみたクリスティーナ。

「……だから、私もフィールドに立たなきゃならないの？」

ぼんやりと呟くビオティーテ。クリスティーナは逆の腕をとって、今度はそちらの腕を拭き始めた。

「別に嫌ならいいけど……そしたら、ビオっちは、何ができる？」

無邪気に聞いてみたが、内心はドキドキのクリスティーナだ。何もできないことを知ったの上での質問だ。ビオティーテが黙りこくるのも無理は無い。

しばらく黙って腕を拭きながら、少女を観察してみる。

何も答えられないビオティーテ。可哀相なビオティーテ。助けを求めるだけで、自分からは何もしない哀れな子 ホントに、キミはそんな子なの？

「強く……強くなったら、何か……できるの？」

恐る恐る尋ねてきたビオティーテに、クリスティーナは「弱いままでは何ができるの？」と聞いてみた。

途端にギョツと唇を噛みしめる目の前の女の子。クリスティーナは立ちあがってテーブルに行くと、汚れたタオルをテーブルの上に置いて椅子に座った。

ジッとクリスティーナの動きを目で追うビオティーテ。

どうしようかなとクリスティーナは迷う。自分はお茶にかけて引ッ

掻き廻して無邪気に笑うピエロのような役回りのはずなのに、今していることと言ったら新人さんのフォローアップ。全然性質が違う役どころに戸惑っているのだ。

でも、今朝協力すると言った手前、この役回りも投げ出すわけにいかないし、できればあの『女性プレイヤー』に対して酷くマイナスイメージを持った二人の考えを正してみたかった。

つまりは、なんだかんだいって、今日必死にくつついて来たこのお嬢さんのことを気に入ってるのかも知れない。

だから、慣れない助言を試してみる。

「何ができる、できないぢやなくて……何をしたいか、どうしたいかって考えてみたら、少しは世界が変わる力モなお」

何かを探るかのようにクリスティーナをジッと見つめるビオティーテ。クリスティーナはニツコリと微笑んでみた。

「何がしたいか、どうしたいか。それが見えれば、そこに向かっていくだけでしょ？」

（スパルタかもしれないけれど僕らに付いてくれば、それだけでメイン職業のレベルは『ある程度まで』上がるんだよ？ それって、考え方によつては、すごくラッキーなことじゃない？

ライライが『育てる』と言ったんだ。結構、鬼かもしれないけど、ついてくればキミの力になるんだよ。お嬢ちゃん）

自分から逃げ出すか、アズライトの策略にはまって他のギルドへ出荷されていくのか、このギルドに残って行くのか。

さてどれに賭けてみようかなどと思つてしまふ自分に呆れながらも、クリスティーナは、なんの娯楽もない強制的に連れて来られた異世界の中で、娯楽として目の前の少女を見出した。みいだ

（ねえ、足掻いて足掻き切つて、あの男たちの鼻を明かして見せてよ。お嬢ちゃん）

ビオティーテを見つめれば、何かを決心したように表情を固くしていた。

暗中飛躍？ 異世界にて引き抜き騒動勃発？

蘭丸はマコトを心待ちにしていた。昨日拾った女の子、ビオティーテと一緒に来るかとも思っていたのだ。彼女は女の子だし、まだレベルだつて低い。まさかフィールドに行くはずがないので、街に残るマコトと行動を共にするに違いないと考えたと、今日一日 銀杏工房 に居ることになるのだ。これで落ち着いていられるはずがない。

朝からソワソワして落ち着かない蘭丸に売り子たちは不思議そうな顔をしていたが、昨日の「一葉への報告で 遊色の雫」の新人ビオティーテの存在を知っている薊は「蘭丸ちゃん^{あさみ}つてば、青春してるわねえ」などとからかっていた。

「あ、薊先輩っ！ そんなこと言わないでくださいよ それよりも、昨日頼んでおいた石罅、ホントに貰えるんですか？」

「もちろんよお」

ニヤニヤした顔をして蘭丸へ薄い緑色の石罅を渡す薊。それを受け取った蘭丸はというと真つ赤な顔をしてワタワタと慌てながらも嬉しそうに『寄木細工の宝石箱』へ仕舞うのだった。

『寄木細工の宝石箱』の中には数種類の『ミニタオル』が丁寧に折りたたんで入れてあり、仄かにリンゴの香りのする石罅が入ると銀杏工房 特製『香りつきティッシュ』になる。蘭丸はビオティーテにこれを渡そうと、昨日から楽しみにしていたのだった。

（『ありがとう、蘭丸さん』ってお礼言ってくれるでしょうか？でも、ホントにこの石罅で大丈夫なのかな？ リンゴの香りなら嫌いな人はいないって薊先輩言ってるけど、ビオティーテさんが嫌いだったらどうしよう）

ドキドキソワソワしながらギルドホールの入口をちらちら見ている蘭丸を、仕方がないなと言わんばかりに見ていた薊だったが、実はそんな自分もビオティーテに会うのは楽しみなのだ。

「ねえ、それって昨日イチに報告してた、蘭丸ちゃんの愛しのドワーフ娘へのプレゼントでしょ。あとでサンプリングとして色々試してもらいたい物があるし……あたしも仲良くなっておかなきゃね」ドワーフの女性の数は少ない。貴重なサンプル兼可愛い女の子との知り合うというのは薊にとっても嬉しいことだった。

しかし 銀杏工房 へ出勤してきたのはマコト一人で、少しがっかりした蘭丸だったが、気を取り直してマコトへ声をかけた。

「マコトさん、おはようございます。あの……きよ、今日、ビオティーテさんは、ギッ、ギ、ギルドハウスでお留守番、なんですか？」

落ち着かない様子でマコトの後ろをしきりに見ていた蘭丸。その様子を見て、マコトは少し言いくそうに告げるのだった。

「蘭丸さん、おはよ……ビーなら、ギルドの皆と一緒にフィールドへ行ったよ。今日はメイン職業のレベルアップだった」

マコトの言葉に蘭丸は言葉を失った。ビオティーテをフィールドに連れていくなんて、あのギルドの人たちは何を考えているんだろうかと信じられない思いだった。

「少年っ！ 昨日はありがとねえ。おかげ様で、『香りつきティッシュ』の売れ行きは上々よお」

ひらひらと手を振りながら告げる薊に、ほっとしたように笑みを浮かべて挨拶をするマコト。

「良かったです。お役に立てて」

「牛脂石鹸の方も飛ぶように売れちゃって、困っちゃうほどのよお。今日も朝から牛脂石鹸作り。もう手が牛脂でベトベトよお」

困ったように手のひらを見せる薊。だが、その手には牛脂の脂は付いていなかった。からかわれたと分かると苦笑しつつ、薊の衣装を見て尋ねるのだった。

「今日は牛脂を探りにフィールドへ行かれるんですか？」

マコトの問いに薊はニコツと微笑む。

「ふふっ、材料調達部隊の中に 料理人 が居たから、牛脂の分離
お願いしておいたの。だから、今日は一日中、作業室で缶詰なのよ
お」

その答えを聞いてマコトは納得した。なんせ今日の薊の衣装は、
フワフワとした薄物を何枚も身に纏っていたのだ。そして、今日も
見事に化粧を施している。こんな恰好でフィールドに行ったら大変
だろうと思っていたのだ。

「ねえっ、ホントにビオティーテさんをフィールドに連れてっちゃ
ったんですかっ？」

驚きから我に返った蘭丸が、マコトのロープの襟元を首を絞めん
ばかりに握って聞いてきた。

「く……くるし……」

マコトはビックリして蘭丸の手を外そうとしたが、ぎゅちり捕ま
っているらしく外すことができなかった。

薊といえば、そんな二人の様子を「あらあら」と表情は困ったよ
うに、のんびり眺めていた。

「マーナガルムさんの声に驚いちやうような、弱弱しくて可憐な子
を！ なんでフィールドなんて危険な場所に連れてっちゃうんです
かあっ！」

ガクガクガクとマコトを揺らす蘭丸。流石にこれはまずいと薊は
止めることにした。

「こらこら……連れてったのは少年じゃないでしょう？ そんなに
興奮しないの」

「だってっ！」

凄いい形相で薊を睨みつけてきた蘭丸に、呆れた薊はため息交じり
に言うのだった。

「だってクソもないわよ。やあねえ……少年がフィールドに連れ
て行くように言っただけじゃないでしょ？」

「……」

薊の指摘に黙りこくる蘭丸。薊が蘭丸からマコトを救出すると、ゼイゼイ言いながらマコトは薊に礼を告げる。薊は苦笑しながら気にするなと手をヒラヒラさせ、蘭丸に聞かせるようにマコトに尋ねた。

「どうせアズが言いだしたんでしょう？」

どうして分かったと言わんばかりのマコトの目に「あの腹黒の考えなんてすぐ分かるわよ」と呟く。

「蘭丸。そんなに気になるなら、昨日のうちに 銀杏工房 にスカウトしてきちゃったら良かったのに」

「私が一葉先輩に頼みましょうかって言ったら……」

力なく呟く蘭丸に、あららと呆れて薊は肩を竦めた。

「馬鹿ねえ。ホントおバカさん。そんなこと言ったら、イチに借りを作りたいくない綾ちゃんのことだもの、無理しても自分のとこで引き受けちゃうわよ。昨日だって材料持ち込みで 木工職人 が自ら乗り込んで行ったんでしょ？ これ以上借りを作ってなるものか状態だったんじゃない？」

「だったら、どうすればよかったですかっ！」

容赦ない薊のツツコミに涙目になりながら蘭丸が怒鳴った。そんな蘭丸をフンと鼻で笑って更に突き落とすのが薊だった。

「簡単よ。自分に正直になればよかったの。僕が一葉先輩を説得しますからドワーフちゃんを 銀杏工房 に下さいって。ココでポイントが一つね。キミが自分でイチに説得するってことをアピールすること。自分の為にそんなに頑張ってくれるんだってドワーフちゃん感激したのに」

残念そうに薊が告げれば、パクパクと陸に上がった魚のように口を開閉する蘭丸。

「女の子だったら、イチのことだもの、レベルの高低関係なく無条件で入会を許可するわよ。賭けてもいいわあ それにしても残念だわあ。銀ちゃんしろうかね以外のドワーフ娘、楽しみにしてたのに」

ガツクリと蘭丸の肩が落ちた。廊下の隅でどんよりとした雰囲気
を纏わりつかせ虚ろな目の若者を薊は「馬鹿ねえ」と呆れかえった
眼差しで見るのだった。

「ほら、少年。ぼんやりしないで、仕事よ。し・ご・と」

呆氣にとられて二人の言いあいを見ていたマコトの前でパンと手
を叩いた薊は、そのままマコトを引つ張って作業室へ連れて行く。

「ドワーフちゃん、苦勞してるでしょうねえ」

作業室に行く途中、ポツリと零した薊の言葉に、マコトは「えっ
？」と問い返した。

「なんでもないわ。こつちのこと　はい、じゃあ、今日もノル
マ達成頑張つてね。キミには高あいアルバイト代払ってるんだから」
笑いながら冗談めかして言えば、真面目なマコトのこと「分かり
ました」と裁縫台に向かった。

「素直な子って好きよあ　ホント、あたしの周りって腹黒だら
けだから、白い子って大好き」

クスクスと笑いながら、自分の仕事をしに隣の作業室へと移
動する薊だった。

牛脂の白い塊と各種材料を手にとると調香台へ持っていく。

「あの二人の女性プレイヤー嫌いも相当なもんだからねえ」

独り呟く。アズライトとは大学のサークルで知り合った先輩後輩
だ。と言っても、あちらはよく差し入れを持ってきたる大事な
お客様で、こちらは貧乏学生という身分の違いはあったが。

それでも、困ったことがあつたら相談に乗ってくれる兄貴分って
感じで、金欠でバイト代もまだ手に入らない時期に焼肉をおごつて
くれたり、サークル帰りにラーメンを食べながら進路の相談に乗っ
てくれたりと、何かにつけ可愛がってくれたアズライトに一葉も薊
も頭が上がりなかった。

そんな関係だから　宝玉の翼　の事件があつた時、アズライトか
ら依頼されて薊や一葉たちも彼のサポートに回って動いた。恩人の
助けになりたいという思いもあったが、それ以上に恩をあだで返す

ような彼女たちの仕打ちが許せなかったからだ。

その後、あの事件にかかわった女の子の大半は一葉のファンだったことが分かり、事情を聞いてみて呆れた。なんと一葉と仲が良い綾香を恨んでの犯行だったらしい。なんともいじましい乙女心だと薊は晒う。

「大事な恩人の彼女に手なんかだせっかつ！」

そう言って怒り狂っていた一葉の姿に、不謹慎ながら笑いを止められなかった。

まあ、事件全体としてみると笑えるところの話ではなかったが。

「大事な先輩の大切な人だもの、礼を尽くすのは当たり前なのに、あの子たちには分からなかったのよねえ……」

コロンと出来あがった真つ白な石鹸を転がす。

薊は当時流れていた噂を思い出すと、遣る瀬無い思いに苛まれる。

「結局、一葉目当ての殆どの女の子たちは引退しちゃったのよねえ」

広告塔の一葉が大学を卒業し、仕事が忙しくサークルに顔を出せなくなってくると、一葉目当てに入った女の子たちはエルダー・テイルにログインしなくなって行った。ゲームを始めたこと自体会話をしたいがための可憐こひげしい乙女心おんなこころって奴だったのだ、一葉に会えないのならば続けても仕方がないのだろう。

ゲームの中だけでもと続けていた娘こもいたらしいが、結局はあの事件に関わっていたことがバレると、皆止めて行ったのだ。

その後、銀杏工房を妹に頼まれて立ち上げることになった時、一葉は椿たちに女性の取り扱いについて頼んだのだ。また、同じような事件が起これば、折角の楽しいゲームが台無しになってしまう。

「イチも変わってるわよね。あんなことがあつたら、普通もう金輪際女にかかわるものかと思うはずなのに……」

大量の石鹸を竹かごに入れると、また材料を手に調香台へ向かう。積極的に女性プレイヤーを受け入れて、受け皿として銀杏工房を提供する一葉。片や、自分の大切な人以外の女性プレイヤーを

受け入れず、小さな箱庭を守るように仲間だけで固まる　遊色の雫。
。どちらのあり方が正解で、どちらが間違っているなんて判断付
くようなことじゃない。

「でも、折角男と女が居るんだから、どちらとも仲良くなりた
いじゃない？」

台の上にたくさん転がる真っ白な石鹸たち。それらをザラザラ
と竹かごに入れながら薊は呟いた。

「ゴメンね、先輩。でも、この世界がゲームじゃなくなった今、頭
が柔らかくて、たくさんアイディアを持つてる子は、うちにこそ
必要なの。うちの手駒にしたいのよ　先輩のここに居たんじゃ、
宝の持ち腐れ」

竹かごの中には、たくさんの石鹸があり、その香りが部屋中に充
満する。

「先輩は綾さんがいれば……それでいいんですよ」
薄っすらと薊は笑う。

隣の作業室では、杏と交代しながら裁縫台を使うマコトの姿があ
った。同じ部屋で作業する蘭丸は衝撃から立ち直っていないのだろ
う、まだ来ていない。

「新人さんが入ったそうですってね」

杏が楽しそうに尋ねてきた。　遊色の雫　では新人が入ってこな
いため、珍しいのだろう。仕方がないとマコトは苦笑交じりに答え
た。

「蘭丸さんから聞いたんですね？　可愛い子ですよ」

「蘭丸ってば、ひどく気に入ったみたいで、昨日から大騒ぎよ」

ふふふつと笑った杏は、休憩用の椅子に座って『ティッシュ』の
模様用の花を選別する。色とりどりの花々を一つ一つ選り分ける杏
が、答えのないことを訝し^{いぶか}み顔を上げると、困ったような顔のマコ
トが居た。

「マコト様？」

「ん？ あつ、いや……さっき、蘭丸さんに入口であつたよ。ビーが一緒じゃなくて、残念そうだったんだ」

杏から声をかけられ、慌てて言葉を紡いだマコト。そんな彼の様子を気にすることなく杏は尋ねる。

「ビーっておっしゃるの？ その新しい方のお名前は」

「ううん、違うよ。ビオティーテ、ビオティーテって言うんだ」

答えながら、マコトは今朝のことを思い出していた。

朝、ビオティーテがフィールドに立つと聞いた時、この弱弱しい少女があんな場所に行くなんてと思い、アズライトに 銀杏工房へ連絡するから彼女も自分と同じように街での活動をさせようと思見した。

しかし、逆にアズライトから呆れたように言われてしまったのだ。「弱いままでは何かあつた時に自分の身一つ守れませんよ」

その一言が、暗に今の自分自身のことを言われているようで、マコトは何も言えなくなってしまった。

「だったら……本当は僕もフィールドに立つべきなんだろうね」

「そうですね。本来なら、貴方も立つべきでしょう。ただ幸運なことに貴方は高レベルの 裁縫師 ですし、貴方のアイディアのおかげで一葉君にもかなりの恩を売ることができました。良かったですね。今までのプレイの結果と機転のおかげで、彼女と違い安穩とした生活を送ることができますよ」

につこりと優しい微笑みを浮かべて、僥倖なことだと皮肉気に伝えるアズライト。

「もっとも最初から貴方には感謝していましたがね。その分を差し引いても、他のギルドへ払い下げしようとは考えませんから、安心して働いてくださいね」

マコトはドキッとして身体をこわばらせた。この目の前の男が、決して身内に甘い男ではないと三年間のプレイで身に試みていたのだ。彼が態度を軟化させるのは綾香に関することだけで、マコトの

ことだって綾香というフィルターがなければ、眼中にないとはつきり分かっていた。

当時は、だから気楽で、安心できる人間だと思うことができた。そう人間不信に陥っていた自分だったからこそ、この人は絶対自分の傍に来ることは無いし、押しつけがましい親切を押し付けてくる人間でもない、そう確信できることが嬉しかったし、安心した。

でも今、この拠り所のない異世界で 遊色の雫 から追い出されてしまつては、自分に行き場がない。それがとても怖いと、今日になつて分かつたのだ。

（私は、甘えてた？）

その甘えの部分を指摘されたようで痛かつた。

ゲームの間はオンラインだけの気楽な関係だと安心しきつていた。ゲームを終わりにしてしまえば、現実では会うことのない人たち。

でも、ゲームが現実となつた今現在を考えると、その浅い関係が損なわれていくようで、心もなくなってきた。

所詮一日数時間の付き合いと言えなくなつてしまつた、今の現状が怖かつた。

ぼんやりと出来あがつた『ミニタオル』を見つめるマコト。

その考え込んでいる姿に杏は、マコトが薊から 銀杏工房 への移籍話を話され迷っているのだらうと見当つけた。

実は昨日、銀から一葉が何か企んでいると聞き、それとなく薊や椿に探っていた杏だったが、今朝になつて一葉から企みを明かされたのだ。

「マコトさんを 銀杏工房 へ引き抜きたいと思ひましてね。杏、あなたからもマコトさんに話を持ちかけてくれないかな？」

告げられた内容に驚く。目を大きく見開いて一葉を見れば、彼はニツコリと微笑んで「よろしくお願いしますね」と杏の肩に手を置いて囁いた。

「あ、綾香様が……」

「ああ、綾さんには内緒でお願いしますね。きっと綾さんはマコトさんを手放さないとだから……狙うなら本人だけ。綾さんだって本人から移籍を告げられたら、止めるに止められないでしょう?」
話が終わるとサツサと一葉は部屋から出て行ってしまう、部屋には杏が一人残された。

きつと一葉は 銀杏工房 の主要人物にマコト引き抜きの話をしてたのだろう。杏に声をかけるなら最低でも薙や椿、橘には話をしているはずだ。

(銀が知れば、どうするでしょうか?)

綾香のことを命の恩人と慕う銀のことだ。その綾香を裏切るようなことはしないだろう。そうすると一葉は銀には話していないのかと疑問に思う。この引き抜き話を杏が銀にしたら、一葉はどうするつもりなのか……。

今朝から何度となく考えていた杏は首を振った。

(一応、総合責任者の意向は伝えましょう。来る来ないは本人が決めることですよね)

責任転嫁になってしまうかもしれないが、マコトから断られれば、こんなにも悩むことは無いのだ。さつさと告げてしまおう。そして、一葉に断られたと報告すればいいんだ。

「マコト様?」

杏はぼんやりとしているマコトに声をかけた。

マコトはハツとしてこちらを見てきた。

「もしかしたら他の方から話をされたかもしれないのですが……
銀杏工房 へ移籍する気はないですか?」

杏の言葉にマコトは息をのんだ。

暗中飛躍？ 異世界にて引き抜き騒動勃発？（後書き）

視点がコロコロ変わって分かりにくいかも……ゴメンナサイです。

紆余曲折？ 異世界生活でのお悩み相談？

一日中、動揺していた。杏から移籍を勧められた後も仕事をこなしたが、昼食時に「隣いいかしら？」と近寄ってきた薊にまで 銀杏工房 へ誘われたのだ。

「遊色の雫 に新人ちゃんが入ったんでしょ。じゃあ、少年、うちに来ない？」

薊は紅を刷いた唇で弧を描くと、そう囁いてきたのだ。くらくらするような香りが纏わりついて、午後の仕事でも自分の周りで薊が囁いているようだった。

仕事が終わると逃げるように 遊色の雫 のギルドハウスへ急ぐ。誰かに行くなと止めて欲しかった。 遊色の雫 と違って、人の大勢いる 銀杏工房 に所属するなんて、未だに人が怖いマコトにとって罰ゲームのようだった。

かといって、世話になっっている 銀杏工房 の杏たちへ移籍を断れるかと言われたら断りきれぬ自信がなかった。

（姐さんっ！ 助けて……）

心の中で叫びながら、表通りを走り抜け、裏通りへと入りこむ。昨日今日と通り慣れてきた道をただひたすら走りぬける。

「もう少しでギルドハウスだから頑張れなおっ！」

甲高いクリスティーナの声が聞こえ、マコトは立ち止った。辺りを見回すと建物の陰からギルドハウスへ戻っていく一同の姿が見えた。

声をかけようと近くの建物まで近寄った時、マーナガルドの背中にグッタリトするビオティーテと心配そうなクリスティーナと綾香の姿が見えた。あまりの姿に駆け寄ろうとしたマコトだったが、二人が話す言葉の内容に思わず物陰に隠れた。

「モンスターを前にしても逃げなかったじゃない」

「偉い偉いのおっ！」

「アズ、ガルっ！ 二人とも、ちゃんとビーのこと認めてあげてよね。こんなに頑張ったんだから」

励ます綾香とクリスティーナの声。綾香はビオティーテのことを評価するよう男性二人組に告げていた。

（ビー……一日、フィールドに立ってたんだ）

マコトは呆然とした。何処か心の一部分で、ビオティーテも自分のようにフィールドに立つても、すぐにリタイアすると思っていたのだ。

そして、そう思っていた自分自身に愕然とする。

（僕は……ビーがフィールドに立てない方が良いと思ってた？）

目を見開く。なんてことだろうと己の醜い心に顔をゆがめる。気のいい心優しい先輩のふりをしながら、自分は何てことを思っていたのだらうと、マコトは自己嫌悪に陥っていた。

ギルドハウスの方へ歩を進める一行は、マコトの思いとは関係なく言葉を紡いでいた。

「実はクリスもねえ……今日一日、付いてこれると思ってなかったのぉ」

もう一人では歩けないのだろう。マーナガルの背にグツタリと身体を預けていたビオティーテが弱弱しく何か言うと、その言葉を聞いたクリスティーナが「そんなことないのおっ」と叫んでいた。「ビオっちは何も出来なくて、とーぜんなのぉっ！ レベルは低いし、魔物さんとのご対面は初だし。むしろ、こうして一日中戦闘を見て発狂せず頑張ったのは、かなり大きな評価ポイントなのぉ」

クリスティーナのセリフに綾香も頷く。

「正直、ここまで頑張れると思ってなかったのよ。ほらっ、アズにガル。ちゃんと褒めてあげなさいよ」

綾香の言葉に、仕方がなさそうにマーナガルムは「ビオ……は、頑張ったよ」と告げた。もちろんその後に「明日も頑張れば、本物だらうけどな」と付け加えて、綾香と言いあいになったのだが、

今朝までの態度から比べるとかなり柔らかなものだった。

「私は、やればできる子だと初めから思っていましたよ」

こちらからは見えないが、多分いつもの微笑みを浮かべながらのセリフだろう。アズライトの言葉に綾香が何かを囁いた。

一行の仲の良い雰囲気にもコトは気おくれした。自分が入り込めない何かを感じ取ってしまい、無意識に一步下がった。

「遊色の雫　に新人ちゃんが入ったんでしょ。じゃあ、少年、もうお払い箱ね」

耳元で幻聴が聞こえ、バツと振り向く。当たり前だがそこには誰もいなくて、ドキドキと早鐘のように動く心臓の音が辺りに響くようだった。

少しずつギルドハウスから遠ざかるように歩きだす。今日はあの場所に戻るなど出来そうになかった。

念話で綾香を呼び出した。

「銀杏工房　で徹夜の仕事をするんだ　　うん。今日は　銀杏工房　で過ごすから……明日は帰るよ。そう、たくさん採れたんだ。じゃあ、僕の分は裁縫台の上に置いてくれば明日分別するよ。そう、ビーが……あつ、ゴメン。ちよつと今呼ばれたみたいなんだ。じゃあ、おやすみ」

ビオティーテの話を初めそうだった綾香の言葉に、慌てて念話を切ったマコト。

もちろん行く宛てなど有るはずもなく、トボトボと歩きだした。

（銀杏工房　に泊まるって……誰かに連絡したら一発で分かるウソなのに。馬鹿だなあ）

己の詰めของ甘さに苦笑が漏れた。

「貴方は高レベルの　裁縫師　だから必要なですよ」

アズライトの声に似た幻聴が聞こえ、ビクツと身体が震えた。アズライトが後ろに居るのかと振り返るが、誰もいない。ただ、風に吹かれて埃が舞い上がるだけだった。

「マコトはパニックになったのに、ビオティーテは違うわね」

また幻聴が聞こえてきて、幻聴だと自覚していても、耳の奥で囁かれる声に心が千切れた。

幻聴を振り切るように走りだす。

アキバの街の中、マコトは走っていた。

どこに行つていいか分からなかった。

「銀杏工房　がマコト様を買ったんです」

「銀杏工房　へ払い下げしたんですから、安心して働いてくださいね」

杏の声とアズライトの声がマコトの後ろを追いかけてきた。

「少年、お払い箱よ」

薊の囁きが耳の中に入り込む。

「イヤ、違つ、イヤ……」

首を振り走り続けるマコトだったが、道端の石につまずき転んでしまった。

転んだまま立ち上がれなかった。

（ヤダよ……人に振り回されるなんて、もう嫌なのに）

「誰か……助けて……」

マコトは小さく呟くと、そのまま意識を失った。

「大丈夫ですか？」

優しい声。男の人の声が聞こえる。

マコトはぼんやりと目を開く。焦点の合わないぼんやりとした世界の中、ぼんやりとした大きな影が目の前にあった。指先が触れる毛布の感触に、ぼんやりとした意識が徐々に覚醒していく。

「もしもし？　分かりますかあ？」

何かが目の前を行ったり来たりしている。気になってマコトがその動きに合わせて目を左右にやれば、安心したような声が聞こえてきた。

「意識はありそうですね。目も見えてるみたいですし……って、ね

え、大丈夫ですか？ アナタ、道端で倒れてたんですよ。覚えてます？」

「み、ち……ばた？」

そう言えば転んだまま起き上った記憶がない。そうすると、自分はあの後気を失ったのか。

ぼんやりとそんなことを思っていると、徐々に焦点が合い始め、目の前には黒髪の男性の姿が見えた。パチパチと火の爆ぜるような音とぼんやりとした炎の赤い揺らめきが見える。

彼はマコトが声を出したことで大丈夫だと安心したのか、にっこりと微笑む。

「中々意識が戻らないので、心配しましたよ 本当に大丈夫ですか？ ココはアキバの街中なので、襲われることは無いと思ってましたが……」

「あ……」

意識を失ってずいぶん時間がたっていたのだろう。喉がからからで声が出ず、引きつったような掠れた音がマコトの口から零れた。

男性は、マコトのかすれた声を聞いて、水筒をマコトの傍に置いて、マコトが座るのを助けた。

「気がつかなくて済みません。喉が渴いてますよね。どうぞ」

マコトが身体に力が入らないのを分かっているのか、座るマコトを支えると、水筒のふたを外し、マコトの口に当てる。マコトは一瞬躊躇した後、それでも喉の渇きには耐えられず、男性の助けを借りて水筒の中身を少しずつ飲み始めた。

かなり喉が渴いていたのだろう。渴いた身体の隅々まで水が染み渡る感覚と、もっと水分が欲しいという身体からの欲求が湧きおこる。

やがて水筒の中身を全て飲み干したマコトは、ほうと息を吐いた。

「はあ……あ、ありがとうございます」

息を吐いたことで落ち着いたマコトは、ジッとこちらを見ている男性に慌てて礼を言うのだった。

マコトが一人で座れると分かった男性は、マコトから手を離すと少し離れたところに座り、自分の足もとにある毛布を肩に掛けた。「無事目が覚めてホッとしましたよ。まあ、この世界では死んだとしたら大聖堂へ強制的に連れて行かれるようですから、死んでいるわけではないと思っていましたけどね」

ぐったりとした人が目の前に倒れているのだ。そりや気持ち悪かっただろうとマコトも苦笑した。どうやら目の前の男の人が道端に倒れていたマコトを保護してくれたらしい。

「助けてくれて、ありがとうございます」

「どういたしまして……と、いつでも私はキミをココに連れてきただけけどね」

辺りを見回してみるとアキバの街によくある廃ビルのように、ところどころ崩れかけてるむき出しのコンクリートと草木に浸食されて瑞々しい緑に覆われた一室だった。男は薪代わりの太い木の枝をポンと焚火の中に放り投げた。火の粉が舞いあがり、すうっと空気の中に消えて行った。

男はマコトがどこに居るのか不安に思っていると思ったのだろう。落ち着いた声で「ココは裏通りを更に入ったところにある廃ビルです」とマコトに教えるのだった。

「まだ夜です。夜道を歩くのは街の中といっても危険ですから、明日の朝までココで休んでいたら如何ですか？ 毛布にくるまっていなさい。冷えますよ」

落ち着いた声がマコトの耳の中に滑り込む。どこにも行くところのなかったマコトは、その言葉に頷いて、倒れていた自分に掛けてあった毛布を身体に巻き付けた。

「この世界の食糧事情はご存じだと思いますが……何も食べないよりはマシです。どうぞ」

そう言っ出されたのは『おにぎり』と『塩』。確かに、この組み合わせだったら味が湿気た煎餅でも塩で誤魔化しが効くし、見た目と味のギャップも少ない。

「ありがとうございます」

そういえば 銀杏工房 で昼食を食べたつきり何も口にしていなかったなと思いながら、もらったおにぎりを食べるマコトだった。

遊色の雫 のギルドハウスに帰れば、今日フィールドで採ってきただろウキチンと味がある果物が食べられるだろうが、 銀杏工房 に移籍話を持ちかけられた今、なんとなく帰りづらかった。

それに、きつとビオティーテが一日フィールドで頑張ってた話などを聞くことになると思うと、自分自身の弱さや情けなさが先に立ってしまい、褒めることができないどころか、当たり散らしてしまいそうで嫌だった。

「僕って弱いんです」

両ひざの上に顎を寄せ、黙って揺れる炎を見つめていると、なんだか心細くなり、そんな言葉が漏れた。ハッとして口を塞いだが、一度発した言葉が戻ることは無く、恐る恐る男の方を盗み見た。

「……皆、弱いですよ」

男の表情は影になって見えなかったが、口調はしんみりとしたものだった。

「強くなければいけないなんてこと……きつとないですよ」

「そうでしょうか？」

男はマコトの言葉に答えることもなく、黙って枝や棒を炎の中に投げ入れた。火の爆ぜる音が響き、また静かに炎が揺れる。

「強くないとこの世界で生きていけない気がします なんてこんなことになっちゃったんだろう」

ただ自分はゲームをしていただけなのに。現実の人間と友人関係がうまく築けないからと言って、こんな罰ゲームみたいな仕打ち酷過ぎると思っていた。

こちらに来て、周りの人みんな混乱していて、それでも前に進もうと、日々の生活を必死になってこなしていく。そんな皆には言えなかったけど、こんな理不尽で不可解な出来事に、マコトの弱い心は折れてしまいそうだった。

「狂ってしまった方が楽なのかもしれない」

ポツリと呟く。過去何度も思ったようなことを、架空の世界でま
で口にするようになるとは思ってみなかった。

「狂ったって、状況は何も変わりませんよ。そもそも、どこからが
狂気で、どこまでが正気かなんて、他人には区別のつく問題ではあ
りません。患者が偽れば、医者だって誤診できます」

ぼんやりと呟いた男だったが、ハツとしたように口に手を当てた。
軽く首を振ると、自分の背負い袋を傍に寄せた男は、背負い袋の中
を漁り始めた。

「どっちにしろ、死んだら強制的に生き返るのです……実際、死ぬ
つもりで警備兵に向かって攻撃した男もいたみたいですしね」

背負い袋の中から飯盒はちろうと水筒を取り出した男は、蓋を取った飯盒
の中に水筒の中身を入れ、太めの枝を使って焚火の上にうまい具合
につるした。

「警備兵に攻撃した男も、この世界で生きるのが嫌になったのでし
ょうけど……結果は逃げ出せなかった。生き返った男は、呆然とし
ていたらしいですよ」

中の液体が温まったところで、器用に飯盒を火から外した。ゴソ
ゴソと背負い袋の中から取り出したブリキのカップに温まった液体
を注ぐと、一つをマコトに差し出した。

「どうぞ。昼間は暖かいとはいえ、夜は冷えるでしょう。温まりま
すよ……まあ、味は水道水ですが」

最後は苦笑交じりに暖かなカップを渡す。マコトは礼を言って受
け取ると、暖かなカップを両手で包む。じんわりとした温かさが両
手から広がって行き「あったかい」と顔をほころばせた。男はそん
なマコトの姿を見るとニコリと微笑んだ。

「笑えるなら大丈夫ですよ。人は悲観にくれると笑うことすら出来
なくなりますからね」

男の言葉にマコトは頷いた。ブリキのカップを両手で持ち、頬に
額に押し付けると押し付けた個所から熱が伝わり、表情が緩む。

「この世界の死というのは、決して終わりではないんですよ。何度でも生き返れる　　なんて、命の価値の軽い世界なんでしょうね」
また生き返るのだから、何度死んでも構わない。そんな考え方に陥るのも時間の問題だと男は自嘲気味に笑った。

マコトは、男の話を聞きながら、カップに入った湯を飲んだ。この時期、夜は焚火のそばだといっても冷える。冷たくなっていた身体に暖かな湯がしみ込んで、胃のあたりから暖かな熱が広がった。
「僕には仲間が居るんです。とても幸運なことなんだけど……何かを得るために戦わなきゃいけない世界で、僕は街の中から出ることもせず、生活できるんです」

マコトの呟いた言葉に、男は首をかしげた。

「ラッキーなことじゃないですか？」

「でも、それが……怖い」

じつとブリキのカップを見つめるマコト。ブリキ部分に映り込んだ炎が無機質なカップの表面を彩る。

「いつ捨てられるか分からない。用済みだと言われてしまうかもしれない。お前なんて要らないって言われたら……」

「……」

「昔、他人にそう言ってしまったことがあるんです」

迷いながらも口に出してしまえば、感情が迸り、涙があふれる。

自分の元に転がり込んできた男。初めは甲斐甲斐しく主夫のように家事に勤しんでいた男だった。あの頃の彼はとても優しく、仕事に疲れた私を労ってくれた。それが嬉しかったのに、徐々に振るい出す暴力。それに怯える日々　　耐えきれず「出て行って」「あなたなんて要らない」と叫んだ。あの時の男の傷ついた目が忘れなれなくて、結局は言い成りになってしまった。

そんな弱い自分が嫌いで、男の暴力に怯えるだけの自分も嫌い。それでも、もし力があつたとしても、あの傷ついた瞳で見られたらと思うと何もできなかっただろう。それが分かるだけに、余計に自分のことが嫌になる。

そして訪れた別れは、あまりにも悲惨で、事あるごとに夢で見る。赤い海から恨むような視線が、嘲笑する顔が浮かび上がって消えていく夢の中で……彼女だけが手を差し伸べてくれた。ぼろぼろの私に「女である自分が嫌なら、ネットの中だけでも男になってみたら？」と微笑んだのだ。

私は彼女に依存して、そして

「結局、私も……そう言われちゃうのになって」

火が爆ぜる音だけが響く静まり返った空間。世界がこんなに静かだと、こちらの世界に来るまで考えたこともなかった。焚火に当たるなんて、それこそ学生の頃以来じゃないだろうか。

柔らかな赤い炎と知らない人。これから先、会うかどうかも分からない人の傍だからこそ、正直な心の内をさらけ出すことができた。「そんなことはないでしょう？」

男は柔らかな声でマコトの言葉を否定した。

「もしも仲間の人にとってキミが必要ないんだったら、『戦えない』ってことが分かった時点で、捨て去ると思いますよ」

火を絶やさぬため、定期的に枝を投げ入れる男。コンクリートの壁に映し出される男の黒い影はゆらゆらと揺らめいた。

「ただ、情性で仲間に加えてるだけかもしれないでしょ？」

男の示した都合のいい考えを否定したくて、マコトは小さく呟いた。

「それだつたら、余計に用済みだなんて言えないでしょう。言えないのなら情性がずっと続いて当たり前になりますよ。人の情って結構厚いんです」

小さな抵抗を見せるマコトが可笑しかったのか、男は小さく口元をほころばせて応えた。

「そう……かな？」

呟いたマコトは睡魔に負けたのだろう。両手の力が緩み、ブリキのカップがカツンと音を立てて床に落ちた。

男は立ち上がってマコトの傍に寄って行った。

「そ、う、だと、いい……な」

ぐらりと倒れるマコトの身体を近付いた男は支えようと、毛布の上に横にする。そして自分が纏っていた毛布をマコトに掛けた。

「人の感情は、なかなか厄介なモノなんですけどね 遊色の

雫 のマコトさん」

そう呟く男の顔には、先ほどまでの暖かな微笑みは欠片もなかった。

事実無根？ 異世界での騒がしい朝！

朝、廃ビルの中で目を覚ますと部屋の中には誰もいなかった。すつきりした目ざめに寝過したかと慌てて起き出したマコトだったが、太陽は東の空から顔を覗かせたばかりで、早朝特有の少しひんやりとした空気がマコトから体温を奪って行った。

くしゅっ……

冷えた空気に鼻の奥がむず痒くなりくしゃみが出た。

マコトはゆっくりと部屋の中を見回す。マコトに掛けられた毛布と焚火の跡だけが残っているだけで、他に人の居た形跡は無かった。一瞬、昨日のことは狐か狸に化かされたのだろうかと思っしまったが、そんな馬鹿なと苦笑いを浮かべた。

「……」

男の名を呼ぼうと口を開いたが、そういえば名前を知らなかったと思う。間が抜けていることに、ステータスの確認すらしていなかったのだ。

「そっか……ここは エルダー・テイル なんだから、わざわざ名前聞かなくてステータスで分かるんだっけ」

掛けてあった毛布を持ちあげ、どうしようか悩む。流石に借りっぱなしはまずいだろうと思うが、名前も居るところも分からなければ返しようがない。

ため息をつきながら、立ち上がって毛布を畳むために端と端を合わせ軽く振ると、カサリと紙が一枚落ちてきた。不思議に思って紙を拾い上げて見ると、生真面目そうな文字で、今晚もここに居るから毛布は置いていつて構わないと記されていた。

「今晚も……ここに来るんだ」

紙をじっと見つめ、自分に言い聞かせるように呟いた。

「せっかくだから、直接……お礼、言っただ方が良いよね」

毛布を背負い袋の中に入れると、昨日とは打って変わった明るい表情で、廃ビルを出るマコト。

どこに行こうか考える。今日 銀杏工房 へ行ったら、蘭丸からビオティーテのことについて聞かれるだろう。そう考えるとビオティーテの様子を見るため 遊色の雫 のギルドハウスへと走り出した。

昨日と違って、ビオティーテの目をちゃんと見れそうだった。もちろんまだ嫉妬や羨みの感情が無くなったわけではないが、自分の居場所が奪われたという攻撃的な気持ちは落ち着いていた。

「『情性も続いていけば当たり前』かあ……フィールドに立てなくても、私が役に立てることがあるなら、きつと捨てられないよね」

ギルドハウスの赤い扉が見えると走るスピードを緩める。

扉の前で少し息を整え、中に入ると二階の自分の作業台へ行った。作業台の上には籠が一つ置いてあり、棚にはたくさん綿花や絹玉が仕舞ってあった。籠の中を見てみると色鮮やかな花々がぎっしり詰まっていて、花の香がマコトの心を落ち着かせた。

「マコトか？」

声をかけられ振り返ると、扉にもたれてマーナガルムが立っていた。彼は、寝起きの為か欠伸を一つして「ずいぶん朝早く帰って来たんだな」と呟いた。

「えっと……び、ビーの事が気になって……」

しどろもどろに呟けは、マーナガルムは「ああ」と納得して、作業室に入ると休憩用のソファアーにドカリと座った。

「昨日は頑張ってたぜ。シルキーワームにコットンプラント、ゴブリンもいたな。流石に震えてはいたけどな……言われた通り、叫び声は上げず、物陰に隠れてたな。一日で結構レベル上がったらしいぜ」

マコトとは違つと言外に言われているようで胸が痛んだが、そんなそぶりも見せず「凄いいじゃないか」と感嘆の声を上げた。

「そうだな。初戦であれだったら上出来だな。偉そうなこと言った

って、俺の初戦の時と比べたらマシな部類だろうな　ただ、やっぱり衝撃は強かったみてえで、アキバの街に着いた途端、安心して立てなくなっちまったがな。しゃあねえから、背負って帰って来たぜ」

マーナガルムの言葉に昨日隠れて見ていた風景を思い出す。ズキズキと痛む心を無理やり押し込めたマコトは、マーナガルムの言葉にドキリとした。

「昨日は大変だったんだろ？」

「えっ……」

膝の上に肘をつき、組んだ手の上に顎を乗せたマーナガルムは、心持ち顔を俯かせる。

「徹夜だったんだってな。在庫が足りなくなるほど売れてるらしいじゃねえか」

「え、あ……あ」

マーナガルムはマコトの答えを求めていなかったのだろう。マコトが何か応えるよりも早く「なあ」と声をかけてきた。

「えっ？　何？」

「よくシーとデートしてるらしいじゃねえか」

マーナガルムの言葉に首をかしげる。脈絡もなく問いかけられ、マコトが戸惑って答えないと「違うのかよ」と低い声で尋ねられる。

「あ、えっと……デートっていうのかな？　買い物に行ったり、食事に行ったりは、たまにだけど」

しどろもどろに答えるマコトに、「それがデートとどこが違うんだ」と更に畳み掛けられ、どう答えていいか分からなくなる。

（デートって、普通、異性同士で出かけることだよな……でも、シ―も私も女なんだけどなあ）

「なあ、オマエと居る時のシ―ってさ……どんな感じなんだ？」

何処か思いつめたように聞いてくるマーナガルムに更にうるたえるマコト。

「どんな感じって……普通の女友達と同じ……」

そこまでマコトが呟くと、ガバツとマーナガルムが立ち上がり、マコトに詰め寄った。じりじりとマコトは後ろに下がるが、すぐに背を棚に付けることになってしまい、マーナガルムとの距離が縮まった。

「女友達い！ おまつ、そんないい加減な気持ちで付き合ってるのかよ」

「ちよつ、ちよつと、待ってよ。ねえ、なんか誤解してない？」

「何が誤解だよっ！」

マコトは胸ぐらを掴んできたマーナガルムに叫んだ。

「シーと僕は付き合ってるんじゃないよ。シーと付き合ってるのはガルムさんの方じゃないの？！」

「何で俺が妹と付き合わなきゃならねえんだっ！」

マコトの叫びにマーナガルムの怒鳴り声がかぶさった。

「えっ？ い、妹おっ！」

びつくりして目を丸くして叫ぶマコトに、マーナガルムは眉をひそめる。

「シーに聞いてねえのか？ 俺とシーは兄妹だ。親が離婚しちゃって苗字が違うけどよ」

「聞いたこと無いし……ずいぶん似てない兄妹だね」

引きつったような笑いを顔に乗せマコトは呻いた。

「俺は父親似で、あっちは母親似だ　それより、どうなんだよ。シーとは遊びだっていうのか？」

「ちよつ、ちよつと待っててば。ガルムさんは、勘違いしてるって」
「何が勘違いだよ。シーから頻繁に会ってる話を聞いてんだぞ」

マコトとケツト・シーが付き合ってるに違いないと思いついて入るマーナガルムは、マコトの言葉を聞こうともせずグツと掴んでいる胸元を持ちあげ始めた。マコトの足が徐々に床から離れていった。

「う、うわあ。足、足浮いてるって……」

わたわたと焦りだすマコト。

「何の騒ぎなのよ」

階下の騒ぎで目が覚めたのだろう。綾香が眠そうな目をこすりながら入口の扉を開けた。マコトは天の助けとばかりに「姐さんっ！助けてっ！」と叫んだ。

部屋の状況を見た綾香は目をパシパシと瞬くと「えっ？」と目を凝らした。

「ガル、何やってんのよ？」

慌ててマーナガルの腕を叩き、マコトを救助する綾香。痛そうに腕を押さえて屈みこんだマーナガルムは「綾姐、なにすんだよ」と呻いた。

「何するんだよって、それはこっちのセリフ！マコを苛めないですよ」

マコトをかばう様にマーナガルムの前に仁王立ちする綾香。綾香の陰に隠れているマコトをギッと睨んだマーナガルム。マコトはマーナガルムの眼光の鋭さにビクツと身体を竦めた。

「こいつがシーとのことを遊びだっというから……」

「はあ？」

いきなり何を言い出すのかと素頓狂な声すっとんきょうを上げた綾香は、一瞬沈黙した後、げらげらと笑いだした。

「マコと、シーが、付き合ってる、ですってえ」

腹を抱えて笑いだした綾香をギョツとして見つめるマコト。マーナガルムといえば、何故笑いだしたのか分からず、ムツと顔をゆがませた。

「なんだよっ！何がそんなにおかしいんだよっ！」

「だっ、だって！ぷっくっ……はあ、おかしいっ」

笑い過ぎてゼイゼイと呼吸を荒くする綾香。腹筋が痛いと身体をくの字に折り曲げたかと思うと、次は床を叩いて笑い続けた。

「姐さん……笑い過ぎ」

呆れたように呟いたマコトは、肩をすくめてマーナガルムに言った。

「ガルムさん。シーと僕が付き合うなんて有り得ないよ」

「あーおかしかった。腹筋が痛いわ……ガル、笑わせてくれてありがとう」

晴れやかに告げた綾香は、「知らなかったわぁ」とにんまりと笑った。

「マコ、あなたいつシーと付き合ってたの？」

「姐さん……」

「まあ、マコがね、男に懲りてるのは聞いてたけど、女に走ってたなんて初めて知ったわ」

クスクス笑いながらマコトに囁いた綾香の言葉に、聞こえないはずのマーナガルムがギロリマコトを凄い眼で見た。

「何二人でコソコソ話してんだよ」

「姐さん、ふざけないでよ。ガルムさんが本気にする」

「ゴメンなさい。楽しくって……」

マコトは青くなつて綾香に言うが、綾香は軽やかにマコトに謝つてマーナガルムに向き合った。

「ガル、シーとマコが付き合うなんて有り得ないから安心しなさいつて。それにシスコンもいい加減にしないと、シーに嫌われるわよ？」

呆れたような綾香のセリフにマーナガルムも叫び出した。

「るせえっ！ 前々から心配してたんだ。実際に会ったら、しっかり話を聞かなきゃならねえと思つてたから、良い機会だから問い詰めて見ればっ！！ こ、こいつはなあ、シーのことを『遊び』だと言つてんだぞ」

「遊びなんて……」

「ああ、ただ遊んでただけで、付き合ってるなんて、凄い飛躍のしかたでビックリしちゃうわ」

マコトが口を挟もうとしたが、綾香とマーナガルムの舌戦にスゴスゴと引き下がるしかなかったのだった。

それから二人は、ギヤアギヤアと賑やかに騒ぎ出し、騒ぎを聞き

つけた他の三人が様子を見に来て、マコトは地獄に仏とばかりに助けを求めた。もうマコトではどうにもできない状況に陥ってたのだ。
「流石単細胞なお」

説明を聞いたクリスティーナはマーナガルの直情的ともいえる行動にあきれ果て、バイオティーテは何と言っているのか分からずオロオロしていた。

そしてアズライトはというと、呆れたように嘆息した。

「で？ 二人で朝から騒いでた、と」

口角を上げ微笑みを浮かべたアズライトが低い声で言うと、綾香とマーナガルムはピタリと口を閉じた。

二人は揃ってギギギと錆びついたロボットのようには首を動かし、アズライトの微笑みを見た途端、二人の身体が一回り小さくなったようにキュツと縮んだ。

「だ、だつて」

言い訳するように声を合わせて呟いていたが、アズライトがニコリと微笑むとピタツと口を閉じた。

「ガルム君、とても元気が有り余ってるようですね？」

「い、いやあ……」

「綾も朝から元気で羨ましいですよ」

「えっと……アズ、もしかして怒ってる？」

アズライトの微笑みの中に青筋を見つけたような気がして、おずおずと綾香が言ってみれば、アズライトは「呆れているだけです」とスッパリと切って捨てた。

「二人とも仲が良いのは分かりますが、時間を考えてください。朝からこの騒ぎは遠慮したいですね」

アズライトの言葉に、綾香とマーナガルムは小さくなって謝るのだった。

その後、朝食を取ろうと四階まで皆で移動し、昨日フィールドで採ってきた果物と街で買ってきたご飯などを並べた。

「流石に毎食フルーツっていうのも飽きるわね」

「でも、湿気た煎餅味のご飯は嫌なお」

ため息交じりに綾香とクリスティーナが言っている隣では、バイオティーテが自分が採った果物をマコトに出していた。

「ありがとう。昨日頑張ったんだって？ マーナガルムが褒めてたよ」

につこりと笑ってマコトが言うと「本当ですかっ！」とバイオティーテは喜びに震えた。流石に昨日あれだけ冷たい態度を取られてたのだ、褒められたと言われれば嬉しくないはずがない。

「まだ認めたわけじゃねえからな」

「それはどっちのことなのお？」

ぶつくさとマーナガルムが言えば、にこおっとクリスティーナが人の悪い笑みを浮かべて混ぜ返した。

「シーやんとマコマコのことお？ それともバイオっちのことお？」

「喧しいんだよ」

プイとそっぽを向くマーナガルムをけらけらと笑うクリスティーナ。

「マーナガルムさん」

バイオティーテが何処か思いつめたような真剣な眼差しでマーナガルムを見つめる。

「な、なんだよ……」

マーナガルムはバイオティーテの視線にたじろいだ。

「あの、私、まだレベルも低くて、全然何もできないんですけど……頑張りますから、遊色の雫の仲間って認められるように、努力します。だから、今日もフィールドでよろしくお願いします」

テーブルに額をくつつけんばかりのバイオティーテの姿と告げたセリフに綾香とクリスティーナは破顔した。彼女がココまで決心するとは思っていなかったが、前を向いて頑張ろうとする姿勢が嬉しかった。

どうだとはかりに綾香はマーナガルムとアズライトを交互に見た。

マーナガルムはビオティーテの言葉に「あ、ああ」と頷いたが、動揺しているのか果物を潰してしまった。慌てて手やテーブルをタオルで拭くマーナガルム。ワタワタとして机を拭くのもままならないようだった。

アズライトの方は、いつも通りの微笑みを浮かべ「期待していますよ」と優しく言葉をかけていたが、綾香が注目しているのに気付くと更に笑みを深くした。

一方、マコトは、彼女のセリフを聞いた途端、ゾクリと悪寒が背中を走った。嫌な汗が背中を流れ落ち、心臓がバクバクと激しく鼓動を打っていた。

一気にビオティーテと自分の距離が離れてしまったようで、マコトの足元がぐらつく。

それでもマコトは自分の醜い感情を悟られないように明るい表情を作って、決死の覚悟で自分の気持ちを伝えたビオティーテにエールを送るのだった。

（大丈夫、大丈夫……）

心の中で、置いていかれてしまうと弱虫の自分が泣き叫んでいるのを感じながらも、表面上は笑顔を作るマコト。

その姿をじつと観察するアズライトの眼差しに、マコトは気付くことは無かった。

進取果敢？ 異世界旅行は苦難続き？

東の空から陽が出てすぐのひんやりとした空気の中、蘭丸はギルドホールを抜け出して、遊色の雫のギルドハウスへ走って向かった。

肩掛けカバンの中に入っている『香りつきティッシュ入り寄木細工』が蘭丸の走りに合わせてカタカタと鳴った。

「ビオティーテさんみたいな弱い人をフィールドに連れ出すなんて……」

蘭丸は昨日マコトから聞いた話を思い出すと、ビオティーテを守るために何も出来なかった自分が不甲斐なくて仕方がない。何故、あの時無理やりにも 銀杏工房 へ誘わなかったのかと後悔で胸がいっぱいになった。

「マコトさんだって、なんで反対しなかったんだ」

遊色の雫は新人苛めして楽しむ最低なギルドだったのかと、綾香は売り子たちの噂の通り自分以外の女性は蹴落すような最低な人だったのかと思うと、そんな人たちにビオティーテを預けた自分の見る目の無さが情けなかった。

「ビオティーテさんは、僕が助ける」

ビオティーテを助ける自分。それはまるで物語のヒーローになったかのように、蘭丸の気分を高揚させた。

（待ってて、ビオティーテさん……）

蘭丸の脳裏には、ビオティーテを助ける自分の姿が映し出されて、その勇ましさに胸が熱くなった。悪物から王女を助け出す王子になったかのように自分でも気付かないうちに笑みが漏れた。

ビオティーテが屈強なマーナガラムに掴まれて、無理やりフィールドに連れ出そうとされている。僕は

遊色の雫　のギルドハウスの赤い扉が開いて、そこから綾香が出てきてこちらに走って来る蘭丸の姿に目を丸くした。

はぁはぁと息を荒くして、綾香の目の前で止まった蘭丸は、身体を折り曲げて短く息を吸ったり吐いたりすると「ま、待って、ください」と息も絶え絶えに呟いた。

「蘭丸。どうしたの？」

あまりの必死の形相に綾香はキョトンとして首をかしげた。

「ビ、ビオ……」

「ああ、ビオティーテ？　ビーならクリスと装備を確認してるわよ。今三階に居るから呼んできましょうか？　ちよつと待っててね」

あつさりとビオティーテの場所を答えると、扉をあけっぱなしにして、トントンと階段を上っていく綾香の後ろ姿が見えた。

（あ、あれ？）

決死の覚悟が揺らいでいく。なんであんなに普通なのかと疑問に思うが、これが奴らの手なんだと気を取り直すと、呼吸を整えギルドハウスの中に乗り込んだ。

「ビー、なんかねえ、蘭丸が来てるわよ。装備の確認は終わったの？」

上階から声が聞こえてきた。どうやら装備の確認は終わったらしく、ビオティーテの柔らかな声が階下に響いた。

「蘭丸さん、ですか？　お約束はしてないですけど……ちよつと行ってきますね」

「いつてらつしゃあい」

クリスティーナの甲高い声が階段に響き、直後に扉の閉まる音がした。

ドキドキと早鐘のような心臓の音とトントンと階段を下りる音が重なって、徐々に近くなる足音に蘭丸の鼓動は早くなっていき、眩暈がしそうだった。

ヒョコつと階段の踊り場から下を覗くビオティーテの姿が見え、蘭丸を確認するとニコリと微笑む。その愛らしい微笑みに蘭丸は「

僕が来たから大丈夫だよ」と言おうとしたが、言葉にならなかった。
「おはようございます。蘭丸さん……どうかなさったんですか？」

無邪気に小首をかしげるビオティーテ。蘭丸はゴクリと唾を飲み込むと、持ってきた肩掛けカバンから『香りつきティッシュ入り寄木細工の宝石箱』を取り出す。

「こ、これ……」

差し出された物をビオティーテは不思議そうな眼で見ながら「戴けるんですか？」と尋ねた。

コクンと頷く蘭丸を見て、そおっと手を差し伸べるビオティーテ。『寄木細工の宝石箱』を差し出す蘭丸の手とビオティーテの指先が触れ、それを感じた蘭丸はビクリと身体を震わせた。蘭丸の身体の震えを感じたのか、『寄木細工の宝石箱』から手を離し、戸惑う様に差し出した手を彷徨わせるビオティーテ。

戸惑う眼差しが蘭丸の手の中の物と蘭丸とを交互に見つめ、蘭丸は「あつ……」と声を漏らすと、ビオティーテに押し付けるように『寄木細工の宝石箱』を渡した。

「あ、ありがとうございます」

おずおずとビオティーテはお礼を言うと、自分の手の中の物をシゲシゲと眺めた。

蓋には様々な木の欠片が美しい模様を描いており、蓋を開けると瑞々しいリンゴの香りがした。その柔らかな香りに頬が緩む。

「良い匂い……」

目を細めるビオティーテの言葉に、蘭丸はこの石鹸を譲ってくれた鮎に最大の感謝を贈った。蘭丸の頭の中では、賑やかなクラッカーの音と共に割れるくす玉の幻影が広がっていた。

「蘭丸さん、これを届けに来てくれたんですか？」

蘭丸の顔をじっと見つめるビオティーテの黒目がちの瞳に蘭丸は魅入った。反射的にコクコク頷くと、何も言うことができずビオティーテと見つめ合う。

「ありがとうございます。大切に使いますね」

花が綻ぶように微笑むビオティーテの姿に蘭丸は胸がいつぱいになったが、これだけは言わなければと必死に氣力を振り絞る。

「あ、あの…… 銀杏工房 へ来ませんか？ ぎ、 銀杏工房 だったら、危険なフィールドに行かなくても大丈夫だし……あ、あと、サブ職業のレベルも上げることが出来ます。 裁縫師 の杏先輩とか、 化粧師 の薊先輩とか……も、もちろん 木工職人 だったから私が教えることができます」

蘭丸の言葉を聞き洩らさないといつかのように、じっと見つめるビオティーテの目に、蘭丸はゴクリと息をのみ込んだ。

「でも……」

「移籍だったら、ギルドハウスで簡単に出来ます。だから大丈夫です」

ビオティーテの言葉を途中で遮って、蘭丸は自分の言葉を言い切った。

「だから……一葉先輩になら、私から説明します。大丈夫です。一葉先輩は女性を無碍になんてしません。ココみたいに無理やりフィールドになんて連れだしません」

蘭丸はギュツとビオティーテの手首を握った。柔らかな肌の感触に心臓は破裂しそうだったが、ここで離してしまつてはビオティーテを 悪魔の巣 遊色の雫 に放り出すことになつてしまうと、蘭丸はしっかりと握った。

ぐつと引き寄せるが、ビオティーテは蘭丸に逆らつて動こうとしない。

信じられない思いで目を見張る蘭丸だったが、そうかと思ひ当たった。

「脅されてるんですね でも、大丈夫です。 銀杏工房 へ逃げれば、そこまでは追つてきませんし、もし追つてきても渡すようなことはありません」

きつぱりと宣言する蘭丸に、小さな声でビオティーテは逆らつた。「違うの。そうじゃないんです」

「何で？ だって、ビオティーテさんは嫌なんでしょう？ フィールドになんて行きたくないんでしょ？ 無理やり連れてかれてるんでしょ？ ねえ、だったら私と逃げましょうよ……なんで、嫌がるんですか？」

蘭丸は訳が分からなかった。ビオティーテは弱い。弱いからフィールドになんて行きたくない。なのに無理やり連れ出されてる。だから、私が助ける。なのに、何故彼女は嫌がるんだ？

「私は、自分の意思で……自分の意思でフィールドに立つんです」

ビオティーテは宣言した。蘭丸の目をじっと見て、どこか自分に言い聞かせるようにきっぱりと宣言した。

「誰に何を言われているのか、私は知りません。でも、決めたんです」

ビオティーテの涼やかな声が蘭丸の耳じだを打つ。蘭丸の自己満足じみた英雄心に楔を打ち込んだ。

「現実世界での私は、人の言うことを聞いて、それに従うだけの詰まらない人間でした……でもっ、でも」

ぐつと唇をかみしめて、涙がこぼれそうになりながらも必死で涙をこらえて、ビオティーテは呟いた。

「でも、決めたんです。この世界では強くなろうと……全て自分の考えで、自分で決めて、自分の力で生き抜こうと」

ポロリと涙が一粒、ビオティーテの大きな目から零れ落ちた。蘭丸の手の力が抜け、するりとビオティーテの手首が蘭丸から離れて行った。

蘭丸は、まるで自分が捕まえた小鳥が飛び立っていくような、大切な大切な宝物が消えて行ったような奇妙な感覚に陥った。

「キミは……フィールドに、立つのは……怖く、ないんですか？」

何処か遠くの世界で自分ではない人が呟いている感覚がする。耳に覆いを掛けたように音がボンヤリとして定まらない。

ゆらゆらと揺れる視界の向こうで、蘭丸の言葉に「怖いです」と
呟くビオティーテの姿が見えた。

「だったら……」

無駄な足掻きだと思いつつも蘭丸は言い募ることを止められなかった。安穩とした 銀杏工房 で生活を否定されているような気がしながらも、自分の生活を守るためにビオティーテの考えを正さなければならぬ。蘭丸は混乱する頭の片隅で、自分でも気付かないうちに、そんな考えに囚われていた。

「だったら、そんな怖い思いをしてまで、フィールドに立たなくたっていいじゃないかっ！」

ビオティーテの耳に蘭丸の叫びと合わせて、昨夜のクリスティーナの声と言葉が木霊した。

『何をしたいか、どうしたいかって考えてみたら、少しは世界が変わる力モなお』

（何をしたいか……どうしたいか……）

ゆつくりと一言一言かみしめるようにビオティーテは告げる。目の前に居るのは昨日までの弱い自分なんだと自分に言い聞かせて、これが今の自分の考えなんだとビオティーテは言葉を放った。

「誰かに縋って生きるとな弱い私は嫌なの。ただ言われたことに従って、決められた道を行くだけの生活はもう沢山なのよっ！ だから、だから……」

声が小さくなる。これから伝えようとする決意は、弱い自分には余りにも虚勢じみっていて、大言を吐くようで怖くなる。カタカタとビオティーテの震えに合わせて、手の中の箱が音を鳴らす。

ビオティーテはゴクリと唾を飲み込むと、震えを止めるように箱をギュツと抱きしめて叫んだ。

「怖くても、それ以上に私は強くなりたいんです……自分で決められるくらい、強く、強くなりたいんです」

ビオティーテの声が階段に響き渡った。

パチパチパチ

乾いた音が階段の上から響いた。

驚いて音がする方を振り仰ぐビオティーテ。蘭丸は呆然としながらも、音の鳴るほうへ視線を移す。

「素敵な覚悟です」

冷やかな笑顔を顔に張り付けたアズライトが踊り場に立っていた。止めるような綾香とクリスティーナの姿がちらりと見えたが、こちらには来る気配は無かった。

「離してっ！」

綾香が小さく叫ぶ声が聞こえた。どうやらマーナガラムに腕を取られ、こちらに来ることは出来ないようだった。ぼんやりと見え隠れする綾香の姿を眺めていたビオティーテだったが、ひんやりとしたアズライトの言葉にハッと視線をアズライトに戻す。

「見事な、決意……ですね」

笑みを浮かべたまま、ゆっくりと階段を下りたアズライトは、ビオティーテの前に立つ。身長差のあるアズライトの顔を確かめるには見上げなければならず、ビオティーテは首を上向かせる。

二人の視線が絡まった。見下すような冷やかなアズライトの視線。震えながら見上げるビオティーテの表情が固まった。

「『誰かに縋って生きるような弱い自分は嫌だ』と云うのでしたら、鍛えてあげましょう」

につこりと微笑む。優しいな微笑みのはずなのに、ビオティーテの背筋に冷たいモノが滑り落ちた。

「それこそ嫌というほど、鍛えて差し上げますよ　だから、貴方の覚悟、見せてもらいましょうか？」

蘭丸の目には、微笑んだ男が悪魔に見えた。ここでビオティーテを助けられるのは自分だ、私が助けなければと蘭丸は震える声でア

ズライトに叫ぶ。

「あなたは、それでも人ですかっ！　なんで、なんで、そんな酷いことを言うんですか？」

震える声は大きな声にならず、掠れるような細い声だったが、アズライトは蘭丸の声ににこりと笑って答えた。

「蘭丸君？　私はビオティーテに『鍛えてあげます』と親切に申し出ているだけですよ？」

言葉だけを見ればアズライトの言う通りだったが、なんとかアズライトに反論しようと口を開いた蘭丸。

しかし、蘭丸の言葉が声になるよりも早く、アズライトの冷たい声が飛んできた。

「それに、貴方は　銀杏工房　の方でしょう？　これは　遊色の雫のギルド内部の話し合いです。部外者は出て行ってください」

その言葉の強さに蘭丸は思わず後ずさりをした。

ただ、しつぽを巻いて逃げだすことしか蘭丸には出来なかった。それに気付いた時には、蘭丸は赤い扉の外側に立っていたのだった。

（私は、彼女を……助けることが、出来なかった　　）

蘭丸は無力感に苛まれた。この赤い扉を前にした時のような高揚感や微塵もなく、ただ肩を落として　銀杏工房　へ戻ることしか出来ない自分が情けなかった。

進取果敢？ 異世界旅行は苦難続き？（後書き）

スミマセン。いつものことながら、この後、『相思相愛？ 異世界での恋愛模様！』の前に二話挟むことになります。

それに伴って、『事実無根？ 異世界での騒がしい朝！』の最後を少し変えました。

ご迷惑をおかけして、申し訳ございません。

一生懸命！ 異世界での戦闘指南？

フィールドに立ったバイオティーテは、目の前で綾香達が余裕そうに戦う様子を観察していた。魔物たちの姿や敵意に疎みそうになる心を宥めながら、胸に掛けたペンダントの水晶をぎゅっと握る。

ややもすれば目を閉じて、小さく縮こまって恐怖をやり過ごそうとする身体を叱咤し、目を開いて目の前の状況をジッと観察する。

この日フィールドを出てすぐ、バイオティーテはアズライトに課題を出されたのだ。戦闘終了後、毎回どんな内容だったかを報告するようにと。

「もちろん、恐怖があるでしょうが……強くなりたいと宣言したのです。そのくらい来ますよね」

ニッコリ笑ってアズライトは告げると、バイオティーテが何か口にするよりも早く「もちろん」と優しい微笑みを彼女に向ける。

「怖かったら 帰還呪文 でアキバの街へ帰っても構いませんよ？」

優しい声と親切な言葉に騙されそうになるが、目は笑っていない。バイオティーテが次に来るであろう波を待ち構えていると、アズライトは目を細めて次の言葉を告げるのだ。

「その場合は、逃走とみなして、もう二度とフィールドには連れ出しませんから 御安心ください。 銀杏工房 でもどこでも、

好きなギルドへお逃げなさい」

「……逃げません」

アズライトの冷たい眼差しに負けぬように、目に力を入れてバイオティーテは呟いた。怯えからかなり小さな声になってしまったが、アズライトの耳には入ったようで、にこやかに微笑まれる。

「なら、頑張ってくださいね。期待してますよ」

「……」

バイオティーテが何も言えず固まっていると、アズライトは背を向

けマーナガルムと打ち合わせを始めていた。

二人の話が終わるのを待っていたのだろう綾香とクリスティーナがバイオティーテに近付く。

「ゴメンね。何にも助けられなくて……」

悔やむような綾香の声にバイオティーテは緩く首を振った。

「大丈夫です。だって、私には強くなる方法なんて分らないんだから……」

「ライライ、なんか今日、雰囲気違うのぉ」

クリスティーナはアズライトの方を盗み見ながら呟くと、背負い袋の中から取り出した物をバイオティーテの首にシャリと掛けた。バイオティーテが驚いて自分の胸元を見るとそれは細い鎖で出来たペンダントで、鎖の先には透明な水晶がぶら下がっていた。長細い水晶の中を見て見れば、様々な色合いを持つ小さな石が浮かんでいた。「これは？」

水晶を手にして不思議そうにクリスティーナを見れば、「お守りなのぉ」とクリスティーナが囁いた。

「持つてると敵に気付かれないんだって。確かそんな感じのはずなのぉ。怖かったらギュツと握つとけ、なのぉ」

ふにやりと笑うとクリスティーナはバイオティーテの手を取り、水晶をギュツと握らせる。

その水晶を見た綾香は何か気付いたように目を見開いた。その後、綾香の視線は、水晶を握るバイオティーテの手とクリスティーナの顔を何度も往復し……最後にアズライトの後ろ姿に移った。

「綾ちゃん？ どないしたのぉ」

クリスティーナの声に綾香は軽く首を振ると「なんでもないわ」と告げるのだった。

そして一行は、森の中でゴブリンの群れと戦っている。

マーナガルムが何か叫ぶとゴブリン達はマーナガルムに群がり、マーナガルムに押しかけていくゴブリンを綾香が鮮やかに倒してい

く。クリスティーナが呪文を唱えると、彼女の目の前に白い光で出来た模様が現れて、その模様の真ん中から真つ赤な蜥蜴が現れた。

身体がユラユラと揺らめいたそれが、まるで炎のようだといオティテが思ったと同時に「サラちゃん、ブレスなのぉ！」と楽しげなクリスティーナの声が響いた。クリスティーナの言葉と共にスツと後ろに下がり間合いを取るマーナガルム。赤いトカゲが炎の息を吐き出すとゴ布林達は黒こげになり……冷たい気配と共に氷の矢がゴ布林達に突き刺さった。

あっという間の出来事だった。

沢山いたはずのゴ布林の群れは、いつの間にか屍になっていて、ビオティーテは茫然と立ちすくむばかりだった。

「ビオティーテ」

背後からアズライトの声が聞こえ、ビオティーテは思わず背筋を伸ばすと、今見た光景を一つ一つ報告していった。

「戦闘が始まってすぐ、マーナガルムさんが叫び声を上げました。言葉までは聞き取れませんでした、その叫び声でゴ布林はマーナガルムさんに向かって行きました」

ゴクリと唾を飲み込む。今日何度も行っおこなていることとはいえ、今見たばかりの戦闘の様子を思い出しながら報告するのは、勇気のいることだった。今、受けたばかりの衝撃をもう一度頭の中に再現しているのだ。その恐怖を思い出し、ビオティーテの呼吸が自然に荒くなる。

「それで？」

続きを促す声に、ビオティーテは息を整えて語りだした。

「綾香さんがゴ布林を倒していました。それから……」

「ゴ布林は綾香に攻撃されて、綾香に向かって行きましたか？」
確認するようなアズライトの言葉に、ビオティーテは必死に今の戦闘の様子を思い返す。綾香がゴ布林に攻撃した後、攻撃されたゴ布林は倒れたが、周りのゴ布林は相変わらずマーナガルムに群がったままだった。

「いいえ、綾香さんのことは眼中にないようでした」

「そうですか。それでは報告を続けて」

その後のクリスティナの前に現れた赤いトカゲのことや、クリスティナの声に合わせて動いたマーナガルのこと、現れた氷の矢のことを報告するビオティーテ。

頷きながら聞いていたアズライトは、全ての報告を聞き終わるとビオティーテの報告に評価を下す。

「可、と言ったところですね。もう少し注意深く観察してください。次は、ガルム君の叫んだ内容や、クリスが召喚する時に召喚対象の名前を呼びますから、その名前などを覚えていられるようにしてください」

小瓶に入った回復薬を渡され、飲んでおくよう指示される。

報告が終わり、辺りを見回す余裕が出てくる。少し離れたところで、綾香たちは草花を確認しながら背負い袋に入れていた。

アズライトも草花の収集に加わった。木の皮を剥ぐマーナガルム、地面に落ちた木の実を拾い集めるクリスティナ。

「ビオティーテ、終わったらアイテム収集の手伝い出来る？ 大丈夫だったら、マコが使う草花を教えてあげるわ」

回復薬を飲み、ホツと一息ついたところで綾香に呼ばれ、ビオティーテは「今行きます」と慌てて綾香の元へと走り出した。

こうして戦闘のたびに報告を求められ、マーナガルムや綾香の使う技の名前、クリスティナが呼び出す精霊たちの名前を覚えておくよう指示される。また、ちゃんと聞き取れるようになると、アズライトはそれぞれの効果などを語った。

教えた技や呪文が再度報告の中に出てきたときには、「効果は？」と質問を返されることが多くなり、そのたびにビオティーテが答えられず間違^{まちが}ついていると、見ていられないとばかりに綾香やクリスティナが口を挟んだ。

それを呆れたように見ていたアズライトだったが、止めようとは

せず、次の報告の時も同じ技や呪文が出てくれば「効果は？」と確認してくるのだった。

「マーナガルムさんは タウンテイング・シャウト という技を使っていたんですね」

毎回最初のマーナガルムの大声が聞こえた時には、目の前に迫るモンスターに身がすくんでしまっていて何も考えられなくなってしまう。報告のたびにアズライトから「ガルム君は何て言っていました？」と確認されるが答えられないビオティーテは、思い切ってマーナガルムに何と言っているのか確認したのだ。

「ああ、 タウンテイング・シャウト は敵を逆上させて、俺に集中攻撃させる技だ。この中じゃ、俺が一番装甲が厚いからな」

ついでとばかりに技の説明をするマーナガルム。確かにステータスを確認すると、戦闘で何度も攻撃を受けているはずなのに、HPはさほど減っていないかった。

「綾も戦士系ですが、守備力という点では ガーディアン 守護戦士 には敵いません。味方を守るという点に特化した職業ともいえます」

後ろから来たアズライトが付け加えた。ビオティーテは条件反射のように背筋が伸びてしまう。まるで悪戯が見つかった生徒のようだと思い、妙に納得した。

（アズライトさんって、学校の先生みたいなんだ）

「次の報告の時には、実際にちゃんと聞きとって報告してくださいね」

「は、はい……」

アズライトの言葉に少し自信なげに頷くビオティーテだった。

「次はクリスが先生するのよ」

マーナガルムにお礼を言っていると、クリスティーナがビオティーテに抱きついてきた。

「まずねえ、クリスと一番仲が良いのが……」

クリスティーナは自分の召喚する精霊の話になると口が止まらず、しまいには風の精霊シルフィードや森の精霊ドライードを呼び出し、高い木の枝になっ

る木の実を取ってもらうなどの実演を見せ始める。

何度も報告を重ね、それぞれの技や呪文を理解してくると、闇雲にフィールドやモンスターを怖がるだけだったビオティーテの心境にも変化が見えてきた。

それを待つていたかのようにアズライトは、ビオティーテへ次の指示を出すのだった。

「ビオティーテ、次の戦いからは周りの状況を確認しながら、戦闘の観察をしてください。もし周辺にモンスターの気配を感じたら、声を出して知らせてください。クリスこちらに来てください。

綾は……そこを動かないでくださいね。ガルム君！」

アズライトはビオティーテに告げた後、『集魔香』と呼ばれる匂い袋を取り出し、マーナガルムに投げつけた。

パシッと匂い袋を受け止めたマーナガルムの周囲に白い粉が撒き散らばる。

「うわあっ！　なんだよ、これ……」

白い粉を受けたマーナガルムはゴホゴホとむせ出した。顔の前にフワフワと漂う粉をよけるように手で払いながら、場所を移動する。

「『集魔香』^{タウンテイング}です。モンスターたちは基本的にガルム君を狙ってきますから、挑発^{タウニング}特技はもう使わなくて構いません。効果は2時間ほどです。大量にモンスターが現れますから、休憩が欲しいのでしたら、さっさと殲滅してくださいね　もちろん、綾もクリスも休憩が欲しかったら頑張ってくださいね」

「ええっ！」

綾香とクリスティーナが非難の声を上げると、マーナガルムもギョツとしたようにアズライトを振りむいた。

「ちよっ、ちよっと待て……って、来やがったし」

にこにことトンデモナイことを告げてきたアズライトに抗議しようとうと口を開きかけたが、匂いにつられて集まってきた灰色狼の姿が遠くに見え、マーナガルムは舌打ちした。

「流石犬ところだ。鼻の利きはピカイチだな。ったくよお、さっさ

と終わりにしてやるぜ」

マーナガルムはハルバードをグルングルンと振り回しながら、こちらに駆け寄って来る灰色狼の群れを待ち構えた。綾香は援護の為だろう、マーナガルムの斜め後ろで構えた。

「ビオティーテ、状況確認」

「えっ……」

アズライトの言葉に慌ててビオティーテは周囲の確認をする。後ろにも左右にも魔物の姿は見えない。来るのは前からの狼だけのようだ。

「目、目の前に狼の群れが……全部で、7？6？5頭以上はいま
す」

動いているため数が良く分からない。数えられるところまでは数えて、報告してみた。

「6頭です。周囲の状況の確認を続けてください」

アズライトが告げた時、左手の奥の木の間から赤い獣の目が光った。

慌ててビオティーテは叫んだ。

「ひ、左……モンスターがいます」

前方のマーナガルムと綾香は、6匹の灰色狼をサクサクと倒していたが、今、左手にいるモンスターが来た場合、戻って来るまでには時間がかかる。ビオティーテは謎の獣と自分が対峙した時、自分は相手に対抗する手段がないことに気付くとパニックに陥った。

「安心しろなお。クリスのドリアちゃんに任せろなお！」

クリスティーナは叫ぶと森の精霊トリアーネを召喚すると、光の魔法陣の中から緑色の長い髪を持った細身の美しい少女が現れる。白い部分の無い緑色の大きな瞳でビオティーテを見つめた少女は、ビオティーテにニコリと微笑む。

すると、ビオティーテのパニックに陥っていた心が落ち着いていた。

「ドリアちゃん、林の中の敵を殲滅なお」

クリスティーナが叫ぶとドリアードは地面を滑るように進む。少

女が着ている風に揺れる葉々のような色合いのワンピースが徐々に広がり、裾が何本もの蔦に変わる。蔦は凄じ勢いで木々の間をすり抜けていき、林の中に居た獣たちを絡め取り、林の中から引き摺りだした。獣たちの哀れな鳴き声が聞こえてきたが、やがて声も聞こえなくなり、ドリアードの裾に戻っていった蔦たちの先には変わり果てた姿になった灰色狼が3体絡まっていたのだ。

「ビオティーテ、呆けてる暇はありませんよ。状況確認を続けてください」

アズライトは目の前で行われていることについていけず、ぼんやりとドリアードの姿を見ていたが、アズライトの言葉にハツとして周囲に目を配る。

そしてその後、ゴブリンなどのモンスターが次々と襲いかかって来たが、そのたびに返り討ちにした面々は疲れた表情でアキバの街に戻っていくのだった。

ギルドハウスに帰り付いたクリスティーナは「お風呂に入りたいのお」と樽一杯の水を屋上に持ち込み、サラマンダーを召喚して水の中にポンと放り投げた。

サラマンダーはキーキーと怒り狂ったが、クリスティーナに宥められ、ルビーの欠片を貰うと満足気に帰っていくのだった。

「さあってと、ガルガルとライライはあっち行っててなのお」

マーナガラムとアズライトを追い出し、ポンポンと服を脱ぐと水着になったクリスティーナは、どこから持ち出したのか桶を手^{すく}に樽の中からお湯を掬った。

ザバーツと肩から湯を掛けると汗が流れていき、ハアツと息を吐くクリスティーナ。

「綾やんとビオっちもお湯掛けてみ？ 気持ちいいぞお」

「それじゃ、どっちかっていうとお風呂じゃなくてシャワーでしょ？ 私は濡れタオルで拭けばいいわ……帰って来る時、川で汗を流したから、そんなに汚れてないし」

綾香はそう言うところクリスティーナの桶を使ってお湯を汲む。その桶の中でタオルを浸し絞ると、自分の首回りを拭きだした。

「つまらないの。ビオッチは？」

「私も拭くだけで……いえ、じゃあ、お湯掛けます」

綾香と同じように拭くだけで終わりにしようと思っていたビオティーテだったが、あまりにもクリスティーナがしょ気かえるので、服を脱いで水着の上からお湯を掛けてもらった。

「あったかい……気持ちいいですね」

川の水で冷えた身体にお湯を当てるとそれだけで気持ちが良い。夕方になってきて外気温が冷えてきたから余計にお湯の温かさが気持ち良かった。

お湯自体さほど量は多くないので、すぐに無くなってしまったが、クリスティーナとビオティーテは久しぶりにさっぱりとした気分になった。

部屋着に着替えた三人。ビオティーテと綾香は椅子代わりの岩に座り、のんびりと空を眺めていた。クリスティーナは樽の中を確認する。

残ったお湯は桶に3〜4杯ほど。そのお湯を桶の中に入れ、クリスティーナは簡易足湯とばかりにビオティーテの前に置く。椅子代わりの岩の上に座っていたビオティーテの足を桶の中に入れ足を揉んだ。

「すごいっ！ 気持ちいいし、足の疲れが取れてくみたいです」

ビオティーテは感嘆の声を上げた。

「じゃあ、次はクリスガやってみるの」

ビオティーテが満足すると、お湯を変えクリスティーナが足を桶に入れた。ビオティーテの言う通り、湯を張った桶の中に足を入れて、足の指をほぐすと気持ちよかった。

「もっと浅くて広めの樽だったら、足湯とか出来そうなの」

「そんな樽、どこにあるっていうのよ」

クリスティーナとビオティーテが代わる代わる簡易足湯に浸かり、

その気持ちよさそうな姿に綾香も簡易足湯を楽しんだ。

「気持ちいいわねえ。これにアズにアロマオイルでも貰ってきて、入れれば完璧だったわね」

「それ、いいですね。入浴剤みたいで」

「温泉の素とかバス リンみたいでしょう。薔薇のアロマとか贅沢じゃない？」

「温泉いいなあ、行きたいなあ……」

満点の星空の元クリスティーナは呟いた。

屋上で女性陣がお湯で遊んでいる頃、アズライトは調香台でアロマオイルを作っていた。材料があまりないので今までに作ったモノを組み合わせようかと在庫を調べると、以前作ったラベンダーのアロマオイルを発見した。

「疲れている時は、やはりラベンダーですかね……」

帰りにギルド会館の貸金庫から出てきた『熱石』をシャーレのような浅い皿に乗せ、アロマオイルの入った小瓶の蓋を取ると、1滴アロマオイルを『熱石』の上に垂らした。

『熱石』にアロマオイルが触れた途端、『熱石』が赤くなり、石の周囲の温度が上がった。その熱でアロマオイルは蒸発して、部屋中に微かなラベンダーの香りが広がる。

『熱石』は、水などの水分を加えると熱を発する石で炎は出ない。そのため熱だけが必要な際などによく用いられ、アズライトはアロマライト代わりに使えるかと使ってみたのだ。

「……若干香りが薄い？ 2滴ほど垂らした方が効果的ですかね」
じつと見ていると5分ほどで発熱が終わり、徐々に冷えていく『熱石』。水分が少ないと発熱の持続が無いため、就寝時間などで使う際に心配ないだろう。

仄かにラベンダーの香りがする部屋の中、アズライトは一人呟く。
「テーブルがありましたしね……そこで使って貰いましょうか」

「アズ。いるの？ って、あれ？ 何この匂い……ラベンダー？」

綾香が扉を開け入ってきた。作業室の部屋の中に広がる微かな香りに気付き、クンクンと鼻をひくつかせる。

アズライトは綾香の姿を見て、にっこりと微笑んだ。

「丁度良かった。貴女に差し上げようと思ひましてね……綾、使い方を説明しますから一寸見てください」

綾香が調香台に近付いたのを確認すると、アズライトは『熱石』と皿を指し示した。

「これは『熱石』といって、水分を与えると発熱する石です。皿の中に入れて使ってくださいね」

『熱石』は皿に入ったままだったので、その上に小瓶の中身を１滴垂らす。

すると石が赤くなり、石の周りが熱を帯びる。

「今、アロマオイルを垂らしました。だいたい１滴で５分ほど熱くなります。部屋の広さを考えると２滴ほどが適量だと思いますよ」

「うん、良い香りね」

息を思いきり吸い込んだ綾香は、その香りに頬を綻ばせた。

「今日のご褒美ですよ。がんばりましたからね」

「そう？」

綾香は小首をかしげる。頑張ったと言われても、相手は雑魚であるゴブリンや灰色狼ばかりだ。レベルが高い敵でも３０レベルほどだったろうか。『集魔香』のおかげで大量に湧き出てくれたが、綾香達とのレベル差は大きい。

綾香はレベル８、そのほかの３人はレベル９０だ。この世界にきたところと比べると戦闘に慣れ、レベル２０から３０を相手にして疲れたなどと言うことは、まずない。

なによりも昨日だってモンスターと戦っているのだ。なんで今日に限ってなんだろうと、アズライトの不思議な言いように疑問を抱きつつも「まあ、くれるっていうなら貰っておくわ」と綾香はアロマオイルの小瓶と『熱石』の入った皿を持った。

「気を付けてくださいね。まだ『熱石』は熱いんですから」

「大丈夫よ……っと、そうだった」

扉に向かっていた綾香だったが、振り返るとアズライトに尋ねた。

「あのペンダント……クリスがビーにあげたヤツ」

「ああ、『透明人間の首飾り』ですか。懐かしいでしょう」

につこりと微笑んだアズライトに綾香は不審そうに尋ねた。

「あれって……アズのよね？」

「だいぶ前にクリスに差し上げたんですよ　何かおかしな点でも？」

アズライトの何気ない答えに、しばし考え込んだ綾香だったが、フウっとため息をつくときニツコリと笑った。

「そういう事にしといてあげる。じゃ、これありがとう」

「そういう事にしといてください。良い夢を……」

ヒラヒラヒラと手を振って、綾香は部屋を出て行った。

一生懸命！ 異世界での戦闘指南？（後書き）

一話じゃ終わりませんでした。アズ先生が前回鬼だったので救済策。救済になっっているでしょうか？

さてこの後、一話入ります……が、今日は目が痛くなってきたので更新できません。

明日は予定があるので、21日更新予定です。

首飾りの名前が気に入らなかったので変更しました。

閑話休題？ 異世界生活ものんびり一休み？（前書き）

繋ぎみたいな話になってしまい申し訳ありません。

閑話休題？ 異世界生活ものんびり一休み？

マコトは 銀杏工房 へ出勤すると、杏と薊の二人に 銀杏工房 へは移籍しないことを伝えた。

杏は残念そうな顔をしながらも何処かホッとしたような表情を浮かべたが、薊は残念そうにしながらもマコトの耳元で「気が変わったら、いつでも声かけてね。待ってるわよ」と囁くのだった。

「それにしても蘭丸ってはどうしたのかしら？」

マコトと杏が作業をしている作業室に遊びに来た薊は、今朝からの憔悴しきった蘭丸の表情を思い出し不思議そうに呟いた。

ちなみに、蘭丸は今朝から虚ろな表情でぼんやりと自分の作業台を眺めていたが、余りにも様子がおかしいので椿に勧められて今は部屋で休んでいる。

「今朝、どこから帰ってきた時から、あんな調子なんですわ」

杏も不思議そうに首をかしげた。

「遊色の雫 の新人ちゃんでも、何かあったのかしらね」

石鱗のことで二人のことを知っている薊は呟くと、チラリとマコトの表情を窺った。マコトがギクリと身を固くしたのを察し、薊の唇が楽しげに弧を描く。

「少年、何か知ってるのかしら？」

「な、なんのことかな？」

とぼけるようなマコトのセリフに薊は不敵に笑った。

「少年、知ってることを洗いざらい、全ておっしゃいなさい。あたしが許すわ」

「ちよっ、ちよっと待ってくださいよ。僕は何も知りませんって」
「嘘ね。ほらほら、早く白状しなさいって」

人の悪い笑みを浮かべ詰め寄って来る薊にマコトが敵うはずがな

く、結局は今朝の出来事を洗いざらい白状する羽目になった。

「あら……その新人ドワーフちゃん、結構見所があるんじゃない」話を聞いた薊はそう評価した。

「あのアズ先生の氷の微笑の前でも逃げなかったんでしょ。しかもそんな先生と一緒に、フィールドへピクニックに行ったなんて、凄いわぁ」

何処か茶化すような薊の言葉にマコトはゲンナリとして呟く。

「僕はあんなアズライト先生、もう見たくないよ。凄く怖いんだ」

「あらあら、アズ先生を怖がってるだけのようじゃ、少年は成長が無いわね」

クスクス笑って薊は、マコトの髪をぐしゃぐしゃとかき混ぜた。

マコトは薊にされるがまま、グラグラと頭を揺らしていたが、「薊さん、お願いがあるんだけど……」と呟いた。

「なあに？ 少年のお願いだなんて、お姉さんドキドキしちゃうわ」クスクスと楽しげな薊の言葉に「お兄さんの間違いじゃない？」とマコトは思わず突っ込んだが、笑顔で無視された。

気を取り直してマコトは薊に頼んだ。

「石鹸を買いたいんだ。男の人でも使えるような香りの弱い奴」

「あら？ 贈り物？」

「う……ん、ちょっと助けて貰って……あの、ちゃんと代金はお支払しますから、一つ譲ってくれませんか？」

「どうしようかしら……少年には移籍断られちゃったのよねえ」

薊が悩むように呟いたセリフに、それもそうだとマコトは肩を落とす。考えてみれば、今日自分は薊の申し出を断ったばかりで、そんな自分が薊に頼みごとをするなんて、すごく虫のいい話だと己の考えの浅さに嫌気がさす。

「そうですよね……ゴメンなさい。他の物探します」

「やだわぁ。ちょっと待ってよ」

薊はケラケラと笑いながら「冗談よ。じょ・う・だ・ん。本気にしないでよ」と言うとマコトの方をバシッと叩いた。

「あたしつてば、そんな狭量じゃないわよ。少年つてば、そんなに気を落とさないで欲しいわあ……ほら、蘭丸のことを教えてくれたんだし、情報料としてタダであげるわよ」

「いや、代金を支払わせてください。なんだかタダより高いモノは無い気がする……」

「まったく、それじゃあ、あたしが性格悪いみたいじゃないもお……ちよつと待つてて、今持つてきてあげるわ」

楽しげに薊は言つと、弾むような調子で作業室から出て行つた。

「マコトさん、薊さんは自分の作ったモノが喜んでもらえるなら良いつてタイプの人ですから、そんなに深く考えなくても大丈夫ですよ」

杏がおかしそうに笑つた。

「移籍の件は気にしないでくださいませ。そんなことを気にされてしまつては、こちらも困つてしまいますわ」

杏のセリフにも素直に頷くことはできず、マコトは曖昧な笑みを浮かべるのだった。

その後、薊は「男性にはこれ」と持つてきたのは濁つた緑色の石鹸と、くすんだ黄色の石鹸の二つ。

「緑の方がライムで、黄色はレモンよお。爽やか柑橘系で、男性にも使いやすいと思うわあ」

杏とマコトはどんな香りだろうと石鹸に鼻を近づけた。黄色の石鹸からは爽やかなレモンの香りが広がり、緑色の石鹸からは清々しいライムの香りが漂う。

「仄かな香りですね」

「これだったら男の人も平気かなあ？」

杏とマコトが呟くと薊は呆れたように言つた。

「男の人も平気つて、少年……あんただつて、立派な男じゃない。なあに悩んでるの？」

「えっ……あ、うん。そうだね」

マコトは慌てて誤魔化すような笑顔を作つた。薊は不審そうに眼

を細めたが「まあいいわ」と持ってきた石鹼二つをマコトに押し付ける。

「えっ？ あっ……おいくらですか？」

「いいわよ。別に。それよりも新商品、何か考えて欲しいわね」

にんまりと薙は笑うと、何か新しく売り出せるものは無いのかとマコトに詰め寄った。

「そんなに次から次へと考えられませんか？」

わたわたとマコトは慌てだし石鹼を返そうとするが「お礼に必要なでしょ？ 持って行きなさいよ」と渡されてしまったのだった。

その日の夕方。

銀杏工房 を出たマコトは、昨日男と会った廃ビルへ向かっていた。持ち帰ってしまった毛布は背負い袋の中にあり、早く会って返さなければと歩いていた足は走りだし、自然にスピードも速くなっていた。

何本か路地を曲がり、今朝通った道を逆順に走り抜ける。

見覚えのある廃ビルの前にたどり着いた時、夕陽は西に傾き、空を染める茜色は色を濃くしていた。

「い、いるかな？」

息を整えるように何度か呼吸を繰り返す。走ったためだと思うが、ドキドキと心臓の鼓動が速い。マコトは落ち着くように自分に言い聞かせながら、おそろおそろ中へ入る。

陽も落ち風が出てきた。風通しの良いビルの中はどこかひんやりとしていて、マコトの汗が冷えて熱を奪い、身体がブルリと震えた。

「あのお……」

名前も知らない男に、どう呼びかけていいか分からず、昨日いた部屋へ向かいながら声を出す。恐る恐る吐き出される言葉には力がなく、小さい声は空気に溶けていくようだった。

「……」

扉の無い奥の部屋。チロチロと動く赤い光と大きな影がコンクリ

トに映し出されていた。

それを目にした途端、マコトの心臓は激しく動き出す。

（落ち着け、落ち着いて……）

自分に言い聞かせながら、ゆっくりと進む。

もう少しで部屋の中が見えそうだという時になって、ずっと後ろから近づく気配を察し、マコトは慌てて振り向こうとする。

「動くな……」

鋭い男の声。その声にマコトはビクリと身体を竦ませる。

「悪いが、ここには何も盗めるようなモノはない」

そう言った男は、マコトの両手を無造作にひねり上げる。掴まれた手首の痛みにマコトは声を上げた。

「ん？」

マコトの叫び声を聞いた男は、眼を細め何かを確認すると、マコトの手を離れた。

「ああ、キミだったんですね。手荒な事をしてしまって悪かったですね」

優しいな微笑みを浮かべ、男はマコトを案内するように先に部屋へと入った。マコトも続いて部屋に入ると、昨日のように小さな焚火が窓から入る風に揺れていた。焚火の近くには背負い袋にかぶされたローブが置いてあり、コンクリートの壁に大きな影を作っていた。

「どうしました？ お仲間と仲たがいでしょ？」

男に尋ねられるとマコトは激しく首を振った。

「ち、違います。ば、僕は……あの……」

何を言っているかわからなくなり、マコトは慌てて背負い袋を下ろすと、その中から毛布と石鹸を取り出した。

「昨日はありがとうございました。あの、今朝言えなかったから……」

男はマコトが差し出した毛布を受け取ると「やっぱりキミが持ってたんですね」と柔らかく笑った。その微笑みにマコトの心臓がド

クンと大きな音を立てた。

「今晚は、毛布なしで寝ることになると覚悟していたんですよ」

「あつ……すみません」

真つ赤になつてマコトは謝つた。少し考えてみれば、彼は昼間のうちにココに毛布を取りに帰つて来たのかも知れなかったのだ。あるはずの毛布が無かつた時の彼の驚きや戸惑いを考えると、申し訳ない思いにいっぱいになった。

「ん？ これは？」

毛布と共に手渡された二つの石鹸に男は首をかしげる。

「あつ、お礼、です。昨日助けてもらったので……その……」

しどろもどろに呟いたマコトに、男はニツコリと笑つと「ありがとう。大事に使わせてもらいますよ」と応えた。

「でも、石鹸なんて貴重品、いただいてしまつて構わないのですか？」

興味深そうに石鹸をしげしげと眺めたり、香りを確かめたりしていた男は、何気ない様子でマコトに尋ねた。異界化してしまったエルダー・テイルにおいて、石鹸は嗜好品と化している。作れる者が限られているのだ。石鹸はお金を積んでも、なかなか手に入らない貴重な品物になっていた。

「だ、大丈夫……なのかな？ えっと、貰い物なんですけど……」

薊から言われた『新商品』に頭を悩ませながらマコトは答えた。

そんなマコトの姿に男はクスリと笑う。

「これが女性からの贈り物だったら、貰つてしまつていいのか悩みますよ？」

「それは、絶対ありません」

男の言葉に薊のあでやかな姿が脳裏に浮かび、慌てたマコトは首を振ると、きつぱりと言い切つた。

「知り合いから譲つてもらつたんです。第一、僕に贈り物をしてくれる人なんていませんから……」

必死に言葉を重ねるマコトの姿に男は軽やかに笑つた。

「冗談ですよ。そんなに言い訳しなくたって、初めからそんなことを疑っていません」

「本当に？　なんだか笑い方が怪しい感じがします」

面白がるような男の口ぶりに、マコトはムツとして「帰ります」とくるりと後ろを向いた。

「お気をつけて」

「あの……いまさら何ですけど、名前、聞いてなかったので教えてください。あつ、僕……」

自分の名前を告げようとしたマコトの言葉を男は遮った。

「マコトさん、でしょう？」

「えっ？　なんで……って、そっか、確認したんですね」

まさか男が自分の名前を知っていると思わなかったマコトは驚いて目を丸くするが、すぐにステータスを確認したのだろうと納得した。

そんなマコトに男は微笑んで自分の名前を告げるのだった。

「ええ　私は、スイレンですよ」

「スイレンさん、ですか……昨日はありがとうございました」

ぺこりと頭を下げて、マコトは廃ビルから出て行った。

閑話休題？ 異世界生活ものんびり一休み？（後書き）

相思相愛？ 異世界での恋愛模様！（前書き）

今回、R指定です……軽くですけど。

書いててめちゃくちゃ楽しかった二人です。

相思相愛？ 異世界での恋愛模様！

宿屋の一室。薊は二間^{ふたま}続きの客室を借りきって住居としていた。

もちろん一葉に言えばギルドホールでスペースを貸してもらえるが、大量の衣装を持っている薊の要望に叶う部屋は用意してもらえないならばと、ギルド会館からほど近い宿屋の部屋を長期契約したのだ。ちなみに片方の部屋が寝室で、残ったもう片方はクローゼットだ。こちらの世界に飛ばされてすぐ、蘭丸を使って見事なウオークインクローゼットを作ったのは『薊さんらしい』と 銀杏工房 でも有名な話になっている。

寝室には「私、寝像悪いから大きめベッドが良いわ」と蘭丸に言っ
て、備え付けの二つのベッドを撤去して、キングサイズのベッド
を一つ置き、その部屋の片隅には小さいテーブルとイスを置いた。
そして現在、そのテーブルを挟んで、薊と橘がのんびりと会話し
ていた。

「少年に断られちゃったのよ」

綺麗な指でティーカップの取っ手を摘み白湯味の紅茶を飲む薊。
ちなみに、橘の前にもおそろいのティーカップが置いてあり、傍ら
には薊曰く「気分の問題」と美しく彩られたクッキーが小さな皿に
並べてある。もちろんクッキーの味は押して測るべし。

「残念じゃったのお。まあ、ワシの方も、綾香嬢に断られてるがの
お」

味が分かっているためか、二人ともクッキーには手を出さない。

白湯を飲んで喉を湿らせながらおしゃべりを続けていた。

「あら、あんたは綾さんの方から攻めたのね……でも、綾さんの場
合、 銀杏工房 の大所帯は厳しいんじゃないかしら」

小首をかしげて薊が呟けば、橘も頷いた。

「ついでに言えば、お嬢の場合、売り子たちからの評判は最悪じゃ
からの。今流れちよる噂のまま移籍してたら反発は大きかったのお」

話す声はどこか楽しげで、娯楽として使われそうだった綾香のこ
とをほんの少しだけ哀れに思った薊はため息交じりに尋ねた。

「……その状態で移籍を勧めたってわけ？」

「ん？ 移籍後のフオローは先生の仕事じゃろ？ ワシは、軒先を
借りに来た小鳥に中に入らんかと戸を広げただけじゃ」

橘は二ツと笑うと口元にひびが入りパラパラと粉が落ちた。橘は、
顔から零れていく粉に「はあ」とため息をついた。

「ねえ、仮面ベルソナのメンテナンス、お願いできる」

急に橘の声が若返った。橘は自分の顔に両手をあてて、メニュー
画面のアイテム一覧から『仮面ベルソナ』の装備解除を選択する。装備を解
除した途端、コロんと両手の中に仮面が剥がれ落ちた。

「ファンデーションが崩れたって誤魔化したんだけど、どうも劣化
してるみたいなのよね」

仮面をテーブルの上に置くと、ハンドタオルで顔を拭く橘。表情
の消えた橘の顔がテーブルの上に残り、デスマスクのような不気味
な印象を受けるが、薊は気にした風もなく手にとってシゲシゲと観
察した。

仮面の表面には細かな亀裂が無数に広がっており、口元や目元な
ど頻繁に動く箇所は表面が剥がれ粉を吹いていた。

「あら、ホントねえ……ちゃんと枚数あげたでしょ。ローテーショ
ンして使ってる？ 一日以上休ませないと劣化が早いだよ」

『仮面ベルソナ』とは、化粧師 が作ることのできる変装用アイテムで、
主にハロウィンや仮装パーティの時に使用して楽しむものだ。顔の
パーツは様々なバリエーションに富んでおり、老若男女様々な顔を
作って楽しめる。もちろん人外のパーツも存在しており、お遊び的
要素として 化粧師 たちは作った仮面を使って人を驚かせたり楽
しませたりしていた。

また、顔に張り付いた仮面は、自分本来の顔のように表情を思い
のまま変えられるため、他人から見ても仮面を付けていると感じさ

せない精巧なものだった。

もともと橘は、ゲーム上のグラフィックとして歳を重ねたモノを選んでいたが、エルダー・テイル オリジナル に来ると現実世界の自分の容姿に引き釣られるらしく、かなり見た目が変わってしまったのだ。慌てて薊に助けを求め、この『仮面 ペルソナ』を作ってもらった。

「他のペルソナと年齢を合わせてくれなかったでしょ。それに泊まり込みも多かったし……ギルド あそこ ホールでは流石に変えられないわよ。ばれちゃったら面倒だし。誰かさんは、ギルドのメンバー皆が徹夜してるって云うのに、ちゃんとココに帰ってきてたみたいだけど」

橘は恨めしそうに言いながら、顔を拭っていたタオルをテーブルの上に置く。仮面の下から出てきた橘の顔は仮面と比べるとかなり若く、高校生くらいの幼さを感じさせるものだった。

「目元の皺をもう少し増やして欲しいのよ……出来れば、頬のシミもね、色を濃くして貰いたいわけ。どうも貫禄が弱いのよ」

「はいはい。じゃあ、この仮面 ペルソナ はどうするの？」

「それを綺麗にしちゃったら若返ったことにならない？」

テーブルの上のティーカップとクッキーを片付けた薊は、テーブルに化粧道具を並べてメンテナンスを始めた。

「そっちの仮面と年齢を合わせるわよ。知らなかったわ、使ってるうちに使用頻度によって年齢が変わっちゃうのね……ペルソナも成長するってことかしら？」

ブツブツと呟きながら、メニュー画面を呼び出してペルソナの状態を確認する。補修に必要な化粧品を道具入れの中から探し出しながら、薊は橘に確認した。

「ねえ、橘……特殊メイクに必要な材料が不足してるって気付いてるわよね？」

「別口で仕入れてあげてるじゃない。あれじゃ間に合わないの？」
呆れたような橘の言葉に、薊は肩をすくめる。

「いい加減、素顔晒したら？　きつと気付いてるメンバーもいるわよ？」

「イヤよ」

きつぱりと橘は答えた。

「由良^{ゆうら}、あなたも知ってるでしょ。私がこの顔でどれだけ苦労してるか。会社の飲み会で居酒屋行けば、女子高生と間違われて身分証明書^{身分証明書}の提示を求められること数知れず。あなたとの待ち合わせで、夜スッピンで街を歩けば警察に補導される。はては、スーパーではお酒もたばこも買わせてもらえない！　ちゃんと身分証明書を出したつてのに疑われて『お客様申し訳ありませんが』よっ！　この悲しさがあなたに分かるの？」

今までの屈辱的^{くつじよくてき}日々を思い出し、眉間にしわを寄せながら言い募る橘に、薊も過去の出来事を思い出す。

「いや、確かに、あなたを連れて友人に会ったら『風見君ってロリコンだったの』って必ず確認されるけどね。お巡りさんには『妹さんを夜、一人で歩かせちゃダメですよ』なんて言われるし……」

「それよっ！　なんで私の方が年上なのに、由良が私の保護者扱いされるの？」

人指し指をビツと薊に向けた橘は「皆して私を馬鹿にして」と悔しげに呟いた。

「……顔？」

「だから、この顔が嫌いなのよ」

憎々しげに橘が言うつと、薊は肩をすくめて呟いた。

「今、確実に世の女性を敵に回したわね。世の中アンチエイジングだつて言うのに……」

「変わってもらえるなら変わって欲しいわ。何故に30女が新入社員から学生バイトに間違われなきゃならないんだっ！」

最近の出来ごとを思い出す。

4月に入社したばかりの新入社員が、寄りにも寄ってお局様である橘に対し「バイトの方ですか？」と声をかけてきたのだ。ちなみ

にこの時、橘の勤める会社には学生のアルバイトしかいなかった。ということ、新人の彼女は橘のことを学生と勘違いしたのだ。

それを聞いた橘の顔コンプレックスを知る社員たちは青ざめたが、橘はココで怒るのは大人げないと社員証を目の前に出して「どっちかっていうとお局様よ」と低い声で答えたのだ。

それに対して「うつそあ」とけらけらと笑いだした新入社員は、慌てた周りの社員から注意されると「ええっ！アレで三十路い！どんな化け物よ」と騒ぎ出したのは、記憶に新しい。

あの時の怒りが蘇ってきた橘は、立ち上がるとボフンとベッドに殴りかかった。

「ホント、あんたって人類の神秘よね」

しみじみと告げた薊を橘はギツと睨むと、低い声で呟いた。

「ラブホ出て、青少年保護防止条例違反で捕まりかけた男には言われたか無いわ」

「ああ……あの時ほどスツピンのあんたの危険性が理解できた時は無かったわね。怖かったわあ。危うく前科一犯、性犯罪者リスト行きだったものねえ」

遠い目で当時を思い出した薊は、しみじみ呟いた。

「酷いわよね……中学生に間違われてたなんて」

クスクス笑い出した薊の言葉に、プンスカと橘は怒りだした。

「あん時は、すでに25超えてたわよ。バリバリ社会人よ」

「はいはい。分かったから……で、こっちのペルソナは必要ないのね？」

何時の間にか何枚もの仮面をテーブルに並べていた薊は、他の仮面よりは幾らか年若い顔を橘に見せた。

「ん……予備で取っておく。材料無くなった時困るから」

「じゃあ、年齢を上げておくわあ。目元の小じわを増やして、肌をくすませてっ」と

薊が材料を選択して、仮面にメイクを施していくと、一気に10歳ほど歳を取った老婆の顔になった。

「もう少し、貫禄出せないの。こお、物知り婆的な……」

「無茶苦茶を言うわねえ」

呆れたように薊は言ったが、目つきや眉などを少し弄^{いじ}つて少々きつめの印象を持つ顔立ちに手直した。

「ん……いいんじゃないの。明日は 天翔ける馬 との在庫納入の約束が入ってるから、こっちの顔で行こうかしら 綿花はたくさん欲しいけど、やっぱり仕入れるなら駆け引きしないかね」

にんまりと笑う橘に、「 天翔ける馬 っていうと、あいつかあ」と嫌そうに呟いた薊。

「ん？」

なにも気付いてなさそうな、のほほんとした橘の態度に少しムカツとする。だから、少し呆れたように言ってみた。

「材料足りないってことは、手とか首元に使う化粧品が無くなるって気付いてる？ 年齢って顔よりも手や首元に現れるのよ？ 顔が年寄りでも手や首元が若かったら本当の化け物よお？」

「手は手袋でカバーするわよ。首元は襟元の詰まった服とスカーフでカバーする」

薊の言葉にきっぱりと橘は言い切った。

「そう……なら大丈夫かしら？」

にんまりと薊は笑うと、化粧道具の中から化粧落^{ふくだけ}としを取り出し自分の化粧を落としていった。スッピンになった薊は、ご機嫌で化粧水と乳液を顔に付けた。

「由^{ゆい}も化粧水と乳液使ったらあ？」

「必要ないわよ」

ブンとソツポを向いてベッドに飛び乗った橘。ベッドのスプリングに押し返されてポムツと弾む。

「お肌荒れちゃっても知らないわよお」

「肌荒れで年増に見えるなら、そっちに期待したいわ」

拗ねたように言った橘はベッドの上でゴロンと寝返りを打った。

「せつかくのさわり心地のいいモチモチすべすべお肌なのに、勿体

ないわあ」

鼻歌交じりに夜の手入れを終わらせた薊は、仕上げにリップクリームを塗ると化粧道具をパパッと簡単に片づけた。

そして、ゆっくりとベッドに近付く。ベッドの上でゴロゴロと左右に寝がえりを繰り返す橘にギュームツと抱きつくと、耳元で囁いた。「あんたが若作りだから、こっちも頑張ってお肌の手入れして若く見えるように努力してるの。だ・か・ら、その労を労ってよ」

囁いたついでに、愛らしい耳をぺろりと舐めた。

「なっ！　ちよっ、ちよっと由良っ！！」

慌てて逃げようとする橘だったが、がっちりと抱きしめられ逃げるに逃げられない。首を嫌々と振ってはみるものの、どう考えても薊を楽しませるだけで解決にはなってなさそうだ。

耳や首筋に甘噛みを始めた薊に諦めた橘。身体の強張りが溶けたことを感じた薊は抱きつく力を弱め、器用に衣を剥いでいく。

「フフフ。化粧してないあんただ相手だと、あたし、性犯罪者わるいおとなになつたみたいじゃない？」

クスクス笑いながら、露わになった肌に丹念にキスをしていく薊。橘は薊の青味がかった銀色の髪の毛を指に通しながら「あんたの言葉を聞いてると、こっちは百合になつたみたいよ」と呟いた。

橘の褐色の肌の上を薊の青銀色の髪がなぞる。

「ねえ、由良……あんた、最近先生に似てきてない？」

橘の胸で遊んでいた薊は、その言葉に一瞬嫌そうに顔をしかめたが、ふっと笑うと「そうかしら？」と呟いた。

「じゃあ、あんたも綾さんみたいに、あたしに捕まってみる？」

顔を上げジッと橘の顔を覗き込んできた薊に、ベエッと舌を出した。

「逃げ切つてやる」

「それでこそ、追い詰め甲斐があるわね」

ニッコリ笑うと指を動かした。

翌朝、橘の大絶叫で薊は目を覚ました。

「うるさいわねえ」

「由良っ！…… あんた、これどうするのよっ！……」

隣の部屋から飛び出してきた橘は、ベッドの上で微睡まじろんでいた薊に馬乗りになって叩き起こした。

「サツサと目を覚ましなさい。このエロ河童っ！」

頭をポカスカと叩かれた薊は、眠い目をこすりつつ目の前の絶景を堪能した。ゆったりとしたシャツを着ている橘はボタンを途中しか止めておらず、前かがみになった今の状態だと、胸の谷間が薊の位置から良く見える。

「なあに？ 朝からお誘い？ 元気ねえ……」

ふわぁと欠伸をして布団の中から両腕を出すと、そのまま馬乗りになっている橘を抱きしめた。そのまま上半身を起こすと、橘の胸元にキスをする。そのまま顔を下に下にと滑らせた。

「ちよつと、違っ！」

バシッと頭を叩かれた。

「痛い……誘ってきたのは、由からじゃないの？」

「違うわよっ。朝っぱらから止めてよね。私の言いたいのは、ココっ！」

橘は胸元の赤い印を指さした。赤い斑点はポチポチと首全体に広がっている。

「ん？ 蕁麻疹じんましん？」

嘸うそだく薊をギリリつと睨みつける橘。

「あんたねえ……」

「うそうそうそっ！ やだわぁ。ほんの冗談じゃない」

につこりと笑うその笑顔からは作弄的なことしか感じられず、橘の頭の中でプツリと何かが切れる音がした。

「どうしてくれるのよ」

地を這うような低い声。

しかし、薊はそんな橘の様子もどこ吹く風といった調子でシラッ

と告げる。

「いいでしょ？ どうせ隠すんだから」

「いいわけないでしょおっ！」

薊に橋は殴りかかった　　が、その腕は薊に捕らえられ、そのまま薊が寝がえりをうつたため、今度は橋がベッドに沈んだ。

「もう、由つてば、お・ま・せ・さん　もつつけて欲しいなら、そう言えいいのに……恥ずかしがり屋さんなんだからっ」

語尾にハートマークが飛んでそうな甘い声に騙されそうになるが、今の体勢はとてつもなく自分に不利だと橋の背中に嫌な汗が流れる。
「あんた、ほんつとうに先生を手本にしてない？」

目一杯『本当』のところを力を含めるが、薊はサラリと流すとト
ンデモナイことを言い出した。

「だって由つてば、全力で逃げてくれるんでしょ？　兎さんを追い
詰める獵師つて感じで楽しくない？」

「あたしや、ハンティングの獲物か？！」

ゲシツと足で薊の腹を蹴り飛ばそうとするが、敵もさるもの引つ
搔くもの。橋の攻撃を予測していたようで、パシツと足首を捕らえ
られてしまった。そのまま足首を持ちあげられ、太もみにチュツと
キスをされた。

「や……ヤダっ。ね、ねえ……止め、よ？」

可愛らしく小首をかしげて提案してみるが、逆効果だったらしく
薊の笑みがにいと深くなった。シマツタと思ったがもう遅い。

「見えなくなっちゃうから残念だけど、やっぱり害虫^{むし}よけつて必要
じゃない？」

ニコニコと笑いながら、足首から手を離し、その手をシャツの下
から差し入れる薊。

「昨日のセリフは訂正しておくわ。『^{ベルソナ}仮面』なら沢山あげるから、
素顔^{この顔}はあたし専用にしておいてね」

じたばたと暴れる幼いお姉さんに囁いた。

キスマークなんて内出血だから回復呪文唱えれば治るよね、なんてことを考えた橘だったが、そもそも内出血ごときが 冒険者の身体に影響を及ぼすわけがない。もちろん回復呪文をかけても取れなかった。

橘は薊のサブ職業が 化粧師 だったことに気付いたのは、どうしても取れない赤い痣に疑問を抱き、薊を問い詰めてからだった。ちなみに、その痣は 化粧師 特製『落ちない口紅』だったらしい。

相思相愛？ 異世界での恋愛模様！（後書き）

気分転換です。久々に悩まず書いて楽しかったデス。

蛙鳴蝉噪！ 異世界の噂話！（前書き）

ずいぶん間が空いてしまい、申し訳ありません。

蛙鳴蟬噪！ 異世界の噂話！

いつもの賑やかな 銀杏工房 会議室。女子社員達がせっせと商品梱包を行っているそこでは、いつものごとく街で仕入れてきた噂話で盛り上がっていた。

「椿お姉さまっ！ 私も薔薇の香りの『ミニタオル』を売りたいんですっ！ 私が持っているのが薔薇の香りじゃないって分かんると『薔薇の香り』を売ってるのは誰？」って聞いてくるんですよっ！」

「ダメよ。この薔薇の担当になるのに、私がどれだけ大変な思いをしたか分かっているの？」

薔薇担当の 売り子 の言葉に、椿に直訴していた少女は「じゃんけんに勝っただけじゃない。使ったのは運だけでしょ」と騒ぎ出した。

「運も実力のうちって言うじゃない」

ふふんと笑う薔薇担当の 売り子 に、キーッと怒りだす少女。そのやり取りを聞いていた他の少女も、口々に香りの変更を求めて椿にお願いを始めた。会議室の中は少女たちの甲高い声でいっぱいになっていき、收拾がつかなくなる。

少女たちの様子に、椿は苦笑してパンッと手を叩いた。途端に静まり返る少女たち。

「分かりました。それでは、人気の香りについては人数を増やしましょう。希望する香りを確認しますから、 売り子 の皆さんは全員、自分が売りたい香りを書いた紙を提出してください。あつ、もちろん自分の名前の記名もお願いしますね」

椿が告げれば、人気の香り担当の 売り子 たちからは若干の非難の声が漏れたものの、対多数の少女たちは自分の希望の香りの担当になれる期待を持ち、大急ぎで自分のメモ用紙を取り出して、名前と希望する香りを書きだした。

彼女らは口々に友人と、どんな香りが良いか相談し始めたため、会議室の中のざわめきが大きくなる。

そんな中、次々と椿の元に集まる紙。椿は集まった紙の内容を素早く確認すると、しばし思案する。

「人気の無さそうな香りはローテーションで変えてみましょうか……もちろん、薊さんをお願いして新しい香りも投入しましょう。その香りが、限定の香りとなれば購入する方も増えるでしょう？」

椿の呟いた声は微かなものだったにもかかわらず、会議室にいる少女たちは椿の言葉を聞き止め、口々に新しい香りの話題で盛り上がるのだった。

そんな中、何かを思い出した少女が隣の少女に話し出した。

「そういえば、こないだ 大地人 の女の子が買いに来たわよ」

すると、話を振られた隣の少女も「私のところにも来た」と大きく頷いて笑いだした。

「香りつきのを買っていったんだけど『リンゴの香りじゃないんですね』なんて言われちゃったわ。NPCのくせに芸が細かいわよね」

その子の担当はジャスミンの香りだったため「香りなしもありますよ」と声をかけたが、「香りつきの方が贅沢な感じがするから」と 大地人 の少女は 香りつきティッシュ を購入していったらしい。それを面白おかしく 売り子 の少女は仲間たちに話して聞かせた。

「あたし、ビックリしちゃった。 大地人 って、決まり切った言葉しか言わないもんだと思ってからさあ……」

「それだったら、私だって……」

そう話し始めた少女は、 大地人 の男性が彼女に贈るために巷で有名な 香りつきティッシュ を購入していったことを話し始めた。なんでも、その男性曰く、贈る相手は桃の甘い香りが好きで、その香りを探して 銀杏工房 の 売り子 をアキバの街中探していたとのこと。

「で、私が『それは大変でしたね』って言ったら、『これで彼女の笑顔が見られるなら、安いモノですよ』だって」

「きゃあ！！　なにその　大地人　の人。妙にかつこよすぎじゃない？」

「私も一度でいいから言われてみたいわあ」

「でも、なんかさあ、妙に人間っぽくない？」

「きゃあきゃあ騒ぎ出した少女たちのなか、一人の少女が首をかしげて呟けば、他の少女たちから「馬鹿ねえ」と笑われるのだった。

「どうせ受け答えだって、コンピュータで決まったパターンがあるんでしょ。NPCなんだからさ」

「そそ、わたしらプレイヤーを楽しませるための仕掛けなんですよよ」

「他にもどんなパターンがあるか知りたくなるわね」

「分かる分かるっ！」

「とにかく、NPCに感情なんてあるわけじゃない」

「ケラケラと楽しげに笑いだした少女たちに、首を傾げた少女も自分が考えすぎなんだろうと思いなおした。

「そ、そうよねえ」

「そうに決まってるじゃない　それよりさあ、新しい香りってなんだろうね」

「私は森林の香りみたいな、安らぎ系がいいわ」

「ええっ！　ミントみたいなサツパリ系よ」

少女たちの話題は移ろいやすい。さっきまで話していた　大地人の話題など何処かに流れてしまい、次は新しい香りがどんな香りなのか予想し合うのだった。

天翔ける馬　は自称万屋ギルドだ。客の要望を叶えるため、ありとあらゆることを請け負うと豪語するだけあって、その仕事の範囲は多岐に渡る。

ある時は迅速かつ正確に品物を送り届ける運び屋だったかと思えば、別の時には街のあらゆる噂話を仕入れてくる情報屋。またある時には、希望の品をフィールドやダンジョンにて探し出す、或いは魔物を倒して採って来る調達屋。客の要望があれば何でもこなすというのが、このギルドの座右の銘らしい。

そして、彼らのお得意様の一つに 銀杏工房 があり、今は綿花を中心にフィールドでのアイテム収集作業を依頼されていた。

「次回からは少し納入量を減らさせてくださいね」

にこにこ人のいい笑みを浮かべ 天翔ける馬 のナツメが告げると橘はムツと眉をしかめた。

「他に良い取引相手でも出来たのかのお？ 銀杏工房 相手では旨味が無くなったのか？」

「まさかまさか！ そんなことはありませんよ 近頃、綿花を希望するお客様が多くなりましたので、たくさんのお客様に確実な料をお届けするためには、各お客さまからの御注文を一定量にしなければならなかったのですよ」

形良いすらしとした指を組み、目を細めたナツメは、橘が何か言う前に「もちろん」と続ける。橘は文句を言おうと開いた口を閉じ、胡散臭そうにナツメをじろりと見た。

「 銀杏工房 様は、昔からのなじみですし……私の先代であるイチ先輩がいらっしゃるところです。出来るだけ融通したいところですが、何せコットンプラントを倒そうとするパーティが多すぎるのです。もちろん、私達も努力していますが、御希望の量を揃えるのが大変だと云うことを理解していただきたいのですが？」

何処か芝居がかった仕草で告げるナツメに、橘はため息をつきつつ確認した。

「……で、納入できる量はどのくらいだと言いたいんだい？」

「こちらほどで」

どこからともなく現れた白い紙。眼鏡をかけた橘は、ひらりと机の上に差し出された用紙を覗き込んだ。

そして、そこに書いてある数字を見て、彼女の顔が陰しくなる。

「ずいぶん、減ったもんだね」

「大災害 からこちら、出来る限りのメンバー補充をしているのですが、戦える人となかなか探すのが容易じゃないのですよ
橘、貴女が来ていただけるのなら、倍とまではいきませんが、それ相当の量が増やせるのですか？」

にっこりと提案する青年の姿に橘は首を振った。

「フィールドに年寄りを連れ出そうとは、良い性格をしとるな」

「何もフィールドに行かなくても、貴女に出来る仕事ならウチにも山のようにありますよ？ 由、もともとは貴女もウチのメンバーだったんです。古巣の助けになるうとは考えてくださいませんか？」

「もともとと言っても4年も前のことじゃろ？ いまさらお局が戻ったところで、新人たちとの軋轢の元になるだけじゃぞ？」

呆れたようにフンと鼻で笑いながら告げる橘の言葉に、ナツメはため息をついた。

「こんなにラブコールを送っていると云うのに、つれない方ですね」

「そろそろ諦めたらあゝ」

音もたてず部屋の扉が室内に向かって開き、極彩色の衣装に身を包んだ薊がスツと入ってくると、ナツメは厄介な奴が来たとはかりに顔をゆがめた。

「懲りない坊やねえ。これまで何回も断られてるんだから、サツサと諦めたらいかがあ？」

「商談中だと札を下げておいたはずですけど？」

嫌そうにナツメが言い放てば、薊も「私も商談に来たの」とにこやかに微笑んで橘の後ろに立つと一枚の紙を彼女に渡した。

「コレ、仕入れよろしくね。あつ、もし 天翔ける馬 に難癖付けられたら、別の材料探しを請け負ってくれそうなギルド紹介してあげるわ」

わざわざナツメにも聞こえるように橘に耳打ちした薊。

「っ！ 私は難癖なんてっ！」

「してたでしょ？ やだわあ、ギルド間の取引を個人取引にすり替えるなんて」

くすくすと笑う薊だったが、目は笑っておらず冷やかな眼差しをナツメに向けていた。

「橘のオババ、古巣に義理立てすることは無いわよ？ 新しいギルド、幾らでも紹介してあげるわあ。蛇の道は蛇つてところね……綿花を売りたいってギルドからの連絡、けっこうきてるのよ？」

「う、ウチだって今回と同じ分量、また納入できますよ！」

反射的に叫ぶナツメに、薊は笑みを深くする。

「良かったわねオババ。でも、保険として2、3、他のギルドを紹介してあげるわ」

「なっ！」

「だって、そちらさんメンバーが足りないんでしょ？ 期待させていて『やっぱりダメでした』ってなったら困るのはウチじゃない？」
薊の指摘に自分の告げたセリフを思い出し口をパクパクさせるナツメ。

「いつから聞いたったんかのぉ？」

呆れたように呟いた橘に、薊は少し考えるふりをしながら答えた。
「……な・い・しょ。イイ女ってミステリアスの方がいいでしょ？」

橘は救いようがないとばかりにため息を付きながら首を振った。

「そんなに遊び歩いていて、仕事はサボりとは、なかなか良い身分じゃのぉ？」

橘の言葉に薊はフンと笑って答えた。

「あら、最近 可愛い部下 メイキャップアーティスト 志望の子が増えたのよ。おかげで使えない手下がたあつくさん。牛脂石鹸くらいだったレベルが低くても作れるから、レベルアップのために仕事を押し付け^{示し}てきたわよ」

サラリと言い放った薊は、自分をギリリと悔しそうに睨みつける青年に余裕の笑みを見せた。

「坊や、綿花の仕入れ大変なんでしょ？ 仕事に戻ったら？」

悔しそうな表情を見せていたナツメだったが、薊の言葉を無視して橋に向き直った。

「橘さん、銀杏工房では、変わったことはありませんか？」

「ん？ 何か情報でも掴んだのかのお？ 万屋よろずや」

「変わったこと、ねえ……」

ナツメの言葉に橘も薊も首をかしげる。

ナツメは薊に対して小馬鹿にしたような視線を送る。薊がその視線に気付き、ムツとした表情を見せると、少しばかり溜飲りゅうこんが下がり満足そうに微笑みを浮かべたナツメだった。

「流石に不確定な情報をお売りするわけにはいきませんか、裏が取次第、銀杏工房様には情報をお売りしますよ。ええ、特別に、ね」

やっと自分のペースを取り戻し、内心ホッとしながらも、そんな様子を見せないようにナツメは告げると、優雅に椅子から立ち上がる。

「それでは、ごきげんよう」

扉の前で芝居がかった様子でナツメが一礼すると、丁度タイミング良く扉が開いた。

ゴツンとナツメと扉がぶつかり、ナツメが扉に押されるような形で前のめりになりながら倒れると、開いた扉の向こうから銀しろがねが現れ、部屋の中をきよきよと見回した。

「ナツメさんが来てるって聞いたんだけど……」

橘と薊は顔を見合わせ、無言で扉の前で倒れている青年を指さした。

「あれ？ ナツメさん、どうしたの？」

心底不思議そうに銀が呟く。それを聞いた薊は「哀れな奴……」と憐みの視線を青年に送るのだった。

蛙鳴蝉噪！ 異世界の噂話！（後書き）

蛙鳴蝉噪 あめいせんそう

蛙鳴は蛙の鳴き声、蝉噪はセミがやかましく鳴くことの意。
うるさいくせに役に立たない議論を交わすこと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0876l/>

遊色の雫 イリデッセンス・ドロップ

2011年9月1日13時43分発行